山鹿素行全集

思想篇　第十巻

編纂者　廣瀬　豊

肖　像（津輕系）（第一卷口繪平戸系肖像参照）

辨明書の一部（第十五巻八一九頁参照）

目次

山鹿語類　七（卷第三十九――卷第四十五）

山鹿語類七目次

巻第三十九　聖學七

陰　陽

五　行

巻第四十　聖學八

天地

卷第四十一　聖學九　性心

卷第四十二　聖學十　性心

卷第四十三　聖學十一　大原

卷第四十四　續集

卷第四十五　續集

聖學七

六四　陰陽の說を論ず

師曰はく、陰陽は、天地人物の總管なり。天地旣に陰陽を以て成る、故に天地の間に盈ちて造化を爲す所以の者、陰陽を出でず。其の本を以てすれば、則ち理氣なり、形氣なり。身に氣血向背あり、人に男女あり上下あり、君子あり小人あり。物の飛走動植、事の開闔動靜常變、理の善惡邪正明暗、時の治亂盛衰豐凶、地の高下磽确、何に適くとして這の裏面を離るべからず。凡そ消長・屈伸・生長・收藏して天地人物遂ぐ、是れ陰陽自然の道なり。

師曰はく、易に曰はく、「天の道を立つ、陰と陽と曰ふ。地の道を立つ、柔と剛と曰ふ。人の道を立つ、仁と義と曰ふ」[一]と。愚謂へらく、陰陽は、天地人物の總管にして、

（一）說卦傳に出づ

而も陰陽を以て天に屬す。柔剛・仁義亦陰陽にして、地と人とは其の用異なり。聖人辭を建てて之れを辨ずること尤も著明なり。夫れ天は萬物の大原にして、聖人皇極を立て、天を以て之れを稱す。地及び人物は悉く天に屬す。天の道は陰陽を以て之れを立つ、是れ萬物の極、陰陽を管する所以なり。

師曰はく、易は、聖人が天地人物に因りて道の大原を立て、日用事物の始終を示せるもの、其の書たる只だ陰陽を以てするのみ。大傳に曰はく、「[一]一陰一陽之れを道と謂ひ、陰陽不測之れを神と謂ふ」と。凡そ卦畫の奇耦其の變化二儀を出でず、故に曰はく、「[二]太極兩儀を生ず」と。

六五　陰陽の形象を論ず

師曰はく、輕くして昇る者を陽と爲し、重くして降る者を陰と爲す。輕くして昇る者は氣なり、重くして降る者は形なり。是れ天は陽に屬し地は陰に屬す、而して天地の陰陽を離れざる所以なり。凡そ陽の物に於けるや、燥なり、奇なり、剛なり、炎なり、圓なり、浮なり、明なり、動なり、出なり、合なり、聚なり。陰の物に於けるや、

（一）繫辭上傳に出づ、但し抄出なり

（二）同前に「是の故に易に太極あり、是れ兩儀を生じ、兩儀、四象を生じ、四象、八卦を生ず云々」と出づ

濕なり、耦なり、柔なり、涼なり、方なり、沈なり、晦なり、靜なり、入なり、分なり、散なり。天地人物の間、其の用陰陽根を互にして相對し相偶す。

師曰はく、陰陽の形象其の著明なる者は水火を出でず。陰陽は天地萬物の惣管にして、其の形象は水火以て計會し來る。故に天地人物の形象は水火を離れず。水火相合し相分れて其の用遂に亨る、水火の用大なる哉。凡そ氣の輕く揚るや、其の間溫便ち之れに隨ふ。其の重く凝るや便ち下つて水と爲る、是れ火の炎上し水の潤下して、自然の形象已むことを得ずして然るなり。天地は水火を以て立ち、水火を以て運行し、人物は水火を以て成り、氣血を以て營衞す。其の間昇降して其の用を遂ぐ。

師曰はく、天地運行して生々息むことなく、人物各々亨る、是れ陰陽昇降循環して間斷なきの謂なり。大傳に曰はく、(三)「日往くときは月來り、月往くときは日來る。日月相推して明生る。寒往くときは暑來り、暑往くときは寒來る。寒暑相推して歳成る。往は屈なり、來は信なり。(四)屈伸相感じて利生る」と。是れ昇降の說なり。故に這の一箇の氣輕揚運行して、其の間許多の查滓降り留まりて這の形質を爲す。這の形質は氣に通じて又昇り揚り盡して、其の查滓相留まる。是れ人物の生死榮枯、都べ來つて此

(三) 繫辭下傳

(四) 信伸相通じ、のぶるの意なり

の裏面を出でず。生じ來り死し去る、皆往來屈信の間、生々更に息むことなく、陰陽相推して周環運轉するなり。

師曰はく、凡そ萬物陽を得るときは發し、陰を得るときは凝る。發するときは陰成り、凝るときは陽生ず、是れ又自然なり。草木暖を得て陽に向へば便ち萌芽發生す、是れ陽を得て發するなり。既に發生すれば則ち形象全く具はる、是れ陰の成るなり。寒を得て陰に向へば則ち花葉凋零す、是れ陰を得て凝るなり。既に凋零すれば則ち結聚して萌芽を含む、是れ陽の生ずるなり。其の實は、陰陽少くも離れず、往來屈信生息むことなきなり。能く這箇の裏面に通ずる、是れ陰陽不測の謂なり。

師曰はく、天は陽にして日月星風の凝滯して象あり、地は陰にして人物水火の氣あり、是れ陰陽各〻陰陽を具へて四象成るなり。四象生ずるときは陰陽に老少あり、變動ありて、天下の用全し。

六六　陰陽相根ざすを論ず

師曰はく、陰陽偏廢すべからず、天地は陰陽を以て立つ。天あれば地あり、人あれ

ば物あり、更に偏立せず偏長せず。故に陽を謂ひて陰を論ぜざれば陽立たず、陰を謂ひて陽を論ぜざれば陰立たず。理氣形氣共に相合して天地人物の用成る。是れ乃ち天[一]一水を生じ、地二火を生ずるの謂なり。凡そ一箇の氣あれば其の象あり、一箇の形あれば其の氣あり。先後を論ぜず次序を謂はず、陰陽互に周轉し來るなり。

師曰はく、陰陽支離すべからず。易に曰ふ[二]、「水火相射はず[三]」とは是れなり。故に陰陽相對して天地人物行はる。上下四方の相待、晝夜明暗の相對、皆然り。近く諸れを人に取るときは、男女あり君臣あり、各〻相因つて其の用亨る。陰陽を離れ陽陰を離るれば、乃ち陰陽支離間隔して陰陽立たず。天は地に因るが故に天たり、君は臣に因るが故に君たり。地なくしては天立たず、臣なくしては君立たず、是れ支離せざるなり。水火は、相尅の甚しきなり、然して水は火に因つて循環流行し、火は水に因つて盛長す。水火既に然り、況や其の餘をや。陰陽根を互にす、故に支離せず。

師曰はく、陰陽根を互にす、故に火は陽にして內暗し、是れ陰を含むなり。水は陰にして內明かなり、是れ陽を含むなり。離の卦は火に屬して二陽一陰を包み、坎の卦は水に屬して二陰一陽を包む。易の卦畫、其の象以て見るべし。

(一) 朱子易學啓蒙に「天一水を生じ、地六之れを成す。地二火を生じて天七之れを成す」と出づ
(二) 說卦傳に出づ
(三) 相厭はすの意

師曰はく、陰陽は偏廢せず、支離せず、根を互にす、而して陰陽同じく長ぜず。陽長ずるときは陰消じ、陰長ずるときは陽消ず、是れ又自然の道なり。其の間陽は氣の輕く清めるものにして必ず昇り進む、故に其の象、上たり天たり君たり高たり。陰は形の重く濁りて必ず降り退く、故に其の象、下たり地たり臣たり卑たり。天地本と尊くして、其の用或は仰ぎ或は俯し、或は戴き或は踏む。聖人是れに因つて禮を節し品を定め、尊卑上下の道明かなり。大傳に曰はく、「天尊く地卑くして乾坤定まる。卑高以て陳ねて貴賤位す」と。愚謂へらく、凡そ陰、陽に隨ふときは順なり。陽、陰に隨ふときは逆なり。順なれば便ち長久なり、逆なれば便ち久しからず。君臣・父子・夫婦の道、日用平生の間皆然り。故に遠く天地人物自然の誠を觀察して、近く諸れを身に取るときは、陰陽の實理なり。

(一) 繫辭上傳の首に出づ

六七　或ひと陰陽の說を問ふを辨ず

或ひと問ふ、陰陽未生の前如何。師曰はく、易に曰はく、「太極兩儀を生ず」と。是れ陰陽未生以前は猶ほ太極と曰ふがごとし。凡そ太極は陰陽既に極まるの象なり。天

地の道は未生を以て之れを論ずべからず、故に陰陽未生の前なし。既に陰陽あれば乃ち天地あり人物あり。是れ這の一箇の太極、天地人物を含藏し盡す。何ぞ陰陽なきの前に別に這の太極あらんや。

或ひと問ふ、陰陽の生ずるに先後ありや。師曰はく、先後なし。陰陽相對待して更に先後の論ずべきなし。推して謂ふときは、動を以て先と爲すに似たりと雖も、動は是れ靜に根ざし、靜既に動を具ふ。故に動けば則ち靜裏面にあり、靜なれば則ち動裏面にあり、動靜根を互にす、何ぞ先後を以てせんや。

或ひと問ふ、陰陽は一か二か。師曰はく、朱子曰ふ、「[一]陰陽を一箇と做して看るも亦得、兩箇と做して看るも亦得。兩箇と做して看れば、是れ陰に分れ陽に分れて兩儀立つ。一箇と做して看れば只だ是れ一箇の消長なり」と。愚謂へらく、既に兩儀と曰ふときは、陰陽是れ兩箇なり。凡そ天下人物の用各〻兩箇にして成る。天地人物皆然り。兩箇又一般にして其の道亨る。天地氣を通じ上下相和し、内外表裏相因つて而して後に其の用全し。是れ兩箇又一般の意なり。大傳に所謂、[二]太極兩儀を生ずるの謂なり。太極は兩儀を具へて一般と爲る。若し之れを分別せば、乃ち陰あり陽あり。天地人物

(一) 朱子語類卷六十五に出づ

(二) 前頁參照

の間皆然り。是れ自然の道にして、造作を須たざるなり。

或ひと問ふ、邵子[一]曰はく、「一氣分れて陰陽と爲る」と。（二）皇極經世觀物外篇に出づ、邵子が門人之れを記す。是れ陰陽以前に一氣あるなり。師曰はく、邵子專ら數を以て之れを論ず。數各〻一二先後あり、故に既に天地の始終を謂ふも、是れ未だ陰陽の實に通ぜざるなり。其の指す所の一氣、何ぞ陰陽を離るるの一物あらんや。既に氣と曰へば、乃ち形象相根ざし、陽は陰に因るなり。

或ひと問ふ、陰陽升降の理尤も正しきも、古人曰はく、觀物外篇に出づ「陽下りて陰に交はり、陰上りて陽に交はる」と。又曰はく、「天氣降る」と。是れ陰亦上ることあり、陽亦降ることありや。師曰はく、陽は輕浮にして昇り、陰は重沈にして降る、是れ理氣形氣の必然なり。故に陽下るべからず、陰上るべからざるは、自然の理なり。古人の說未だ其の實を得ず、錯雜して正しからず。陰陽根を互にし相因循し來る、故に凡そ形象あれば氣あり、氣あれば溫水[三]あるなり。今火をして水を熱せしむるに、其の氣是れ昇る。其の間に溫水[四]惟れ含む。或は以て之れを蓋ふときは、氣聚まり點滴と爲りて下る。是れ陰陽昇降の近く考ふべきなり。地氣昇りて寒陰の爲に蓋はれ、凝滯して雲と爲り、

（一）邵雍、字は堯夫、共城の人、宋代、後河南に住み、李挺之に從學し、一世の學者なり。二程との問答、二程語錄に散見す。終身仕へず、熙寧十年歿、年七十六。康節と謚す。

（二）皇極經世書は觀物內篇十二篇より成り、數理を以て天地を解せしものなり、雍の歿後門人の輯錄せしを觀物外篇と稱し、內篇の義を發するに足る。

（三）（四）一本、共に「濕氣」に作る

其の陰結聚し雨と爲りて下る。地氣は陽にして昇り、其の間陰水の相因るあり、陰の上り交はるにあらず。陰水聚結すれば雨と爲る、是れ陰の降るなり。雨の下るや氣亦相因る、陽の下り交はるにあらず。

或ひと問ふ、形は是れ陰にして氣は是れ陽なり、形あれば乃ち氣あり、氣あれば乃ち形あり、陰陽の自然なりとせば、凡そ器物の情なきも亦氣ありと爲すか。師曰はく、器物何ぞ天地の氣なからんや、天地の間、萬物の出生制作未だ嘗て這箇の氣なくんばあらず。水を以て之れを涵せば乃ち濕腐して去り、火を以て之れを燒けば乃ち炎上して去る。豈氣なしと謂ふべけんや。

或ひと問ふ、相尅の甚しきは水火に如くはなし。易に曰ふ、(四)「水火相射はず」と、子又曰はく、「水は火に因り、火は水に因る」と。此の說未だ通ぜず。師曰はく、相尅は幷合兩長するの謂なり。相幷合し相兩長するときは、相尅して消長す。水火は南北に位して相近づかず、能く相對す。故に水は火に因り、火は水に因つて支離せざるなり。天地の相隔り、東西の相向ひ、南北の相對する、各〻相尅を以てして立つ、其の自ら然ること見るべし。君臣相近づくときは狎れて犯し、父子相近づくときは恭敬を失し、

(四) 前出一三頁參照

男女相近づくときは淫れて溢れ、日月相近づくときは食して光を失ふ。是れ聖人の禮儀品節を定むる所以なり。其の相遠ざかるも亦節あり、天地日月の相間り、南北東西の相對するを以て、近く日用彜倫の上に取るときは、其の用粲然として明白なり。

或ひと問ふ、火は水に因つて盛長するの説未だ通ぜずと。師曰はく、人は水分盛なれば元氣強剛なり、草木は寒陰の包むに因つて生々の氣を盛にす。凡そ萬物の理皆此の如し。

或ひと問ふ、朱子曰ふ、「(一)天地の間兩ながら立つの理なし、陰陽に勝つに非ざれば即ち陽陰に勝つ、物として然らずといふことなく、時として然らずといふことなし」と。今子が所謂陰陽相對するとは、兩ながら立つの理に非ずや。師曰はく、朱子の所謂兩ながら立つの理なしとは、兩箇幷び立たざるの謂なり。南北兩ながら立ち天地兩ながら位し、皆兩立す、是れ又自然なり。這裏消長あるときは長久ならず、是れ陰陽相對するなり。陰陽幷び立たずとは、一所一時一用に兩箇幷行するなきの謂なり。水火相合すれば尅し、木金相幷ぶときは勝つ、是れ天地の道なり。

(一) 朱子語類巻六十五に出づ

六八　五行の說を論ず

師曰はく、五行の說、洪範[一]に出づ。五行は、水火金木土にして、五者天地の間に行る所以なり。五行は本と作爲を待たず、自然の形勢なり。凡そ天地人物は陰陽以て總管して、五行は陰陽の其の形象を著はすものなり。故に五行は形にして陰陽は氣なり、五行は地に屬し陰陽は天に屬す。人は二五[二]に因つて日用を爲し來り、陰陽五行は人を得て以て其の用を正す。陰陽は形よりして上なる者なり、五行は形よりして下なる者なり。

師曰はく、陰陽の形象は水火を出でず、水火は以て五行の主たり。水火は象ありて形なく、見るべくして取るべからず。故に天に在りて陰陽と謂ふときは只だ其の氣を論じ、地に在りて陰陽と謂ふときは既に其の形象を論ず。天に在りては、暖冷寒暑の氣あり、地に在りては、水火金木の形あり。水火の用尤も大なる哉。

師曰はく、水火相對待し相流行して、其の間萬變盡く。凡そ形象ある者は、未だ嘗

[一] 書經周書の篇名

[二] 二は陰陽

て五行を出でず。易に曰はく、「[一]地の道を立つ、柔と剛と曰ふ」と。柔剛は五行の體なり。五行相錯はりて天下の用成る。其の五者は自然の形にして、之れを用ひ之れを錯ふる者は不測の神なり。其の神又陰陽を出でず。易に曰はく、「[二]陰を分ち陽を分ち迭に柔剛を用ふ、故に易六位[三]にして章を成す」と。愚謂へらく、其の本を論ずるときは、分陰分陽にして其の用を異にす、然れども迭に柔剛を用ふ、是れ其の章を成す所以なり。章を成さざれば事物の用行はれず。

六九　五行の生序を論ず

師曰はく、洪範[四]の初の一に曰はく、「五行。一に曰はく水、二に曰はく火、三に曰はく木、四に曰はく金、五に曰はく土。水を潤下と曰ひ、火を炎上と曰ひ、木を曲直と曰ひ、金を從革と曰ひ、土は爰に稼穡す。潤下は鹹を作し、炎上は苦を作し、曲直は酸を作し、從革は辛を作し、稼穡は甘を作す」と。愚謂へらく、五行の序は洪範に初めて之れを出す、乃ち河洛[五]の數、天地萬物生々の序なり。朱子曰はく、「陽變じ陰合して初めて水火を生ず。水火は氣なり、流動閃爍して、其の體尚ほ虚にして、其の成形

(一) 説卦傳、前出九頁參照
(二) 説卦傳
(三) 易の卦は六種の爻より成る、初三五の位を陽剛とし、二四六の位を陰柔とし、陰陽柔剛互に相雜りて文章を成すの意
(四) 洪範九疇の初の第一條なり
(五) 河圖洛書、河圖は伏羲の世黄河より現はれた龍馬の背に負ひし圖にして易の八卦の源をなせしもの。洛書は禹の時に洛水より出でし龜の背にありし文にして洪範の基源となりしものと云ふ。數は數理なり

猶ほ未だ定まらず。次いで木金を生ずれば則ち確然として定形あり。水火は初に是れ自生し、木金は則ち土に資る。五行の屬皆土中より旋り生出し來る」と。竊に按ずるに、既に水火と曰ふときは須らく氣と曰ふべからず、只だ金木に對しては乃ち象ありて形なし。故に陰陽は氣なり、五行は形なり。洪範に五行の形を言ひ、五行の用を論じて、以て五行日用の道を明かにすること、尤も切なる哉。

師曰はく、五行の生序は水を以て首位と爲す。是れ一氣既に通ずれば、其の氣蒸鬱して便ち濕潤[六]を含む。濕潤聚結して汗下淋漓たるときは雨と爲る。是れ天[七]一六を得て水生ずるの謂なり。雨水下れば氣と爲り、又昇り又降る、生々息むことなきの理なり。故に水を以て五行の首と爲す。魯齋の鮑氏曰はく、「物の初めて生ずるや其の形皆水なり、水は萬物の一原、皆天一の造化に根ざす。夫れ金石の産其の初め亦乳なり、一陽の氣、一日の時、一年十一月冬至皆子に肇まる。子は水の位なり。夫れ水は陽に生じて陰に成る。氣始めて動いて陽生じ、氣聚まりて靜かなるときは水と成る。呵氣を觀て見るべし。蓋し水を生ずるの初めは一に屬す、故に微かなり。水と成る時に至れば則ち六なり」と。或ひと問うて曰はく、「天一水を生ずること、亦物の驗むべきあ

(六) 一本、濕を溫に作る
(七) 前出一三頁參照

りや」。曰はく、「人の一身に験むべし、貪心動けば津(一)生じ、哀心動けば涙生じ、愧心動けば汗生じ、慾心動けば精生ず。人心寂然として動かざるの時に方れば則ち太極なり。此の心の動きは、則ち太極動いて陽を生ずるなり。所以に心一たび動いて水生ず、即ち天一水を生ずるの證と爲すべし。神は氣の主たり、神動けば氣隨ふ。氣は水の母たり、氣聚まるときは水生ず」と。愚謂へらく、氣あれば乃ち濕を含む、是れ天一の象にして其の凝滯是れ水なり。心一たび動くときは既に水の濕を含み、動極まりて水生ず、是れ陽極まりて陰と爲るなり。魯齋が說略ぼ說き得て未だ精しからず、況や太極の理に未だ通ぜざるなり。凡そ水は正北方の首位にして、其の質純陰にして其の用は純陽なり。外暗く內明かにして、卦は坎に屬す。易に曰はく(二)、「萬物を潤ほす者は水より潤ほすはなし」と。萬物の歸する所にして、天に在りては月と曰ひ雨と爲り、地に在りては水と爲り、人に在りては腎と爲る。火は正南方の位にして、其の質陽にして其の用は陰なり。外明かにして內暗く、卦は離に屬す。易に曰はく(三)、「萬物を熯かす者は火より熯くはなし」と。萬物皆相見はるるところにして、天に在りては日と曰ひ電と爲り、地に在りては火と爲り、人に在りては心と爲る。萬物を生殺し、顯仁藏用、

(一) 口中の液
(二) 說卦傳
(三) 同前

神妙窮まりなし、火の用尤も大なり。一氣は是れ火の本なり。氣は必ず動く、動くときは暖溫あり、是れ火の初にして、其の聚結して形を成し火と爲るなり。古人曰はく、「水は精と爲り、火は神と爲る」と。夫れ水は濕潤の聚結せるもの、故に形に屬す、火は氣の動旋するもの、故に神と爲る。形氣相合して其の間に不測の靈妙あるなり。是れ水火を五行の主と爲す所以なり。土は水火の査滓なり。水靜かなるときは下に結滯の物あり、動くときは上に浮漚(四)の形あり、是れ土なり。火炎上するときは煙氣結滯して形を爲し、其の物に就くの下には灰燼の成るあり、是れ土なり。故に土は水火の査滓なり。土、水火の査滓に因つて生じて能く水火を藏し、水火又土に因つて行る。故に土を五行の因る所と爲し、其の位中央に在るなり。金木は土の生ずる所にして、金は土の精秀聚まりて金と爲り、木は土の氣生じて草木と爲るなり。是れ五行生々の本原なり。其の本原を知らざれば、其の用正しからざるなり。

　師曰はく、五行に生數あり、行數あり。洪範の次序は、對待を以て之れを論ず、故に水火木金土なり、先儒の所謂生數なり。木火土金水の如きは、春夏秋冬の序にして、流行の數なり。朱子曰はく、「五行の序、某は三句に作りて之れを斷ぜんと欲す。曰は

(四) 浮べる沫

く、數を得るの奇耦多寡を論ずるときは、水火木金土と曰ひ、始生の序を論ずるときは、水木火金土と曰ひ、相生の序を論ずるときは、木火土金水と曰ふ。此の如くして其れ庶幾からんか」と。愚謂へらく、先儒の所謂生數・行數は恐らくは此の如くにあらじ。朱子嘗て之れを疑ふ、故に三句の斷あるなり。天地の理は本と造作なく、又模樣なし。造化の本原、人物の生育は初より兩樣なく、又先後の論ずべきなし。然れども其の說を推して、强ひて以て之れを言へば、水を以て先と爲す。是れ質の著明以て見つべければなり。火は水の氣なり、水生ずれば則ち火這裏に旋轉し、水火既に生ずれば土成る。土成れば木生じ金全し。是れ水火土木金の序なり。天地人物の生々、此の次序を出でず。近く諸れを身に取るに、陰陽の始めて交はるや、其の氣凝りて水と爲る、其の間運行の火ありて此の質を生ず、是れ水火土なり。質の初めて成るや筋骨を生ず、是れ木なり。長ずるに及びて堅厚なる、是れ金なり。故に其の生數を論ずれば則ち水火土木金と爲り、其の行數を謂へば則ち木火金水にして、土は惣括たり、惣郭たり。四時の循行は春夏秋冬を以てして、土は四時を統ぶ。木火相生ずれば土成りて堅厚なり。草木の子實枝根以て見つべし。今水を金器に入れて之れを煮るに、木以

て初めに、火以て次ぎ、金以て受け、水以て成る。是れ木火金水の證なり。故に天地人物流行日用の間、猶ほ四時の生長收藏の如し。是れ行數の序なり。人の臟腑も亦此の如し、飲食以て元氣を養ひ、元氣盛にして肺金之れを稟く。肺金水を貯へざれば火の爲に壞る。木火金水共に和調して、身體是れ潤肥す。

師曰はく、凡そ天地人物其の惣郭は皆土なり。水火は上下に在りて、金木は其の裏面に在り。金は水に屬するが故に能く火に敵す。水は金に因らざれば其の質を全うせず。木は火に屬するが故に能く火を傳ふ。火は木に因らざれば其の德を發せず。水火相對し金木相守りて天地日月周旋運行し、生々息むことなし。

師曰はく、凡そ水金は陰なり、火木は陽なり。然して陰陽根を互にし相錯はりて更に支離せず。水は正北に居る、故に陰の盛たり、其の象を大陰と爲す。陰極まれば陽始めて生ず、故に水を陽穉と爲して少陽と爲す。火は正南に居る、故に陽の盛たり、其の象を太陽と爲す。陽極まれば陰始めて生ず、故に火を陰穉と爲して少陰と爲す。木は東方なり、故に陽穉たり少陽たり。然して陽の木を生ずるに到つては已に强盛なり、故に木を陽盛と爲し太陽と爲す。金は西方なり、故に陰穉と爲して少陰と爲す。

然して金を生ずるに到るときは已に質を成す、故に金を陰盛と爲して太陰と爲す。是れ陰陽根を互にするなり。夫れ陰陽各〻稺少なれば、陰は陽の助を受け、陽は陰の助を受く。盛老ゆれば陽は陰の根を含み、陰は陽の根を含む。是れ陰陽錯綜して萬物生成するなり。

師曰はく、洪範の水火木金土の序は、對待を以て之れを論じ、向背左右中を以て一二三四五を言ふ。是れ天地人物五行生々流行共に以て成るなり。先儒是れを以て生々の序と爲す、故に甚だ附會の說あり。水火木金土は、天地人物自然の形にして、天一地二天三地四天五の數は、聖人只だ生數の序を論ずるなり。故に易に水火木金土の序を言はず。

師曰はく、洪範に五行を論じて具に其の用を言ふ。潤下・炎上・曲直・從革・稼穡は、皆五行の德なり。五行に此の德なきときは實用なし。聖人の五行を擧ぐるは、其の德に因つて其の用を明かにする所以なり。水は能く萬物を潤ほして、其の質下つて卑きに處り、火は能く萬物を熯かして、其の氣上つて高きに處る。木は曲つて直く、金は之れを鑠すときは能く從つて耗損せず、其の性變ぜず、是れ革なり。土は稼穡に因つ

て其の徳を發す。是れ五行の徳用なり。潤下は鹹を作し、炎上は苦を作し、曲直は酸を作し、從革は辛を作し、稼穡は甘を作す、亦五味の自然なり。

師曰はく、五行に相生あり相尅あり、天地の間相尅對待して其の道立つ。其の道立つときは相生す、是れ相生相尅の循環周旋なり。人物亦此の如く相尅對待するときは、其の用成りて長久なり。故に相生相尅は一理なり。

師曰はく、天地人物の間五行立つは、是れ自然の道なり。人身は五行を以て成る、故に其の情に喜怒哀樂の欲あり、惻隱・羞惡・辭讓・是非の發あり。之れを正しくするに道を以てすれば仁義禮智と爲る。洪範(一)次の二に曰はく、「敬んで五事を用ふ。一に曰はく貌、二に曰はく言、三に曰はく視、四に曰はく聽、五に曰はく思」と。是れ又五行に合するなり。彝倫又五を以てす。所謂君臣・父子・夫婦・兄弟・朋友なり。故に五行の天地人物に於ける、其の用尤も大なり。唯に五行のみを言ひて、平生日用の間を明かにせざれば實なきなり。

七〇　或ひと五行の説を問ふを辨ず

(一) 書經洪範、前出二〇頁「初の一に曰はく」に次ぐものなり

或ひと問ふ、天地の間萬物あり、何ぞ只だ金木水火土を以て五行と爲すや。師曰はく、五行の水火土金木を以てするは、聖人天地人物を考へ、已むを得ざるの理を以て、已むを得ざるの物を窮め、已むを得ざるの用を行ふなり。聖人窮め盡して、天地又之れに應ず。凡そ天地の間、只だ水火の二儀萬物の主たり。水は以て之れを潤ほし、火は以て之れを熯かす。潤熯は水火の氣なり。水火既に形すれば、天地位し日月運る、故に水火に因つて土成り、土成りて木金生ず。是れ更に造作假合を待たず、自然の勢なり、自然の形なり。天地人物因つて著明なる所以なり。天地人物は五行を以て生成し來る、故に其の質其の情其の用亦五行を出でず。水火以て體を爲し、木金以て用を爲す。民生日用の間、水以て之れを潤ほし、火以て之れを熯かし、土以て之れを養ひ、金以て之れを制し、木以て之れを用ひ、飮食・衣服・居宅・用器更に五行を外にせず。是れ水火土金木を五行と爲す所以なり。

　或ひと問ふ、水火土の三つの者は其の說著明なり。金又玉石あり、木又草あり五穀あり、又鳥獸魚鼈あり、而して只だ金木を以て五行に充つるは、其の說ありや。師曰はく、聖人の萬物を定め天下の用を盡すは、已むことを得ざるを以て本と爲す。金木

は剛柔なり。而して金は從革を以て、或は隨順鑠磨して其の用以て從ひ、或は斷制截割して其の用以て革まる。木は曲直を以て、或は曲りて用を爲し、或は直くして之れを支ふ。天下の間、人物の用未だ嘗て金木なくんばあらず。玉石は土の精にして、之れなしと雖も亦以て足りぬべし。草に五穀あり、洪範に土と謂ひて稼穡を稱す。(一)稼は五穀を種うるなり、穡は之れを斂むるなり。既に土と曰へば乃ち稼穡の用以て全きなり。且つ金と曰へば玉石以て具はり、木と曰へば乃ち草苔以て擧ぐるなり。竊に按ずるに、上古は穴居野處して、未だ稼穡の事あらず、況や百藥の制なきをや。大傳(二)に曰はく、「結繩を作して網罟を爲り、以て佃し以て漁す。蓋し諸れを離(三)に取る。包犧氏沒して神農氏作る。木を斲りて耜と爲し、木を揉めて耒と爲し、耒耨の利以て天下に敎ふ。蓋し諸れを益(四)に取る」と、是れなり。故に上古の民は血食して以て生くべく、引導して天年を終ふべし。五穀藥草の全きなしと雖も、人民の生くること又可なり。金木の用、水火の體、人物以て生成し、日月以て輔養す。是れ木金を以て五行に充つるの謂なり。鳥獸魚鼈は、物の五行を得たるものにして人の類なり。金石草木を以て之れを論ずべからず。

(一)「土は爰に稼穡す」を指す
(二) 繫辭下傳
(三) 離の卦より取り來る
(四) 益の卦より取り來る

或ひと問ふ、邵氏曰はく(一)「太柔を水と爲し太剛を火と爲し、少柔を土と爲し少剛を石と爲し、水火土石交りて地の體之れを盡す」と。如何。師曰はく、是れ觀物内篇の言なり。邵伯溫(二)が解に曰はく、「或ひと曰ふ、『皇極經世に、金木水火土を舍いて水火土石を用ふるは何ぞや』と。曰はく(邵伯溫)、『日月星辰は天の四象なり、水火土石は地の四體なり、金木水火土は五行なり。四象四體は先天なり、五行は後天なり。先天後天の自つて出づる所なり、水火土石は五行の自つて出づる所なり。水火土石は本體なり、金木水火土は致用なり。其の致用を以てするの故に之れを五行と謂ひ、天地の間に行はるる者なり。水火土石は蓋し五行其の間に在り。金は石より出でて、木は土に生ず。石ありて而して後に金あり、土ありて然して後に木あり。金は從革して後に成り、木は植物の一類なり。是れ豈五行を舍いて用ひざらんや。五行其の間に在りとは、此れの謂なり。皇極經世は水火土石を用ふるに其の本體を以てするなり。洪範は金木火水土を用ふるに其の致用を以てするなり。皆主とする所ありて、其の歸は則ち一なり』と。又曰はく、『混成一體之れを太極と謂ふ。太極既に判れて初めて儀形あり、之れを兩儀と謂ふ。兩儀又判れて陰陽剛柔と爲る、之れを四象と謂ふ。四象又判れて太

(一)邵康節、前出一六頁參照

(二)宋代の人、康節邵雍の子、字は子文。司馬光に師事せり。徽宗の時上書して、祖宗の制度に復せんと乞ひ、小人に忌まれ、利路轉運使に至りて終る。紹興四年歿、年七十八。易辯惑・河南集・聞見錄・皇極系述・觀物内外篇解等の著あり

陽・少陽・太陰・少陰・太剛・少剛・太柔・少柔と爲りて八卦を成す。太陽・太陰・少陽・少陰は象を天に成して日月星辰と爲り、太剛・少剛・太柔・少柔は形を地に成して水火土石と爲る。八つの者具備りて然して後に天地の體備はれり。天地の體備はりて而して後に變化して萬物を生成するなり。所謂八つの者は亦四つに基づくのみ。天に在りて象を成すは日なり、地に在りて形を成すは火なり。陽燧(三)は日に取りて火を得、火と日と一體に本づく。天に在りて象を成すは月なり、地に在りて形を成すは水なり。方諸(四)は月に取りて水を得、水と月と一體に本づく。天に在りて象を成すは星なり、地に在りて形を成すは石なり。星隕ちて石と爲る、石と星と一體に本づく。天に在りて象を成すは辰なり、地に在りて形を成すは土なり。日月星の外より高くして蒼蒼たる者は皆辰なり。水火石の外より廣くして厚き者は皆土なり。辰と土と一體に本づく。天地の間は猶ほ形影聲響の相應ずるがごとく、象上に見はるれば體必ず上に應ず、皆自然の理なり。蓋し日月星辰は猶ほ人の耳目口鼻あるがごとく、水火土石は猶ほ人の血氣骨肉あるがごとし」と。愚謂へらく、邵氏先天後天の說を發明し、四象の儀に因つて、天の日月星辰を稟け、地の火水石土を設く。尤も所以あるに似たり。

(三) 日光より火をとるものをいふ
(四) 月より水を取る鏡

然して易の四象は陰陽又陰陽を含むの謂にして、日月星辰水火土石を論ぜず。是れ皆附會の甚しきなり。聖人易を謂ひ五行を論ずる、人物日用の間を出でず。故に體用の差なく、唯だ近く諸れを平生に取るのみ、何ぞ先天後天本末の異あらんや。且つ天に日月星辰河漢あり、日は以て之れを熯かし、月は以て之れを潤ほし、星は木に屬し辰は土に屬し、河漢は金氣なり、是れ天の五行なり。地又水火木金土あり。邵氏は星を以て石と爲す、是れ星隕ちて石と爲るの說に因る。石は陰なり。星常に明ありて以て炎上す、豈陰と謂ふべけんや。其の隕ちて石となる如きは、灰燼の餘なり、其の實知るべからず。伯溫以爲らく、「石ありて而して後に金あり、土ありて然して後に木あり」と、凡そ金石草木は皆土の屬なり。土あれば則ち金を生ず、金氣土を貫きて之れを固む。石は土及び木の以て結聚して這の堅剛底あるなり。木は地の氣以て之れを生じ、土之れを爲りて潤熯の用あり、木は以て人物の用と爲る。故に金木は各〻水火の屬にして、或は水を生じ或は火を生ず。金惟れ水を生じて火を含み、木惟れ火を生じて能く水を來す。其の德以て見るべし。邵氏臆說を以て附會し來る、尤も取るべきなし。

（一）明代蘄州の人、字は東璧、楚王府奉祠正たり、讀書して生業を治めず、ことに醫書を好む。本草綱目・奇經八脈考等の著あり
（二）人體兩腎の中間

或ひと問ふ、五行皆一つなるも、惟だ火のみ二つあり。二つとは陰火なり陽火なりと。此の說如何。師曰はく、李時珍[一]が曰はく、「陽火・陰火、其の綱凡そ三つ、其の目凡そ十有二。所謂三つとは、天火なり、地火なり、人火なり。所謂十有二とは、天の火四つ、（天の陽火二つ、眞火なり、星精の飛火なり。天の陰火二つ、龍火なり、雷火なり。）地の火五つ、（地の陽火三つ、木を鑽るの火なり、石を打つの火なり、金を戞つの火なり。地の陰火二つ、石油の火なり、水中の火なり。）人の火三つなり。（人の陽火一つ、丙丁君の火なり。人の陰火二つ、命門相火[二]なり、三昧の火なり。）」愚謂へらく、是れ醫家の說なり、此の如く論じ來れば、乃ち五行各〻數品あるべし、何ぞ必ずしも唯に火のみならんや。然して五行の間、火甚だ烈强にして物を害す、故に醫家火に於て其の說を具にす。

或ひと問ふ、水火は五行の惣管にして、唯だ火以て其の烈强甚しとは、何と謂ふことぞや。師曰はく、水は形の象なり、火は氣の象なり。形ある者は重く沈みて結滯し、氣ある者は輕く浮びて通貫す。故に火は萬物をして運動流行生殺變化せしめ、其の神靈謂ふべからず。水は萬物をして靜定安止長久緩平ならしめ、其の潤德謂ふべからず。火と水と相對し、其の用亦同じうして、火は急速なり、水は緩遲なり。故に專ら火を以て烈强と爲す。火甚し、故に只だ炎上し去る。水緩し、故に潤下して退く。其の物を害するや、水尤も深浸にして去るべからず。是れ水火共に能く物を生じ、能く物を

殺すなり。

　或ひと問ふ、五行の生と相生と、其の分ち如何。師曰はく、生とは其の初の出生なり。相生とは流行の序なり。然して生序流行して、序又相支離せざるなり。黃榦[一]が曰はく、「五行に生數あり行數あり、知らず、何の故ぞや。初生是れ一樣、流行又是れ一樣。其の物たるや二ならざれば、其の物を生ずること測られず。易簡[二]の義恐らくは此の如くならじ。此の故に嘗て疑ふ：其れ只だ是れ一樣、造化の本原を以て之れを人物の生育に參するに及ぶ、初より兩樣なし、只だ是れ水木火金土便ち是れ次序なりと。古人陰陽造化の殊なるを分別せんと欲す、故に水火木金土を以て言を爲すのみ。一[三]より十に至るの數、特に奇耦多寡を言ふのみにして、次序此の如しと謂ふに非ず。蓋し積實の數にして次第の數に非ず。天奇を得て水を爲す、故に曰はく、『一、水を生ず』、一之れ極まりて三と爲る、故に曰はく、『三、木を生ず』。一極まりて三と爲り、一運の圓を以て三を生ず、故に一にして三と爲るなり。地耦を得て火と爲る、故に曰はく、『火を生ず』。二之れ極まりて四と爲る、故に曰はく、『四、金を生ず』。二極まりて四と爲り、二周の方を以て四と爲る、故に二にして四と爲るなり。水は初生の陽、木は

（一）朱子の門人にして女婿、字は直卿、勉齋先生と稱す。經解・勉齋文集あり
（二）易の繫辭上傳に「乾は易を以て知り坤は簡を以て能くす。易なるときは知り易く、簡なるときは從ひ易し」云々、「易簡にして天下の理得たり」と出づ
（三）同前に、「天一地二、天三地四、天五地六、天七地八、天九地十」と出づるを指す

極盛の陽、火は初生の陰、金は極盛の陰。陽極まりて陰を生じ、陰極まりて陽を生ず。故に但だ當に水木火金土を以て次序と爲すべし。初生より流行に至る、皆是れ此の如し、若し陰陽奇耦一初一盛を看んと要せば、當に水火木金土と曰ふべし。次序此の如しと謂ふに非ず。今以て第一水を生じ、第二火を生じ、第三木を生じ、第四金を生ずと爲して、以て次序と爲すときは則ち誤れり。水木火金土は五行の序なり、水火木金土は其の奇耦初盛を分ちて言を爲すなり。此れを以て之れを觀れば、只だ是れ一樣、初より兩樣なし。所謂一二三四は、但だ一多一少、多の極、少の極を言ふなり。初より次序を以て言ふに非ざること、猶ほ人の一文兩文を言ふがごとし、第一の名第二の名と謂ふに非ず」と。愚謂へらく、黃榦が論少しく其の所以あり。夫れ五行は一なり、而して以て生と行との異なることありと爲すときは、誠に支離に近き者の若し。然して生と行と合して一と爲る底は、太極の謂なり。太極未分の時、象數悉く具はつて闕如する所なく、此の裏面先後次序の謂ふべきなし。故に天地人物只だ一氣にして、共に出生し來るなり。若し先後次序を言はば、則ち第二義に落ち、作爲造設に渉り了る。是れ天地自然の道なり。今民生日用を以て之れを謂はば、乃ち已むことを得ざるの言

あり。是れ兩儀を生じ四象を生ずるの謂なり。故に日用流行底、未だ嘗て其の次序なくんばあらず。黃榦が水木火金土を以て自然の序と爲すは、是れ又一三二四の數形なり、自然の序と謂ふべからず。洪範の水火木金土の數は、是れ乃ち生數の序にして、流行の序亦之れを含む。竊に案ずるに、水火は五行の惣管にして天地人物の主なり。故に火は炎上し水は潤下して、火は上に在り水は下に在り、此の間木金以て成る。木は浮んで火に屬し、金は沈んで水に屬す。此に於て火木金水の體全し。其の相生流行を以てするときは、中央の木上りて火を生じ、中央の金下りて水を生ず。火、木を得るが故に盛なり、水、金を得るが故に長ず。此れ以て流行に充つれば、乃ち木は火を生じて左より炎上し、金は水を生じて右より潤下し、進退昇降更に違はず。是れ河圖・洛書自然の數にして、天地人物生成日用の道なり。故に水火先づ生じて全體と爲り、木金後に生じて體用と爲る。是れ水火木金にして、而も見來れば火木金水なり、木火金水也。是れ生成流行日用の序、分合聚散して一氣と爲るなり。凡そ人物の生は、氣以て生じ水以て包む。木金の象這裏に在り。土は郛郭惣體なり、火水を以て生成す。故に四方に配するときは中央に位し、數を以てすれば生數の終、萬物の歸する所なり。

是れ洪範五を以てして、河洛中央に位するなり。

或ひと問ふ、水火は先に在り、木金土は漸次に長成して堅硬と爲る、是れ先後の謂か。師曰はく、是れ木金土の形を以て論じ來るなり、天地人物の實理は然らず。木金土漸次に長成するときは、則ち水火も亦長生す。人物の生は其れ稺柔なり、五行共に然り。其の壯長するに及びては、五行亦壯長す。何ぞ只だ木金土のみを以てせんや。是れ太極象數を含んで漸次に洪廣遠大なり。這の洪廣遠大は一彼一此に非ず。人其の象數の暗に全きことを知らずして、其の形體既に顯はるるを見る。故に木金を以て遲成と爲す。其の間都て象形の差あり。水火は象なり、土木金は形なり。水火の始終は見るべきなく、土木金は其の生ずるを人未だ見ざれども、其の成るや以て見るべし。故に竟に先後の說あり。

或ひと問ふ、四時の序は木火金水にして、土は四時に旺なり。夏の後は便ち繼ぐに秋を以てす。相生の序明かならずと。師曰はく、黃榦之れを疑ひて、以て火能く金を生ずと爲す。李氏希濂詳に之れを辨じて曰はく「惟だ土定位なく旺を四季に寄す。辰未戌丑の月は土の旺なる所なり、土旺なれば皆以て金を生ずべし。然して辰未は陽な

り、戊丑は陰なり。陽は則ち生じ陰は則ち成す。辰未固より皆陽なり。春木の氣盛なるときは、土之れが爲に傷つき、夏火の氣盛なるときは、土之れが爲に息ふ。故に季夏は本と土旺なるの月にして、又之れに加ふるに火を以てすれば、尤も旺と爲る。故に能く金を生じて秋と爲る。此れ其の相生の序豈瞭然として甚だ明かならざらんや。月令(一)に、中央の土を以て季夏の後に繼ぎ、素問(二)に、四時の外に於ては、長夏(三)を以て土に屬す。皆是れ此の意十干の序と脗合す。炎・黃(四)より今に迄るまで未だ之れを改むることあらず、周子・朱子蓋し皆之れを取る。今一旦孤論を創立して以て其の獨見を行ふ。愚恐らくは其の造化本然の體に合はざらんことを」と。愚謂へらく、黃幹が火より金を生ずるの說尤も疏論にして正しからず。凡そ土は水火の査滓、五行の因る所藏むる所なり。故に五行を謂へば乃ち土を物體と爲し、四時を謂へば乃ち土を四時の離れざる所と爲し、四方を謂へば乃ち土を四維(五)と爲し、五常を謂へば乃ち信を土と爲す。河圖の數各〻中央の五を得て、洛書の數を成し、四維各〻十數を得。是れ土を四行の歸藏と爲すなり。土は以て四行を離れず、四行は土を得て全體あり。故に土の位を別つべからずして、其の寄旺を謂ふときは中央と爲し、專ら相生を以てするときは火よ

(一) 禮記の篇名。四時の中央は土用なり、土用は四季共にあり、而して夏の土用は土用中の中央にして最も氣の盛なるときなれば、特にあげていひしなり

(二) 支那最古の醫書、黃帝と岐伯との問答を記せしものといひ傳ふれども、詳ならず、辭源には漢以前の書なることは確なりと記せり

(三) 陰曆六月

(四) 炎帝・黃帝

(五) 四方の隅、乾・坤・艮・巽をいふ

（六）四端に仁義禮智を云ひて、信を云はざるとなり

り土を生ずと爲す。是れ四時を謂ひ四方を謂ひ四端を謂ひて、土旺・中央・信(六)に及ばず、易に四象を生ずるを曰ひて這裏に及ばざるものなり。夫れ萬物の生成、人生の日用は、陰陽の交易變化のみ。陽生長の極は便ち變じて陰と爲り、陰生長の極は便ち變じて陽と爲る。是れ木火は陽の生長、金水は陰の生長、根を互にして交易するなり。天下の間人物の用は、火以て炎上して止むべからず、故に陰以て包藏して其の事成る。夏の陽盛に炎上するや、金は以て之れに敵當し、水は以て之れを援助し、而して後に陰陽相循環し四時相運行し、萬物生々して息むことなし。木火金水炎上・潤下・相生・相尅して、土全く備はる。今人物を以てすれば乃ち人物是れ土なり、水火の査滓なり。木火金水能く循環して人物全く備はる。物の惣體、人の一身、皆土なり。天の全體は辰を以てし、地の全體は土を以てす、四時四方皆然り。故に其の生成するや、木火金水を以て悉く相和調す。世の夏已後相尅するを疑ふ者は、唯だ相生を必として說を立つるの蔽なり。或ひと曰はく、然らば乃ち月令に中央の土を以て季夏の後に繼ぐは非なりや。師曰はく、四時各々土旺ありて、其の主位を論ずるときは、中央の土を以て季夏の後に繼ぐべし。月令此に於て之れを行ふ、是れ相生の說を以て四時を論

ずるなり。凡そ四時の循行は、陰陽の交易生尅の生成なり。春夏は木より火を生じて左より上に至る、炎上の謂なり。秋冬は金より水を生じて右より下に至る、潤下の謂なり。炎上するが故に萬物發生し、潤下するが故に萬物歸藏す。其の昇降進退、髮を容れざるなり。或ひと曰はく、夏と秋との間相尅して、冬と春と相繼いで相生を以てすること、未だ其の說を得ずと。師曰はく、是れ相生相尅の交易なり。季夏は相尅を以てし、季冬も又相尅を以てせば、乃ち皆尅を以てして交易せざるなり。季冬は相生を以て相繼ぎ、季夏は相尅を以て相受くるは、天地四時の循環自然の妙にして、生々息むことなきなり。四時を以てすれば乃ち木火は陽、金水は陰、季夏は陽の終、季冬は陰の終にして、四時の尾なり。此れ相繼ぐに相尅を以てすれば、乃ち間隔して通ずべからず。四時の將に終らんとするとき相生を以てする、是れ天地生物の理なり。木火は金水の爲に相尅す、其の間火金に尅ちて陰長ずること能はず、水木を生じて陰は陽を養ふ。若し火は金に尅つことあらず、水は木を生ずることあらずんば、陰常に勝つて陽行るべからず、陰陽隔絕して生成すべからず。天地の自然、此の如きの安排を須ひず。而して見來れば乃ち此の如きの妙あり。

或ひと問ふ、子或は木火金水を以て次序し、或は水金木火を以て次序す、是れ未だ一定せざるの論か。師曰はく、木火金水を以てするは四行流行の序なり、水金木火は、天地人物自然の形勢なり。火木金水は、炎上潤下相生の序なり。合一すれば乃ち河洛(一)の生成にして、洪範に所謂水火木金土なり。聖人の教は初より多端なきも、後學皆實を失ひて數説を具へ異論を立て、學者竟に疑惑して歩を失ふ。天地の陰陽は水火を出でず、木金之れに次ぎ、土以て之れを終る。是れ洪範・河洛の意なり。今錯綜すれば乃ち四時木火金水にして、其の理用を詳にするときは、陽は炎上して季夏に至つて小成し、陰は潤下して季冬に至つて大成す。其の次序木火金水の如きに似て、而も水火は以て極と爲り、木金は以て之れに屬して四時成る、是れ水火木金土なり。水は分れて上に在りて金に因り、火は分れて下に在りて木に因る。水は潤下し火は炎上す。其の氣相交はり、陰陽錯雜(二)し、地天交泰して、萬物成る。是れ水金木火は、猶ほ天の北極は上に在り、南極は下に在り、地の南北は相對し、金木は中に在り、人の百會(ひやくゑ)は上に在り、元氣は下に在り、肺金肝木は裏面に在り、物の水以て金器に依り、木以て火を傳へて相成るがごとし。是れ水火木金土なり。火木は炎上して相生じ、金水は潤下して

(一) 河圖・洛書、前出二〇頁參照

(二) 一本、錯綜に作る

相生ず。火木は陽の稱壯、金水は陰の稱壯にして、左旋し右轉して四時行はれ百物成る。是れ又水火木金土なり。故に水火木金土の次序は是れ惣管、而して其の裏面錯綜して生成し來るなり。先儒五行の實理を知らず、竟に多端を立て異説を論ずるなり。

或ひと問ふ、萬物の生ずるや、木金以て遲く成り、其の壞るるや木金又遲く除く。是れ水火は先んじ來るが故に先んじ去り、木金は後れて成るが故に遲く壞るるや。師曰はく、水火は更に支離せず、氣絶するときは水行らず、水行らざるときは氣絶するなり。木金は水火相因り以て屬するの形器なり、木金は水火を得ざるときは成らず。水火は木金を得ざるときは其の用なし。木金は形の極なり、故に遲く壞れ了る。未だ敗壞せざる底は、猶ほ水火の在るあるがごとし、形體盡了すれば乃ち水火亦絶盡するなり。

或ひと問ふ、金石も火を生ず、而して五行は木より火を生ずるを以てす。土石も水を生ず、而して五行は金より水を生ずるを以てす。其の説未だ審ならず。師曰はく、木金は水火に因つて生ず、故に木も水火を有す金も水火を有す、是れ五行支離せざるの道なり。況や土は水火の査滓にして水火の歸藏する所なり。土尤も水火を有す。凡

そ所謂相生は四時流行を本とし、其の生長を指して相生と爲す。故に火は木を得て生長し、土は火を得て增長し、金は土を得て蟠根し、水は金に因りて生成し、木は水を得て繁茂す。是れ相生の謂なり。木を鑽つて火を取り、金鑠けて水形を爲し、火旺にして金汗し、水西して東す、是れ金より水を生ずるなりと。是れ等の說皆陰陽術數家の言ふ所にして信ずるに及ばざるなり。其の大源を論ずるときは、則ち水火進退昇降周旋運轉して、査滓は土と爲る。土の氣浮びて木と爲り、土の精沈みて金と爲るなり。故に木金は水火の形する所なり。或ひと曰はく、四行の相生は既に的當し了るも、金より水を生ずるの說猶ほ通ぜず。師曰はく、水は金を得て萬物の用と爲る。水火の相敵するは尤も烈し、水火の中間は金以て相支へて、火以て長じ、水以て成る。人生日用の間、天地四時の行、人物臟腑の定、皆是れなり。或ひと曰はく、四行の相生は壯盛を以てす。而して火より土を生ずるは、滅却（一）し去る、壯盛と爲すこと未だ明かならず。師曰はく、人の元氣剛壯にして飮食能く消すれば、皮肉膏肥して身體健剛なり。是れ火より土を生ずるの謂なり。草木季夏に至つて、其の枝葉子實堅硬にして盛熟す。是れ火より土を生ずるなり。凡そ天下の萬物竟に水火に因り混合して土と爲り、又生

（一）火が土を生ずるは、火が滅却して生ずるものなるに、相生は壯盛によるといへば、滅却も壯盛なるかとの問なり

生して枯滅す。枯滅すれば乃ち土と爲る。是れ四時生長收藏の道、進退昇降更に間斷なし。或ひと曰はく、然らば乃ち世の所謂木を鑽りて火を作る等の相生は用ふべからざるか。師曰はく、何ぞ用ひざらんや。天地自然の理又此の用あるなり。陽は動、陰は靜なり。木を鑽るは是れ陽、故に火生ず。火生ずれば乃ち水之れに隨ふ、走れば乃ち熱し、熱すれば乃ち汗す。水火は相對する者にして而も相附く。金木は水火の用たるなり。

或ひと問ふ、洪範(一)に土を以て五と爲すの說未だ審ならず。師曰はく、水火木金生じて土を以て終るなり、土は地の全體なり。水火木金の四は、土を以て綱領と爲す、故に五を以て生數の終と爲し、十を以て成數の極と爲す。木火土金水を以て次序するが若きは、只だ相生の序にして土の全體を謂ふに非ず、故に洪範は水火木金土を以て相序づるなり。

或ひと問ふ、子が所謂土とは水火の查滓なるに、火は土を生じて、水は土を生ずるにあらざるは何ぞや。師曰はく、八卦の方位は坤艮相對す、坤は土なり、艮は山なり。離火の次は是れ坤、坎水の次は是れ艮、是れ水火以て土を生ずるの效なり。火は土を

(一)「一曰水、二曰火、三曰木、四曰金、五曰土」の意

生じて金生じ、水は土を生じて木生ずるなり。其の土を以て水火の査滓と爲すは、本と生々の論に原づくなり。

或ひと問ふ、相尅の說得て聞くべきや。師曰はく、相尅は對待の位なり。相尅して天下の用立つなり。所謂水は火に尅つ、故に火烈しからず。火は金に尅つ、故に金用を爲す。金は木に尅つ、故に木能く隨ふ。木は土に尅つ、故に稼穡すべし。土は水に尅つ、故に水潤下す。是れ相尅を以て天下萬物の用と爲すなり。凡そ稼穡して五穀給り、木を伐り水を熱し、地を穿ち水を埋め、利用出入之れに因らざるなし。其の次序を謂ふときは、則ち水火金木土にして、水火相守り金木相對して、土又中央に在り。火は土を生じ、土は水に尅ち、木は土に尅ち、土は金を生ず。其の相生相尅互に交易して天地人物生成す。

或ひと問ふ、火は木石にも尅つ、而るに必ず火は金に尅ち、金は木に尅つと謂ふ、其の所以ありや。師曰はく、相生相尅共に以て民生日用の間を論じ來る。火の能く傳はること尤も木に在り。是れ火の長盛にして、火の用を爲すべきも、木の用を得と謂ふべからず、故に是れ木は火を生ずるなり。火金に尅ちて、金は天下の利用と爲り、

木は火の爲に尅たれて則ち滅盡し了り、金木に尅ちて、木は天下の利用と爲る。或ひと曰はく、然らば則ち水は火に尅つ、乃ち火は水に尅たれて、天下の利用と爲るに足らざるか。師曰はく、水は火に尅つ、故に火天下の利用と爲るなり。凡そ火は炎上して潤下せず、水を得るときは炎上することを得ず、故に陽氣結聚して散ぜず、火の德を全うするなり。金石木は皆火を有するも陰の爲に包まれて發せず、炎上の火は金水の對待を得ざれば、則ち常に溢れて全からざること、猶ほ日の寒陰に尅ちて光輝烈しからず、夏火の秋冬に尅ちて萬物伏藏するがごとし。

　或ひと問ふ、木は土を得て生育し、土は水を得て浸潤すること、猶ほ土は木を生じ、水は土を生ずと謂ふべきがごとくにして、而も木は土に尅ち、土は水に尅つと曰ふは何ぞや。師曰はく、草木は土を得て蟠根茂生す、是れ土に尅つを以てなり。且つ木は以て土を穿つべく、土は以て水を通じ、水は能く萬物を化し、而して土は竟に化せず。是れ相尅以て相生し、而して萬物成るの謂なり。

　或ひと問ふ、萬物は相尅を以て相生するの說は聞くを得たり。四時何ぞ相生を以て而も相生するや。師曰はく、四時亦相尅して相生す。所謂春夏は陽にして秋冬は陰な

り。生長するの萬物は收藏して全し。收藏は陰の剋なり。收藏に因つて生長するを得る、是れ相剋の相生なり。木より火を生ずるは陽中の穉老なり、金より水を生ずるは陰中の穉老なり。季夏に繼ぐに秋を以てする、是れ火金に剋つなり。天地の生成するに、水火相對し、金木相守ればなり。人民日用の間、敬以て戒め嚴以て莊に、父兄以て教へ師友以て輔け、君臣相對し上下以て位する、皆相剋配偶の道なり。

或ひと問ふ、水は火に剋ちて、而も火先んじて水和するは、其の理ありや。師曰はく、水火は本と一元氣なり、相近づくときは乃ち相剋し、相遠ざかるときは乃ち相附く。火は一氣の既に形せるなり、故に內暗くして陰を含む。水は一氣の未だ形せざるなり、故に內明かにして陽を含む。是れ坎離(かんり)[一]の象、自然の道、水火根を互にするなり。水は本と氣を含む、故に火氣の相昇るに因つて相附き相聚まるなり。且つ陽昇りて陰の爲に覆はれ、其の氣益〻强し。水下(ひくき)に自つて附くは、是れ陰が陽を包めばなり。身體は皮肉の爲に包まれて、氣以て進み、血以て附く、皆一理なり。一器に火を貯へ之れに坳水(あふすゐ)[二]を蓋(おほ)へば、水器中(きちゆう)に聚まるも、亦是れなり。一箇の器一箇の身は乃ち小天地にして、其の流行以て之れを見るべし。

[一] 易の卦名、坎は水を象徵し、離は火を象徵す

[二] 凹器の水

或ひと問ふ、極暑には乃ち水悉く涸る、是れ火盛にして水却つて藏るなり。火の水を聚むるの說と應ぜざるか。師曰はく、極暑は乃ち水悉く涸る、是れ水の火に附くなり。極暑は炎上尤も甚し、水氣蒸し昇りて地上乾き去る。故に夏雲は高く昇りて奇峰稍や多く、人身は暑に因つて汗を發し、器物の濕潤皆去る、是れ人物の水氣も亦乾涸するなり。夏太だ炎暑なるときは、秋冬雨雪あり、炎暑極しからざれば秋冬雨雪少し。共に是れ火水を聚むるの理なり。

或ひと問ふ、五行は天に屬するや、地に屬するや。師曰はく、五行は天地人物の流行底なり。天地人物は五行を出でざるなり。洪範皇極內篇(一)に曰はく「五行は天に在りては則ち五氣たり、雨暘燠寒風(二)なり。地に在りては五質たり、水火木金土なり。天の五氣雨暘は質なり、地の五質水火は氣なり。天、地に交はりて雨暘質と爲り、地、天に交はりて水火は氣と爲る。二變じて三變ぜざる者は、二は陰陽の正を得て、三は陰陽の雜を得ればなり。故に一は能く變じて三は變ずること能はざるなり」と。愚謂へらく、五氣を以て五行と爲す、其の說正しからず。天の五行は、日月星辰河漢なり。地の五行は、水火木金土なり。日月は天の水火なり、星は木に屬し少陽なり、河漢は

(一) 宋の蔡沈の撰、尙書の洪範篇の主として數理的立場に立てる研究書なり、蔡沈の略傳は後出一四七頁參照
(二) 暘は晴、燠は暖の意

天の金氣にして少陰なり、辰は天の土なり。五氣は五行に充つべしと雖も、皆氣にして定數なし。天を以て氣を論じ、地を以て質を論ずるは、尤も其の理あり。然れども天地各〻氣と質となくんばあらず。唯だ氣質のみを以て天地を論ずれば偏著なり。偏廢すべからず。氣質相因つて天地人物生成す。

或ひと問ふ、五行の人物に於ける、其の說如何。師曰はく、天地は五行の大成せるなり、人物は五行の小成せるなり。人物には氣血筋骨皮肉あり。氣血は水火なり、筋骨は木金なり、皮肉は土なり。人の一身は、皮肉を郛郭(三)と爲し、氣血以て主たり、筋骨以て用たり。是れ五行の質なり。氣は以て炎上し血は以て汗潤し、毛爪以て生長し、皮膚以て厚堅に、五臟は內に祕れ、耳目口鼻手足は外に用ふ、皆五行の流行なり。人物は五行を以てせざれば、則ち天地と類せざるなり。凡そ水火は五行の惣括なり。人物の生成尤も氣血に在り。氣血對待するときは水火能く流行して、其の査滓は土と爲る、故に皮肉充滿す。皮肉充滿するときは筋骨生成す、是れ猶ほ木金の土に因るがごとし。木は氣に屬す、故に輕浮にして昇り易くして、土の皮膚に在り。金は質に屬す、故に重沈にして降り易くして、土の根蒂に在り、猶ほ人の筋の皮膚に附き、骨の內裏

(三) 城郭の如し

に在るがごとし。天は地に附き、地は天に附き、人物は中に在り。故に人物は天地に附きて生成す。其の大を論ずれば則ち唯だ天地のみ。人物は悉く地の理氣にして、其の間數〻差異あり、而れども又陰陽氣質の生成を出でず。

或ひと問ふ、聖人の詳に五行生尅を論ぜざることは何ぞや。師曰はく、易は聖人道の綱領天下の用法を論ぜるものにして、其の卦畫は皆五行の交易變易に在り。聖人の教は唯だ日用事物の間に在り、故に其の象を取り辭を繫くる、亦近く諸れを身に取りて、遠く諸れを物に求めず、其の説卦・大傳(一)の論言(ろんげん)に於ける、以て考ふべし。凡そ五行相尅相生の説、見來れば乃ち自然の理にして、安排すれば乃ち鑿(さく)(二)す。故に聖人專ら水火陰陽の道を以てして、其の生尅術數を論ぜず、後來の醫家及び數術、推及ぼして以て多端に到り、竟に數家の説あり。聖人の道豈此の如く造作せんや。

或ひと問ふ、五行の説博學審問すれば乃ち大いに人生に益あり、聖人何ぞ詳にせざるや。師曰はく、陰陽の妙合更に知識の及ぶべきなし、是れ陰陽は不測の神なり。博學審問すと雖も、竟に窮め盡すべからず。一箇の眇身も以て窮め盡すべからず、況や萬物をや、況や天地をや。少(しばら)く窮め知るが如きも、亦術數して吉凶禍福を論ずるなり。

（一）繫辭傳を指す
（二）臆測に陷る

(三)「初の一に曰はく、五行、次の二に曰はく、欽しんで五事を用ふ」をさす

(四) 張子全書卷二正蒙の參兩篇註に出づ

(五) 張子全書卷二正蒙の參兩篇の言なり

(六) 前卷二七四頁參照

(七) 黃帝の史官

且つ醫家に論ずる所亦厚生の術にして、聖人の執らざる所なり。洪範(三)に唯だ五行と曰ひて五事を次ぐ、皆其の用其の德を論じて、以て平生日用の道に充つるなり、更に不測の妙を識らんことを要せず。凡そ天及び地、人及び物、數般の模樣を須ひず、自然の形勢のみ。人之れを推して其の說を附し其の術を益す、故に術數は聖人之れを必とせず。

或ひと問ふ、朱子曰はく、(四)「五行の說、正蒙の一段說き得て最も好し、一字を下すも輕〻しくせず」と、然りや。師曰はく、正蒙參兩の篇は洪範五行の說に因つて五行を論じ、水火を以て氣と爲す。然れども既に水火と曰ふときは其の象あり、專ら氣と爲すべからず。土・木・金に對すれば只だ象ありて形なし、故に水火は質中の氣なり、木金は土中の氣と質となり。木は土の氣生々し、金は土の精蟠沈す。土木金皆水火あり、水火亦土木金を離れず、是れ五行相因るの道なり。其の所謂(五)「土は物の始を成して終を成す所以にして、地の質なり化の終なり」といふは、其の理最も得たり。

或ひと問ふ、十干十二支五行の配當如何。師曰はく、元の吳澄(六)曰はく、「十幹十二支の名立つて、相配して六十と爲すも、其の始まる所を知らず。世に傳ふ、黃帝大撓(七)に

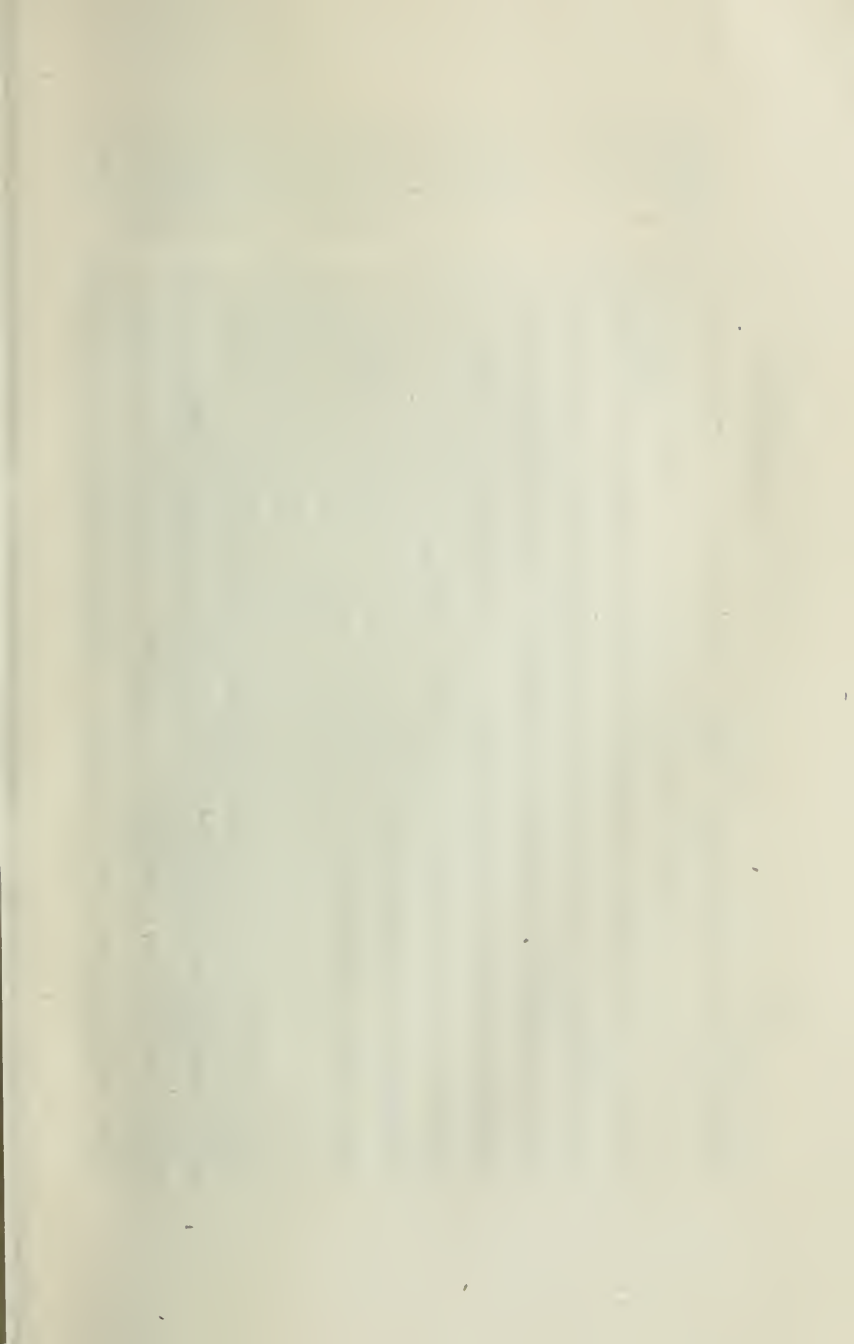
命じて甲子を作らしむと。或は然らん」。〔一〕武經總要に曰はく、黃帝大撓に命じて、天地の德を推し五行の情を採り、以て斗柄の建す所を占ひ、始めて甲子を作ると。註に曰はく、大撓は黃帝の臣なり。撓は奴教の反。愚謂へらく、十幹は五行の氣の天に行るものなり、故に天干と曰ふ。十二支は五行の質の地に具はるものなり、故に地支と曰ふ。十干は五行各〻陰陽を具へ、十二支は地の四方各〻陰陽あり、四維に土を以てするなり。十干は甲乙の木に因り、而して丙丁の火、而して、戊己の土、而して庚辛の金、壬癸の水、此れ氣を以て其の行の序を語る者なり。十二支は子の水に起り、然して後に寅卯の木と爲り、巳午の火、申酉の金、亥の水に歸して、辰戌丑未の四維を以て土と爲す。此れ質を以て其の生の序を語る者なり。是れ又生尅相循環して自然の理相應ずるなり。術家が猥瑣の說、執り用ふべからずと雖も、其の理相具はりて異ならず。子夏が所謂〔二〕「小道と雖も必ず觀つべきものあり」なり。

或ひと問ふ、五味を以て五行に配するは如何。師曰はく、洪範〔三〕に五味を以て五行に配す。先儒曰はく、「五味に必ず作〔四〕すと言ふは洪範に潤下は鹹を作し、各〻作すと言ふ水の源を發するや未だ嘗て鹹ならざるも、流れて海に至り、凝結既に久しうして鹹なる者なれば、潤下の作す所、火の始めて炎ゆるや未だ嘗て苦からざれども、炎上已まず焦灼既に久しうして、

〔一〕宋の曾公亮・丁度等の著、四十卷、兵書なり

〔二〕論語子張篇第四章

〔三〕〔四〕「一に五行。一に曰はく水、二に曰はく火、三に曰はく木、四に曰はく金、五に曰はく土。水に潤下と曰ひ、火に炎上と曰ひ、木に曲直と曰ひ、金に從革と曰ひ、土は爰に稼穡す。潤下は鹹を作し、炎上は苦を作し、曲直は酸を作し、從革は辛を作し、稼穡は甘を作す」をいふ

苦の味成るなれば、苦は炎上の作す所、木の初めて生ずる、金の初めて鑽る、土の始めて稼穡する、亦然ればなり」。愚謂へらく、水の鹹き者は、水の海潮を以て本と爲せばなり。鹵鹽各々潤下する、是れ水の味なり。火の苦き者は、火烟鬱蒸するときは其の味苦く、心熱すれば乃ち味苦し、煤燼皆然り。是れ炎上は苦を作すなり。（醫書に曰はく、物の小にして味の苦き者は火の兆なり。物熱すれば甘きは土の味なり。）木の味酸き者は、春結ぶ所の草木子實必ず酸し、久しうして酸酢を食ふときは肝膽以て養益す。金の味辛き者は、金鐵の屑新しき者は其の味辛し、人辛を食へば乃ち汗水以て生ずる、金より水を生ずるの理なり。凡そ味辛ければ乃ち熱を生ず、故に辛は火に屬すべしと雖も、火の味は實に苦なり。土の味の甘き者は、人五穀を食ひ以て脾胃を養ふべく、五穀の味は差異ありと雖も悉く甘に屬す。是れ五味は五行に屬すればなり。夫れ五味は必ずしも水火木金土の味を論ずべからず。味に這の五あり、此れを以て五行に配するときは此の如し。而して之れを推せば乃ち自然の理あるなり。強ひて五行の味を以て論じ來れば、乃ち附會の説あるなり。

山鹿語類　巻第四十

聖學八

天　地

七一　總じて天地を論ず

師曰はく、天地は陰陽の總管にして、陰陽は天地の天地たる所以なり。既に陰陽あれば則ち昇降進退して這箇の天地あり。凡そ陰陽ある底は皆天地に因つて天地に歸す。陰陽の名も亦天地を以て之れを立つ。故に天地は萬物の宗源にして道體の至極なり。聖人極を立て教を設くる、法を天地に效ふなり。

師曰はく、天地の天地たる所以は、造作安排を待たず、唯だ已むを得ざるの自然のみ。故に能く長久に、能く傾頽せず、能く始終なく、其の極は數を以て焉れを論ずべからず、事を以て之れを計るべからず。這の陰陽に自然の形象ありて、天たり地たり、

日月たり山川たり人物たり。這裏（このうち）安排計較を下さば、乃ち天地自然底に非ず。故に暦家及び術數（家）の、天地を論じ、天の形迹を窺ひ、數般の說を建つるも、亦盡すべからざるの處あり。是れ陰陽不測の神なり。

師曰はく、天地人物の生成、其の本源を言ふときは、次序の論ずべきなし。陰陽の二氣絪縕（いんうん）(一)昇降して天地人物の形象あり、其の流行を言ふときは、未だ嘗て前後なくんばあらず。是れ又自然の道各〻已むを得ずして然り。聖人の教を設け道を示すは、悉く天地人物の定法にして又自然なり。

師曰はく、凡そ天地は其の本（もと）運轉なし。是れ陰陽各〻其の位を定め、能く安寧にして上下違はず、古今なく消長なし。天に運轉する者は日月星宿及び河漢にして、皆天の氣なり。地に運轉する者は、水潮の消息、草木の榮枯、人物の飛走死生にして、皆地の氣なり。故に天地の實は動なく又靜なくして、其の氣運動周旋して、天地人物の用遂に亨る。此れ自然の形勢なり。聖人の天地を論ずる、皆其の用を以てして、其の無用底を窮めず。故に「天行健(二)なり、晝夜を舍（お）かず」と言ふ。

師曰はく、氣昇りて止まることなき、是れ天なり。其の重濁降つて凝聚する、是れ

(一) 旺盛の意

(二) 易の乾の象に「天行健なり。君子以て自彊して息まず」をいふか

地なり。邵子曰はく、「[三]一氣分れて陰陽と爲り、判れ得て陽の多き者を天と爲し、判れ得て陰の多き者を地と爲す」と。又曰はく、「[四]天は動に生ずる者なり、地は靜に生ずる者なり、一動一靜交はりて天地の道盡く」と。朱子曰はく、「[五]天地の初間只だ是れ陰陽の二氣、這の一箇の氣運行し、磨り來り運り去る。磨り得ること急了なれば許多の查滓を挼得て、裏面に在りて出づる處なく、便ち結びて地と成り、中央に在り。氣の清める者は便ち天と爲り日月と爲り星辰と爲り、只だ外に在りて常に周環運轉す。地は便ち只だ中央に在りて動かず、是れ下に在るにあらず」と。又曰はく、「[六]天地の始初混沌として未だ分れざるの時は、想ふに只だ是れ水火二者あり、水の滓脚便ち地を成す。今高に登りて群山を望めば、皆波浪の狀を爲すも、[七]只だ知らず、甚麼の時に因りて凝り了れるかを。初間は極めて軟なり、後來方に凝り得て硬し」と。愚謂へらく、一氣既に生ずるときは、陰陽相具はり、氣昇り象降つて、竟に這の天地あり。水火は氣の形あるなり。氣已に形あれば乃ち水火昇降す、故に火は炎上し水は潤下して、天地の全體唯だ水火にして、水の查滓凝つて土を成す。地は本と水、土は水火の查滓なり。火の查滓は輕揚して皆雲氣と爲る。今水の極めて濁れるは便ち地を成す。火の烟炎重

(三) 邵子全書卷之五に出づ

(四) 邵子全書卷之三に出づ

(五) 朱子語類卷一に出づ。但し多少字句の出入あり

(六) 同前

(七) 朱子語類の原本はこの次に「便是水泛如レ此」の六字あり

きは下り、輕きは上りて雲と爲る、是れなり。故に水の查滓凝硬して此の國土を成し、海裏の處々に國嶋の點象あり。火の輕查も又凝つて天裏の處々に星宿の點象あり。是れ天地の形體は陰陽水火の極致なり。朱子の所謂「初間極めて輭かに、後來方に凝り得て硬し」とは、是れ唯だ人物の初生に就いて論じ來るなり。天地の形豈然らんや。

師曰はく、先儒に天地始終あるの說あり。邵子曰はく、(一)「既に消長あり、豈始終なからんや。天地大なりと雖も是れ亦形氣の二物なり」と。愚謂へらく、天地本と形なし、故に始終なし。陰陽の形は水火なり。水火は象ありて形なし、形なきときは始終の言ふべきなし。今古今あるを以て始終ありと爲す、是れ人其の見る所を以て之れを論ずるなり。天地は萬古より此の如く、又萬々世を經ても變ずべからず。是れ自然の形勢已むを得ざるなり。數學に天地の始終を立つるは、數術は始終を立てざれば總計すべきなければなり。邵子は十二萬九千六百年を以て一元と爲し、天地の始終消息を論ず。是れ一元の氣甲子(二)に始まり、漸々に推し覓むるなり。天地は本と甲子の建つべきなし、何ぞ十二萬九千六百の數あらんや。天地人物一般(三)に出で來る、其の始の求むべきなく、其の終の知るべきなし。既に出で來ると言へば乃ち始あるに似たり、始あれば乃ち終

(一) 邵子全書巻之六、皇極經世外篇下に出づ、字句多少異なる
(二) 十干十二支の始め
(三) 同樣にの意

あり。天地は常にして古今なし。古今唯だ一般なるも、人以て古今ありと爲すなり。天地に始終あるときは、則ち無窮とは言ふべからず。朱子曰はく、「(四)動靜端なく陰陽始なし、先後を分つべからず」と。又曰はく、「晝にして夜、夜にして晝の如し、晝の前已に夜あり、夜の前已に晝あり」と。是の說尤も理會せり。天地は先後なく始終なし。若し流行循環の序を立て、强ひて論說すれば乃ち又始終の儀あるなり。

師曰はく、易に所謂(復の彖に言ふ)「復は其れ天地の心を見る」と。又曰はく(大壯の彖に言ふ)、「正大にして天地の情見つべし」と。愚謂へらく、天地は唯だ自然の形勢にして、氣以て昇り質以て降る、其の間更に一事を設くべきなし。聖人仰いで觀俯して察し、其の應用正大にして、其の實生々息むなきなり。(五)大傳に曰はく、「天地の大德を生と曰ふ」と。(六)文言に曰はく、「天地變化して草木蕃し」と。(七)彖に曰はく、「天地交はらざれば萬物興らず」と。(八)又曰はく、「天地感じて萬物化生し、聖人、人心を感ぜしめて天下和平なり。其の感ずる所を觀て、天地萬物の情見るべし」と。是れ天地生々の謂なり。又曰はく(豫の彖に言ふ)、「天地は順を以て動く、故に日月過たずして四時忒はず」と。(九)大傳に曰はく、「天尊く地卑くして乾坤定まる」と。(一〇)又曰はく、「天地位を設けて、易其の中に行はる」と。(一一)又曰はく、「天

（四）朱子語類卷第一に出づ
（五）繫辭下傳
（六）坤の文言
（七）歸妹の彖
（八）咸の彖
（九）繫辭上傳冒頭に出づ
（一〇）同前
（一一）繫辭下傳

地の道は貞しくして觀るものなり」と。是れ天地正大の謂なり。夫れ天地は正大なり、故に能く長久にして安靜なり。天地相感じ水火以て交はりて、萬物化生す。故に能く生々して息むことなし。聖人易を作り、其の法象變通著明、悉く天地四時日月に因る。（一）大傳に曰はく、法象は天地より大なるはなく、變通は四時より大なるはなく、縣象著明なるは日月より大なるはなし。是れ（二）極を立て道を教ふる、天地を出づるなし。天地這箇の模樣なくして、其の流行周旋、萬物に於て正大生々ありて、毫末の違なし。是れ誠の道にして、其の用大なり。朱子曰はく、（三）「天地は別に勾當（四）することなし、只だ是れ物を生ずるを以て心と爲す。一元の氣運轉流通して略ぼ停間なし、只だ是れ許多の萬物を生じ出すのみ」と。

師曰はく、易の乾の象に曰はく、「天の行ること健なり、君子以て自彊息まず」と。坤の象に曰はく、「地勢は坤なり、君子以て厚德ありて物を載す」と。愚竊に按ずるに、天の象は、日夜運轉して一息の停まるなし。君子其の象を觀て以て自彊息まず。坤は地の勢に法る。地は能く萬物を生じ萬像を載せ、含弘光大にして、品物咸く亨る。君子其の象を觀て以て厚德ありて物を載す。故に（五）象に曰はく、「大なる哉乾元、萬物資りて始む。乃ち天を統ぶ。（六）至れる哉坤元、萬物資りて生ず。乃ち順にして天を承く」と。

（一）繫辭上傳
（二）隱微の意
（三）朱子語類卷一に出づ
（四）しわざ
（五）乾の象
（六）以下は坤の象

是れ天地乾坤の用なり。凡そ聖人の天地を言ふや、近く諸れを人物日用の間に取る。故に其の度數曆術、皆充つるに其の人を以てして、聖人自ら是れが辭を作らず。只だ天地日月四時に資り、詳に日用を察す。是れ聖人の易を論ずる、天地日月四時を以てするなり。後世の術數曆家、皆天文を弄し變異を占ひ、星度を諳じ算法を立つるも、一も日用に徵むることあらず。故に其の術悉く一技に陷る。豈堯舜の天地七星を正すと同じからんや。古人曰はく、「善く天を言ふ者は必ず人に徵あり」とは是れなり。

師曰はく、陰陽の形氣、其の至りは天地なり。其の精を日月と爲す。日月運行して天地四時惟れ行はれ、人物各〻其の處を得。日月縣象著明、是れ天地の大德、天地の知の至りなり。

七二　天

師曰はく、天は氣の鍾まる所なり、覆うて外なし。億兆の上に盡し昇ると雖も又此の如し。是れ氣の積ればなり。楊倞（七）唐の憲宗の時の人荀子を註して曰はく、「天に實形なく、地の上空虛なる者は皆天なり」。程子曰はく、（八）「凡そ氣あるもの天に非ずといふこと莫し」

（七）荀子注二十卷あり、漢の劉向以後、荀子を整理し、又註を施せし人にして、今日傳はれる荀子はこれなり
（八）二程語錄卷六に出づ

と。朱子曰はく、「天は只だ是れ氣なり」と。愚謂へらく、世の所謂天なる者は廿八宿を指して之れを論ず、故に形體あるに似たり。廿八宿は是れ天氣結聚して星宿と爲れるなり。天是れ窮まりなし、故に始終なし。唯だ氣の輕く揚りて停まらざる底なり。日月星宿は這裏に列環す。人其の圓く覆ふを見て天の形質と爲す。天何ぞ圓く覆はんや。氣は太虛に炎上す、太虛更に形質の名づくべきなし。程子曰はく、「天の天たる所以は本と何爲るぞや、蒼々焉たるのみ。其の之れを名づけて天と曰ふ所以は、蓋し自然の理なり」と。

師曰はく、聖人、天を稱して或は天と曰ひ、或は帝と曰ひ、或は乾と曰ふ。程子曰はく、「(一)形體を以てすれば之れを天と謂ひ、主宰を以てすれば之れを帝と謂ひ、至妙を以てすれば之れを神と謂ひ、功用を以てすれば之れを鬼神と謂ひ、性情を以てすれば之れを乾と謂ふも、其の實は一のみ。自る所にして之れを名づくる者異なるなり」。又(二)曰はく、「凡そ箇の主宰底の意思ある者は皆帝と言ひ、一箇の包含徧覆底の意思あるときは皆天と言ふ」と。愚謂へらく、程說之れを詳にす。凡そ天と曰へば則ち其の指示する所太だ廣し。帝と曰へば則ち國君王者に對し、天を以てし上帝と爲すの詞な

(一) 近思錄道體類に出づ、但し終りの二句なく、順序一箇處異なる。程子は伊川なり

(二) 二程語錄卷二に出づ

り。且つ全體を論ずるには乃ち天地を稱し、德を稱するには則ち只だ天と曰ふ、是れ氣は以て主宰たり、質も亦氣の成なればなり。地と天と相並び配するも、而も地は專ら天を以て用を爲す、故に萬物の極は以て天と稱す。

師曰はく、先儒天の形體を論じて曰はく「天の體は彈丸の如く、外に運旋し、地平を中に著く、此れ其の常體なり」。邵子曰はく、「[三]天は圓くして地は方なり、天は北高くして南下し、是を以て之れを望めば倚蓋[四]の如し。天は地を覆ひ、地は天を載せ、天地相函む、故に天上に地あり、地上に天あり」。（觀物に、張氏曰はく、天圓きこと虛毬の如く、地斜にして其の中を隔つ云々。）程子曰はく、「[五]天地動靜の理、天圓なれば須らく轉ずべく、地方なれば須らく安靜なるべし。南北の位豈定め(下さ)ざるべけんや」。朱子曰はく、「天の形は圓にして彈丸の如く、朝夜に轉運す」と。又曰はく[六]、「[七]尙書璣衡の疏に、王蕃（三國の時の人、吳に仕へて常侍と爲る）が渾天の說一段を載すること極めて精密なり」と。其の說に曰はく、「天の形狀は鳥卵に似て、地其の中に居れり。天は地の外を包むこと猶ほ殼の黃を裹むがごとく、圓きこと彈丸の如し。故に渾天と曰ふは、其の形體の渾々然たるを言へるなり」と。愚謂へらく、爾雅[八]の疏に曰はく、「天は是れ太虛、本と形體なし。但だ諸星の運轉を指して以て天と爲すのみ」

（三）邵子全書巻之五に出づ。但し原典は北高を南高に、南下を北下に作る、素行の說は北高南下なり。後出一五一頁參照

（四）傘の類か

（五）二程語錄巻二に出づ

（六）朱子語類巻二に一部出づ

（七）尙書舜典の「璿璣玉衡を在（あきらか）にし、以て七政を齊ふ」の註。璣衡は璿璣玉衡の略にして、後の渾天儀なり

（八）言語・器具・天地・山川・草木・鳥獸等の名物を解釋せる支那の古書、作者不明

と。按ずるに古今天を論ずるに、皆日月星宿を以て極と爲す。其の形體を論ずるに、其の法二あり。一に曰はく渾天、其の圖丸の如し。一に曰はく蓋天、其の圖蓋の如し。渾天は全く天體に象り、蓋天は南方の度反つて濶し、類せざる所以なり。漢末揚子雲(一)は蓋天の八事を難じて以て渾天に通ず。桓譚(二)・鄭玄(三)・蔡邕(四)・陸績(五)各々周髀(六)を陳ぶ。卽ち蓋天の説なり。其の本は包羲氏の周天曆度(七)、其の傳ふる所は周公が殷商に受けて、周人之れを志す、故に周髀と曰ふ。髀は股なり、股は表なり。其の言、天の居は倚蓋の如く、極は天の中に在りて、而今天の北に在り、天の形倚蓋の如きことを知る所以なり。天の傍轉すること磨を推して左に行くが如く、日月は右行して天に隨つて左轉す。之れを蟻の磨石の上を行くに譬ふ。磨左旋して蟻右行し去る、磨は疾くして蟻は遲し。故に磨に隨つて左旋せざることを得ずと。此れ蓋天の説なり。渾天は先儒皆之れに因る。而今の星圖凡そ以て木に鋟め石に勒すべき者は、皆蓋天の遺なり。渾天は以て木に鋟め石に勒すべからず。亦二分二至(八)とし四圖を爲りて木に鋟め石に勒する者あるも、却つて蓋天の圖の一に歸するに如かず。然らば則ち蓋天・渾天の説以て並行すべし。惟だ是れ蓋天の圖は南方の度當に狹かるべくして反つて濶く、其の星當に密

(一) 後出二四五頁參照
(二) 後漢、相の人、字は君山、音律鼓琴を好み、五經に詳に、ことに古學を好む。光武に用ひられしも、直言して讖を非とせしにより貶せられて歿す、著書二十九篇
(三) 後漢高密の人、字は康成、郷里に子弟を教ふること千餘人、孔融この人を敬して一郷を立て、鄭公郷といふ。晩年大司農に拜して卒す、毛詩箋・三禮注・其の他著書百餘萬言、傳はるもの少し
(四) 後漢陳留圉の人、字は伯喈、性孝

弟にして、仕官の後も令名あり、石經を作り、又後漢紀以下著書多し。事に坐して獄死す、年六十一
(五) 三國吳の人、字は公紀、長じて博學多識、星曆算數通ぜざるなし。孫權に召されて直言して憚られ、出でて鬱林太守となる。嘗て渾天圖を作り、注易釋玄を著はす、歿年三十二
(六) 支那古代算術の一、天を覆盆に似たりとし、中高にして四邊下く、所謂蓋天の說をなすものなり
(七) 三百六十度を以て周天と爲す曆法。周天は大圜一周を繞るの謂なり (八) 春分秋分に分ち、夏至冬至に分ちて合計四圖とするなり (九) 圓を意味す。圓は一にして周圍三なればなり (一〇) 二程語錄卷二に出づ

なるべくして反つて疎なり、亦勢ひ爾らざるを得ず。觀者意を以て之れを會りて可なり。是れ先儒の論ずる所なり。凡そ天の形體を詳にすること竟に得べからず、是れ乃ち自然の形勢なればなり。只だ少く星宿の運轉を以て算計し來りて此の說あり。天文の書に因つて之れを推すべし。

師曰はく、說卦に曰はく、「乾を天と爲し圜と爲す」と。又曰はく、「天を參にす(九)」と。是れ天を以て圓なりと爲すなり。邵子曰はく、「天は圓なり」と。程子曰はく、(一〇)「天圓なれば須らく轉ずべし」と。愚謂へらく、天能く覆ふ。覆へば乃ち包含して外なし。是れ便ち圓の謂なり。星宿日月は皆天に附して旋轉す、旋轉する者は須らく圓なるべし。是れ天を以て圓形と爲すなり。凡そ物圓なれば乃ち能く轉じて、始終なく端末なし。此れ之れを無窮と謂ふ。故に其の數奇にして止まらず、其の應用自由にして滯ることなし。是れ圓にして神なり。天本と形體なきも、星宿日月の繫る所を以て論じ來れば、乃ち圓を以て之れを稱すべし。

師曰はく、上天は氣積りて絪緼し、更に正色なく、明暗の論ずべきなきも、這裏に

日月ありて以て見るべく、此に於て正色明暗の說あり。莊周氏[一]曰はく、「天の蒼々たる[二]は其の正色か」と。朱子曰はく、「天明[三]かなれば則ち日月明かならず、(故に)天に明なし。夜半の黑滓(滓)地、天の正色なり」と。愚謂へらく、天に色なきも、日月明かにして其の明暗を知る、黑色を以て之れを論ずべからず。唯だ氣の太虛に結聚するのみ。故に無色を以て正色と爲すなり。

師曰はく、康節[四]六合の外を論ず、是れ算術に因つて以て此の說あり。曆家の算數は、皆日月星辰の形象ありて運行する處を算得し到るなり。凡そ形體ある者は必ず內外あり。故に康節が六合の外を論ずるも、上天豈這の外あらんや。若し外あらば乃ち上天に非ず。上天は形象なく、唯だ一氣のみ。猶ほ人物の外を太虛相圍むがごとし。其の度數を立て、氣候を算するは、皆運行の迹を以て焉れを推考するなり。推考すべきの迹あるときは、必ず須らく內外あるべし。

(一) 戰國時代、孟子と時を同じうして出で、一世を傲睨して仕へず、儒墨を駁して老子を祖述し莊子を著はす
(二) 莊子逍遙遊篇に出づ
(三) 朱子語類卷一に出づ、但し黑滓地は黑滓滓地に作る
(四) 邵雍の諡なり。この論朱子語類卷一にあり

七三　地

師曰はく、地は氣の查滓降つて結聚す、其の實體は水にして、其の見るべきは土な

り。故に字は土也を以て地と爲す。是れ其の之れを名づけて地と曰ふ所以なり。蓋し自然の理なり。

師曰はく、地は天の中にありて偏倚傾側せず。古人其の說を立つ。邵子曰はく(五)「天何にか依る。曰はく、地に依る。地何にか附く。曰はく、天に附く。曰はく、然らば則ち天地何れの所にか依附する。曰はく、自ら相依附す。天は形に依り地は氣に附く。其の形や涯ありて、其の氣や涯なし。有無の相生ずる、形氣の相息む、終りては則ち始あり、終始の間、天地の存する所か」と。朱子曰はく(六)、「康節の此の言、『天は形に依り地は氣に附く』と、重複して言ひて此の意を出でざる所以の者は、惟れ人、天地の外に於て別に去る處を尋ねんことを恐るるが故なり。天地は外なし、所以に其の形は涯ありて其の氣は涯なし。其の氣たるや緊し、故に能く地を扛げ得て住む。然らざれば則ち墜つ、(故に)須らく軀殼の甚だ厚きものあるべく、此の氣を固うする所以なり。若し夫れ地の動くは只だ是れ一處の動くなれば、動くも亦遠きに至らず」と。邵(七)伯溫曰はく、「伊川先生康節先生に見ゆ。伊川食卓を指して問うて曰はく、『此の卓地上に安在す、知らず天地甚の處に安在する』と。康節之れが爲に極めて其の理を論じ、

(五) 邵子全書卷之七漁樵問答に出で、又朱子語類卷百十五に出づ、前者に於ては「樵者漁者に問うて曰はく」として出せり

(六) 朱子語類卷百、邵子之書に出づ

(七) 前出三〇頁參照。朱子語類卷百十五に依れば濂溪遺事に見ゆといふ。

以て六合の外に至る。伊川嘆じて曰はく、『平生惟だ周茂叔(一)に見えて論此に至る、然れども康節の詳(くはしき)に及ばず』と」。問ふ、「晉志に渾天を論じて以爲(おもへ)らく、天の外(そと)は是れ水、天を浮べて地を載する所以なりと。是れ如何」。朱子曰はく、「天の外に水なく、地下是れ水載す」と。又曰はく、(二)「天は氣を以て地の形に依り、地は形を以て天の氣に附く。天は地を包む。地は特(た)だ天中の一物のみ」と。程子亦曰はく、地は特だ天中の一物のみと。又曰はく、(三)「天運息まず、晝夜輥轉す、故に地は惟(四)だ中間にあり、天をして一息の停(とど)まることあらしめば、地は須らく陷下すべし」と。愚謂へらく、地は天の中にあり、氣以て之れを載す。是れ先儒皆之れに因る。黃帝岐伯(五)に問うて曰はく、「地は憑ることありや」と。岐伯曰はく、「大氣之れを擧ぐといふとも亦是(ぜ)なり」と。邵子專ら天地を謂ひ、「六合の外須らく軀殼の甚だ厚きものありて、此の氣を固くすべし、故に地を扛(あ)げ得」と。朱子亦曰ふ、「地は氣の査滓聚まりて形質を成す者、但だ其の勁風旋轉の中に束(たば)ぬるを以ての故に、以て兀然(こつぜん)として空に浮ぶことを得、甚だ久しうして墜ちざるのみ」と。是れ皆氣以て載するの謂なり。猶ほ一箇の微塵を空中に遊ばしむるがごとし、是れ風(かぜ)旋轉して乃ち塵落ちず、旋轉止まれば乃ち塵落つ。天運息まざるが故に地陷下せざるの說なり。

(一) 周敦頤、字は茂叔、世に濂溪先生と稱す。宋の大儒の一人なり

(二) 朱子語類卷一に出づ

(三) 同前に出づ

(四) 原典は推に作る、あがつてと讀む

(五) 黃帝の臣にして醫に精しといふ

竊に按ずるに、諸說未だ安からず。夫れ氣は輕く揚りて質は重く停まる。天は積氣のみ、(六)列子の曰はく、天は積氣のみ、故に能く清んで昇る。地は氣の査滓なり、故に重くして降る。地の四方上下皆然り。地下又氣昇り質降り、四方又昇降す、故に地は天の中央に在りて傾側せず。先儒皆地下の氣地を載すと爲す、太だ然らず。地下亦地上の如く、氣は昇り質は降りて、水火陰陽の昇降進退は自然の道なり、故に地能く載せて傾側せず。氣あれば乃ち質あり、質あれば乃ち氣ありて、天地竟に長久なるも、亦已むを得ざるの至誠、作爲する所なくして然るなり。

師曰はく、(七)文言に曰はく、「坤は至柔にして動くこと剛なり、至靜にして德は方なり」と。又曰はく、(八)「義以て外を方にす」と。說卦に曰はく、「(九)天を參にし地を兩にす」と。先儒竟に地の形體を論じて方と曰ふ。邵子曰はく、(一〇)「天は圓にして地は方なり、地の東南下く西北高し、是を以て東南は水多く西北は山多し」と。程子曰はく、(一一)「地方なれば須らく安靜なるべし」と。愚謂へらく、地亦圓形にして天既に地を包むと相應ず。火は炎上し水は潤下す。潤下の水又圓なり、炎上の火又圓なり。日月以て之れを見るべし。古人地を以て方と爲し、易の(一二)坤德を謂ひて方と爲す、是れ方は正しうして定ま

(六) 列子天瑞篇に出づ

(七) 易經、坤の文言

(八) 同前

(九) 天は陽にして奇、地は陰にして偶。故に天を參とし地を兩として蓍策の數を立つるなり

(一〇) 邵子全書卷之五に出づ

(一一) 張子全書卷十一易說、張橫渠の言に全く同一の言あり

(一二) 前出、「至靜にして德方なり」をいふ

るの謂なり。凡そ圓なる者は止まらず、方なる者は定まる。氣以て息まず、質以て移らず。氣は充滿して虧けず、質は定法ありて變ぜず、是れ地の德なり。方なる者は能く平に能く直し、故に地を稱して平と曰ひ直と曰ふ、其の形は圓く天と相應ずるなり。

　師曰はく、上天本と實形なし、下地亦實形なし。强ひて論說するときは、星辰日月の運轉は以て圓に屬し、四時氣候の循環、四方配當の序は、以て方に屬す。此に於て方圓相對し、氣質相成り、上下以て定まり、尊卑以て位し、萬物以て亨る。

　師曰はく、凡そ萬物の質形ある底は皆地に屬す。質形あれば乃ち氣あり、是れ陰陽天地の自然なり。形ある者は其の守る所愼む所專ら直平方にあり。萬物の生成、人民の日用、亦這裏を出でず。文言(一)に曰はく、「直は其の正なり、方は其の義なり。君子は敬以て內を直くし、義以て外を方にす。敬義立ちて德孤ならず」と。是れ地の德は方なり、坤厚くして物を載せ、天に順承し直方を以てせざるときは、何ぞ无疆に合せんや。直方なるときは其の用平なり。

　師曰はく、坤の文言に曰はく、「陰は、美ありと雖も、之れを含みて以て王事に從ひ、敢へて成さざるなり。地の道なり、妻の道なり、臣の道なり。地の道は成す无くして

(一) 易經、坤の文言

代りて終あるなり」と。是れ夫子坤の道を論ずるなり。地は天に順ひ、女は男に從ひ、臣は君に順ふ。是の如くなれば乃ち三綱立つ、故に地は天の氣に因つて、萬物資つて生じ、以て厚德ありて物を載するなり。

七四　或ひと天地の說を問ふを辨ず

或ひと天地の形を問ふ。師曰はく、天地は形なし、故に能く長久なり。天は氣の積なり、地は水の混なり。水火は象ありて形なし、是れ天地の形なき所以なり。天の上皆天なり、窮め盡すべからず。地の下皆水なり、窮め盡すべからず。日月星河漢見るべし、山河人物知るべし、只だ其の氣の相運轉するなり、本と皆形なし。或ひと曰はく、然らば乃ち天地形なきや。師曰はく、何ぞ形なからんや、本と形なし、故に能く千狀萬體を生ず。既に日月星宿山河人物の見るべきあり、何ぞ形なしと曰はんや。凡そ天地は是れ理氣氣質の間のみ。故に氣あるものは天に屬し、質あるものは地に屬す。天は只だ氣、氣なるが故に昇る。地は只だ質、質なるが故に降る。是れ昇降の自然なり。或ひと曰はく、然らば乃ち天地は有形無形と謂ふべからずや。師曰はく、形の有

無を必とすれば一偏に落在す。天地は只だ自然の一理なり。

或ひと問ふ、程子曰はく、「天地は虚を以て德と爲す、至善の者は虚なり、虚は天地の祖にして、天地は虚中より生ず」と。師曰はく、地上皆虚なり、虚は是れ自然なり。天地は心無くして虚なり、天地の外別に這の虚あるに非ず、天地本と天地、虚中より生ずべきなし。若し虚中より生ずるの說を設けば、天地未分以前這の虚なる底あらんや、尤も未だ得ざるの論なり。

或ひと問ふ、天地の前は何底ぞや。師曰はく、邵子曰はく、「或ひとの曰ふ、『隤然として高き者は吾れ其の天たることを知る、隤然として下き者は吾れ其の地たることを知る。吾れ天地の前は何物といふことを知らず』と。曰はく、夫れ無は從つて有なる者なり、有は反つて無なる者なり。淸濁混じて一たり、是れを太極と謂ふ。太極は已に氣を見はす。太極判れて兩儀生ず。太極は之れを有と謂ふや、之れを無と謂ふや。太極は一氣なり、之れを一と謂はば、數なきに非ず、乃ち數の始なり。之れを氣と謂はば、象なきに非ず、乃ち象の始なり。安んぞ之れを無と謂ふべけんや。然らば太極の判つ所以、兩儀の分るる所以の者、孰れか之れをして然らしむるや。其の然る所以

にして然る者は、道の變に由つてなり」と。朱子曰はく、「(一)周子・邵子の太極を說くは、是れ陰陽に和して袞說(二)す。易中には便ち擡起して說く。周子言ふ、『(三)太極動いて陽を生じ、靜にして陰を生ず』と。動く時は便ち是れ陽の太極、靜なる時は便ち是れ陰の太極なり。蓋し太極卽ち陰陽の裏に在り、易に太極ありて是れ兩儀を生ずといふが如きは、則ち先づ實理の處に從つて說く。若し其の生を論ずれば則ち俱に生ず。但だ其の次序を言へば、須らく這の(實)理ありて方に始めて陰陽あるべきなり。其の理は則ち一なり。然りと雖も見在の事物より之れを觀るときは、陰陽は太極を函み、其の本を推すときは、太極は陰陽を生ず」と。(四)西山の眞氏曰ふ、「周子より以前凡そ太極を論ずる、皆氣を以て言ふ。莊子以へらく『道は太極の先に在り』と。所謂太極とは乃ち是れ天地人三つの者の氣形已に具はりて、渾淪未だ判れざる者を指し作すの名にして道は又別に是れ一懸空底の物、太極の先に在り、則ち道と太極とは二と爲す。知らず、道は卽ち太極、太極は卽ち道にして、其の理の通行する者を以て言ふときは道と曰ひ、其の理の極至なる者を以て言ふときは太極と曰ふ、又何ぞ二あらんやといふことを。倘し周子其の祕を啓き、而して朱子闡いて之れを明かにするに非ざれば、孰れか太極

(一) 朱子語類卷七十五に出づ、處々語句の省略あり
(二) 混說に同じ
(三) 太極圖說に出づ
(四) 宋の儒者眞德秀、後出二五四頁參照

を之れ理と爲して氣に非ざることを知らんや」と。愚謂へらく、先儒の論此の如し。其の旨太極を以て天地以前の理と爲す。竊に按ずるに、易に太極を論ず、是れ易中に於て其の次第を序で來るなり。易の書たる、見在の事物より之れを推出す、故に其の序此の如し。然れども其の所謂太極は象數悉く具はるの謂にして、唯だ專ら理を以てす、乃ち(一)其の説相違ふ。夫れ天地は先後なく始終なし、故に天地の以前と謂ふべきなし。若し天地已前の説あらば、是れ天地を知る者に非ず。

或ひと問ふ、子が説に因るときは、天地未判及び開闢の論は皆非か。師曰はく、天地何ぞ開闢の説あらん。既に開闢なし、故に未判の論なし。天地は本と天地、萬古以前又天地、萬世以後又天地、更に消長增減なきなり。

或ひと問ふ、邵子已に天地始終の説を立つる如何。師曰はく、或ひと問ふ「天は子に闢け地は丑に闢け、人は寅に生るる是れ如何」と。朱子の曰ふ「此は是れ邵子が皇極經世の中の説にして、今知るべからず、他れ只だ是れ數を以て推し得て此の如く説くなり。寅の上に物を生ずるは、是れ其の上に到りて方に人物あるなり。(二)一元・十二會・三十運・十二世あり、十二萬九千六百年を一元と爲す。歲月日時元會運世皆十二

(一) 易の説と先儒の説と相違すとなり

(二) 皇極經世書の説に三十年を一世、十二世を一運、三十運を一會、十二會を一元と爲す

よりして三十、三十よりして十二。堯の時に至り會は巳午の間に在り、今漸く未に及ぶ。戌の上に至りて物を閉づると說く。那裏(三)に到るときは復た人物あらず」と。愚謂へらく、邵子の天地始終の說皆術數の論にして、聖人の言はざる所なり。人物の見在の處に就いて此の說を立つ。天地何ぞ始終あらんや。或ひと曰はく、然らば乃ち三統(四)の說は誤か。師曰はく、或ひと三統を問へるに、朱子曰ふ、「諸儒の說據なしと爲す、看來れば只だ是れ天地肇判の初に當り、天始めて開くること子の位に當る、故に子を以て天正と爲す。其の次に、地始めて闢く、丑の位に當る、故に丑を以て地正と爲す。惟だ人最後に方に生る、寅の位に當る、故に寅を以て人正と爲す。卽ち邵康節十二會の說は、寅の位に當れば所謂物を開くあり、戌の位に當れば所謂物を閉づるあり。物を閉づれば便ち是れ天地の間都て物無きに了る。他れの說を看れば便ち須らく天地の翻轉數千萬年なるべし」と。愚謂へらく、三統は近く一晝夜に於て論說すれば、其の實以て試むべし。夜半より一陽是れ復りて唯だ其の氣あり。是れ天以て闢くるなり。丑に到りて二陽以て重なりて質是れ生ず。是れ地の闢くるなり。寅に到りて三陽既に成り、萬物の用以て全し。是れ人の生なり。故に康節の推す所、專ら一晝夜の間に因

(三) そのところの意

(四) 三代の正朔。夏正は寅を建てて人統と爲し、商正は丑を建てて地統と爲し、周正は子を建てて天統と爲す。これを三統又は三正と謂へり

りて算し來り、本を推して竟に十二萬九千の積數あるなり。其の實豈這箇の數般の模樣あらんや。天地人物の生成は唯だ一般にして、以て次序すべからず。是れ自然の道なり。數術を論じ、次序を詳にし、三統を具ふるは、是れ其の用法なり。故に其の數術牽合する所あるに非ず、是れ乃ち自然の道なり。

或ひと問ふ、子の謂ふ所天地の實は始終なしと。然れども世に上古あり、人に三皇あり、以て上世の說あり、是れ始終の謂に非ずや。師曰はく、天地に古今なし、人に古今あり。故に上古近代の異あり。天地は陰陽の總管なり、人は萬物の一なり。人物本と天地と同じく生成して、其の初知ることなし。聖人傑出して後に人々人たる所以を知る。此に於て天地に法り教を立て道を行ひ、竟に人皇の初と爲る。豈其の最初に人物なからんや。人の聰明漸次に長じ來る、故に後來數般の模樣あり。

或ひと問ふ、先儒皆云ふ、「天先づ開け地次に闢くる」と。易に曰はく、(一)「天一地二」と。今天地人物先後なしとは何の謂ぞや。師曰はく、易に曰はく、(二)「太極兩儀を生ず」と。是れ陰陽更に先後の論ずべきなきなり。氣あれば象あり、象あれば氣あり、這裏先後次序の差なし。故に天は氣なり、地は象なり、何ぞ先後を必とせん。今君臣父子

(一) 繫辭上傳
(二) 前出一〇頁參照

の如き、臣あれば乃ち君あり。君あれば乃ち臣あり、父子亦然り。是れ先後始終なきの謂なり。其の日用起所を以て之れを謂へば、便ち亦未だ嘗て先後始終なくんばあらず。是れ聖人教を立て道を行ふの的意なり。故に言ふに天地を以てし君臣を以てし父子を以てす。是れ辭の順なり。地天臣君子父と道ふべからず。凡そ天地人物の初め先後次序なきは是れ自然にして、其の用に又先後次序あるも是れ又自然なり。或ひと問(三)ふ、「太極の動靜ある、是れ動先にして靜後なりや否や」。朱子曰はく、「動靜端なく陰陽始なし、先後を分つべからず。今只だ是れ起る處に就いて之れを言ふ。畢竟動の前は是れ靜、靜の前は又是れ動、何者を將てか先後と爲さん。只だ今日の動便ち始たりとて昨日の靜は更に說かずと道ふべからず」。

或ひと問ふ、天地は壞ることを會するや否や(四)。師曰はく、天地は本と形なし。形なき故に竟に壞ることを會せず。日月・星宿・山河・人物各〻象あり、故に天地の氣に因りて、消長・盈朒・榮枯・死生あり、然して天地竟に變ずべからず、日月・星宿・山河。人物亦壞るべからず。其の消長・盈朒・榮枯・死生は、猶ほ呼吸運轉のごとし。人以て消長死生の見を爲す、故に日月・星宿・山河・人物這箇の變易あり、是

(三) この問答、朱子語類巻一に出づ、抄出にして語略されたり

(四) 可能の意をあらはす。天地は壞るるべきや否やとの意なり

れ其の象形あるを以てなり。天地は象形なく、又敗壞の論ずべきなし。或ひと曰はく、朱子曰ふ[一]、「天地は壞ることを會せず、只だ是れ人の道なきこと極り了するを相將つて、便ち一齊に打合して混沌たること一番、人物都て盡き又重ねて新に起らん」と。此の説如何。師曰はく、天地竟に壞るべからず、人物亦竟に壞るべからず。其の間聖人の道甚だ泯沒し、四夷以て犯し、天下以て亂れ、書籍壞燒す、稍や久しうして而る後に世治まる。以て先世を考ふるに、由來なくして、人物新に起る、是れ乃ち上世の如し。此に於て開闢の説を立つ。是れ俗の所謂天地敗壞の理なり。其の實更に天地人物始終なし、何ぞ敗壞を云はんや。或ひと曰はく、人物必ず死生榮枯あり、然らば乃ち天地亦敗壞あるべきや。師曰はく、人物又天地と與に長久なり、萬古より今日に至るまで人物相生々す、斯の民や上世の後昆[二]なり、斯の物や上世の遺種なり。日月も出沒盈虧あり、人物の死生榮枯怪しむべきなし。

或ひと問ふ、曆法に數を立てて以て算し來りて更に違はず、是れ始終あるの證なり。師曰はく、曆數も亦聖人民を教へ時を授くるの道なり。數は始終を立てざれば計會せず。其の計會すべきの法を考へ、數を立て除乘して以て究め盡すなり。是れ皆日月星

(一) 朱子語類卷一に出づ

(二) 後錄に同じ

宿運轉周旋の迹にして、其の象形以て稽(かんが)ふべし。故に這の法あり。天地象形の認め得べきなければ、這の曆數何ぞ之れを知らんや。

或ひと問ふ、天地人物は子の說に因れば滅せざるや。師曰はく、起滅は人以て此の說を爲す、故に滅を以てすれば乃ち滅し、不滅を以てすれば乃ち不滅なり。天地人物更に起滅の名づくべきなし。

或ひと問ふ、天地の心如何。師曰はく、或ひと問ふ、(三)「天地の心も亦靈なりや否や。只だ是れ漠然として無爲なりや」。朱子の曰ふ、「天地の心は是れ靈ならずと道(い)ふべからず、但だ人の恁地(かくのごとく)に思慮するが如くならず。伊川曰ふ、(四)『天地は心なくして化を成し、聖人は心ありて無爲なり』と」。又問ふ、(五)「天地は心なし、仁は便ち是れ天地の心なり。若し其れをして心あらしめば必ず思慮あり營爲あらん、天地曷(なん)ぞ嘗て思慮あり來らんや。然して其の四時行はれ百物生ずる所以の者は、蓋し其の合當(まさ)に此の如くなるべきを以て便ち此の如し。思惟を待たざるは此れ天地の道たる所以なり」と。朱子曰ふ、(六)「此の如くんば、易に所謂(七)『復は其れ天地の心を見る』(八)『正大にして天地の情見つべし』は又如何。(公(きみ)の)說く所の如くんば、秖(た)だ他(か)の無心の處を說き得るのみ。若

(三) この問答、朱子語類巻一に出づ
(四) 同前
(五) 朱子語類巻一に出づ、問者は楊道夫字は仲愚なり
(六) 同前つづき
(七) 復の卦の彖に出づ
(八) 大壯の卦の彖に出づ

し果して心なければ、須らく牛より馬を生出し、桃樹の上に李花を發くべきに、他れ又却つて自ら定まる。程子曰はく、『(一)主宰を以てすれば之れを帝と謂ひ、性情を以てすれば之れを乾と謂ふ』と。他れ這の名義自ら定まる。心は便ち是れ他の箇の主宰の處、(所以に)天地は物を生ずるを以て心と爲すと謂ふ所以なり」と。愚謂へらく、天地の心は復に於て以て之れを見、天地の情は正大に於て見つべし。夫れ天地既に理氣相合し、陰陽相和して、氣質以て定まる、未だ嘗て心情なくんばあらず。凡そ心性(情カ)は理氣妙合自然の謂にして、其の用は運動息むことなく、少くも停留の處なし。始まつて終り終りて始まり、先後なく始終なし、是れ天行の健にして地勢の坤なるなり。其の循環底是れ這の天地の心なり。別に論說すべきなし。復の卦たる、陰爻悉く盛にして、陽爻既に復す、陰極まれば乃ち陽生ず、消長盈虧瞬息の間斷なし。是れ天地の心なり。見來れば生々息むことなきのみ。或は生々を以て心と爲し、或は仁を以て心を論ずる、皆作爲假合の說なり。天地は陰陽の總管にして萬物の宗源なり、故に爲すことなく言ふことなく、其の應用は只だ正大なり。人は一箇の生物、故に能く視聽し能く言動し能く思慮す、皆一技一術の小なり。猶ほ草木魚蟲鳥獸の區、其の尤れるあるがごとし。

(一) 近思錄道體類に出づ。前出六二頁參照

（一一）陰陽五行

天地は許多の事なく、視聽すべく言動すべく思慮すべきの用なし。朱子の牛は牛を生み李樹は李花を發くを以て、天地の心ありと爲す。牛は牛を生み李樹は李花を發くものは、牛李の心なり。牛李は牛李と爲る、是れ自然の理にして、(一一)二五の過不及なり。天地は牛李を生ずるに心なく、只だ生々息むことなし、故に牛李も各々其の生を遂ぐ。或ひと曰はく、人には視聽言動思あり、天地には視聽言動思なし。是れ又人は天地に秀づるか。師曰はく、人は生物なり、耳目鼻口なきときは、其の生を遂げず。故に視聽言動思あるも亦自然の用なり。天地は至大至公にして形象の必とすべきなく、又視聽言動思の用ふべきなし、何ぞ人天地に秀づと謂はんや。凡そ形氣尤れる所あるものは、皆氣の過なり。其の至大至公底は形氣の尤れる處なく、只だ自然の全體なり。

七五　或ひと天を問ふを辨ず

或ひと問ふ、天は形象なきや。師曰はく、凡そ昔人は積氣を以て其の象に名づく。氣少くして質あるは乃ち陰と爲り、結びて雲霧と爲り、其の氣の粹精輕揚なるは、是れ天なり。故に形象の必とすべきなし、地上皆氣、一箇の空缺底も、悉く這の氣流行

す、故に天あらざるの處なく、又天外の論ずべきことなし。

或ひと問ふ、六合の外論ずべからずして、而も邵子之れを論じ、且つ曰はく、(一)「氣の外更に須らく軀殼の甚だ厚きもののあるべし」と。此の說如何。師曰はく、或ひと問ふ、(二)「康節六合の外を論ずるも、恐らくは外なからん、否や」と。朱子曰はく、「理に內外なし。六合の形は須らく內外あるべし。日は東畔より升りて西畔に沈む。明日又東畔より升る。這の上面許多、下面も亦許多なり。豈是れ六合の外(三)ならざらんや。曆家は氣を算ふること、只だ日月星辰運行の處に算得し到り、上り去つては更に算へ得ず。安んぞ是れ內外なきことを得ん」と。愚謂へらく、日月星辰は天の中、積氣の象なり、故に日月星宿の外猶ほ這箇の天あり。若し內外を這裏に論ずるときは、其の說あるも、天を論ずれば乃ち內外なし。天豈軀殼の甚だ厚きものあらんや。天は是れ氣の積なり。氣甚だ積るが故に外なし。邵子以爲らく、「氣以て地を載す」と、竟に此の說あるなり。

或ひと問ふ、天に九重の說あり(如何)。師曰はく、朱子曰はく、「其の九重と曰ふときは、地の外より氣の旋轉して益〻遠く益〻大に、益〻淸く益〻剛に、陽の數を究め

(一) 朱子語類卷百に出づ、前出六七頁參照

(二) この問答、朱子語類卷一に出づ

(三) 原典は外の字、內に作る「內にあらずや」となる、從ふべし

て九に至るときは、則ち極清極剛にして復た涯あることなし」と。又曰はく、「人常に天に九重ありと說く、九處に分つをもつて號と爲すは非なり。只だ是れ旋るに九つあるのみ。但し下面は氣較濁つて暗し。上面至高の處は至淸至明のみ」と。愚謂へらく、九重は日月の道、五星の道、廿八宿の道、無星の天、是れ所謂九重なり。其の理を謂へば、九は陽數の極にして、天も亦陽の至りなり。天險にして升るべからず、其の重累九數を以てすればなり。

或ひと問ふ、天の體必ず圓を以てするや。師曰はく、天に體なし、故に形の謂ふべきなし。日月星宿の運轉を以てすれば、須らく圓にして旋るべし。且つ地の萬物を載する、其の形圓なり、其の氣昇り積んで天と爲る。然れば乃ち天亦地形に因りて圓く之れを覆ふの理なり。天の體は知るべからずと雖も、地の形に因つて以て焉れを推すべし。

或ひと問ふ、子天地を指して運動なしと爲す。易に所謂「天行健なり」と、其の差あるに似たり。師曰はく、易に所謂天は各〻其の應用を以て之れを論ず、故に星宿運轉の天を以てするなり。愚が所謂天は積氣の名なり、故に運動の說なし。氣は只だ輕

揚して止まらず、是れ天の外なきなり。

或ひと問ふ、天は清明を以て象と爲す、今子は天を以て無色と爲すは何ぞや。師曰はく、天は清明の稱すべきなく、又黒暗の謂ふべきなし。日月象を繫け、而して後に明暗見るべし。日月繫らざれば、明暗の說言ふべからず。其の間氣は淸く質は濁り、氣は輕く質は重し。淸く輕きが故に高く昇り、濁りて重きが故に厚く降る。這裏に陰陽の精凝結して日月星宿と爲り、竟に晝夜明暗あり、寒暑溫冷あり、以て人物の用たるなり。

七六　或ひと地を問ふを辨ず

或ひと問ふ、子が所謂地は天の中に在るの說なり。是れ地下も亦此の地上の如きか。師曰はく、豈唯だ地下のみならんや、四方上下皆這の地上の如し、故に火は以て炎上し、水は以て潤下し、氣は是れ淸く昇り、質は是れ重く降り、天地竟に傾覆なし。地下亦此の如く、四方皆然り。是れ自然の道なり。或ひと曰はく、此の說太だ先儒に違ふ。其の據る所何事を以てするや。師曰はく、詳に天地の象を知れば此の說分明なり。

凡そ天は南北の極を以て樞軸と爲し、輪の轂の如く、礎の臍の如く、動かんと欲すと雖も得べからず。南北の極兩頭に在り、衆星運轉して息まず。今天形を見るに、北極は地上に出で南極は地下に入り、欹ち傾きて正しからず、日月星宿側轉す。是れ豈天の正ならんや。我が居る所の地欹ち傾きて以て之れを望む、故に此の欹傾の說あり、竟に天の形を以て此の如しと爲すなり。地は圓にして四方なり、人以て之れに處り、或は平に兩極を見、或は南極を見て北極を見ず、或は日月北道を行り、或は日月常に中道を行り、或は日月横に望みて、四時寒暑齊しからず、晝夜長短大いに差ふ。皆處る所の地に因れり。唯だ中華のみ四時の氣候正しく、日月星宿其の稟くる所以て正し、故に人物恆に秀づ。朝鮮之れに次ぎ、本朝之れに次ぐ。其の餘は皆四時宜しからず、寒暑尤も大にして、人物の生成悉く正しからず。是れ地の圓くして四方上下人以て處るべし。邵子が所謂(一)「天は圓くして地は方なり、天は北高くして南下し、是を以て之れを望めば、倚蓋の如し。地は東南下くして西北高し、是を以て東南水多く西北山多し」とは、是れ實に天地を知らざるの謂なり。

或ひと問ふ、子が說に因れば、中華も亦天地の中に當らず、何ぞ又其の精秀あらん

(一) 前出六九頁參照

や。師曰はく、天の中は赤道の下なり、南北の極を以てすれば、南北の極の下乃ち天の臍軸なり。赤道の下は日に長短なく、恆に炎熱尤も太し、故に四時なく收藏なく、其の人必ず柔弱にして、其の情必ず實なし。是れ不正の地なり。南北の極の下は日月恆に照らして晝夜なし、或は半年を以て晝夜と爲す、尤も不正の地なり。唯だ中華は北極地上に出づる三十六度、南極地下に入る三十六度なるを見、水分以て高く火分以て早く、水火相尅し、日月の道欹ち望みて、寒暑甚しからず、四時以て行はれ、萬物生長收藏す。故に天地の氣質以て和調し、人物各〻秀精を得。其の據る所天地自然の形勢に在り。

或ひと問ふ、子は地を以て圓と爲す、其の説如何。師曰はく、凡そ形質あるものは地に屬す。人物の形悉く圓なり。水落ちては乃ち圓形を爲し、人は天の圓を戴く、故に頂き圓なり。地の圓を履む、故に足の中凹なり。且つ聖人の地德[一]を稱するや方平を以てして、竟に形方を稱せず。易の「地を兩にす」[二]は陰の耦數なり。地以て方なれば日月星宿の運動必ず差異あらん。[三]三才圖會に曰はく「地と海と本と是れ圓形にして同じく一球たり、天球の中に居ること、鷄子の黃、淸內に在るが如し」と。地を謂ひて

（一）前出六九頁參照
（二）前出六九頁參照
（三）明の王圻の撰。天文・地理・人物を説くに圖を以てする故にかく名づく。王圻は字は元翰、地方官吏となり、後專ら著作に從事す、右の外に續文獻通考世に行はる。

方と爲す者あらば、乃ち其の定まりて移らざるの性を語りて、其の形體を語るに非ざるなり。天既に地を包む、則ち彼此相應ず。

或ひと問ふ、邵子曰はく、(四)「天は圓にして地は方なり」と。又曰ふ、(五)「地は直方にして靜なり、豈圓動の天の如くなることを得んや」と。此の說先儒皆之れに據れり。今子が說に因れば用ふべからざるか。師曰はく、地の形は圓にして其の用は方なり、直なり、平なり。凡そ四時氣候各〻地に因つて其の名號を立つ。四時是れ方なり、度數三百六十、四時各〻九十にして其の用を爲す。萬物の形あるもの正しからざれば乃ち全からず、正なれば方なり。是れ(六)「義以て外を方にする」なり。我れ地上に居りて其の立つ所是れ直なり、其の視る所惟れ直なり。立つ所直ならざれば乃ち視る所亦斜なり、又履む所平ならざれば傾き、直なれば乃ち平なり。是れ地の德にして人の用ふる所なり。人の頂は圓く足平かなること、以て見るべし。

或ひと問ふ、張子が正蒙(七)に曰はく、「地は氣の中に在り、天に順つて左旋すと雖も、其の繫る所の辰象之れに隨つて稍や遲きときは、反つて移徙して右するのみ」と。地も亦旋轉するか。師曰はく、地は形質之れ重沈なり、重沈なれば乃ち旋轉せず、旋轉

(四) 邵子全書卷五に出づ
(五) 同卷六に出づ
(六) 坤卦の文言に出づ
(七) 參兩篇に出づ

左右すれば萬物を載する能はず。張子天地の實を詳にせず、故に其の論ずる所尤も差謬あり。所謂「地に升降あり日に脩短あり、地は凝聚して散ぜざるの物と雖も、然も二氣其の間に升降し、相從ひて已まず」と。此の説を證するに海水潮汐の候を以てする、尤も是ならず。然れども先儒既に四遊升降三萬里に過ぎざるの説あり。（周禮の註に鄭氏曰はく、地の厚さ三萬里、春分の時地正に中すべし。此れより漸々にして下り、夏至に至りて、地下ること萬五千里。地の上畔と天中と平なり。夏至の後地漸々にして上り、秋分に至りて、地正に天の中央に當る。此れより地漸々にして上り、冬至に至りて、上遊萬五千里。地の下畔と天中と平なり。冬至より後地又漸々にして下る。此れ所謂地三萬里中に升降するなり。）朱子曰はく、「土圭の一寸は一千里を折む。土圭の景は只有五寸にして、一萬五千里を折む。其の地の中に在るを以ての故に、南北東西相去ること各〻三萬里」と。問ふ、「何をか四遊と謂ふ」。曰はく、「地の四遊升降三萬里に過ぎざるを謂ひ、天地の中間相去ること止だ三萬里と謂ふに非ず。春遊は東に過ぐる三萬里、夏遊は南に過ぐる三萬里、秋遊は西に過ぐる三萬里、冬遊は北に過ぐる三萬里。今曆家の算數此の如し。土圭を以て之れを測れば皆合ふ」。曰はく、「譬へば大盆に水を盛りて、虚器を以て其の中の四邊に浮べ、四方を定むるが如し。器浮びて東に過ぐる三寸なるが若くば、一寸を以て萬里と折むるときは、西に去る三寸、亦地の水上に浮ぶも、東方に蹉過する三萬里なるときは、西方に遠く去ること亦三萬里なる

（一）同正蒙參兩篇に出づ
（二）長短と同じ
（三）同前つづきに「一晝夜の盈虚升降に至っては、則ち海水潮汐を以てこれを驗して信と爲す」とあるを指す
（四）周禮注疏、鄭玄の注に賈公彦の疏あり
（五）方位・日景を測る器、後出一六一頁參照
（六）この一句割註として見るべきか

が如し。南北亦然り。然らば則ち冬夏晝夜の長短は日昇出沒の爲す所に非ずして、乃ち地の四方に遊轉して然るのみか」。曰はく、「然り」。曰はく、「人如何して此の如きことを測り得ん。恐らくは此の理なからん」。曰はく、「知るべからずと雖も、然も暦家推算して其の數皆合ふ、恐らくは此の理あらん」と。愚謂へらく、地の升降を以てするときは星辰の度數知るべからざるも、星辰の度數は更に變ぜず。豈地の升降あらんや。日に長短あるものは、日の道の高低に自然の勢にあればなり、地の升降に因るに非ず。是れ舊說は天度日月の道を詳にせず、故に這の差謬あり。朱子暦算の合ふを以て此の理ありと爲す、尤も不可なり。算術して其の惣計を以て牽合し來るも、信用するに足らず。唯だ直に天地日月星宿を視、其の實理を考ふれば、以て之れを證するに足れり。

或ひと問ふ、地は質にして、氣以て之れに通ずるは何ぞや。師曰はく、天は火なり、地は水なり。水火本と相因る、故に質は氣を離れず、氣は質を離れず。是れ消長昇降の理なり。

或ひと問ふ、程子曰ふ、「地氣上騰せざるときは天氣下降せず」と、如何。師曰はく、

氣は恆に昇りて、質は恆に降る。質あれば乃ち氣あり、氣あれば乃ち查滓あり、是れ氣質自然の道なり。地中萬物を生ずる者は地の氣生々すればなり。日月往來し星宿旋轉して、風雨霜露以て施し行く者は、天の氣周旋して、其の查滓以て降るなり。昇降消長更に間斷なく、四時寒暑推移して交易變易し來りて、人物の生遂に亨る。大なる哉、天地の用や。

七七　天文

日

師曰はく、日は太陽の精なり。天地の間は積氣にして、其の陽精を日と爲す。故に日暘谷(一)に出づれば乃ち人物の氣是れ輕揚し、咸池(二)に入れば乃ち人物の氣是れ重沈す。萬物の氣あるもの悉く天に屬して、日は其の主長たり。

師曰はく、日は唯だ其の象ありて、質形の言ふべきなく、日の精は光明にして其の用は炎上す。太虛は積氣の間に麗り、寒陰以て之れを包む。故に其の光輝甚だ大にして、其の形一團形を爲し、其の用は炎上す。故に地上常に熱せず、萬物咸く亨る。

(一) 東方の日の出づるところ
(二) 西方の海、日の浴する天上の池

師曰はく、日の轉ずること東より西に至り、西より東に至る。是れ天の氣に從つて旋轉するなり。其の旋轉は只だ進行のみ。今北を背として南に向ふ、故に東より西に至る。是れ進むが如し。西より東に至るは降退するが如し。是れ地上一定の見る所を以てするなり。日恆に進行して止まざること、猶ほ蟻の圓玉の上を廻るがごとし。天の象至大にして以て限るべからず、旋轉し來れば又東より西に至る。故に生々息むことなく、始なく終なし。只だ見る所の地に因りて數般の差あり。

師曰はく、日の道は天の中央に在り、是れを黃道と曰ふ。南北極は天の樞軸にして、其の中陰陽の精之れが主として、以て運行旋轉す、是れ日月の道なり。天の度數甚だ濶く、日月は唯だ其の中間に周旋して、其の光明通ぜざるなく、其の陽德遍ねからざるなし。

師曰はく、日蝕は日が月の爲に掩はるるなり。日は必ず月と會す、月と日と亢ふときは日蝕あり、會すと雖も亢はざるときは日食せず。其の交を加へ去る處、暦家推算して以て之れを定む、定數あり。

師曰はく、日は太陽の至精光明寔に盛にして常に盈つるを以て、君父・夫兄・中國

の象と爲し、人に於ては元氣と爲す。故に能く周流旋轉すれば、乃ち其の德光明にして通ぜざるなし。其の周流旋轉差へば乃ち光明遍ねからず。凡そ日月は天地を以て體と爲し、陰陽を以て極と爲す。故に其の運行未だ嘗て此の如くならずんばあらず。是れ乃ち自然の形勢なり。人の君父夫兄此の象に法りて日用彝倫の道と爲すときは、其の間光明にして昧からず、周流して偏らず。理以て之れを詳にし、法以て之れを正し、知以て之れを明かにして、其の事物全く亨る。

月

師曰はく、月は太陰の精なり、天地の間は積氣にして、其の陰精を月と爲す。故に月太虛に升れば乃ち人物の氣是れ重く沈む。其の精は本と水なり。萬物の質形あるもの悉く地に屬して、月は其の主長たり。

師曰はく、說文（一）に曰はく「月は闕なり、陰は陽に抗すべからず、臣は君を敵とすべからず、故に文に於て闕は月たり、其の闕の時多きを以てなり」と。愚謂へらく、月又質形の言ふべきなく、唯だ陰の精にして、猶ほ水の淸白のごとく、這裏能く日光を容れて、此の一團の光明を爲すなり。

（一）後漢の許愼著、文字の意義を解說せるもの、本名說文解字、略して說文とも云ふ

師曰はく、月に弦望晦朔の名あり。月は皎潔なりと雖も虚にして光なく、自ら照すこと能はず、必ず日の光を受けて後に明生ず。其の盈虧するや、日光を受くるの多少を以てす。釋名(二)に曰はく、「朔は蘇るなり」。說文に曰はく、「月は一日に始めて蘇る、故に月初の一日を朔と爲す」。虞書(三)の正義に曰はく、「朔は盡なり、萬物此に盡き、蘇りて復た生ずるなり」と。是れ月明蘇生の日、故に一日を朔と爲す。初七八日に至り、其の明正に半ばにして弓の張れるが如き、之れを上弦と謂ひ、十五日に至り、其の明正に滿ち、日月正に東西に對して相望む、之れを望と謂ひ、二十三四(日)に至り、僅に半明を存して明漸く減じ、弓の弛めるが如き、之れを下弦と謂ひ、廿九三十日に至り、日月相會し、月光都て盡く、之れを晦と謂ふ。晦は明ならざるなり、月は盡なり。是れ皆日光を受くるに因つて此の名あり。凡そ日に近きときは其の光微なり、日に遠きときは其の光明かなり。朔の後日西に在れば明西に生じ、望の後日東に在れば明東に存す。

師曰はく、古今の人皆謂へらく、月の盈虧は蓋し人の目の觀る所の者を以て言ふ。月の體は、其の日を遡ふる者常に盈ちて虧くるの時なし。日月の行る所高低あり、下

(二) 後漢の劉熙の著、字義を訓詁せるもの

(三) 尚書正義、漢の孔安國の傳、唐の孔穎達等の疏に成る。その書の虞書堯典篇なり

の月を觀る所差あり、故に消長盈虧あるなり。其の望に當りてや、人其の滿月を觀る。是れ日月相對して人中間に在ればなり。其の晦に及ぶや、日は月の上に在り、月明上に向つて盈つ、下よりして觀る者悉く其の明を見ず。故に全く虧くと爲す。其の朔弦に及びては、日は月の側に在り、其の明傍に向つて盈つ。故に未だ見えざるを朔と曰ひ、半虧を弦と曰ふなり。是れ日月は端末なく盈虧なくして、唯だ自然の運行周旋のみ。其の消長盈虧は人以て之れを論ずるなり。先儒月を論ずるに既に此の説あり。

朱子・吳澂各〻此の説あり。(二)

師曰はく、月の旋轉は皆日に附す、是れ水火相射はざるなり。凡そ月は日に近づきては乃ち遠ざかり、日に遠ざかりては乃ち近づく。是れ水は火の氣に附きて昇り去るも、然れども其の質陰なり、故に會へば則ち退き去る。陰陽升降は自然の道にして、尤も造作を假らず。

師曰はく、月道と日道と異ならず、只だ月道は至つて地に近し。故に其の道濶きが如し。然れども黄道の裏なり。

師曰はく、月の食ある者は、邵子曰はく(三)、「日月相食するは數の交なり。日、月を望

(二) 前巻五三二頁參照

(三) 邵子全書巻之五、皇極經世觀物外篇上に出づ

めば則ち月食す」と。朱子曰はく、「(三)暦家に之れを暗虛と謂ふ。至明の中に暗虛あり、其の暗至つて微なり、望の時は月は之れと正に對して分毫の相差ふことなし。月暗虛の爲に射はる、故に食す」と。愚謂へらく、日蝕は日月相會するなり。月蝕は先儒皆曰はく、「日は火なり、其の精、內暗く外明かなり、故に相對して月暗虛の爲に射はるるなり。其の道經緯相同じければ乃ち食す、經緯同じからざれば乃ち相會し相望むも亦食せず」と。此の說未だ然らず、只だ日月相望みて、地其の中に間れば月食す。(四)容齋の洪氏曰はく、「暦家に日月の食を論ずること、漢の(五)太初より定まる」と。

師曰はく、月は日の照を稟けて以て光を爲し、其の盈つること極まれば必ず缺く。臣子后妾夷狄の應と爲す。故に日に近づくときは暗く、日に遠ざかるときは明かなり。日と道を同じうすれば乃ち或は日蝕月蝕す、是れ臣子后妾日用平生の道なり。臣子は君父を離るべからず、或は近づき或は遠ざかりて、猶ほ月は日に麗りて遠近するがごとし。臣子君父に近づけば敬怠り且つ狎る、故に其の知暗し。君父は上に尊く臣子下に卑しく、禮節恭敬以て正しければ上下明かなり。猶ほ日の晝を照らし月の夜を照らすがごとし。臣子威を專らにすれば、乃ち僭踰して君父を無す。是れ猶ほ月の日を掩

(三) 朱子語類巻二に出づ、但し終りの語句は稍や異なる

(四) 宋の洪邁、字は景盧、容齋はその號なり。容齋隨筆・續筆・三筆・四筆・五筆、七十四巻の著あり

(五) 前漢武帝の年號

ふがごとくし。上下相隔たりて相望むと雖も、臣子直に君父に對すれば、乃ち必ず其の身を剋す。是れ猶ほ日の月を射ふがごとし。君子は故に日月の食に於て過を改め變を懼る。是れ天文を以て效を我れに切にす。

星辰

師曰はく、星は天の積氣結聚して這の形象を爲し、恆に光明かにして息まず、其の字日生を以てす。是れ陽の餘精にして、五行に於ては木に屬す。其の大小疎密は、或は遠近あり或は大小ありて各〻一ならず。釋名に曰はく、「星は散なり、言ふところは列位布散するなり」と。愚謂へらく、星なきを辰と謂ふ。天は唯だ積氣、其の中間に星宿相結聚して圜を爲す、自然の形勢なり。猶ほ地は是れ一團の潮水にして、其の裏面に州國山野ありて、潮水の中に拔け出づるがごとし。

師曰はく、天は形なし、星宿を以て其の形體を論ず。日月五星も亦天の積氣二五の精にして、運轉定まらず。只だ恆星其の座を定めて違へず、故に上天を論ずるには、南北極廿八星を指し、以て論說し來るなり。凡そ星宿の列位、拱向(一)甚だ嚴にして紊れず、猶ほ朝廷の官位相立ちて、君臣の等差違はざるがごとし。天人合一の理尤も疑ふ

(一) 對向と云ふが如し

べからず。

師曰はく、南北の二極は數星の樞紐なり。朱子曰はく、「天は圓にして動いて地の外を包む。地は方にして靜なり、天の中に處る。故に天の形半ばは地上を覆ひ半ばは地下を繞り、左旋して息まず。其の樞紐動かざるの處は、則ち南北極と爲す。之れを極と謂ふは、猶ほ屋脊之れを屋極と謂ふがごとし。然して南極低れて地に入ること三十六度、故に周回七十二度、常に隱れて見えず。北極は高く地を出づること三十六度、故に周回七十二度、常に見えて隱れず。北極の星、正に常に見えて隱れずして、七十二度の中に在り、常に其の所に居て動かず。其の傍は則ち諸星天に隨ひて左旋し、更〻迭に隱見す。皆環繞して歸向するが若し。此れを知るときは天樞の說を知るなり」と。又曰はく、「史記に載す、北極に五星あり、(二)太一常に中に居る、是れ極星なり。辰は星に非ず、只だ是れ中間の界分なり。其の極星亦微しく動くも、惟だ辰は動かず、乃ち天の中猶ほ磨の心のごとし」といへり。史記の天官書に、(三)中宮は天極星、其の一の明なる者は、太一の常居なり。註に云ふ、北極其の星五、紫微の中に在り。愚謂へらく、萬物の生成皆樞要の相總ぶるあり、一箇の微器亦然り。是れ陰陽相散じて相聚まるの地なり。人の頂に百會あり、腹に臍穴あり、(四)瓜瓣の攢頂、車輪の中軸皆是れ

(二) 星の名、天を主宰する神といはる

(三) 北極星を中心として四方各〻四十度、即ち直徑八十度の中間を云ふ

(四) 瓜の種子の集まるところの中心

なり。積氣の精は南北の兩端に聚まる、之れを南極・北極と謂ふ。此の兩極是れ中軸・瓜瓣・百會・臍穴なり。衡管（一）を以て之れを窺ふに、北極の旋轉最も密にして、循環して管中を出でず。名づけて紐星と曰ふ者は是れなり。其の旋轉太だ密なりと雖も、其の度數又三百六十五度四分度の一なり。列宿各〻其の座に居て、旋轉して止まらず、南北極其の所に居て、衆星之れを拱（二）す。

師曰はく、北極七十二度の間を紫微宮と曰ふ。三垣の中垣、紫微垣是れなり。上垣あり、太微垣と曰ふ。下垣あり、天市垣と曰ふ。先儒の所謂中垣なる者は天子の大内なり。上垣は治朝なり、下垣は市なり、國中を兼ぬ。凡そ國の中を建てて王宮を爲る、朝を前にして市を後にす。蓋し諸れを三垣に本づくるなり。故に大帝・后・太子・庶子皆象を紫微に列す。總べて大内に居るなり。愚謂へらく、紫微垣七十二度の間は是れ天の小成なり。星辰の度數悉く這裏に出づ。故に北極五星は位を中央に定め、大帝・后宮・太子・庶子は天樞なり、四輔以て之れを佐け、上宰・少尉兩ながら相對し、北斗の七宿其の末に居る、是れ七政（三）の樞、陰陽の本元なり。故に天の中を運りて四方に臨制し、以て四時を建てて五行を均しうす。一（四）は天を主り、二は地を主り、三は火

（一）渾天器

（二）尊び奉ずるの意

（三）七星に同じ、即ち日月と五星をいふ

（四）星の番號なり

を主り、四は水を主り、五は土を主り、六は木を主り、七は金を主る。第七を搖光と曰ひ、極を去ること三十六度なり。紫微垣・中宮の間は常に見(あら)はれて隱れず、廿八宿の列星出沒して定まることなきも、亦中宮を以て之れを考ふれば、乃ち其の隱るる所亦見るべし。

師曰はく、星宿の度數を考ふるに廿八宿を以てす、是れ廿四節(五)に因つて昏曉の中星を正すに、這の廿八宿相當りて更に亂道差違なし。人以て之れを見るに易(やす)かるべし。其の星宿は天の體を環遶(くわんぜう)して、角(六)より箕(みぼし)に至りて、東方蒼星の七宿を爲し、斗(ひきつぼし)より壁(なまめぼし)に至るは、南方朱雀の七宿、奎(とかきぼし)より參(からすきぼし)に至るは西方白虎の七宿、井(ちちりぼし)より軫(みつうちぼし)に至るは、北方玄武の七宿。東方は龍形、西方は虎形、皆首を南にして尾を北にす。南方は鳥形、北方は龜形、皆首を西にして尾を東にす。廿八宿を觀るには、毎に日入後の初昏より、將に旦ならんとして天未だ明けざるの前に至り、轉じ去り轉じ來りて、約二十餘星あり、常に見るべし。八宿の太陽の前後に在る者は見るべからず。日入りて初めて昏く(七)、日の以前に在るが如き者は皆見るべからず。將に旦(あした)ならんとして日の後に在る者も、亦見るべからず。凡そ二十八宿皆是れ光明的にして、其の餘の從星は

(五) 又廿四氣ともいふ。一年を毎月二氣にて二十四に分てるなり。例へば立春・雨水・啓蟄・春分等のごとし

(六) すぼし。東方の宿以下箕・斗・壁等皆星の名なり

(七) たそがれそむる頃のこと

黄的あり黒的ありて同じからず。

師曰はく、五星は五行の精なり。其の行度舒(ゆるやか)なるあり速なるあり。漢の天文志に、(一)歳星(さいせい)を東方春木と曰ひ、(二)熒惑(けいわく)を南方夏火と曰ひ、(三)太白を西方秋金と曰ひ、(四)辰星を北方冬水と曰ひ、(五)塡星(てんせい)を中央季夏土と曰ふ、是れなり。朱子曰はく、「五星の色各〻異なり、其の色を觀るときは、金木水火土の名辨ずべし。衆星は光芒閃爍(せんしやく)し、五星は獨り此の如くならず」と。愚謂へらく、五星を五緯と曰ひ、日月と同じく緯道を行(めぐ)るなり。廿八宿は恆星の五行相顯はるるなり。五星は時令の吉凶に因つて其の形象を見はす。是の時五行の積氣を變じて、其の精相見はるるなり。金水は日に附いて行(めぐ)る、之れを輔星と謂ひ、一歳一周天す。火星は二歳に周天、木星は歳ごとに一次を易へ、十二歳にして周天す。土を塡星と曰ひ、廿八歳にして周天す。其の盈縮するや、日に近くして疾く、日に遠くして遲し。日を去ること極遠にして勢盡きて留まる。此れ其の大略なり。五星は常に天に在り、或は日に近づきて晝見はる、故に常に見はれざるが如し。是れ日月の道を行(めぐ)ればなり。

師曰はく、廿八宿列星の度を經と曰ふ、故に廿八宿を經星と曰ひ、日月五星の度を

(一)木星
(二)火星
(三)金星
(四)水星
(五)土星、以上を五星と稱す

緯と曰ふ、故に日月五星を緯星と曰ふ、是れ天に經緯あり、以て陰陽相合する、又自然の道なり。

師曰はく、朱子曰はく、「辰は天の壤なり、一辰毎に各〻幾くの度あり。謂ふに日月が角の幾(六)くの度に宿するが如くなれば、即ち宿する所の處を辰と爲す」。鮑(七)氏曰はく、「辰は天の體、故に天壤と曰ふ。亦猶ほ土は地の體なるがごとし」と。愚謂へらく、無星の處是れを辰と曰ふ、是れ乃ち天なり。唯だ天と曰ふときは廣くして定なし、故に星辰と曰ひて以て天の惣體を擧ぐるなり。

師曰はく、經星には微なるあり著なるあり。凡そ萬有一千五百二十、列居錯峙して悉く地の州國人物に應ず、庶物靈蠢皆命を係くることを得て、治國平天下の用、齊家修身の道、其の事理粲然として天に明に、上は乃ち下に應じ、下は乃ち上に法る、是れ天地の陰陽自然の道、聖人の仰いで天を觀、俯して地を觀、遂に人物の象を取りて、法を萬世に垂る所なり。

河漢

師曰はく、晉の天文志に、「天漢は東方より起り、尾(八)・箕の間を經、之れを漢津と謂

(六) 一本、「幾角度」に作る

(七) 宋代歙縣の人、字は景翔、名は雲龍、元に及びて仕へず、終身天文を研究して、一家を爲す、天原發微五卷を著はす。前出二一頁の魯齋の鮑氏もこの人か

(八) 廿八宿中の星座の名稱

ひ、乃ち分けて二道と爲す、天津(一)の下に至りて南道に合し、乃ち西南に行き、七星の南に至りて沒す」。楊泉(二)曰はく、「漢は水の精なり、氣發して升り、精華浮上し宛轉して流る、名づけて天河と曰ひ、一に天漢と曰ふ」。史記の天官書に曰はく、「漢は金の散氣、其の本は曰はく水なり」と。愚謂へらく、河漢は金氣の相聚まれるものなり。日月は火水なり、星辰は土木なり。河漢は南北極の傍に帶のごとく横はり、唯だ其の白氣相見えて、其の形の定むべきなし。是れ金氣沈みて伏すなり。金は水を生ず、故に水の精と曰ふも亦可なり。古人曰はく、「天河と黃河と相通ず」と。豈其れ然らんや。黃河は中華の河なり、天河は天に在りて地より皆之れを見る。何ぞ必ずしも中華に限らんや。若し分野(三)の說を以てするときは、又這の說あるか。

風　雲

師曰はく、莊子(四)曰はく、「大塊(五)の噫氣(あいき)、其の名を風と爲す」と。淮南子に曰はく、「天(六)地の氣怒るを風と爲す」と。邵子曰はく、「雹(七)は火に生ず、(雹は)風と同じく陽の極たり、故に雹あれば必ず風あり」と。朱子曰はく、「風(八)は只だ天の如く相似て、住(とど)まらずして旋轉す、今此の處風なきは、蓋し或は旋つて那邊に在り、或は旋つて上面に在る

(一) 星の名
(二) 晉代梁國の人、字は德淵。要漢諸子の說を采りて物理論を作る、文集あり
(三) 支那古代に、天文家が支那全土を天の廿八宿に割宛てたる說なり。後出一二八頁參照
(四) 齊物論に出づ
(五) 大地のあくびをいふ
(六) 天文訓に出づ。但し原典は「天の偏氣怒る……」とあり
(七) 邵子全書卷之六皇極經世外篇下に出づ
(八) 朱子語類卷二に出づ

か、都て知るべからず。夏に南風多く冬北風多きが如きも、此れ亦見るべし」と。張子曰はく、(九)「陽の外に在る者入るを得ざるときは、周旋舍まらずして風と爲る」と。愚謂へらく、天地各〻這の氣あり、流行循環して舍まらず、此の氣陰の爲に迫られ以て風を生ず。故に風は陽なり、能く萬物を燥かす。風は氣なり、能く萬物を潤ほす。天地の氣は猶ほ人の呼吸の氣息あるがごとく、少くも間斷なし。若し口を蹙め唇を閉ぢて氣を吹かば、乃ち風と爲る。天地の氣流行して息まず、或は地形に因り、或は氣候に因りて、逼迫せられ吹いて風と爲る。凡そ氣は必ず寒陰の爲に閉ざされて其の形を生ず、物を以て之れを扇げば風乃ち生ずるの類なり。其の南北東西ある底は、時候及び地形に因るなり。

師曰はく、陸佃(一〇)云ふ、「雲は地氣上りて雲と爲り、天氣下りて雨と爲る。雨は地氣に出で、雲は天氣に出づ」と。張氏が衍義に曰はく、「木の氣蒸すときは雲と爲る」と。愚謂へらく、地氣人物の氣恆に輕く揚り、寒陰の爲に閉ざされて乃ち雲と爲る。雲の體其の色定まらず、近きときは雨を含みて朦朧たり、故に其の色黑し。其の氣雨と爲れば乃ち雲自ら消ゆ。其の間又輕揚の氣高く昇りて雲と爲る。其の色は白く、或は日

(九) 張子全書卷二、正蒙參兩篇に出づ

(一〇) 宋代、越州山陰の人、字は農師、王安石に學び、國子監直講を經て左丞に至る。埤雅の著あり

色を帶び天色に映じ、以て五色の變あり、千態萬狀なり。又陰寒に因り相化す、陰消すれば雲聚結せず、陰長ずれば雲聚結して奇形あり。先儒曰はく、「山の體は陽なり、天氣に通じ雲を出す、潤ほひて以て雨を成せば、乃ち陽中の陰なり。海の體は陰なり、地氣に通じ雲を出す、紅赤にして以て風を成せば、乃ち陰中の陽なり。是の故に山に近きときは黑雲あり、海に臨むときは常に赤氣あり」と。

雨露霜雪霰霙雹氷

師曰はく、字書に曰はく、「水蒸して雲と爲り、降つて雨と爲る」と。說文に、「水雲に從ひて下るなり」と。邵子曰はく、(一)「雨は水に生ず」と。程子曰はく、「雲は陰陽の氣なり、二氣交はりて和するときは相畜ふること周ねくして雨と成る。陽唱ひて陰和するは順なり、故に和す。若し陰、陽に先だつて唱ふが若きは順ならざるなり、故に和せず。和せざるときは雨と成る能はず」と。又曰はく、「凡そ雨は陽の唱に順へば乃ち成り、陰の唱なれば則ち成らず」と。朱子曰はく、(二)「雨は飯甑の蓋あるが如く、其の氣蒸鬱して汗下りて淋漓たれば則ち雨と爲り、飯甑の蓋せざるが如くなれば、其の氣散じて收まらず、則ち霧と爲る」と。愚謂へらく、雨は地氣昇るの間水自ら相隨ひて、

(一) 邵子全書卷六、觀物外篇下に出づ

(二) 朱子語類卷百邵子之書の條に出づ

寒陰の爲に閉ざされ、水聚まりて雨と爲るなり。氣は陽、水は陰なり。陰陽相從ひて更に支離せず、水火相射はず、故に氣昇れば乃ち水共に上る。寒陰の爲に閉ざされざれば、乃ち散じ去る。閉ざさるるときは氣雲と成りて雨を降す、雨大いに降れば乃ち氣散じ雲消ゆ。雨降るの後は雲必ず開く、是れ雲の雨と成りて去る、故に雨大いに降れば雲自ら消ゆるなり。飯甑の蓋あるは、陰是れ閉ざすなり、汗下りて淋漓す。飯甑の蓋せざるは陰閉ざさざるなり、其の氣散じて收まらざる、是れなり。冬は陰、地を閉ざすが故に氣蒸鬱せずして雨少く、夏は陰消じ陽長ずるが故に氣散じて聚まらず、雨又少し。春秋は氣蒸鬱して、寒陰中を閉ざすが故に雨多し。

師曰はく、字書に曰はく、「夜氣露と爲る」と。邵子曰はく、(三)「露は土に生ず」と。朱子曰はく、(四)「古人露は是れ星月の氣と說くも、然らず。今高山の頂上晴るると雖も亦露なし、露は只だ是れ下より上に蒸す」と。或ひと問ふ、(五)「伊川曰はく、(六)『露は是れ金の氣』と。如何」。朱子曰はく、「露は自ら是れ清肅(底)の氣(象)あり、古語に云ふ、『露結んで霜と爲る』と。今之れを觀るに誠に是なり。然れども露氣と霜氣とは同じからず、露は能く物を滋ほして、霜は(能く)物を殺す。雪と霜とも亦異なることあり。

(三) 邵子全書卷六、觀物外篇下に出づ
(四) 朱子語類卷二に出づ
(五) この問答、朱子語類卷百、邵子之書の條に出づ
(六) 二程語錄卷十一に出づ

霜は能く物を殺して、雪は物を殺さず。雨と露と同じからず。雨氣は昏くして、露氣は淸し。露と霧とも同じからず。露氣は肅にして、霧氣は昏なり」と。愚謂へらく、地氣高く昇れば雲と爲り雨を降す、地氣高く昇らざれば、乃ち霧と爲りて露を降す。草木露を含む者は、氣以て水露を來らすなり。凡そ露は夏秋以て多し、是れ陰未だ氣を閉ざさず、故に雨と爲らずして露を成すなり。

師曰はく、霜は字書に曰はく、「凝露なり」と。朱子曰はく、(一)「霜は只だ是れ露結んで成るなり」と。愚謂へらく、先儒皆曰はく、「露結んで霜と爲る」と。是れ露寒の爲に結ばれて霜と爲るとなり、太だ未だ然らず。地氣昇り上りて寒陰の爲に壓はるれば、乃ち其の形結び降つて霜と爲るなり。霜は地上に氷らず、霧降るの間に結ばるるなり、故に霜も又降るなり。

師曰はく、雪は大戴禮(二)に曰はく、「天地の積陰溫なるときは雨と爲り、寒なるときは雪と爲る」と。釋名に曰はく、「雪は綏なり、水下つて寒氣に遇ひ、凝つて綏々然たるなり」。朱子曰はく、(三)「雪は只だ是れ雨結ばれて成る」と。愚謂へらく、雪は本と雨なり、寒空に甚しきに緣つて、風結して雪と爲る、故に雪は陰の盛と爲す。雪は本と

(一) 朱子語類卷二に出づ

(二) 支那古代、周末漢代の禮說を輯めたるもの、漢の戴德の著

(三) 朱子語類卷二に出づ

雨なり、故に又能く物を潤ほして物を殺さず、且つ陰太だ盛にして、其の間陽を含むの謂なり。

師曰はく、霰は大戴禮に曰ふ、「曾子の曰はく、陽の專氣霰と爲る」と。蓋し(四)（註に）「盛陰の氣雨水にあるときは、凝滯して雪と爲る。陽氣(五)摶つて之れを脅して相入れざるときは、消散して下り、氷るに因つて霰と爲る」と。愚謂へらく、霰は雪粒なり。高雲雨を降らし、寒の爲に結ばれて雪と成る、其の間陽氣相摶つて消散し、粒を結んで下るなり。

師曰はく、霙は雨雪雜り下るなり。盛陰ならず陽相摶つの時、雨雪以て下ることあるなり。

師曰はく、雹は雨氷なり。左傳に曰ふ、(六)「凡そ雹は皆冬の愆陽、夏の伏陰なり」。陸佃云はく、「陽、陰を散じて霰と爲り、陰、陽を包めば雹と爲る、形半珠に似たり。其の粒皆三出、雪は六出にして華を成し、雹は三出にして實を成す」と。程子曰はく、(七)「雹は陰陽相摶つの氣、蓋し沴(八)氣なり。聖人上に在れば雹なし、有りと雖も災を爲さず」と。朱子曰はく、(九)「伊川の說く、世間の人說いて、雹は是れ蜥蜴蟲の名、釋名に、壁に在るをもつて守宮と曰ひ、亦蜴

(四) 大戴禮記補注卷五、曾子天圓に出づ
(五) 原典は「陽氣之れに薄りて相入れざるときは」とあり
(六) 昭公四年の條に「聖人上に在すときは雹なし、有りと雖も災を爲さず：：則ち冬に愆陽なく、夏に伏陰なく、：：菑する霜雹なく云々」の引用なるべし
(七) 二程語類卷十一に出づ、伊川の語なり、蓋の字「乃是」とあり
(八) 惡氣
(九) 朱子語類卷二に出づ

（虎とも日ふ）倣すとす。初め恐らくは是の理なしとし、看來れば亦之れあり。只だ之れを全く是れ蜥蜴の倣すと謂ふときは、則ち不可なるのみ。自ら是れ上面結び作して成す底あり」と。愚謂へらく、雹は龍能く水を揚げ、其の間多く山谷の積雪堅氷あり、以て雨と與に雜はり下るなり。故に雹の下ること多く山澗の近くに在り、或は魚を降し、或は氷を降し、積雪堅氷降り下るの間、陽氣相搏つ、其の形團丸の如し。皆龍の以て水を揚げ、其の水雨と爲り、雪氷を揚ぐれば、乃ち雹と爲るなり。

師曰はく、氷は水氣寒陰の爲に閉結せられて、氷と爲るなり。陰能く物を閉ざす。水は形なしと雖も閉ざさるれば凝聚して形を爲す。積水流水皆氷るも、只だ井中の氣は太だ厚きが故に閉ざされず。是れ地氣一穴に出づればなり。凡そ物は水濕あれば乃ち氷る、是れ水に氣あるなり。

霧霞氣虹霓

師曰はく、霧は字書に「陰陽亂れて霿(一)（霧と同じ）氣と爲りて蒙冒す、地を覆ふの物なり」と。又曰はく、「地氣上り天氣應ぜずして霧と成る」と。（爾雅に出づ。）朱子曰はく、「天氣降りて地氣接はらずんば霧と爲り、地氣升りて天氣接はらずんば雺と爲る」。觀物(二)に張子

(一) 霧の本字
(二) 張子は邵子の誤か、觀物内外篇共に邵子全書に收む

曰はく、「土の氣升るときは霧と爲る」と。愚謂へらく、地氣升りて寒陰の爲に壓がれ、蒙冒として上ることを得ざるを霧と曰ふ、多く夏秋に屬す。是れ陰寒中に在るの時なり。冬は陰寒地上を閉ざす、故に氣升ることを得ず、唯だ夕陽日入るの後少陽搏つ、故に地氣地上に充つること三四尺、漸次に壓伏して地上に出づること能はず。其の地上に出づるの氣は忽ち閉塞せられて氷と爲り、（俗に曰ふ霜柱、）恰も氷柱の如し。春も又餘寒ありて、暮春の氣猶ほ末秋のごときときは、凡そ地氣恆に升りて、只だ陰陽の消長に因り、數般の模樣を爲す、皆是れ氣なり。

師曰はく、霞は字書に曰ふ、「日旁の彤雲」と。又曰ふ、「天の客氣結ぼれ、暫爾にして生じ、暫爾にして滅す」と。愚謂へらく、地氣寒陰の爲に壓せられ、既に春を得て氣稍や昇る、且つ又太陽東に出で、地氣升ることを得て霞と成りて靉靆たるなり。寒陰未だ盛ならざれば、朝暮必ず地氣昇りて霞と爲る。夜に及びて陰上を閉ざすが故に降下する、是れ霧なり。

師曰はく、氣は雲の若くして雲に非ず、霧に似て霧に非ず、髣髴として見るべきが若し。凡そ霧及び霞は皆氣なり。其の間森々然として、或は直に上り或は横に亙る、

是れ寒陰相迫り、山谷家屋の間に突き上つて其の象あるなり。

師曰はく、虹霓は、程子の曰はく、「虹は陰陽二氣の交、日を映じて見はる」と。張子曰はく、「(一)螮蝀は陰氣薄くして日氣見はるるなり。二つありて、其の全く見はるる者は、是れ陰氣薄き處、全く見はれざる者は、是れ陰氣厚き處なり」と。朱子曰はく、(二)「(三)蝃蝀は本と是れ薄雨、日の爲に照らされて影を成す、然れども亦形ありて能く水を吸ひ酒を吸ふ。人家に此れあれば、或は妖を爲し或は祥を爲す」と。(四)蔡邕曰はく、「陰陽和せざれば卽ち此の氣を生ず。虹見はれて靑赤の色あるは、常に陰雲に依りて晝、(五)日衝に見はる。雲なければ見はれず、太陰にも見はれず。輙ち日と相互に率ひて、以て日西たれば東方に見はる」と。(六)邢氏曰はく、「虹雙び出でて色鮮盛なる者を雄と爲す、雄を虹と曰ふ。暗き者を雌と爲す、雌を蜺と曰ふ。虹は是れ陰陽交會の氣なり。純陰純陽なるときは、虹見はれず。若し雲薄くして日を漏し、日雨滴を照すときは、則ち虹生ず」と。愚謂へらく、虹霓は、日雲に映ずるの氣なり。日月の傍氣相映ずるを暈と曰ふ。虹蜺も亦暈なり。暈は必ず薄雲に見はる。日或は東或は西なれば、其の暈横に帶す、是れ虹霓なり。其の雙出の者は初虹の影なり。故に其の見はるること尤

(一)　虹の異稱

(二)　朱子語類卷二に出づ

(三)　虹の異名

(四)　前出六四頁參照

(五)　日道、又黄道に同じ

(六)　邢恕、宋代陽武の人、字は和叔。學に通じ、明敏有才、世事に通曉し、學亦進み一家を成す。二程に師事せり。多分この邢氏なるべし

も薄色なり。日天上に在れば乃ち暈上に出で、日東西に在れば、乃ち暈横に見はる。若し其の遠きに在りて以て之れを望まば、猶ほ日傍の暈のごとくならん。薄雲地氣以て日に相映ずるなり、故に甚寒の間は虹霓なし。古人曰はく、「旦に西に見はるるときは雨と爲り、暮に東に見はるるときは雨止む」と。皆日の陽氣を受けて成り見はるるなり。

雷電

師曰はく、易の豫の卦の象に曰ふ、「雷、地を出でて奮ふ」と。程子曰はく、「雷は陽氣奮發し、陰陽相薄りて聲を成すなり。陽初めは地中に潛閉す、其の動に及ぶときは則ち地を出でて奮震するなり」。(七)孔氏の月令注に曰ふ、（月令に、仲春の月雷ありて乃ち聲を發す、始めて電あり、）「雷は是れ陽氣の聲將に上らんとして、陰と相衝くなり」と。蔡邕云はく、「季冬には雷地中に在り、孟春には地の上に動く。此に至つて升りて天の下に動いて、其の聲發揚す」と。邵氏曰ふ、(八)「雷は石に生ず」と。(九)致堂の胡氏曰ふ、「或ひと問ふ、『雷霆は何爲るものぞ、而して然る者は形あるか、神あるか』と。曰はく、『古人未だ之れを言はず。然れども先達大儒亦嘗て其の理を明かにせり。蓋し天地の間、陰陽の聚散開闔の爲す所

（七）後漢の鄭玄の禮記註に、唐の孔頴達の疏を入れたる禮記正義の月令篇のことなるべし
（八）邵子全書卷之六、皇國經世外篇下に出づ
（九）胡寅、致堂はその號、宋の學者、中書舍人に進み、徽猷閣直學士を以て致仕す

に非ざるはなし、神を以て言ふべくして、形を以て論ずべからず。異端の所謂龍車・石斧・鬼鼓・火鞭・怪誕の信じ難きが如きに非ず。故に其の言に曰ふ、陰氣凝聚し、陽内(うち)に在りて出づることを得ざるときは、奮擊して雷霆と爲ると。聖人復た起ると雖も、易ふ能はざるなり。凡そ聲は陽なり、光も亦陽なり。光發して聲之れに隨ふ。陽氣奮擊して出でんと欲するの勢なり』と」。朱子曰はく、(一)「雷は今の爆杖(ばくちやう)(二)の如し、蓋し鬱積の極まりて迸散(はうさん)する者なり」と。(三)或ひと問ふ、「程子曰はく、『雷電は只だ是れ氣相摩軋(まあつ)す』と。是(ぜ)なりや否や」。朱子曰はく、「然り」。或ひと以て神物ありと爲す。（朱子）曰はく、「氣聚まらば須らくあるべし。然れども纔に過ぐれば便ち散ず。雷斧(らいふ)(四)の類の如きも、亦是れ氣聚まりて成る者なり。但だ已に查滓あれば便ち散ずることを得ず、此れ亦之れを成す者は性といふに屬す」と。愚謂へらく、雷は陽氣内に積り、陰以て外を包む。故に迅雷相奮ふの說あるなり。其の間神物相應あり。凡そ天地の間萬物の變更測るべからず、龍、雲に乘りて雨を行(や)るの類、尤も疑ふべからず。故に其の神なるや、未だ嘗て見ずと雖も、能く陰陽相擊の節を窺ひ、神以て之れに應じ、這箇の雷震あるなり。大概陰陽相摩軋あれば乃ち火を生じ、其の積氣甚しければ乃ち聲を生ず。

(一) 朱子語類卷二に出づ
(二) 爆仗に同じ、今の爆竹なり
(三) この問答、程子・朱子の語共に、朱子語類卷二に出づ
(四) 雷につんざかれたる怪石のこと

釜中に湯を熱して、其の甚しきときは數般の聲あり、物を火邊に燒くに、積氣散ぜざる處あれば爆烈の聲あり、以て飛迸す。此れに中れば乃ち損ず、是れ出でんと欲するの氣、陰の爲に迫らるるなり。雷は必ず春夏に在り。陽氣地上に散じ陰寒猶ほ中央に結ぼれ、地氣以て昇り積氣未だ散ぜず、竟に相撃つなり。

師曰はく、電は陰陽相撃の光なり。月令に、「二月初めて電あり」と。疏に云ふ、「電は陽光、陽微なるときは光見はれず。此の月陽氣漸く盛にして以て陰を撃つ。其の光乃ち見はる」と。公羊傳に、「電は雷の光なり」と。程子曰はく、(五)「電は陰陽相軋るなり」。雷電相因るは何ぞや。程子曰はく、「動極まるときは陽形はるるなり、是の故に木を鑽り竹を戞つて、皆以て火を得べし。夫れ二物は未だ嘗て火あらざるなり。動を以てして之れを取る故なり」。邵子曰はく、(六)「電は火より生じ、風と同じく陽の極たり、故に電あれば必ず風あり」と。愚謂へらく、電は雷の光なり、其の雲際に映じて、金蛇飛騰するの狀あり。電にして雷ならざるものあり、是れ電する處に雷あるを聞かざるなり。陰陽相中すれば乃ち光あり。先儒雷電を以て兩物と爲すは、尤も非なり。

（五）二程語錄巻三に出づ、但し問答は見えず

（六）邵子全書巻六皇極經世外篇下に出づ

七八　或ひと天文を問ふを辨ず

或ひと問ふ、日の形象定まらずや。師曰はく、日は陽の精なり。凡そ物の精結聚すれば便ち一團形と爲る。太陽の精相凝る、故に圓形を爲すなり。或ひと曰はく、俗に曰ふ、「火の形は三角にして、日の形も亦三角なり、能く旋轉し來りて此の圓形を爲す」と。又曰はく、「火と日とは本と一なり、火は唯だ炎上し、其の形尖なり。遠く之れを望めば乃ち陰以て之れを包む、故に圓形を爲す。燭火を口裏に含めば其の光結圓するも亦是れなり」と。此の說如何。師曰はく、世俗の謂ふ所、火を以て直に(日に)比す。火は日の用なり、日は火の精なり。故に火の應ずる所甚だ烈しく、火の照らす所尤も溫潤なり。火は必ず物を殺し、日は必ず物を生かす、是れ體用本末の謂なり。愚案ずるに、太陽の精相凝つて日と爲り、其の形體詳に知るべからずと雖も、其の見る所圓なり。太陽は形を以てすれば圓に屬す、日の圓形なる、更に異論を以てすべからざるなり。

或ひと問ふ、日月の運轉するは何の故ぞや。師曰はく、屈子〔一〕が天問に、「日月安くに

〔一〕屈平、字は原、戰國時代楚の懷王の左徒と爲る。內外の重責にありて、王の信任を得しが、讒に遇ひて、憂愁に堪へず、汨羅に投じて死す。屈原が作れる辭賦並にその門人の師を弔ひし辭賦を漢の劉向編次して楚騷と稱す。天問は楚騷の中の篇名なり。朱子、門弟とこの篇につきて問答せしならん

か屬し、列星安くにか陳なる」と。朱子之れに答へて曰はく、「日月五星亦天に隨つて以て地を繞る。然れども其の懸るや、固に綴屬して居まるに非ず、其の運るや、亦推挽して行くに非ず。但だ其の氣の盛なる處に當りて、精神の光耀自然に發越して、又各〻次序あるのみ」と。愚謂へらく、氣は能く運轉して息まず。太陽は陽氣の極なり、故に運動太だ速なり。其の懸るや、天の皮膚の裏面に在り。天本と形なく、皮膚の論ずべきなしと雖も、星宿相列なる、是れ天の皮なり。其の裏面の太虛積氣、是れ天の膚なり。日月這裏を運ること、猶ほ人の氣血の皮膚の間を循環するがごとし。

或ひと問ふ、火と日と相通ず、各〻炎上の德あり、然して地上甚だ熱するは何ぞや。師曰はく、日又炎上す、然れども上天太だ寒く陰以て之れを包む、其の氣多く發せず、地上太陽を受けて相對す、故に熱太だし。凡そ朝夕の熱せざる、寒暑の節、皆此の理あり。

或ひと問ふ、日月十二會ありて、日食恆ならざるは何ぞや。師曰はく、屈子が天問に、「天何所にか沓ひて十二に分つ」。朱子之れに答へて曰はく、「十二と云ふは、子より亥に至る十二辰なり。左傳に曰はく、(一)『日月の會する所是れを辰と謂ふ』」と。註に

（一）昭公七年に出づ

云ふ、『一歳に日月十二會、會する所を辰と爲す。十一月の辰は星紀(一)に在り、十二月の辰は玄枵(二)に在るの類是れなり』。然れども此れ特に天に在るの位のみ。若し地を以て之れを言ふときは、南に面して立てば、其の前後左右亦四方十二辰の位あり。但だ地に在るの位は一定して易らず、而して天に在るの象は運轉して停まらず。惟だ天の鶉火(三)、地の午位に加はるときは、乃ち地と合して天運の正を得るのみ」と。愚謂へらく、一年三百六十日、其の間日月相會すること凡そ十有二、相會するを以て晦朔と爲す、故に十二晦朔あり。春秋の疏に云ふ、「日月處を同じうするときは、日、月に映ぜられて形魄見えず、故に食す。朔は則ち交會す、故に食するは必ず朔に在り。然して毎朔皆會す、應に毎月皆食すべし」。杜預(四)云はく、「日月は動物にして、行度に大量ありと雖も、小しく盈朔あらざる能はず。故に交會して食せざる者ありと雖も、或は頻りに交はりて食するものあり」と。廖子晦(五)問ふ、「日月の行るや其の道各〻異なり、然して毎月朔に合す、知らず何を以て度を同じうして、而も會する所の辰に會し、又或は食し或は食せざることあるや、悉く未だ曉ること能はず。向に指諭を承け、其の行ること或は高くして黄道の上に出で、或は低くして黄道の下に出で、或は相近づき

(一) 星次の名。斗宿・牛宿・女宿（辭海）
(二) 星次の名。虚二星・危三星（辭海）
(三) 南方の星宿の名
(四) 杜元凱、左傳の註を以て有名なり
(五) 宋代、順昌の人、廖德明、子晦は其の字、朱子の門人にして、文公語錄・春秋會要・槎溪集の著あり

て偪り、或は差や遠くして相値はざるときは、皆食せざること如何」。朱子曰はく、「日の南北同じからずと雖も、然も皆黄道に隨ふのみ。月道同じからずと雖も、然も亦常に黄道に隨ひて、其の傍に出づるのみ。其の合朔の時、日月同じく一度に在り。其の望日には日月極めて遠くして相對し、其の上下弦は日月近きこと一にして遠きこと三、故に合朔の時は、日月の東西同じく一度に在りと雖も、月道の南北或は差や日より遠ざかるときは食せず。此れ正に一人燭を秉り、一人扇を執り、相交はりて過ぐるが如し。一人は内より之れを觀る、其の人相去ること差や遠きときは、扇は内に在り燭は外に在りと雖も、而も扇は燭を掩ふこと能はず。或は燭を秉りて内に在り、扇を執りて外に在るときは、近しと雖も扇亦燭を掩ふ能はず。此れを以て之れを推して見つべし」と。又曰はく、「魄(六)、日の上に加はれば日食し、日の後に在れば食せず、之れを晦朔と謂ふ。則ち日月相並ぶなり」と。今案ずるに、日食は、日月相會して、月、日の下を行りて乃ち日光相食するなり。日光是れ暗きに非ず、下より視る所、月の爲に掩はるればなり。故に其の食する處の見ゆる所是れ月魄(七)なり。其の相會するに食すると食せざるとあるは、日月交道の差なり。先儒云ふ、「合朔の時、縱は度を同じ

(六) 月の輪廓の光なきところ

(七) 月の光なき部分

うすと雖も、横は道を同じうせず。若し横も亦道を同じうするときは、月、日を掩ひて、日之れが爲に食す」と。日月の交道・縱横道を同じうすれば、乃ち食あり。然して下より日月を望むこと尤も斜なり。然らば乃ち縱横道を同じうせずと雖も、地上より見る所、日月相重なれば、則ち日食することあり。月と日と相去ること三十六度に及ぶときは、月光あり。三十六度の裏面に入るときは、月光なし。故に晦朔の間は月光なし、其の交會相近ければなり。然して相合重ならざれば、乃ち食せず。春秋の疏に曰はく、「通じて之れを計るに、一百七十三日有餘にして一交あり」と。是れ又其の大略なり。若し此の說に因らば、乃ち一歲に兩交し當に兩食すべし。豈其れ然らんや。

或ひと問ふ、日月何故にか十二會するや。師曰はく、日の行一日に一周して餘なく缺くることなし。月の日に後るること一日に十二度有奇（一）、三十日にして三百六十度有奇なり、其の日月相會するを晦朔と爲す。是れ其の大略なり。其の詳を盡すことは便ち閏月の法に在り。

或ひと問ふ、日月の道、上下遠近以て考ふべきや。師曰はく、日は火の精なるが故

（一）有半又は有餘の意

に太だ高く、月は水の精なるが故に重く降る。是れ陰陽自然の勢なり。日食は月之れを相掩ふ、是れ月は下にして日は上なればなり。日高くして炎上し、水之れに附いて昇降す。日月は相近づき、相遠ざかりて、更に支離せず。

或ひと問ふ、日食は地下に於ても亦之れありや。師曰はく、日月の交はる所定まらず、地下・地上・陰暦・陽暦一定せざるも、其の會合は必ず晦朔の間に在り。凡そ日と月と其の差一日に十二度有奇、一時に一度有奇の差あり。之れを以て算し來れば、乃ち其の法以て考ふべし。

或ひと問ふ、日色朝夕赤紅にして或は光なきは如何。師曰はく、日色は恆に光輝するも、其の見る所の地氣深重なるが故に、光輝を見ざるなり。日色の變は皆地氣に因る、故に日中天に至るときは變ぜず。朝夕或は春秋は、霞霧地氣に因りて日色の變あり。

或ひと問ふ、朝夕日出沒の時、其の形太だ大なり、月も亦然るは何ぞ。師曰はく、是れ亦地氣の蔽塞に因つて以て此の看あるなり。豈只だ日月のみならんや、星宿も亦然り。

或ひと問ふ、月に暈あるは何ぞや。師曰はく、月影の雲氣に映ずればなり。其の大小は、雲の高低厚薄に因る。低くして厚きときは暈大なり、故に暈大なれば乃ち雨る。或ひと曰はく、雲なくして月の傍に重暈あるは何ぞや。師曰はく、陰之れを包むなり、月の四方は陰以て之れを包む、故に重暈あるなり。今燭火を座に置いて、旁より之れを望めば必ず暈ある、亦是れなり。

或ひと問ふ、月の實體如何。師曰はく、月は水の精なり。水は外暗くして內明かなり、故に能く光を移す。天地の間陰陽水火の精、是れ日月なり。日は氣の精、月は水の精なること、猶ほ人に氣血あるがごとし。或ひと曰はく、月亦其の形圓なるは何ぞや。師曰はく、水の體は本と圓なり、故に其の精結滯して圓形と爲るなり。凡そ萬物の精、其の凝滯して象を爲すや、皆一圓形なり。圓形に非ざるときは、須らく運轉周旋すべからず。

或ひと問ふ、月は光なきを以て體と爲すは何ぞや。師曰はく、月の光輝あるは日の光を假るなり、故に光なきを以て實體と爲す。然れども月は本と日に因つて昇降周旋し、恆に全明あり、人立つ所の處より之れを視れば盈虧あるなり。

（一）月の異名、兎又菟に作る、ここは屈平が楚辭天問篇の「厥利維何、而顧兎在レ腹」の註に「言月中有レ菟、何所レ貪レ利、居二月之腹一、而顧望乎」に出づるか
（二）月の中に桂樹及び兎ありといふ傳說
（三）面白く云ふこと

或ひと問ふ、顧兎（一）腹に在るの說如何。師曰はく、屈子の天問に此の問あり、朱子之れに答へて曰はく、「世俗桂樹蛙兎（二）の傳あり、其の惑へること久し。或ひと以爲らく、『日月天に在り兩鏡の相照らすが如くにして、地は其の中に居り、四傍皆空水なり。故に月中微黑の處乃ち鏡中大地の影略ぼ形あるに似て、眞に是の物あるに非ざるなり』と。斯の言理あり、千古の疑を破るに足れり」と。愚謂へらく、桂樹蛙兎の傳は墨客騷人の比興（三）し來るなり。月中の微黑は地の影なりとは、是れ先儒の說なり。今案ずるに、地は其の本と水にして、州國は其の裏面に出づ。月は又水の精なり、故に悉く此の地を移す。月の惣體は水にして其の裏面査滓相結聚ありて、以て月中の黑處を爲す。是れ月と地と以て相偶して陰たるなり。

或ひと問ふ、月蝕の說其の詳なること得て聞くべきか。師曰はく、月食は日の精月の魄に交はるときに、月光之れが爲に食す。是れ闇虛の說なり。故に先儒曰はく、「對望の時縱度を對すと雖も橫は道を對せず、若し橫も亦道を對すれば、日、月を射ひて月蝕す。其の蝕の分數は同道對道交はる所の多寡に由る」と。愚謂へらく、此の說を信ずれば、月蝕は只だ春秋分の間に在り。是れ縱橫道度 北より南に直りて縱に之れを分つ、東より西に至りて

横に之れを截つ、之れを道と謂ふの節なり。月蝕は必ずしも春秋分に限らず、且つ望には、日月恆に相對し望み、分毫の相差ふなし。若し相差へば乃ち月に虧くる處あり。然らば便ち月恆に暗虚の爲に射はれ、毎月望日に月食あるべし。是れ暗虚及び横縱道度を同じうするの説にして、共に信ずべからず。今案ずるに、日月の中に地以て之れに間まれば乃ち食あり、日地月の三つの者相對して、竟に地の日光を掩ひ、月の虧くる處ありて食を爲すなり。地尤も少さし、故に日月相望むの時、多く地外に出でて食することなし。日月縱の度相同じき是れ望なり。横道は赤道の内外相去ること遠しと雖も、赤道を去ること其の度數同じきときは、日月と地と相對す、故に月食あるなり。假令月道赤道の外十度に在り、日道赤道の内十度に在るが如くし、此の日望なるときは乃ち月に食あり。大概春秋分の望、冬夏至の望は（冬至が望の前後に在れば、乃ち日月の道必ず相對す、夏至も亦此の如し）多く蝕あり。

或ひと問ふ、日月大小遠近の差以て聞くべきか。師曰はく、日は大にして月は小に、日は遠くして月は近し。其の大小遠近は測るべからず。或は日晷を以て之れを計り、或は交蝕の間を以て之れを計りて、其の大小遠近の分を謂ふ。少く據る所あるに似たり。然れども實は測るべからざるの理なり。大略日の大さは一度有奇、是れ一日に一

度を退き、三百六十五日有奇を以て其の初に歸ればなり。月の大さは少しく日より減ず。或ひと曰はく、半度と。未だ其の實を知るべからず。是れ月地に近くして、其の見る所太陽に同じければなり。

或ひと問ふ、古人星を以て陰と爲し、月と與に太陽の光を稟くると爲す。此の說用ふべからざるか。師曰はく、星は五行に於て木に屬し、其の光輝恆に存す。只だ日光の爲に奪はれて、其の光晝は見えず。然れども其の光耀の甚しき者は、晝も亦見ゆべし。若し星日光に因らば乃ち盈虧あるべし、且つ日蝕陰曆に在らば、乃ち星光皆既す(一)べし。星の日光を受けざること知りぬべし。凡そ月は日の光を移すが故に、月光は只だ明かなり。星は自ら光あるが故に、其の光輝耀くべし。日は太陽の精、星は少陽の精なり。

或ひと問ふ、星隕ちて石と爲ると。朱子曰はく(二)「星地に墜ちて其の光天を燭らして散ずる者あり、變じて石と爲る者あり」と。師曰はく、火の炎上必ず査滓あり。其の墜つる者は査滓なり、星豈隕つべけんや。査滓相凝つて隕つ、其の形石の如くなり。凡そ星宿太だ高く列り、一箇の微星も亦其の大さ謂ふべからず。若し星隕ち來らば乃ち地を動かし人を損ずべし。且つ星宿尤も形なし、氣以て運轉して此の象あり、豈隕

（一）全部盡くるの意

（二）朱子語類卷二に出づ

つべけんや。日月星宿は天に繋る、隕ちんと欲すとも得べからざるの道、自然の理以て此の如し。

或ひと問ふ、天に形なし、星宿を以て其の形體を論ず。然らば乃ち星宿は是れ天の形なりや。師曰はく、天地本と形なし、日月星宿を以て之れを論ずるときは、天の道之れに盡く。山川海陸を以て之れを論ずるときは、地の道之れに盡く。人物亦此の如し。故に天に形なし、星宿を以て體と爲す。星宿の現藏所位更に變ずることなし。日月は毎日運轉して定位なし。故に星宿を指して之れを論ずるなり。

或ひと問ふ、星宿陳列して天に充滿し、空虧の處なし。其の微小なるものは、人之れを見る能はず、是れ天の皮殼なりと。此の說如何。師曰はく、天は覆ひて外なし。來問の如くなれば、則ち六合の外あるなり、豈夫れ然らんや。天は積氣なり、日月星宿は積氣の精なり、以て運轉周旋して其の中間に繋るなり。此れを以て天の皮殼と爲すの說少く得る所あり。天外なくして、其の曆數算術は星宿を以て期と爲す。然らば乃ち星宿是れ外面の極なり、故に以て皮殼と爲すも亦差はざるなり。星宿の在る所を以て縝密の皮殼と爲さば、乃ち六合の外もあるなり。

（一）前出六七頁の邵子の語に本づく
（二）朱子語錄に出づと文獻通考に引用せり
（三）眞の極位
（四）材

或ひと問ふ、天は太虛の積氣なり、億兆の上に到るも亦太虛ならば、乃ち氣は那の處に積らんや。星宿の見る所を以て縝密の皮殼と謂ふも亦積氣の說に因るなり。師曰はく、是れ先儒の所謂（一）「外更に須らく軀殼の甚だ厚きものあるべく、此の氣を固むる所以なり」と。愚謂へらく、軀殼あるときは太虛に非ず、太虛は皮殼なし、故に能く氣の積るなり。或ひと曰はく、星宿の上も亦太虛あらば、乃ち雲烟の氣あり、以て蔽障の事あり。今然らざるは是れ何ぞや。師曰はく、雲烟の氣は地理に因つて、以て其の見る所あり。其の間雨露霜雪と爲り風と爲りて、乃ち其の氣漸々に輕く淸み、見るべき所なし。氣水を含めば乃ち其の象高く昇らざるも、水盡くれば則ち氣高く昇る。日月星宿の上下左右は氣以て之れを包み、其の象見るべからず。是れ太陽以て之れを射れば氣太だ輕く淸む。雲烟は地に隨ひて其の象あり、豈高く昇ることを得べけんや。

或ひと問ふ、南北極は動かざるや。師曰はく、朱子曰はく（二）「極星も也た動く、只だ是れ他の那の辰（三）に近し、故に動くと雖も覺えず、射糖盤子樣の如し。北辰は便ち是れ中心の椿子（四）、極星は便ち是れ椿に近き底の點子、是れ也た盤に隨つて轉ずと雖も、椿子に近きに緣り便ち轉じ得て覺えず。向來の人北極は便ち是れ北辰と說き、皆只だ北

極は動かずと說く。本朝の人に至りて方に推し得たり、是れ北極は只だ北辰の邊頭に在りて、極星は舊に依りて動くことを」と。又曰はく、「史記に載す、北極に五星あり、（一）太一常に中に居る、是れ極星なり。辰は星に非ず、只だ是れ中間の界分なり。其の極星亦微しく動くも、惟だ辰は動かず。乃ち天の中にして猶ほ磨の心のごとし」と。愚謂へらく、南北極亦旋轉するも、只だ其の度甚だ狹く少し、故に人之れを窺ふことを得ず。（二）銅儀管を以て之れを測れば、其の動かざる處猶ほ樞星の末に在りて一度餘なり。是れ北辰の其の處に居るなり、乃ち天の樞軸なり。北極其の度甚だ狹少なりと雖も、亦宜しく天の度數（三百六十五度四分度の一）に應ずべし。只だ少し動く、乃ち中天の度數大いに運るなり。上下君臣の間、日用動靜、皆此の如し。

或ひと問ふ、南北極は車輪の中軸、瓜瓣の攢頂なりと。天何ぞ此の如く結攢の處あるや。師曰はく、天の積氣、其の木精を星と爲す、其の結聚する處乃ち兩極なり。凡そ萬物皆陽陰の因る所、故に其の形必ず合縫の處あり。其の上下必ず攢約の地あり。天は萬物の宗なり、故に其の象這箇の兩極あり、以て車輪の中軸、瓜瓣の攢頂と爲る、尤も自然の形勢なり。

（一）天を主宰する神
（二）測天儀ならん

或ひと問ふ、列星甚だ多し、何ぞ只だ二十八星を以て天を論ずるや。師曰はく、天の體は圓なり、兩極を以て樞紐と爲す。兩極の間(三)赤道あり、是れ天の中央なり。其の內外を黃道と謂ふ、日月五星の道なり。此の黃道は天の中道なり。二十八宿の列悉く黃道の裏面に在り。(四)鬼は極を去ること六十七度、(五)尾は極を去ること百二十度、是れ二十八宿の內、極を去るの至遠と至近なり。（黃道は四十八度、然れども乃ち少しく其の差あり。）黃道凡そ通計六十度なれば、乃ち各〻其の裏面あり。且つ二十八宿の定位移らざること、人之れを知り易し。廿四節を以て昏曉の中星を考ふれば、尤も伺ひ見るべし、故に二十八宿を以て天を論ずるなり。

或ひと問ふ、二十八宿の名、其の理ありや。師曰はく、其の初或は形を以て之れに名づけ、或は其の出現を以て民業の作(おこ)すべきに因つて之れを名づけ、或は星宿列環の國政に比すべきを以て之れに名づくるなり。

或ひと問ふ、五星の說古へ聞くことあらざるは何ぞや。師曰はく、(六)皇極經世（外篇下）に曰はく、「五星の說は(七)甘公・(八)石公より始まる」と。(九)鮑氏が發微に曰はく、「五星の說古へ聞くことあらず、虞書に但だ『(一〇)五辰に撫(したが)ふ』と曰ふのみ。(一一)甘・石に至りて盡く露はす。

(三) 後出一四一頁參照
(四) 鬼宿、二十八宿の一、朱鳥七宿の第二宿
(五) 尾宿、二十八宿の一、蒼龍七宿の第六宿
(六) 邵子全書卷之六收藏
(七) 戰國齊の人、一名甘德
(八) 戰國魏の石申、甘德と共に昔時の天文家なり
(九) 前出鮑雲龍の天原發微をいふ
(一〇) 皐陶謨に出づ。五辰は四時と土用とを併せていふ
(一一) 甘公と石申との併稱

石中は魏の人、星經（一）を著はす。甘德も亦時を同じうす。星に三色あり、三家の異を別つ所以なり。石に出づる者は赤く、甘に出づる者は黑く、巫咸（二）に出づる者は黃紫なり」と。愚謂へらく、上古は五星の說を委しくすることなし、只だ日月星辰河漢を以て五行を分つ。後來星家具に天文列宿を考へて、竟に五星の說あり。

或ひと問ふ、星宿分野の說如何。師曰はく、按ずるに周禮の春官に、保章氏（三）、星土を以て九州の地を辨じ、封ずる所の封域皆分星あり、以て妖祥を觀る。劉氏曰はく、「星土を九州に辨つ、角（四）・亢・氐は兗（五）州なり、房（六）・心は豫（七）州なり、尾（八）・箕は幽（九）州なり、斗（一〇）・牛は揚州なり、女（一一）・虛・危は青州なり、室（一二）・壁は幷州なり、奎（一三）・婁・胃は徐州なり、昴（一四）・畢は冀州なり、觜（一五）・參は益州なり、井（一六）・鬼は雍州なり、柳（一七）・星・張は三河なり、翼（一八）・軫は荊州なり」と。又晉の天文志には十二（一九）次とす。班固（二〇）は三統（二一）曆の十二次を取りて十二野に配す、其の言最も詳なり。容齋（二二）の洪氏が隨筆に曰はく、「十二國の分野、上は二十八宿に屬す、其の義たる多く然らざること、前輩固に之れを論ずる者あり。其の甚だ曉るべからざる者は、晉の天文志に、『危より奎に至るを娵訾（二三）と爲し、辰に於ては亥に在り、衞の分野なり、幷州に屬す』と謂ふが如きなり。且つ衞は本と封・

（一）天文八卷の中、この星經のみ殘れりといふ
（二）黃帝の時の神巫と云ひ、又殷代の人ともいふ
（三）官名、天星を掌り、星辰日月の變動を誌し、以て天下の遷を觀て其の吉凶を辨ずるを職とす
（四）廿八宿の一、蒼龍七宿の首宿、亢はその第二宿、氐はその第三宿
（五）今の山東・河北二省
（六）蒼龍七宿の第四宿、同第五宿
（七）今の河南省地方
（八）前出一〇一頁參照
（九）今の直隸地方

を河内に受け、商丘は後に楚丘(二五)に移り、河内は乃ち冀州の部ぶる所なり。漢には司隷(二六)に屬す。其の他の邑は皆其の東郡にして兗州に屬し、幷州に於ては了に相干らず。而して幷州の下に列する所の郡名、自ら涼州(二七)に繫るのみ。謬亂此の如くにして、李淳風(二八)が手に出づ。豈天に蔽はれて地を知らざるに非ずや」。愚謂へらく、州郡の躔次(二九)古來既に此の說あり。凡そ天の地を覆ふ、何ぞ中華に限らんや。然れば先賢詳に星宿の定位方隅を考へ、以て論說し來るなり。本と實說に非ず、故に分野の說甚だ謬戾あり。周禮に載する所、是れ世俗の說に因り、以て其の次舍を分ちて吉凶を戒むるなり。故に本朝も亦列宿を詳にし、躔次を推さば、乃ち分野の說尤も之れを行ふべし。

或ひと問ふ「衆星(三〇)之れに拱(三一)ふ」と。凡そ列星唯だ循環旋轉するのみにて、拱ふべからずや。師曰はく、聖人は其の見在する所を以て比喩し來るなり。北辰の其の所に居

(一〇) 北斗星・牽牛星。揚州は今の江蘇・安徽・江西・浙江・福建の地
(一一) 玄武七宿の第三、第四、第五。青州は今の遼寧省遼河以東の地
(一二) 玄武七宿の第六宿、同第七宿。幷州は今の山西省と河北省の一部
(一三) 白虎七星の首宿、第二宿、第三宿。徐州は今の江蘇・山東・安徽の一部分
(一四) 白虎七星の第四宿、第五宿。冀州は今の河北・山西二省地方、河南省の黃河以北、遼河以西を含む (一五) 白虎七星の第六宿、同末宿。益州は今の四川省地方 (一六) 朱鳥七宿の首宿、第二宿。雍州は今の陝西・甘肅地方 (一七) 朱鳥七宿の第三宿、第四宿、第五宿。三河は今の青海省の地方 (一八) 朱鳥七宿の第六宿、同末宿。荆州は今の湖北・湖南の二省と四川省の東南一部 (一九) 十二星次の意 (二〇) 前卷二九九頁參照 (二一) 曆法名、漢の太初元年に勅撰せしものにして、又太初曆ともいふ (辭海) (二二) 洪邁の容齋隨筆、前出九五頁參照 (二三) 星次の名 (二四) 縣名、今河南省に屬す (二五) 今河南省滑縣の東部 (二六) 京師近郡の巡察を司る官名 (二七) 今の甘肅省の地 (二八) 唐初の天文家、太宗の時功により太史令となり、昌樂縣に封ぜらる。渾天儀を作り乙巳占の著あり、占候吉凶符契のごとしといふ (二九) 日月星辰の躔歷する所の度次をさす (三〇) 論語爲政篇首章に「政を爲すに德を以てするは、譬へば北辰の其の所に居て、衆星の之れに共ふがごとし」とあるを指すか (三一) 向つて會釋するの意、後出向拱と同じ

て、衆星斜に回り、皆向拱するが如きなり。

或ひと問ふ、星に雜變ありとは何ぞや。師曰はく、凡そ天人の際、速に相通ず、尤も畏るべし。此れに兆あれば彼れに感あり、其の出沒・顯晦・飛流・升降・疾遲・贏縮・進退・會散・動移・轉徙、邈なれども人與ることなきに非ず。五星の變に合あり、（舍を同じうするを合と曰ふ、）散あり、（變じて妖星と爲ること、）犯あり、（光芒相及ぶ、）守あり、（其の宿に居るなり、）淩あり、（相冒して過ぐるなり、）歷あり、（之れを經るなり、）鬪あり、（相繫つなり、）贏あり、（早出なり、）縮あり、（脫出なり、）食あり。（月・星相淩ぐ。）中興天文志（一）に、「凡そ妖星は五行の乖戾の氣なり、五行の掩合・陵犯・怒逆・錯亂・流散は變の生ずる所なり」と。案ずるに、左氏昭公十七年、星ありて（二）大辰に孛す。魯の申須（三）曰はく、「彗は舊を除ひ新を布く所以なり」と。公羊（四）に曰はく、「孛は何ぞ、彗星なり」と。文公十四年、星ありて北斗に孛す。杜預（五）曰はく、「孛は彗なり」と。郭璞（六）が爾雅（七）の釋に曰はく、「彗は妖星なり、又之れを孛と謂ふ」。（先儒曰はく、孛は光芒短くして其の光四に出づ、彗は其の光掃帚の如し。）是れ皆妖變なり。又客星あり、其の說天文の書に出づ。是れ天地の妖氣にして其の間祥災あり。

或ひと問ふ、流星は何ぞや。師曰はく、星の火氣相散じて流行するなり。火の餘炎

（一）文獻通考に宋中興天文志とあると同じきがごとし、撰者等尋ね得ず
（二）左傳原文は「大辰の西に孛し、漢に及ぶ」とあり、大辰は火星、孛は光芒
（三）魯の大夫
（四）公羊傳昭公十七年の條に出づ
（五）晉の將軍にして學者、左傳に註を施せり
（六）晉代の人、字は景純、博學高才、詞賦は東晉に冠たり。官、尙書郞に至りしが、王敦の爲に殺さる。爾雅注名高し
（七）天地山川物名等の註釋書にして、

周漢の間の作とせらる。

迸出するに因りて流行する底、以て考ふべし。中興天文志に、流星に八あり、飛星に五ありと。上よりして降るを流と曰ひ、下よりして升るを飛と曰ふ。祥あり妖あり。（東西に横行するも亦流と曰ひ、奔るも亦流なり。）具に星學者流に索ぬべし。星宿の變は悉く五行の氣に因り、其の實は天人合一の理に在り。

或ひと問ふ、大風暴に起ることあるは何ぞや。師曰はく、陽氣盛なるの間、陰以て之れを閉ざせば、竟に大風の暴起することあり。今鐵丸の器に水を盛りて小口を穿ち、之れを火邊に置かば、其の氣迸突するも亦是れなり。或ひと曰はく、二月八月の間必ず大風ありて、夏冬大風少きは何ぞや。師曰はく、春秋は陰陽の中分なり。春は陽既に地上に滿ちて、餘寒中天を閉ぢ、地氣昇ること甚だ盛なり、故に大風あり。秋は陰既に地上に滿ち、餘熱猶ほ甚しく、上天は陰寒以て塞ぎ、下地は陰以て之れを閉ざす、故に大風あり。夏は盛暑陰氣薄く、冬は極寒にして陽氣伏し、各〻大風の起るべきなし。故に暴風少しく起るも亦久しく盛なることなし。

或ひと問ふ、風に高下ありや。師曰はく、夏天は風高く、冬天は風低し、是れ寒陰の迫る所に因る。或ひと曰はく、其の國に因りて定風あるは何ぞや。師曰はく、山海

の向背に從つて以て其の差あり。或ひと曰はく、風起るの方は先づ知るべきや。師曰はく、雲起るの方、必ず風あり。

或ひと問ふ、雲に高低あるは何ぞや。師曰はく、水氣盛なれば乃ち重く沈む、故に低る。水氣少ければ乃ち其の氣高く淸む。猶ほ水氣あれば乃ち雲象あるがごとし。或ひと曰はく、雲の聚散は會する所あるが如し。如何。師曰はく、雲は會聚する所なし。只だ風に從つて徜徉す。或ひと曰はく、俄然として起り、大虛を蔽ひて、一箇の晴なし。是れ一處に會して今起り來るか。師曰はく、雲は日々に起り日々に消ゆ、俄に聚まるは山海地氣の一時に結聚するなり。俄に散ずるは、或は風に因りて消散し、或は雨と爲りて降消するなり。或ひと曰はく、風に因りて散去すれば、乃ち又一所に會するか。師曰はく、風は陽氣なり。雲は陰氣なり。射ふ所の陽消え盡きて、其の殘猶ほ白雲と爲るなり。熱湯は大いに蓋を開けば、氣以て物を潤ほし、少しく口を穿てば甚だ突風と爲る、亦是れなり。

或ひと問ふ、夏雲奇峰あるは何ぞや。師曰はく、夏は陽の盛極なり。高天には只だ陰寒あり、故に雲は高天に在りて變態を爲し、且つ地氣太だ熱せるに因り、山谷の地

に時雨あり。其の雲遠くより之れを望めば奇峯たるなり。

或ひと問ふ、日出沒の時雲色必ず赤し、是れ日の水間に出沒するが故に、水火相鬪つて雲色赤紅の色と爲るや。師曰はく、太陽出沒の時は、地氣重々して其の色相映ずるなり、雲色地氣の赤に映ずるが故に、紅赤の數般あり。日月何ぞ水裏に出入せんや。

或ひと問ふ、飯甑(一)以て蒸あれば汗下りて淋漓たり、蒸せざれば散ず。天は蒸の謂ふべきなきに、何の故に這の雨雪の降ることありや。師曰はく、陰寒太だ閉ざせば氣昇ることを得ず、是れ陽揚りて陰蓋と爲り、以て掩壓を爲すなり。飯甑の蒸ある者は、蒸を以て陰と爲す。凡そ嚴冬水凍りて氷と爲る、氷は是れ蒸なり。陰の陽を閉ざすも、皆此の如く尤も密なり。豈作爲の蒸之れに及ぶべけんや。或ひと曰はく、飯甑の汗下るは蒸より點滴あるに、天の雨下るは雲中よりすること何ぞや。師曰はく、陰以て蒸を爲すが故に、陰より下降するなり。雨氣昇ることを得ざるが故に、結聚して汗下ることを爲すなり。

或ひと問ふ、密雲雨らざるは何ぞや。師曰はく、易に(二)「小畜は密雲雨らず、我が西郊よりす」、象に曰はく、「密雲雨らずとは、往くを尙ぶなり。我が西郊よりすとは、

(一) 朱子語類の朱子の言を引いて云へるなり。前出一〇四頁參照

(二) 小畜の卦に出づ

施未だ行はれざるなり」と。程子曰はく、「雲は陰陽の二氣交はりて和なるときは、相畜ふること固くして雨と成る。陽唱ひて陰和するは順なり、故に和す。若し陰、陽に先だつて唱ふが若きは順ならざるなり、故に和せず。和せざるときは雨と成る能はず、雲の畜聚密なりと雖も、雨と成らざるは西郊よりするが故なり。東北は陽の方、西南は陰の方なり、陰より唱ふが故に和せずして雨を成す能はず」と。又曰はく、「凡そ雨は須らく陽唱へば、乃ち成るべし。陰唱へば成らず。今雲西に過ぐるときは雨り、東に過ぐれば否るは、是れ其の義なり。長安は西風して雨ると、終に未だ此の理を曉らず。須らく是れ東より北よりして風ふけば雨、南より西よりすれば雨らざるべし。何となれば、東北は陽に屬し、西南は陰に屬す。陽唱ひて陰和す、故に雨る。陰唱ひて陽和せず、故に雨らず。易に言はく、『密雲雨らず、我が西郊よりす』と、西よりすとは、是れ陰先づ唱ふなり。故に雲は密なりと雖も雨らず。今西風にして雨るは、恐らくは是れ山勢の然らしむるか」。朱子曰はく、(一)「密雲雨らず、我が西郊よりす、此は是れ巽を以て乾を畜ひ、他を畜ふを得ず。故に雨と成る能はず」と。又曰はく、(二)「密雲雨らずとは往くを尙ぶなりと。是れ陰、他を包みて住まらず、陽氣便ち散じて雨を做す

(一) 朱子語類卷七十に出づ、但し語句省略あり
(二) 朱子語類卷七十に出づ

こと成らず、往くを尙ぶ所以なり」と。又曰はく「(三)密雲雨らず、往くを尙ぶとは、蓋し止だ是れ下氣のみ上升す、所以に未だ雨ること能はず、必ず是れ上氣蔽蓋して發泄する處なければ、方に能く雨あり」と。愚謂へらく、密雲と雖も寒陰の氣未だ密ならず、發泄の處あるときは雨らず。故に密雲未だ雨らず。凡そ密雲風數〻起れば乃ち雨らず、風あれば乃ち氣の發泄する處あるなり。或ひと曰はく、疾風迅雨あるは何ぞや。師曰はく、密雲既に雨るの後、風あれば乃ち暴風と雖も雨止まず。是れ雨氣甚だ重くして、風吹き開くことを得ざるなり。凡そ雨中に風あれば、風の物を損ぜざる、亦是れなり。

或ひと問ふ、東風にして雲西すれば必ず雨り、西風にして雲東すれば必ず晴るるは何ぞや。師曰はく、風に因つて晴雨冷暖あり、多く土地の山海形勢に從るなり。四方各〻主位あり、東南は陽にして西北は陰なり。四時又其の風あり、風は陽の發にして本と氣の吹なり。氣は是れ雨水を含む。今東より來るに因つて、其の風は陰以て閉づること少し。故に雨水早く下るなり。南は之れに次ぐ。西北の風は陰太だ之れを閉ぢ、其の勢尤も迅し、故に雲止まることを得ず。凡そ東風は疾迅の大なるなきも亦是

(三) 朱子語類卷二に出づ

れなり。唯だ風勢疾ければ乃ち雲なく雨なし、風勢緩舒なれば乃ち雲蓋ひ雨下るなり。

或ひと、龍雨を行るの說を問ふ。師曰はく、朱子曰はく(一)「龍は水物なり、其の出でて陽氣と交蒸す、故に能く雨を成す。然れども雨は陰陽の氣蒸鬱して成る、必ずしも龍の爲すに非ざるなり」と。愚謂へらく、龍は神物なり、其の背に八十一鱗あり、九九の陽數を具へて鱗蟲の長たり、其の質盛陽なり。故に氣を呵して雲を成し、忽ち雨を下す。陸佃(二)が埤雅(三)に云はく、「龍火濕を得れば焰え、水を得れば燔く、人火を以て之れを逐ふときは卽ち息む。是れ龍は陽物の神蟲たり、故に氣を嘘して雲を成す、雲あれば必ず雨あるなり。各〻天物自然の道なり。箇の神靈物あれば、這の雲を起し雨を行るの能あるなり。雲雨は必ず悉く龍の起し行るに非ず、春夏の間龍陽氣に乘じて、以て暴雨の行あり」。先儒曰はく、「龍は本と陰物、陽明の地に在りて、陽の爲に蒸さるれば、陰濕の氣其の身より出でて、卽ち雲と成り、則ち雨因つて以て降る、又何ぞ怪しまんや」と。皇極經世の外篇補註の中に出づ。今案ずるに、龍は本と陽物なり、故に其の氣雲を起し雨を行る。雲雨は陽の唱に因らざれば起ることを得ず。

(一)朱子語類卷一に出づ、但し語句多少省略あり

(二)前出一〇三頁參照

(三)爾雅の輔けの意にて命名せり、魚蟲草木等の名義を得たる所以、その形狀等を釋ける書なり、引據博洽にして精確なり

(四)或ひと、高山に霜露なきを問ふ。師曰はく、朱子曰はく「上面の氣漸く淸く、風漸く緊し。微しく霧氣ありと雖も、都て吹き散じ了る、結ばざる所以なり。雪の若きは只だ是れ雨の寒に遇ひて凝るなり、故に高寒の處雪先づ結ぶなり」と。

或ひと、雨らんと欲すれば乃ち露昇らざることを問ふ。師曰はく、雨らんと欲するときは、陽以て唱ふ、故に氣散じて結ばず。晝露なきも亦陽以て之れを燥散すればなり。

或ひと、先儒の「霜は能く物を殺して、雪は物を殺さず」と曰ふを問ふ。師曰はく、霜先づ隕ち雪後に降る、故に霜先づ草木を殺すなり。且つ雪は極陰にして物を蓋ひ、其の下自ら陽氣を含む、故に物を殺さざるなり。

或ひと、龍の能く池水を揚ぐることを問ふ。師曰はく、龍は極陽の鱗蟲なり。水は必ず火の爲に揚げらる。龍の池水を揚ぐるに非ず、池水陽火に因つて能く昇るなり。水火は相射はざること、以て之れを知るべし。

或ひと問ふ、朱子蝃蝀(五)を以て神物と爲し、水を吸ひ形質ありと爲すは何ぞや。師曰はく、此の說未だ審ならず。其の水を吸ひ酒を吸ふの說は、別に虹に乘るの神物ある

(四) この問答、朱子語類巻二に出づ

(五) 虹に同じ、朱子語類巻二に出づ、曰はく「蝃蝀の如きは本と只だ是れ薄雨日の爲に照らされて影を成す。然れども亦形あり、能く水を吸ひ酒を吸ふ、人家此にあれば或は妖を爲し或は祥を爲す」と

なり。虹は氣なり、彼れ何ぞ然らんや。

或ひと問ふ、子、雷撃を以て神物ありと爲すは何ぞや。師曰はく、雷震は陰陽の氣相撃つの甚しきなり。相撃てば則ち物と爲る、故に霹靂電光あり、其の激するや屋を壞ち木を折り人物を害することあり、其の處必ず其の迹あり。是れ神物ありて以て其の氣に乘るなり。多くは龍以て其の地に隕つ。龍は尺木(一)なくしては天に升る能はず、故に其の升る處爪痕あり、或は鬚髯の少しく殘るあり、唯だ龍の相乘るのみにあらず、又這の極陽の神物あり。是れ陽精以て乘るなり。

或ひと問ふ、人の雷霆に死する者あり、又自然の遇か。師曰はく、(二)或ひと問ふ、「人の雷霆に死する者あり、無乃素より不善を積み、常に其の心に歉然たり、忽然として(三)震を聞き懼れて死するか」。程子曰はく、「非なり、雷之れを震す」。「然らば雷は孰れか之れを使むるや」。曰はく、「夫れ不善を爲す者は惡氣なり、赫然として震する者は天地の怒氣なり、相感じて相遇ふが故なり」と。(四)致堂の胡氏曰はく、「雷の山を破り廟を壞ち樹を折り人を殺す者は、先儒以て陰陽の怒氣と爲す。氣鬱して怒れば方爾として奮擊す、偶〻或は之れに値ふときは震せらる。然り而して盡く然らず」と。愚謂

(一) 龍の頭上にある山形の物をいふ。この尺木に因りて龍能く飛騰す
(二) 以下程子と門弟との問答、二程語錄卷十一に出づ、但し語句多少異なる
(三) [illegible]
(四) 胡宏、宋の學者、前出一一一頁參照

へらく、天人合一して天の靈氣必ず人に中る、故に人の極惡、天の靈氣以て相通じて、人を殺し廟を震することあるなり。左傳僖(公)十五年、夷伯が廟に震す。傳に夷伯が廟に震するは、之れを罪するなりと。聖人天を畏れて戒愼恐懼を爲す、是れ天人同一の理を以てなり。今疾病あるの徒必ず時候風雨を知ること以て知るべし。又極惡の人以て然らざるあり、是れ幸にして免るるなり。故に雷震亦其の同氣に通じ來ること疑ふべからず。或ひと曰はく「人惡罪底多し、故に偶然として雷震に觸れて死する、皆惡人なり。天之れを罪するに在らず」と。此の說信用すべからず。

七九　天度

師曰はく、天本と形なし、故に度數の謂ふべきなし。曆を作る者二十八宿日月の躔く所を考へ、以て强ひて名づけて度と曰ひ道と曰ふ。初めて日月星辰の考ふべく知るべきところあり。聖人の天道に於ける、其の用尤も大なる哉。

師曰はく、先儒曰はく「北より南に直りて縱に之れを分つ、之れを度と謂ひ、東より西に至りて橫に之れを截つ、之れを道と謂ふ」と。凡そ星辰の運る所之れを度と謂

ふこと、猶ほ地の里あるがごとし。二十八宿が分つ所の度も猶ほ州國占むる所の里のごとし。日月五星の運る所之れを道と謂ふこと、猶ほ地の大路あるがごとし。日月五星の轉ずる所、猶ほ州國其の本道あるがごとし。

師曰はく、天に體なし、只だ二十八宿以て之れを論ずべし。凡そ周天三百六十五度四分度の一、是れ蓋し日の行なり、三百六十五日の外又四分日の一を行り、以て初め合ふ所の星宿と其の度を一にす、故に周天を計るに、三百六十五度四分度の一を以て定數と爲して天度を論ず。

師曰はく、先儒皆云ふ「天行甚だ健なり、一日一夜三百六十五度四分度の一を周り、又進んで一度を過ぐ」と。愚按ずるに、先儒の說に因れば、乃ち天行一日一夜に三百六十六度四分度の一なり。天豈別に周天の度數を過ぎんや。唯だ天一日一夜一周天するのみ、日月五星皆相後る、故に天行健を以て之れを稱するなり。

師曰はく、(一)三百六十五度四分度の一を以て周率と爲れば、天の徑百二十度、是れ圍三徑一の大略なり。其の中央は地以て之れに位す、地上六十度地下六十度、四方又然り。凡そ圓徑百二十度、之れを直截するに十を以てすれば、一截十二度なり。其の一

(一) 以下一五〇頁の圖參照

截は北極の座にして、圓周七十二度、北極より上下三十六度なり。此れより二截直徑二十四度、其の次の二截中央赤道に到る、是れ黃道なり。其の南極より赤道に至る亦此の如し。此れを橫截するに十を以てするも亦然り。此に於て四方の位五行の主以て粲然なり。

師曰はく、四方の主位南北極各〻七十二度、東西亦七十二度、其の四隅合せて七十七度四分度の一。（一隅十九度有奇）是れ天の度數自然の形勢にして、四時土旺と相表裏す。

師曰はく、北極の主位三十六度、是れ六六の數にして、天の周廻三百六十の數既に南北極の主位に盡く。是れ周天の小成なり。二十八宿の度數、其の廣大亦此の一小圓位を出でず。是れ天道自然の理、彜倫日用の間、少しも差違することなし。故に天地の間自ら六曆あり、易は六畫して卦を成すなり。

師曰はく、天に黃赤の二道あり、朱子曰はく、(二)曆家の說、天に五道あり、而今且く黃赤道を將て說く。天は正に一圓匣の如く相似たり、赤道は是れ那の匣子相合縫する處にして天の中に在り、黃道は一半は赤道の內に在り、一半は赤道の外に在り。東西の兩處に赤道と相交はる度は、却つて是れ天の橫分を將て許多の度數と爲す、會する

(二) 朱子語類卷二に出づ、但し抄出

時は是れ(那の)日月は黄道・赤道十字路頭相交はる處に在りて相撞著す」と。愚謂へらく、沈存中(一)が云はく、「天は實に之れあるに非ず、特だ暦家色を設けて以て日月の行と謂ふのみ」。漢の天文志に曰はく、「日に中道あり、中道は黄道、一に曰はく光道。凡そ日月五星の行る所、是れ中道、天の中央なり、故に黄道と爲す。赤道より南北各〻二十四度、惣計四十八度、是れ黄道なり。日月五星這の裏面に出沒す」と。

師曰はく、日の行道一晝一夜に一周天す、二十八宿に及ばざること一度、是れ日行の天に後るるなり。三百六十五日四分日の一にして一周天なり。先儒曰はく、「日の行道は寅卯辰申酉戌の間を逾えず、卯酉相對して赤道を爲す、兩極を去る各〻九十一度強、黄道斜に赤道に絡がりて七曜循環す」。日の行、半は赤道の内に在り、半は赤道の外に在り、冬至には黄道斗に在り、赤道の南に出づる二十四度、辰に出でて申に入る。日も亦辰に出でて申に入り、又漸く退いて北行す。春分に及びては奎に在りて、正に黄赤道の交、卯に出で酉に入る。日も亦卯に出でて酉に入り、進みて夏至に至れば黄道井(二)に在り、赤道の北に出づる二十四度、寅に出でて戌に入る。日も亦寅に出でて戌に入る。秋分に至れば角(三)に在り、復た黄赤道の交に當り、卯に出でて酉に入る。

(一) 沈括、宋代の人、存中はその字。宋契丹の間に奔走して功あり、又博學にして天文方志律暦音樂醫術卜算精通せざるなく、神宗の治績を助くる事多し、後事に坐し貶せられて歿す。長興集・夢溪筆談等あり

(二)(三) 星宿の名、二十八宿の一

日も亦卯に出でて酉に入る。

師曰はく、日の極を去ること遠近知り難し、要するに晷景を以てす。先儒云はく、「光道は北のかた東井に至り、南は牽牛に至り、東は角に至り、西は婁に至る。夏至には東井に至りて北のかた極に近し、故に晷短し。八尺の表を立てて晷景の長さ尺五寸八分、冬至には牽牛に至りて極に遠し、故に晷長し。八尺の表を立てて晷景の長さ丈三尺一寸四分、春秋分には日婁角に至り、極を去る中にして晷中す。八尺の表を立てて晷景長さ七尺三寸六分（案ずるに尺五寸八分に丈三尺一寸四分を加ふれば、丈四尺七寸二分、之れを半にして七尺三寸六分）晷景は日の南北を知る所以なり」。今案ずるに、晷景の法を詳にせざるときは、日の正時知るべからず。

師曰はく、日行は冬至には斗の二十一度に在り、極を去ること百十五度少強、地上を行くこと百四十六度少強、地下を行くこと二百一十九度少弱、日々天に後ること一度、百八十二日半強に到りて井の二十五度に在り。是れ夏至の日行なり。地上地下の行は冬至に反す。其の中春分は角の五度少弱に在り、秋分は奎の十四度少強に在り。（各々極を去ること九十一度少強、地上地下、日行百八十二度半強。）是れ天垣(四)一周して初に復る。日は一度を後れて出づ、故に天行一度を過すに似たり。凡そ日は四十八度の間を行きて盈朒(五)なし、只だ一周回して二

（四）星の序列、九八頁及び一六二頁附圖參照

（五）伸縮の意

十八宿を以て之れを考ふれば、乃ち一日一度の差あり。四十八度一周百八十二日有奇、兩回して三百六十五日四分日の一なり。

師曰はく、月の黄道を行ること日の如く、其の天に後るること十三度十九分度の七、凡そ二十九日四百九十九分にして日と會す。一度は九百四十分。月は二十九日有奇にして黄道四十八度を兩周し、竟に日と會するなり。

師曰はく、天の行ること唯だ一周天にして初位に還る。日行は斜に天を周る、故に其の運轉愈〻後る。月は一晝夜に斜に日行十二日有奇の道を周天す、故に日に後るる十二度有奇なり。月と日と會す、故に日を以て其の後るるを謂ふなり。

師曰はく、先儒曰はく「月に九道あり、九道は靑道二、朱道二、白道二、黑道二と黄道とにして九つなり。月は黄道の中を行らずして其の餘の八道を行る。但し此の八道は皆斜に黄道の內外を出入す、故に之れを九道と謂ふ。日月一歲に凡そ十三次天を經るときは、二十六次黄道の內外に出入す。一次天を經るときは、一次入り一次出づるなり。或は六次入り七次出で、或は七次入り六次出で、各〻十三出入す。此の二十六次黄道に出入するの時、二十四次は皆日と會せざることあり、惟だ兩次ほど日と會

することあり。故に疏に云ふ、『通計一百七十三日有餘にして一交あり、此の時に於て方に食あり』と」。愚謂へらく、九道の說、日月の交會を言はんと欲して以て此の說あり、然して定法を以て之れを論ずれば、一歲に兩交して當に兩食すべくして然らず。信用するに足らざるなり。

師曰はく、日月の行に高下あり、是れ清濁輕重陰陽自然の勢なり。程子曰はく、[一]「日月は一なり、豈日の月よりも高きの理あらん、若し盈虧なくば何を以てか歲を成さん」と。愚謂へらく、日月の高下は日蝕を以て之れを知るべし。高下あるが故に盈虧あるなり。程子の說に因るときは盈虧を以て作物と爲す。天何ぞ箇の歲を成すの意あらん哉。

師曰はく、或ひと[二]朱子に問うて曰はく、「天道左旋し日月右行するは如何」と。曰はく、「疏家に此の說ありてより人皆守定す。[三]張子の日月を說くや皆是れ左旋すと、說き得て好し。蓋し天の行くこと甚だ健なり、一日一夜に周ること三百六十五度四分度の一、又進むこと一度を過ぐ。日の行くことも速に健なり、天に次ぐ。一日一夜に周ること三百六十五度四分度の一、度の端に起り度の端に終りて贏縮なし。正に恰も好し、

(一) 二程語錄卷十一出づ

(二) 朱子語類卷二に出づ、抄出にして語句稍や異なる。張子の說も亦同書の引用なり

(三) 張載、宋代郿縣橫渠鎭の人、字は子厚、二程の學に影響せらること深く、易・中庸に精通す、正蒙・西銘・易說の著あり、專ら講學を事とす、橫渠先生と稱せらる

天の一度を進むことに比するときは、則ち日は一度を退くと爲す、二日に天二度を進むときは日二度を退くと爲す。月の行くことは遲し、一日一夜三百六十五度四分度の一、行いて盡さざること天に比すれば十三度十九分度の七を退き了ると爲す。二十七日半强に至つて天を一周し、初躔と合す。又行くこと二日有奇、二十九日半强と爲りて日と會す。進數は天に順ひて左と爲り、退數は天に逆ひて右と爲る。曆家は進數の算し難きを以て、只だ退數を以て之れを算す、此は是れ截法（一）なり。故に之れを右行と謂ひ、其の日月の度の見易きを取るのみ、乃ち云ふ、『日行遲く月行速し』と、此れ錯說なり」と。愚謂へらく、天行日に一度を剩すこと鄭康成（二）に出で、日月倶に左旋すとは横渠（三）が說に出づ。左旋右旋の論、先儒之れを詳にす。今案ずるに、天行至つて健なり、一日一夜一周天、日之れに次ぎ月之れに次ぎ、各〻天に順ひて左旋す。其の右に退くを以て之れを論ずれば月至つて多く、日之れに次ぎ、天之れに次ぐ。是れ陰陽自然の道なり。右行の說亦廢すべからず、古來天に及ばざること一度の言、尤も然り。

師曰はく、度數に狹濶あり、其の旋轉に緩急あり、然して其の周天皆同じ。凡そ紫（四）微垣の旋るは緩くして、赤道の旋るは太だ急なり。日月星宿の旋轉亦急緩あり。朱子

（一）簡單法の意

（二）後漢の鄭玄、前出六四頁參照

（三）張子全書卷二、正蒙參兩篇に出づ

（四）北斗の北に在り、晉書に「紫微垣十五星…天帝の座なり」とありと

曰はく、「[五]一大輪を以て外に在き、一小輪に日月を載せて內に在き、大輪轉ずること急に、小輪轉ずること慢くするが如き是れなり」と。

師曰はく、蔡氏[六]が書の傳に曰はく、「衆星を經と爲し五星を緯と爲す」と。是れ星宿に於て經緯を論ずるなり。凡そ南北極の度を經と爲す、是れ定位あるなり。日月五星の運行定位なし、故に緯と爲す。二十八宿は東より西に旋り、日月五星は南より北に旋り、二十八宿は左進し日月五星は右退す、是れ陰陽升降進退自然の道なり。

八〇　或ひと天度を問ふを辨ず

或ひと問ふ、先儒皆云ふ、「天一晝夜に一周天して一度を過ぐ」と。今子の說に因れば乃ち天唯だ一周天、是れ何の書をか證とするや。師曰はく、漢唐宋元の儒皆天行健を以て一周天一度を過ぐることを曰ふ、是れ未だ天文を審にせざるなり。天一周して星既に初位に歸る、日未だ出でずして星漸く一度を過ぎて後に日初めて出づ。是れ日の天に後るる一度なり、天行一度の剩あるに在らず。曆書に聖人の言なし、故に今據るべきなしと雖も、然も天何ぞ一度を過ぎんや。只だ日月各〻天行に及ばざるなり。

（五）朱子語類卷二に出づ

（六）宋の蔡沈、字は仲默、少より朱子に師事し、師に屬せられて書傳に志し、父元定の託をも重ねて、數十年にして遂に書經集傳を大成せり。父の謫所に從行し、父子相對して學を樂しむ。後徒步して父の喪を護りて歸鄕し、九峯に退きて仕へず、世に九峯先生と稱す。書の傳とは卽ち書經集傳なり

或ひと曰はく、然らば乃ち天は三百六十五度四分度の一を行り、日は天行に及ばざること一度なるときは、日三百六十四度四分度の一を行らんか。師曰はく、日の天に後るるは其の黄道を斜行すればなり、斜行亦三百六十五度四分度の一なり。故に一度の不及あり。

或ひと問ふ、先儒(一)朱子に問ふ、「天は是れ一日に一周す、日は則ち及ばざること一度、天一度を過ぐるに非ず」と。曰はく、「此の説是ならず、若し以て天は是れ一日に一周すと爲ば、四時の中星如何ぞ同じからざるを解せん、更に是れ此の如きときは、日々一般却つて如何ぞ歳を紀さん。甚麼の時節を把りてか定限と做さん。若し以て天過ぎずして日及ばざること一度と爲ば、趲り來り趲り去つて次の午の時を將て便ち三更を打たん」。朱子の此の説は非か。師曰はく、天は常に定位に歸し、然して晝夜は日を以て之れを定む、故に四時の中星同じからず、日々一般ならざるなり。朱子或ひとの問を辨ずること尤も未だ明かならず、信用するに足らざるなり。凡そ二十八宿天の象に定位あり、日月五星は運動旋轉して更に定位なし。是れ又日月星辰自然の形勢なり。

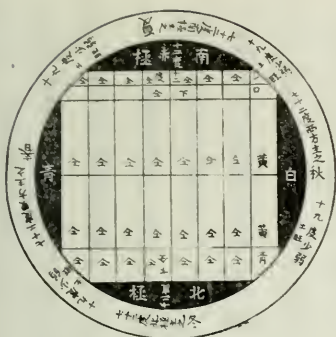
或ひと問ふ、日月五星運動旋轉して少くも止まらず定位なきときは、冬夏至春秋分

(一) 朱子語類巻二に出づ、先儒は黄義剛、字は毅然、臨川の人なり

亦定法なきや。朱子曰はく、「(二)日月皆角より起り天亦角より起る。日は一日運ること一周にして、舊に依つて只だ那の角の上に到り、天は一周し了つて又角を過ぐること些子なり、日々累ね上り去つて一年にして便ち日と會す」と。師曰はく、冬夏至には、日は黃道の南北端を行る、今日の冬至に南端を行り、既に其の道を差ふ。春秋分も亦然り、更に一道を行らず。朱子は天度過ぐるの說に因る、故に其の言此の如し。

或ひと度を問ふ。師曰はく、九百四十分を一度と爲す、是れ日法なり、洛書甄曜度(三)・春秋考(四)異郵皆云はく、「周天一百七萬一千里、一度を二千九百三十二里七十一步二尺七寸四分と爲す」と。周禮に「日至の景、尺有五寸之れを地中と謂ふ」と。鄭衆(五)說く、「土圭(六)の長さ尺有五寸、夏至の日を以て八尺の表を立つ、其の景土圭と等しき、之れを地中と謂ふ。今潁川の陽城(七)是れなり」と。鄭玄曰はく、「凡そ影の地に於ける千里にして一寸を差ふ、景尺有五寸なれば、南(八)日下を載する萬五千里なり、此れに據つて日當に地を去ること八萬里なるべし。日邪に陽城を射るときは天徑の半なり、勾股法(九)を以て之れを言ひ、周率を以て之れに乘じ、徑率之れを約して五十一萬三千六百八十七里六十八步一尺八寸二分を得、一度は凡そ千四百六里二十四步六尺四分なり」と。

(二) 朱子語類卷二に出づ
(三) 未詳、各書の註か
(四) 梁書に、春秋緯三十卷あり、多くは散佚して、僅に十數篇を殘し、玉函山房輯佚書集及び古微書の中に收む、考異郵はその一篇の名なりと出づ
(五) 後漢の人、字は仲師、幼より三統曆に精通し、若くして學名高し、仕官して大司農となり、治績多く、鄭司農と稱して崇敬せらる
(六) 前出八八頁參照
(七) 今河南省登封縣の東南告城鎭を云ふ。潁川に沿ふ。
(八) 日出直

或ひと四分度の一を問ふ。師曰はく、定宇(一)の陳氏曰はく「四分度の一は周天全度の外、其の零度に一度の四分中の一あるなり、九百四十分を一日と爲す。其の二百三十五分は卽ち四分中の一分なり、是れ四分度の一なり」。今案ずるに、五度四分度の一は三百六十の剩分なり。然れば乃ち日も亦一度有奇天に後れ、相積りて五度四分度の一となるあり。

或ひと問ふ、竪截横截の説如何。師曰はく、本と此の説なし、愚假に此の説を設けて以て童蒙に示す。凡そ北極は地上に出づる三十六度、北極の下端は南極の上端に至りて相邪なり。黃赤道は天中を斜帶する故に、地上より直に黃赤道を見れば、乃ち其の度殆ど六十度に幾し。圓率を以て北南極各〻黃道を去る六十度、黃道六十度（實は四十八度）合して半圍百八十度、周天三百六十、自然の數なり。

或ひと問ふ、先儒曰はく「周天三百六十五度四分度の一、東西南北相距ること皆然

下の圖

(九) 數學上の言葉、三角法。勾又句に作る

(一) 陳櫟、元代、休寧の人、字は壽翁。宋亡びて仕へず子弟を教ふ、學者定宇先生と稱す、歿年八十三、尚書集傳纂疏・歷朝通略・勤有堂隨錄・定宇集の著あり

り。天の形は弾丸の如く、半は地上を覆ひ半は地下に隱れ、其の地上に見はるること百八十二度半强なり」。今仰いで天の象を觀るに、二十八宿地上に見在する者或は十五・十七宿、地下に入る者尤も寡し。且つ春分に尤も多く地上に顯はるるは何ぞや。師曰はく、今望む所の天の形は北高くして南下（ひく）し、北極地を出づること三十六度、北極を繞る七十二度、常に見（あらは）るる者之れを上規と謂ふ。南極地に入る三十六度、南極を繞る七十二度、常に隱るる者之れを下規と謂ふ。赤道は南北極の中を分ち、黃道は赤道を夾む、地上より之れを看れば、黃赤道皆斜に二十八宿を周る。赤道に依るは參(一)・星・翼・軫・角・亢・氐・虛・危なり。其の餘は皆赤道の內外に列す。赤道の內に列するの星宿見（あら）はるるときは、其の地上に見在するものは常に半に過ぎ、赤道の外に列するの星宿見はるるときは、其の地上に見在するもの尤も寡し。分野の圖を按ずるに、北極を去ること三十六度、以て之れを考ふれば、乃ち其の說粲然たり。或ひと曰はく、春分は晝夜刻を同じうして、初昏の中星井は十七度なり、曉の中星箕は一度なり。此の度二百五度有奇、是れ中分せざるは何ぞや。師曰はく、星宿の度斜に之れを看ればなり。春分には赤道の內列星多く地上に見在すればなり。

(一) 以下すべて星座の名なり

或ひと二十八宿の定位を問ふ。師曰はく、東方は角より箕に至る七宿なり、次舎を以て言ふときは房心を大火（一）の中と爲す。南方は井より軫に至る七宿なり、形を以て言ふときは朱鳥の象あり。虛は北方七宿の中星、昴は西方七宿の中、四時各〻中星あり、以て其の位を定むるなり。

或ひと二十八宿の度を問ふ。師曰はく、宋の中興天文志に、王奕（二）曰はく、二十八宿亦未だ始より度あらず、天體は沖漠（三）なり、分ちて三百六十五度と爲すと雖も、然も其の度分ち難し、故に暦を作る者其の度を二十八宿に隷し、用ひて以て日月の躔る所を紀すのみ。蓋し天の度あるは猶ほ地の里あるがごとし。二十八宿各〻其の度あれば、則ち日の天を行るや、孟春には某星幾度に在り、仲春には某星幾度に在りと、日の躔得て名づくべし。九州列縣各〻其の里あれば、則ち人の地を行くや、某日某州幾里に至り、某日某縣幾里に至ると、驛得て計るべし。此れ星度の由つて起る所なりと。曰はく、二十八宿の度、濶狹あるは何ぞや。曰はく、日の躔る所偶〻此の宿と相當る。此の濶狹是に於て分つなり、故に渾天を說く者の曰ふ、日の躔る所或は多く或は寡し、適〻其の星に當る者凡そ二十八、故に度の多寡是に於て生ず。井斗の舍、星なき

（一）星名、又大辰即ち心宿なり

（二）元代、玉山の人、字は敬伯、玉山の教諭に任ぜらる。斗山文集・梅巖雜詠・玉斗山人集等あり

（三）沖漠と同意

に非ず、然れども日と與に躔らず、一二日にして其の星適〻與に相當る。故に其の度狹からざるを得ず。其の度の濶狹を得るを失ふは、一宿全體を擧げて盡く此の度を占むるには非ず。南斗は六星なり、全體を擧げて之れを言はば、合(四)距は杓(五)星を度と爲す、而も今の曆家は距魁(六)第四星を度杓と爲す。二星則ち箕に入れば牽牛は六星なり。全體を擧げて之れを言はば、合距二星を度と爲す。今の曆家距中二星を度と爲して、西の二星は斗に入る、虛は二星なり。全體を擧げて之れを言へば、合距北星を度と爲す。而も今の曆家南星を距(へだ)るを度と爲し、北星則ち牽牛に入る。蓋し南斗六星の中杓の二星、日の度に當らずして、魁の第四星度に當る、故に魁より距(へだ)つて二十六度を得、牽牛六星の中、西星日の度に當らずして、中二星度に當る、故に牽牛は魁を距つて六度を得、虛二星の中北の一星日の度に當らずして、南の一星度に當る、故に虛は南星を距りて十度を得。古の曆を造るもの假に是の法を設け、以て日躔を步(はか)る。或者は察せずして謂へらく、二十八宿本(もと)と其の度ありと。又其の宿幾度を得るかを見、遂に謂へらく一宿全體を擧げて焉(ここ)に在りと。則ち又非なり。凡そ二十八宿の度數は皆赤道を以て法と爲す、黃道を推して度に合せざる者は、蓋し黃道に斜あり直あり、故に度數亦

(四) 辭海に、行星と太陽地球と一直線上に在り、且つ距角零なる時、之れを稱して合と云ふと。距は距角なるべし
(五) 北斗柄
(六) 北斗第一より第四を魁といひ、第五より第七を杓といふ

道と等しからず、即ち復た度に當る星を以て宿と爲す。惟だ虛道未だ奇數あらず、是れに自り日の餘分(あり)、曆家斗分を取る者此れなり。餘宿は然らず。沈括が筆談[一]に曰はく、「官の長予に問ふ、『二十八宿多き者は三十三度、少き者は止だ一度、此の如く均しからざるは何ぞや』と。予對へて曰はく、『天の事本と度なし、曆を推す者以て其の數を寓することなければ、乃ち日の行る所を以て天を分ち、三百六十五度有奇と爲す』と」。愚謂へらく、先儒王奕・沈括の說詳にして明かなり。黃道二十八宿の度、諸曆差ありて一決せず。其の圖は三才圖會に出づ。

或ひと問ふ、日行冬至には便ち晝南陸を行り、夜北陸を行る。夏至は又之れに反す。是れ日行に長短なきなりと。師曰はく、古來天文を圖するに赤道を以て中に置き、黃道を以て斜に天中を帶し、一は赤道の內に出で一は赤道の外に出づ。角(秋分)五度少弱、奎(春分)十四度少强を、黃赤道相交はるの處と爲す。其の說唯だ黃赤道の橫直を示すのみ。此れに因つて泥著して來問あるなり。凡そ黃道は赤道を夾み南北各〻二十四度、通計四十八度皆黃道なり。其の日道を以て之れを論ずれば、乃ち冬至の日道は斗の二十一度に在り、夏至の日道は井の二十五度に在り。故に圖は斗の上・井の下を以て黃道の極

(一) 前出一四二頁參照、筆談はその著夢溪筆談なるべし

と爲せり。日道日に一度を退き、唯だ黄道一度の裏を行る。冬至・夏至亦然り。冬至は恆に南陸を行り、節を逐うて漸次に赤道に近づき、竟に春分に至りて中道を行る。又夏至に及べば北陸を行るなり。

　或ひと問ふ、子が說の如くば、天の形太だ圓にして赤道の左右其の端に至れば、乃ち赤道より度數相短し、故に冬至・夏至の日は春秋分より短きか。師曰はく、來問の所天の度を以て日道を論ず、故に此の疑あり。日道は稍や卑く、二十八宿は高し。日道は唯だ黄道四十八度を以て中道と爲す。此の間長短廣狹の言ふべきなし。

　或ひと問ふ、子が說に因れば、乃ち日南陸を行るときは北方甚だ日氣に遠く、日北陸を行るときは南方甚だ日氣に遠し。日月の天地に於ける、豈其れ然く偏ならんや。師曰はく、日行は三百六十五度四分度の一なり、若し冬至の日道夜夏至の日道を行れば、乃ち其の斜太だ舒なり。且つ日出日沒四時同じ。來問の如くば日赤道の南を行るときは北方日に遠く、赤道の北を行るときは南方日に遠し。然れども地上日を去ること各〻六十度、更に遠近なし。凡そ北極地上に出づる三十六度の地を見るに、皆南北日を去ること遠からず、冬至には日南端を行り、夜は乃ち北邊に依る。夏至には日北

端を行き夜亦北邊を行き、晝地上より之れを見るに、日道は猶ほ南に在るがごとし。四時各〻日道を去ること偏らず、故に甚だ寒からず甚だ暑からずして、四時行はれ百物生ず。是れ中國の中國たる所以にして、四夷の四夷たる所以なり。

或ひと問ふ、月に九道ありとは何の書に出づるや。師曰はく、書傳(一)に、日月冬夏九道の圖あり、曰はく、「日に中道あり、月に九道あり」と。說は洪範本傳に見ゆ、合せて陽曆陰曆の說を以て之れを推すに、凡そ月行の交はる所黃道の內を以て陰曆(二)と爲し、外を陽曆と爲す。冬は陰曆に入り、夏は陽曆に入り、月青道を行く。冬至夏至の後、青道の半交春分の宿に在り、黄道の東に當る。立冬立夏の後、青道の半交立春の宿に在り、黄道の東南に當る。衝(三)する所の宿に至るも亦之の如し。冬陽曆に入り、夏陰曆に入り、月白道を行く。冬至夏至の後、白道の半交秋分の宿に在り、黄道の西に當る。立冬立夏の後、白道の半交立秋の宿に在り、黄道の西北に當る。衝する所の宿に至るも亦之の如し。春陽曆に入り、秋陰曆に入り、月朱道を行く。春分秋分の後、朱道の半交夏至の宿に在り、黄道の南に當る。立春立秋の後、朱道の半交立夏の宿に在り、黄道の西南に當る。衝する所の宿に至るも亦之の如し。春陰曆に入り、秋陽曆に入り、月黑道を行く。春分秋分の後、黑道の半交冬至の宿に在り、黄道の北に當る。立春立秋の後、黑道の半交立冬の宿に在り、黄道の東北に當る。衝する所の宿に至るも亦之の如し。四序(四)離れて八節と爲り、陰陽の交はる所に至りて皆黃道と相會す、故に月行九道あり、所謂(五)「日月の行は冬あり夏あり」」。中興天文志(六)に曰はく、「王奕按ずるに、日月の行は遲あり速あり、一術を以て御すべきこと難し、故に其の合散に因り分れて

(一) 伏生の尚書大傳か
(二) 陰道と云ふが如し
(三) 兩天體の黄經或は赤經相距ること一百八十度の時を謂ふ
(四) 四季
(五) 書經洪範に出づ
(六) 文獻通考卷二十一、日月行道にこの引用出づ

數段と爲り、毎段一色を以て之れを名づけ、以て算位を別たんと欲するのみ。陳卓(七)が三家星(八)に於て其の色を別ち以て之れを識すが如き、算法に赤籌黒籌を用ひて以て之れを別つが如きのみ。而して暦家其の意を知らず、遂に以て九道ありと爲す、甚だ嗤ふべし」と。先儒曰はく、「一行(九)、月の黄道を出入するを考へ、圖三十六を爲り、九道の增益を究め大衍暦を作る。五代の司天考(一〇)に、王朴(一一)九道を明かにし以て月を歩し欽天暦を作ると載す。九道は月軌なり、其の半は黄道の内に在り、半は黄道の外に在りて、黄道を去ること極めて遠きこと六度。黄道を出づる之れを正交と謂ひ、黄道に入る之れを中交と謂ふ。古より九道の説ありと雖も、蓋し亦知りて未だ詳にせず、徒だ祖述の文ありて推歩の用ふることなし」。今黄道を以て一同を分つて八節と爲し、一節の中を分つて九道と爲し、七十二道を盡して後、日月をして其の邪正の勢を隱す所なからしむ。蓋し月の黄道に出入する、時異にして日同じからず、渾天の能く述ぶる所に非ざるも、之れを要するに極は六度に過ぎず、則ち大數知るべきなり。

或ひと問ふ、月一晝夜にして斜に日行十二日有奇の道を周天すとは如何。師曰はく、凡そ黄道は天の中央にして日月五星の道なり。其の度四十八度。日黄道の一度を行く

(七) 宋代紹熙の進士、字は立道、清節にして自己の産を納めず著述の酬を以て世綸堂を築き退居して卒す、清敏と謚す

(八) 星座の名の如し、隋書天文志に、二十八宿三家星黄赤二道と幷べいへり

(九) 唐の高僧、大慧禪師と謚す。著書大衍暦、大日經疏等あり

(一〇) 五代史の天文志を指す、同史巻五十八に出づ

(一一) 後周、東平の人、字は文伯、世宗に仕へて、文武の功あり、又明敏にして智材多く、陰陽律暦に詳に、勅を奉じて欽

天曆を作る

こと三日有奇、有奇は十分度の八少强なり、月は黃道の度を行き、日は十二日有奇運る所を行く、故に十二度有奇の差あり。月黃道四十八度を行く十四日有奇ならば、則ち月行は一晝一夜に黃道三度有奇を行く。凡そ此の間斜周の差あり、詳に通計すべし。且つ月行は古人未だ盡せざるの處あり、只だ來者を待つて以て糺すべし。

或ひと、日月の高下を問ふ。師曰はく、日月相重なり近きときは則ち月明なり、三日に限らず。必ず三日を待ちて而る後に明暗ありとせば、則ち大略日を去り日に近きこと、幾ど三十六度にして明暗あり。此を以て詳に之れを試考すれば、乃ち其の高下以て知るべし。

或ひと問ふ、邵子曰はく(一)、「天は左に旋り日は右に行く、日は夫たり月は婦たり、故に日は東に出で月は西に生ず」と。朱子は張氏の說に從ひて、天及び日月各〻左旋すと爲す。師曰はく、天は唯だ一周天のみ。日月各〻天に順ひて左旋し右退するなり。日月右退するを以て天左旋すと爲す。天地は本と動かず、日月運動す。星は旋ると雖も必ず定位ありて、也た運動せざるが如し、是れ陰陽自然の形勢なり。

或ひと(二)、五星の度を問ふ。師曰はく、先儒曰はく、「古曆は五星並びに順行す。秦の曆に始めて金火の逆あり。又甘氏時(代)(三)(石)を並にして自ら差異あり。漢初測候して乃ち

(一) 邵子全書卷五、皇極經世書觀物外篇上に出づ

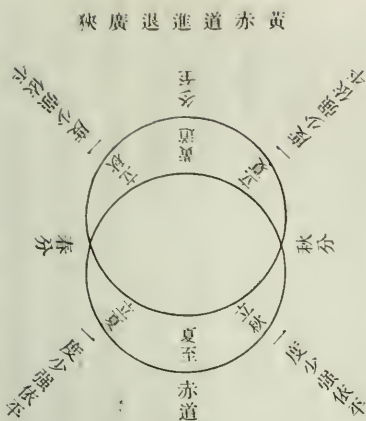
(二) 以下一段すべて文獻通考廿一、七案の引用なり

(三) 甘公、一名德、漢代の人、星學に精し、及び石申二氏をいふ。前出一二七頁參照

（四）後魏の太中大夫となる、易卜星學に通ず
（五）後魏の人、元洪業の黨にして自立を計りし亂なり
（六）顯隱
（七）據き招く
（八）班固、この文もと漢書天文志の中に出づ、但し字句多少異なる

五星皆逆行あるを知れり。其の後相承けて能く察すること罕なり。後魏の末（に至り）清河の張子信(四)學藝博く通じ、尤も暦數に精し、因つて葛榮(五)の亂を避けて海島の中に隱れ、三十（許）年を積みて専ら渾儀を以て日月五星差變の數を測候し、算を以て之れを步り、始めて日月の交道に表裏遲速あることを悟る。五星は見伏し感召(六)向背(七)あり、言ふこころは、日は春分の後に在りては遲れ、秋分の後には則ち速なり。合朔に月、日道の裏に在るときは日食す、若し日道の外に在れば交はると雖も虧けず。月望値交はれば虧く、表裏を問はず。又月行りて木火土金の四星に遇ふに、之れに向へば速に、之れに背けば遲る。五星の四方に行る、列宿各ゝ好惡する所あり。居る所其の好に遇ふ者は留まること多く、行くこと遲くして見はるること早し。其の惡に遇ふ者は留まること少く、行くこと速にして見はるること遲し。常數と並に差ふ。少き者は差五度に至り、多き者は差三十許りの度に至る。其の辰星の行は見伏尤も異なり。皆古人未だ得ざる所の者なり」と。中興天文志に、「夫れ二曜は二氣の精なり、五緯は五行の精なり。二曜倶に順行し五緯獨り退逆あるは何ぞや。班氏(八)謂へらく、『三代の盛時は天下の五緯軌に順ひて逆行の者なし、周の末人紀修まらず、師旅數ゝ起る、故に五緯始め

て常の度を失ひて逆行あるなり』と」。

或ひと、黄赤道の經緯を問ふ。師曰はく、先儒に黄赤道星度增損篇あり 曰はく、「赤道は南北の中を分ち、黄道は赤道の內外を出入す。赤道は橫にして黄道は斜なり。斜は橫より長し、故に黄道之れを增と謂ふ。赤道は中に居り、黄道は傍に出づ。傍は中より狹し、故に黄道之れを減と謂ふ。蓋し亦自然の數なり。黄道は二至(一)の前後に在り、赤道を去る最も遠しと爲す、故に度狹くして少し、當に分限以て差や減すべし。二分(二)の前後は赤道を踰えて出入し、赤道に近く益〻斜なり、故に度廣くして多し、當に分限以て差や加ふべし。大抵南北冬夏の宿度の內に在りては、黄道の度少く、赤道の度多し。東西春秋の宿度の內に在りては、黄道の度多く、赤道の度少し。玆れ天度潤狹の勢の然らしむるなり。四隅四立(三)の初め各〻黄赤道變革の際は、則ち度平にして多少

黄赤道進退廣狹

(一) 夏至・冬至
(二) 春分と秋分
(三) 四隅は四方、四立は立春立夏立秋立冬

の異なし、所謂四立の際[四]一度依强少平といふもの此れなり。疏[五]に曰はく、「後漢(書)張[六]衡の渾儀を載す。赤道は天の腹を横帶し、黄道は其の腹を斜帶し、赤道を去る表裏二十四度」と。晉誌に葛洪[七]が渾天儀の註を載す。赤道は天の紘を帶し、黄道は赤道を出入す、極めて遠きは赤道を去る二十四度と。唐誌に一行[八]が黄道儀を載すも亦然り。愚謂へらく、先儒の所謂黄道は南北兩端に斜出するの謂なり、故に增減の度あり。今案ずるに、黄道は赤道を夾むこと各〻二十四度、皆黄道と謂ふべし。赤道は天の中、故に度數廣し、黄道は南北極に近し、故に度數少減なり。予經緯の圖を設く、以て之れを考ふべし。

或ひと、日晷長短の說を問ふ。師曰はく、漢誌[九]に曰はく、「日極に近し、故に晷短し。月極に遠し、故に晷長し。日極を去るの遠近知り難し、要は晷景を以てす。景は日の南北を知る所以なり」と。按ずるに、周禮に「大司徒土圭の法を以て土深を測り、日至の景、尺有五寸、之れを地中と謂ふ」と。先儒皆地中を卽今の陽城[一〇]を以てする是れなり。八尺の表を立てて日の長景尺五寸、日の短景尺三寸、鄭康成[一一]が註に具なり。

(四) 前頁附圖參照。但し圖には、少强依平に作る
(五) 後漢書天文志の疏
(六) 後漢、西鄂の人、字は平子、安帝の時太史令となり、渾天儀を作る。霝憲算罔論を著はし、又周易訓詁・遺文等もあり。後漢書天文志の分註には著書名は霝憲渾儀とあり、同じものなるべし
(七) 前卷二八九頁參照
(八) 僧一行、前出大衍曆の作者
(九) 前漢書卷二十六、天文志抄出
(一〇) 今河南省登封縣の東南告城鎭をいふ
(一一) 鄭玄の周禮注

又考靈曜(一)・周髀(二)・靈憲(三)・王蕃(四)・陸績(五)が諸書並に云はく、「日の景は地に於て千里にして差一寸なり」と。隋志(六)に載すらく、「宋の元(七)嘉十八年使を交州(八)に遣はして景を測りしに、夏至の日景、表の南に出づること三寸二分。何承天(九)、陽城に計りて交州路に去く、萬里に當りて景の差一尺八寸二分。是れ六百里の差一寸なり」と。唐の太史の議に曰はく、「交州(一〇)は洛を去ること九千里、蓋し山水の回折之れ然らしむるなり。表を以て之れを考ふるに、其の弦當に五千なるべきか。開元十二年使を遣はして景を候らしむ。太史監南宮說、河南の平地を擇び、水準繩墨を設け、表を植てて以て引きて之れを度る。率ね五百二十六里にして晷の差二寸餘。南のかた林邑(一一)を候るに、冬至の晷六尺九寸、

下左圖の圓の周圍の放射線、一本、三十六に作る

(一) 緯書の一種にて、尙書緯、もと三卷ありしが今は佚して古微書の中に輯すと。考靈曜にその殘存せる一篇の名なり

(二) 古の算法書名

(三) 前出漢の張衡の靈憲渾儀か

(四) 三國吳の廬江の人、字は永元、博覽多識術藝に通じ常侍となれり、渾天說ありと晉書・隋書の天文志にあり

(五) 三國吳の人、字は公紀、幼より聰明、星曆算數に通ず、渾天圖を作り、又

夏至には表の南に在ること五寸七分。北のかた鐵勒[一二]を候るに、夏至には四尺一寸三分、冬至には二丈九尺二寸六分。陽城の林邑を距ることを計るに徑六千一百一十二里、五月の日は天頂の北六度に在り。北のかた鐵勒と距ることも林邑と正に等しければ、五月の日は天頂の南二十七度四分に在り。舊說千里にして差ありとは疏なり」と。然らば則ち日晷短長の說は必ずしも尺寸を以て較ぶるを爲さず、大約其の晷を測りて極めて長(なが)ければ日の南に至るを知り、其の晷を測りて極めて短ければ日の北に至るを知る。斯の如きのみと。愚謂へらく、先儒の論此の如し。凡そ晷景海上に非ざれば乃ち日の出沒測り難く、相去るの遠近地勢均しからず。春秋分の日出も亦斜なり、況や冬夏至の日の出沒尤も斜なり。其の測る所速ならざれば乃ち差ふ。故に只だ正午の時を以て之れを知るに在り。然れども天の究りなき、日月の定めなき、何ぞ其の幽微を盡さんや。

八一　曆數

師曰はく、堯典[一三]に曰はく、「乃ち羲[一四]・和に命じ、欽(つつし)みて昊天(かうてん)に若(したが)ひて日月星辰[一五]を曆象し、敬(つつし)みて人に時を授けしむ」と。又曰はく、「帝曰はく、咨(ああ)汝羲と和と、朞(き)は三百有

易釋言の著あり、歿年三十二
（六）隋書天文志
（七）南朝の劉宋、文帝の年號、隋書卷十四、天文志。元嘉十九年に作る
（八）今の廣東省廣州市
（九）南朝宋代、鄕の人、武帝・文帝に重用せられ、御史中丞となる、後免官せらる。元嘉曆を改定せり
（一〇）新唐書卷三十一、天文志抄出、開元は玄宗の年號
（一一）今の安南順化等の處を當時かく稱せり
（一二）今の青海の東部
（一三）尙書

六旬有六日、閏月を以て四時を定め歳を成す、允に百工を釐め庶績咸熙まれり」と。

竊に按ずるに、古昔聖人欽みて昊天を考ふ、是れ天德を以て人事に施し、天人惟れ一にして而して後に民用ひて行ふ。故に日月星宿の周旋を詳にし、敬みて其の度數を紀し其の氣候を正し人の時を授け、四時以て分れ地氣以て詳に、民政以て施す。是れ曆數の世に行はるる所以なり。

師曰はく、一年の法あり、一月の法あり、一日の法あり。一年は其の惣計にして、其の間に中節氣候あり、各〻其の主位あり。凡そ一年を定むるは、是れ日と天と三百六十五日四分度の一にして相會するに同じ。此の定數あつて一月を定む、是れ日と月と二十九日有奇にして相會するに因る。三十日の定數ありて一日を定む、是れ日出日沒を以て一晝と爲し、日沒日出を以て一夜と爲し、一晝一夜にして日周天す。故に一年一月一日各〻日を主とす。凡そ一年の積は一日を以て考ふべし。天道は私なし、日月星辰の運轉更に差謬なし、以て之れを考ふべし。

師曰はく、廿四氣各〻中星あり。之れを中星と謂ふは、南方の正に當り午位の中に直る者なればなり。其の法初昏を以て候と爲す、故に堯典の指す所は卽ち所謂昏に中

の篇名　(一四) 羲氏と和氏　(一五) 一週年

（一）武帝の太初元年鄧平造るところ、年號によつてかくいふ。
（二）章帝の元和二年李梵・編訢のつくるところなり
（三）作者は陳得一
（四）元の世祖、至元十七年、郭守敬の作るところ
（五）宋代、金谿の人、九淵、字は子靜、居所によりて象山翁と號す、文安はその諡なり。その學は程子に出づるも、頓悟を主とし、明の王陽明の學の先驅となり、朱子の一敵國たり。象山集・同外集・語錄等の著あり、この語は象山先生全集卷三

するなり。然して歲差の說あり。堯の冬至の日は虛の一度に在り。月令の冬至の日は建斗に在り。漢の文帝三年冬至の日は斗の二十二度に在り、武帝の太初暦(一)冬至の日は星に在り、斗牛の間に在り。東漢の四分暦(二)冬至の日は斗の二十一度に在り。唐の大衍暦開元の暦の名冬至の日は牛の十度に在り。宋の統元暦(三)統元は宋の高宗の暦の名冬至の日は牛の二度に在り。今授時暦(四)冬至の日は箕の八度に在り。凡そ星宿日月の差考へ難し、是れ乃ち盡究すべきなきの理なり。

師曰はく、氣盈朔虛あり、閏を生ずる十有九歲、七閏して氣朔分齊す、是れを一章と爲す。故に三年にして閏を置かざれば、春の一月夏に入りて時漸く定まらず、子の一月丑に入りて歲漸く成らず。之れを積むこと久しくして三たび閏を失ふに至るときは、春皆夏に入りて時全く定まらず、十二たび閏を失はば子皆丑に入りて歲全く成らず、其の名實乖戾し寒暑大いに反す。象山の陸氏(五)曰はく、「暦家に所謂朔虛氣盈とは、蓋し三十日を以て準と爲し、朔虛とは、前の合朔より後の合朔に至る三十日に滿たず、其の滿たざる分を朔虛と曰ふ。氣盈とは、一節一氣共に三十日有餘、分つて中分と爲す、中は卽ち氣なり」と。愚謂へらく、氣盈とは、日と天と會し、五日九百四十分日

の二百三十五の餘（是れ五度四分度の一）あるなり。朔虛は、日と月と會し、五日九百四十分日の五百九十二の足らざるあるなり。是れ歲に十二月あり、月に三十日あり、三百六十を以て一歲の常數と爲す、故に這の氣盈朔虛あるなり。凡そ閏月は天道の有する所に非ず、日月常に晦朔に合して餘分の剩（あま）るべきなし。月天恆に三百六十五度四分度の一に會して餘分の見るべきなし、曆家通計して此の算術を立つ。尤も聖人の教ふる所なり。案ずるに天道究りなし、故に術を設け說を立つるも亦盡すこと能はず、故に別に餘分の相積あり、是れ三年にして閏を置くの實なり。閏を置くも尙ほ餘分の計るべからざるものあり、而して竟に歲差の說行はる。

師曰はく、天本と四時なし、中華及び本朝は各〻北極を地上に出づること三十六度に見、黃赤道を斜に見る、故に晝夜に長短及び中（ほどよき）あり、寒暑冷暖あり、以て這の四時氣候を分つ。

師曰はく、通曆（一）に曰ふ、「太昊始めて甲曆あり」。楊泉（二）の物理論に曰ふ、「神農曆日を立つ」。漢の律曆志に曰ふ、「黃帝曆を作る」。朱子曰ふ、「（三）太史公が曆書は是れ太初を說く、然れども却つて是れ顓頊（せんぎょく）（四）の四分曆なり。劉歆（りうきん）（五）三統曆を作るも、唐の一行の太衍

十五、語錄に出づ

（一）東晉の穆帝永和八年、著作郎瑯邪王朔之の造るところ、甲子を以て上元と爲し其の上元に因りて開闢の始と爲すといふ。

（二）晉代、洪國の人、字は德淵、徵士なり。物理論の外に、太玄經及び文集あり

（三）、朱子語類卷二に出づ

（四）古代の帝高陽氏の名

（五）漢代、劉向の子、字は子駿、父の向と共に、前漢の學に功あり、ことに經籍目錄の學を起せしは特功なり。王莽と親しく、後相

背きて禍を懼れ自殺す
(一六) 後周、東平の人、字は文伯、世宗に重用せられ欽天曆を造る、後世律曆家に推稱せらる、樞密使を以て終れり
(七) この一條、殆ど隋書天文志の引用なり
(八) 天文觀測器、渾天儀とも云ふ。後出一七〇頁附圖參照
(九) 鄭玄、前出六四頁參照
(一〇) 後漢の人、字は季長、俊才にして郎中に拜す。子弟の教養せらるるもの千を超え、盧植・鄭玄もその高弟なり、三傳異同說の著述

曆最も詳に備はれり。五代の王朴[一六]が司天考も亦簡嚴なり」。愚謂へらく、曆に統天・開禧・會天・授時の差あり。二十八宿の度數亦少しく其の差あり。凡そ曆は皆日月星辰運行の周會を考へ、以て其の說を立つ。古曆今亡びて詳に考ふるの由なきなり。

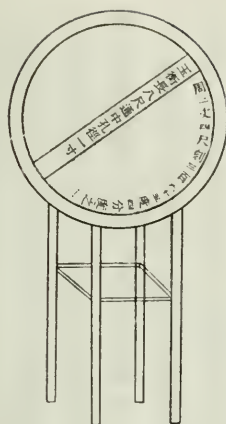
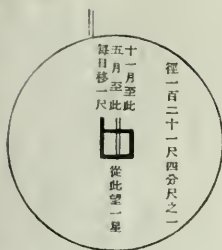
八二　或ひと曆數を問ふを辨ず

或ひと昏旦の中星を定むるの法を問ふ。師曰[七]はく、舜典に曰はく、「璿璣玉衡[八]を在にして以て七政を齊ふ」と。鄭[九]康成曰はく、「其の轉運する者を璣と爲し、其の玉を持する者を衡と爲す、皆玉を以て之れを爲る。七政は日月五星なり、璣を以て其の行度を衡り以て天象を觀る」と。馬融[一〇]が曰はく、「渾天儀は璇轉すべし、故に璣と曰ふ。所謂衡は其の橫簫なり、星辰を視る所以なり。璿を璣と爲し玉を衡と爲す者は天象なり、日月五星皆此の度を以て其の盈縮進退を知る」と。先儒曰はく、「二說皆衡以て星辰の行度を視るを謂ひ、衡を以て璣を望むを謂へるに非ざるなり。惟だ蔡邕が蓋天の說に謂ふ、『圓なる者を璣と爲す、其の徑八尺、璿珠を以て之れを爲り、懸けて之れを運らして以て天の行に象る。直なる者を衡と爲す、其の長さ八尺、靈玉を以て之れを爲

の外經書の注書十餘種に達す、歿年八十八
（一）尙書正義
（二）前出隋書天文志
（三）武帝の年號、正しくは天監九年なり
（四）沖之の子、隋書天文志祖暅に作る。字は景爍、學精微にして人神の妙あり、父が何承天曆を改め作りしを世に行ふ。太府卿を以て終る

る。孔徑一寸、下より璣を望み以て星辰を視る』と。唐の孔穎達が疏[一]に、遂に蔡が說を采りて謂はく、『璣を懸けて以て天に象り、衡を以て之れを望み、璣を轉じ衡を窺ひ以て星辰を知る』。且つ邕が謂ゆる璣は蒼天と爲し懸けて之れを運らす、其の徑八尺、列宿を畫圖すること固に已に稠しく、管窺を概すときは則ち亂る。況や函丈の內に在るもの、安んぞ八尺の管窺を用ひんや。其の說殊に曉るべからず。然れども當に鄭康成・馬融が說を用ひて、衡を以て星辰の行度を視れば之れを得べし」と。又隋誌[二]に載す、「梁の天監[三]中に祖暅[四]之經注を錯綜して以て地中を推す。其の法に曰はく、先づ昏旦を驗して刻漏を定め辰次を分ち、乃ち表を準平の地に立て名づけて南表と曰ひ、日中を候す。更に一表を南表の影の末に立て、名づけて中表と曰ひ、夜中表に依り以て北極樞を望む、而して北表を立て、參をして相直からしめ、三表皆以て準を懸けて定め、乃ち三表の直なる者を觀る。其の表を立つるの地卽ち子午の正に當る。三表の曲なる者は當に更に之れを求むべし。又春秋分の日を以て、一日始[五]めて東方に出づること半體ならば、乃ち表を中表の東に立て、名づけて東表と曰ふ。是の日の夕、日西方に入ること半體ならば、又表を中表の西に立て、名づけて西表と曰ふ。乃ち三表の直な

る者を觀れば、其の地卯酉の正に處るなり」と。南北之れを經し東西之れを緯し、各〻徑百有二十一尺四分尺の一、規して之れを圜せば周三百有六十五尺四分尺の一、以て周天の度に象る。漏刻の上水正日の昏に、中表の北より之れを望んで、以て二十八宿の先づ至るを候ひ、南表と乃ち中表とをして相直きを中星と爲す。明日の昏時に至り更に之れを望むに、星則ち西のかた一度を過ぐれば乃ち南表を移すこと一尺にして、以て之れを望む。又明日星復た西のかた一度を過ぐれば、又西表一尺を移して以て之れを望む。後星當に表はるべきに至りて、卽ち是れ前星度分の盡くるなり。是の如く法を爲すこと、三百六十五日、始めて候ふの星還つて中に當る。蓋し太史中星を占候するの法、是に至つて特に詳なりと爲す。表を立つること此の如くして、更に當に玉衡を以て之れを望むべし、其の法始めて備はる。玉衡の設は先づ南北の經を正し、規を其の中表の南に從め、規衡にて北極を求め以て天中を正し、然して後に中星を取る。北極を去る遠近の度數は、規を轉じて以て之れを就す。其の星玉衡の孔中に在るときは、則ち七政齊ふ。其の星孔中に在らずして卽ち南表に移らば、以て之れを求めて、差ふ所の度數を知るべし。假令ば星を候ふに牽牛を以て始と爲せば、先づ牽牛星を布

望し、正面に在るの昏時を取りて法と爲す。此れより以後日日西に過ぎて、八日を經たる後の昏時女星來り中す、故に牛を八度と爲し餘は此れに倣ふ。凡そ玉衡の說は璿璣と二器と爲し、互に用を相爲して一を缺くべからず。故に舜典並べて之れを言ふ。若し共に一器と爲さば、安んぞ能く並べ言はんや。夫れ璿璣は渾儀たり、玉衡は橫簫たり、然して必ず二器を以て合せて一と爲すを欲するときは膠柱（一）なり。張衡（二）は渾天儀を密室の中に作り、之れを轉じて以て靈臺に天を觀る者に告ぐるに、皆符を合するが如し。則ち知りぬ渾天儀の轉は密室に在りて、橫簫の觀は靈臺に在り、二者互に用を相爲して闕くべからざるを。

或ひと、歲差の說を問ふ。師曰はく、（三）中興天文志に、按ずるに、三統曆の日躔と堯

下圖の「望一星」は一本、「望星」に作る

（一）膠レ柱而鼓レ瑟の略、變通の材なきを云ふ

（二）前出一六一頁參照

（三）以下＊まで文獻通考卷二十一、象緯の條の馬端臨の引用文をそのまま引用せるなり

典・月令と同じからざるは、日の黄道を行くに每歲差ある故なり。江默[四]謂はく、「歲差は日躔の一歲の間に於ける行、周天の度未だ餘分に及ばずして日已に至る、故に每歲常に不及の分あり。然れども歲差は古其の法あることとなし。漢の洛下閎[五]、太初に八百年を歷て一度を差ふに當ることを知ると雖も、後人未だ其の悉を究めず。晉の虞喜[六]始めて之れを覺る。曆家其の說を祖述し、唐堯より漢に至り、漢より本朝[七]に至るまで、冬至の日躔各〻同じからず、然して後に歲星差の法天を得ること甚だ密にして廢すべからざるを知る。然れども嘗て歲差を考ふること諸說同じからず。宋の大明曆[八]は四十年を以て一度を差ふ、之れを太過に失す。何承天[九]は其の數を倍して、百年を以て一度を退く、又反つて及ばず。晉の虞喜五十年を以て日退一度、之れを太過に失す。宋の何承天は又其の數を倍す、之れを及ばざるに失す。元の郭守敬は又謂ふ、六十一年にして一度を差ふと。今に至るまで多く合はず。惟だ隋の劉焯[一〇]二家の中數を取り、七十五年を以て一度を退く、故に唐の一行[一一]詳に三家を考へて、劉焯の尤も近たるを知り、遂に大衍曆を以て之れを推し、乃ち八十三年を得て一度を差ふ。蓋し大衍は一度を分ちて三千四十分と爲し、其の差ふ所の分一歲に三十有六、太だ積んで八十三年に至るときは一度を差ふ。又本朝紀元曆七十八

(四) 宋代、崇安の人、字は德功、地方官として政聲あり、綱集・易訓解・四書訓詁等の著あり (五) 漢代、巴の人、字は長公、天文に精通し洛下に隱れ住む。武帝特に詔して顓頊曆を改めて太初曆を造らしむ、侍中を拜すれども受けず (六) 晉代、餘姚の人、字は仲寧。徵さるれども起たず、天文に精しく安天論を著はし、又毛詩を釋し孝經を注せり (七) 宋朝を指す (八) 實は金の曆にして、太宗の天會五年に楊級が造るところといふ (九) 前出一六二頁 (一〇) 隋代、信都の人、字は士元、煬帝の時太學博士となる。稽極・曆書・五經述議等の著あり、劉炫と共に二劉と稱して、類稀なる博學と爲す (一一) 大衍曆を造りし僧の名

年を以て一度を差ふるの最も密なりと爲すに若かず。其の法に卽いて之れを推すに、慶曆甲申（宋の仁宗の慶曆四年）冬至の日は斗の五度に在り、上つて唐の開元甲子に距る三百二十一年にして、日五度を差ふ。蓋し唐志に『開元甲子の日は赤道斗の中十度に在り』といふ是れなり。開元甲子より上つて漢の太初元年丁丑に距る八百二十七年にして、日十度を差ふ。蓋し唐(志)開元大衍曆の歲差を以て、引いて之れを退くるに至るときは、太初元年冬至の日は斗二十度に在りといふ是れなり。太初丁丑より上つては秦の莊襄王の元年に距る一百四十五年にして、日二度を差へ、冬至の日は斗の二十二度に在り、蓋し月令に『日斗に在り』と云へる、是れなり。秦の莊襄王元年より上つて堯の甲子に距る二千二十八年にして、日二十八度を差へ、冬至の日は虛の一度に在り、日沒して昴中す。故に堯典に言はく、『日は短く星は昴なり』と。說く者歲差の法を知らず、堯典を以て之れを月令に較べて今日に逮ぶ、啻に一次を差ふのみならず、其の說を求めて得べからず、遂に以て節氣に初中の殊ありと爲す。又謂ふ、「古は午を以て中と爲す、皆之れを失すること遠し」と。又曰ふ、「開禧(一)の占測、冬至には日已に箕宿に在り、之れを堯の時に較ぶるに幾ど退くこと四十餘度の差なり。漢の太初より今に至る

（一）宋の寧宗の年號

まで已に一氣有餘を差ふ、而して太陽の躔十二次、大約中氣の前後乃ち本月の宮次を得、蓋し太陽は本と日に行くこと一度なり。近歲の紀元曆は歲差を定めて約一分四十餘秒を退く、蓋し太陽は日に一度を行きて微しく遲緩なり。一年周天して微差あり、分秒を積累して躔度見はる、是れに循つて以往萬有五千年後、將に差ふ所半周天ならんとす。審に是の如きときは、寒暑位を易ふるか。以て曆を治むる者を俟つなり」。*

或ひと問ふ、古來歲差の說ありて、四時氣候日月交感の際差はざるは何ぞや。師曰はく、古人歲差の法を立つる、是れ中星を窺ふの說なり。天に體なし、二十八宿を以て之れを論ずれば、其の運動度數知るべからず、(故に)日の運行を以て之れを紀す。日月の運行定位あり、故に四時の氣候日月交感の際又差はず。天の運行は盡すべからざるの微あり、故に竟に未だ嘗て其の差なくんばあらず。

或ひと問ふ、冬至夏至の日道寒暑、以て甚しかるべくして、寒暑然らざるは何ぞや。師曰はく、日は黃道の端を行く、是れ寒暑至極の節なり。其の然らざるは餘寒餘溫に因る。冬至には餘溫あり、夏至には餘寒あり、故に未だ甚しからざるの理あるなり。

或ひと、日道地に至る南北各〻六十度にして、日南端を行けば乃ち地尤も寒く、日

北端を行けば乃ち地尤も暑きを問ふ。師曰はく、地の太陽を受くるに斜あり直あり、日に長短あり。地氣相隔たれば乃ち太陽勢寡く、斜に太陽を帶ぶれば則ち寒き、是れなり。凡そ寒暑は皆受くる所の地に因りて其の差あり。邵氏の所謂「日行りて寒暑を爲す所以、夏淺く冬深し」と、是れ又其の大略なり。

八三　地　理

土

師曰はく、土は氣の渣滓（さし）なり。這の氣あるときは這の渣滓ありて、氣質の相成ること更に間隔なし。凡そ天地の間只だ氣惟れ昇る、裏面其の渣滓降つて土と爲るなり。人物皆氣の寓する所、其の渣滓相聚まる尤も微なり。

師曰はく、地の大きさ之れを會計すべからず。算術の推す所、淮南子の地形（一）、皆無稽の語なり。人力の能く偏歷する所、算術の能く推知する所に非ず。地形尤も微にして又天と與に相圓し。

師曰はく、土の在る所、高・下・平あり、高（たかき）を山岳と爲し、下（ひくき）を溪澗河海と爲し、

（一）前漢、淮南王劉安の編と稱す。秦漢時代の天文・地文・人文に關する好資料を收めて二十一篇を成す。その墬形訓に「四海の内を闔せて、東西は二萬八千里、南北は二萬六千里……禹乃ち太章をして東極より歩みて西極に至らしめしに、二億三萬三千五百里七十五歩あり、豎亥をして北極より歩みて南極に至らしめしに、二億三萬三千五百里七十五歩あり云々」とあるが如きを指すか

(二) 粘土

平なるを原野平陸と爲す。土には又壤・埴[三]・塗・泥あり、其の土に因つて其の人物の生々する所甚だ異なるなり。

師曰はく、此の渣滓相聚まるの間、氣相寓して升降聚散の妙相因つて生ず。山川の地に跨り、草木鳥獸魚蟲生々して息むことなし、是れ天地の自然なり。

山

師曰はく、地の陽氣相發するの處、山岳丘陵と爲る。凡そ山あるの地は地氣甚だ蒙蔽す。山に大小沙石の差あり、是れ其の地に因りて其の象を變ずればなり。

師曰はく、山に林木あるときは、鳥獸相因る。鳥獸は陽に屬す。林木あるときは其の滴る所相聚まりて河と爲り、河又相聚まりて大川と爲る。川河の水は氣に因つて昇降し更に止まず。

水 海潮川泉

師曰はく、氣昇りて陰の爲に閉塞せられ、竟に降りて水と爲る。萬物の生々其の始まる所は一滴の水にして、其の滓査は質と爲るなり。

師曰はく、海は水の源なり、百川悉く海に歸す。潮の消長あるは、月の出づる所に

因る、而して其の勢相推せばなり。泉は山間の氣相滴り出づるの水なり。這の水相聚まつて川と爲るなり。

岩石泥沙金玉

師曰はく、岩石泥沙金玉は各〻土の精なり。精の淺深、土の上中下に因つて、差別する所甚だ多し。

地　動

師曰はく、陽氣陰と爲りて壓する所、則ち地震ふ。古人之れを論ずる太だ詳なり。

八四　或ひと地理を問ふを辨ず

或ひと問ふ、土に數品ありとは何ぞや。師曰はく、周禮地官大司徒に十有二壤の物を辨ず、而して其の種を知り以て稼穡樹蓺を教ふ。凡そ土は氣の渣滓なり、氣の通塞と陰陽寒暑の循環に因りて這の數品あり。是れ地の自然にして、猶ほ人の生質に强柔明暗の差あるがごとし。其の間山海相交はるの地、是れ陰陽の交易全し、故に其の土必ず上品たり。原野甚だ廣き地は其の土必ず壞る、是れ陰陽交易全からざるなり。泥

沙は水濕の地なり、是れ又數品あり、然れども只だ上中下の三品のみ。

或ひと問ふ、土に因りて風氣尤も差ふは何ぞや。師曰はく、王制に曰はく、「中國戎夷五方の民皆性あり、推移すべからず。東方を夷と曰ふ、髮を被り身に文し、火食せざる者あり。南方を蠻と曰ふ、題を雕み趾を交へ、火食せざる者あり。西方を戎と曰ふ、髮を被り皮を衣て粒食せざる者あり。北方を狄と曰ふ、羽毛を衣て穴居し粒食せざる者あり」と。周禮の夏官職方氏は天下の圖を掌り、以て天下の地を掌り、其の邦國・都鄙・四夷・八蠻・七閩・九貉・五戎・六狄の人民と、其の財用九穀六畜の數要とを辨じ、周く其の利害を知れば、乃ち九州の國を辨じて貫利をして同じくせしむと。愚謂へらく、人の此の生を養ふは皆土に因る。衣服居宅の用、飲水食物の養、悉く土に因りて全し。故に人の風氣、物の勢粧、皆土に因つて差異あり。或ひと曰はく、天は同じく覆ひ地は同じく載せて、獨り地に因るは何ぞや。師曰はく、天は氣に屬し、地は質に屬す、性心は天を以てし、生質は地を以てす。風俗習敎の見はるる所は其の生質に在り、其の生質に因つて性心も亦差ふ、故に天地二ならず、只だ人の見る所に因つて其の說を爲すなり。今天下の國、同じく天は惟れ覆ひて、北方の寒國は十月よ

り二月に到るまで、陰雲是れ覆ひて日月の正色を見ず、南方の暖國は暴雪凍氷を知らず。其の方に因りて其の用あり。或ひと曰はく、然らば乃ち質惟だ異にして其の性心も亦差ふや。師曰はく、質異なれば乃ち性心も又差ふ。禽獸の人に於ける、夷狄の中國に於ける、以て之れを證すべし。

或ひと地中の說を問ふ。師曰はく、(一)屈子が天問に、「(二)周公豫州を定めて天地の中と爲し、東西南北各〻五千里」と。今北邊は極なくして南方は交趾海に際る、道里夐に殊なるに、何を以て各〻五千里と云ふや。朱子曰はく、(三)「此れ但だ中國の地段四方相去るを以て之れを言ひ、未だ極邊と海に際る處とを說かず。南邊は海に近しと雖も、然も地形は未だ盡きず。海外の如きは嶋夷諸國あり、則ち地彼の處に連屬すと雖も、海猶ほ底あり。海の底なき處に至りて地形方に盡く。周公土圭を以て天地の中を測り、豫州を中と爲す。而して南北東西天に際る各〻遠きこと許多なり。北遠くして南近きに至りては、則ち地形偏あるのみ。所謂地は東南に滿たざるなり」と。朱子又曰はく、「河圖に言ふ、『崑崙は地の中なり、地下に八柱ありて互に相牽制す、名山・大川・孔穴相通ず』。(四)素問に曰はく、『天は西北に足らず地は東南に滿たず』と。註に云ふ、『中

(一) 前出一一四頁參照
(二) 以下は朱子語類卷二に出づる朱子門下の問なり
(三) 前のつづき
(四) 一名黄帝內經と稱す、醫籍の最古のものにして、素問と靈樞の二種に分ち、素問は二十四卷、黄帝・岐伯相問答のことを記す

原の地形西北は高く東南は下し、今百川滿湊し東して滄海に之くときは、東西南北の高下知るべし』と」。愚謂へらく、天地の中は赤道の下地是れなり。赤道は天の中帶、地の赤道に中る、是れ乃ち天地の中なり。書の蔡傳[五]に云はく、「嵩高は正に天の中に當る、極の南五十五度は嵩の上に當る」と。[六]或ひと朱子に問うて曰はく、「嵩山は本と天の中に當らず、是れ天の形欹側するが爲に、遂に其の中に當るのみ」。曰はく、「嵩山は是れ天の中にあらず、乃ち是れ地の中、黃道・赤道は皆嵩山の北に在り。南極・北極は天の樞紐なり、只だ此の處にありて動かざること磨臍の如く然り。此れは是れ天の中、至極の處、人の臍帶の如きなり」と。是れ朱子南北極を以て天の中と爲すなり。案ずるに、四時氣候相和して萬物の精秀相成る、是れ天地の中なり。周禮の地官土圭を以て土深を測り日の景を正して、以て地中を求む。是れ聖人の用なり。

或ひと問ふ、草木地に生ずるに其の土宜ありや。師曰はく、周禮に、[七]「地官は土會の法を以て五地の物生を辨ず。一に曰はく、山林、其の動物は毛物に宜しく、其の植物は早物に宜し。其の民は毛にして方なり。二に曰はく、川澤、其の動物鱗に宜しく其の植物は膏物に宜し。其の民は黑にして津ふ。三に曰はく、丘陵、其の動物は羽物

（五）蔡沈の書經集傳（六卷）なるべし。前出一四七頁參照

（六）朱子語類卷二に出づ。問者は潘子善

（七）地官大司徒の條に出づ

（一）木際と平地

に宜しく、其の植物は覈物に宜し。其の民は專にして長ず。四に曰はく、墳衍、其の動物は介物に宜しく、其の植物は莢物に宜し。其の民は晳にして瘠せたり。五に曰はく、原隰、其の動物は贏物に宜しく、其の植物は叢物に宜し。其の民は豐かにして庳し」と。愚謂へらく、周禮に五地の物生を論ずる、是れ土宜の說なり。草木の生、或は濕を好み或は燥を好む。土の埴壤泥沙各〻其の生々を異にす。凡そ壤土は草木長じ易くして傷折し易く、埴土は草木長じ難くして長ずるときは堅厚なり。且つ海邊濕地寒暑の地皆草木の土宜あり。或ひと曰はく、菓實の好惡亦土宜あるか。師曰はく、菓實の相結ぶは尤も土宜あり、唯だ其の生々相勞すれば、其の草木の菓甚だ美なり。埴土沙石の土は其の根ざす所其の長ずる所尤も苦しむ。然れども其の土は上品なり、故に生長蟠根して則ち菓實の味美なり。壤土は下品の土にして、其の生長蟠根する所尤も易し、故に菓實の味美ならず。凡そ菜に根を用ふるあり、葉を用ふるあり、實を用ふるあり、根莖子幷に用ふるあり、各〻其の土に因つて土宜の理藏あり。人之れを攻めて以て其の用を宜くす。

或ひと問ふ、木の材と爲るもの多くは寒國高山の木に在るは何ぞや。師曰はく、冽風恆に中り霜雪以て侵すときは、木自ら棟梁の任に堪ふ。然らざれば其の木只だ茂長して堅剛ならず、人亦此の如し。其の德たるや其の材たるや、日〻月〻に相修め相勤

めて、而して後に大廈の材に中るべきなり。

或ひと、始めて荒田を開くときは、其の穀を收むること倍するを問ふ。師曰はく、荒田は只だ野草のみ。五穀は甚だ土氣に因る、故に荒田竟に穀種を種ゑず。始めて開けば乃ち茂熟す。其の久しきに及べば、地氣漸次衰へて一歲は一歲よりも薄し。

或ひと問ふ、埴土は糞多からざるときは穀を生ぜず、壤地は糞せずして穀茂るは何ぞや。師曰はく、埴土は堅厚にして耕者甚だ勞し、草を生ずる尤も力あり、故に糞を以てして穀茂る。壤土は柔弱にして草木茂り易し、然れども只だ長じて穀種の全きこと少く、全きも亦厚からず。凡そ人の道を修むるも亦然り。久しく練らず、久しく修めずしては、乃ち棟梁の器に堪へざるなり。

或ひと問ふ、土に霜柱あるは何ぞや。師曰はく、陰寒太だ包むときは地氣相壓凍して霜柱と爲る。壤地は薄柔なるが故に地氣發洩し易く、埴土は堅厚なるが故に地氣の發洩すること少し。

或ひと問ふ、地氣冬に到りて太だ多きは何ぞや。師曰はく、地氣は四時相同じ、只だ三冬寒陰嚴寒す、故に地氣發見するなり。或ひと曰はく、冬に至りて地氣甚し、故

に土の下溫暖にして井水以て見るべし、豈四時地氣あらんや。師曰はく、近く之れを身に譬ふれば、夏月は氣息見はれず、冬月は氣息乃ち見はる。是れ氣息異ならずして或は寒閉著散して、以て這の相見はると見はれざることあり。寒暑の閉散に因り、自ら這裏陰陽交易あるなり。凡そ閉塞するときは氣聚まつて象あり、分散するときは氣結滯せず。是れ自然の理なり。

或ひと問ふ、四時土の寄旺の說得て聞くべきか。師曰はく、金木水火分つて春夏秋冬に屬す。土は四季に寄旺すること各〻一十八日、共に七十二日、而して惟だ夏季十八日土氣最も旺すと爲す。故に能く秋金を生ず。愚が記す所の圖象を以て之れを攷ふるに、北極の司る所七十二分、南極の司る所七十二分、東西各〻然り。其の四維十九分少弱の剩餘あり、物計三百六十五日四分日の一、自然の勢止むを得ざるなり。

或ひと問ふ、山は陽氣相結ぶ。然れども北方の山は相覆ふときは雪太だ多し。師曰はく、陽氣相昇れば寒陰相閉ざす、故に陽氣太しきときは寒又太だ閉づ、寒陰閉塞して陽氣蒙朧し、陰雲と爲り來る。是れ必然なり。

或ひと、山或は炎燒して灰を吹き石を出すを問ふ。師曰はく、陽氣發出して這箇の

奇あり。陽相發し相撃して炎焼底あり。其の地脈に中るの地には必ず溫泉あり、是れ水脈陽に要して溫泉と爲るなり。

或ひと問ふ、古人山水を幷せ論ず、山あれば水あるは何ぞや。師曰はく、山は陽の發なり。陽火あれば陰水相屬するは自然の理なり。周禮冬官に曰はく、「凡そ天下の地勢、兩山の間必ず川あり」と。是れ兩山高く聳ゆれば、滴水相聚まりて川と爲るなり。山に林木あれば乃ち氣愈ゝ水を引く、是れ山水相幷するの謂なり。邵子曰はく、(一)「山水を觀て地の體見ゆ」と。是れ地は山水を以て論ずべきなり。

或ひと問ふ、水の源は海の潮是れなり、然るに山水皆鹽なし。師曰はく、陰陽昇降の間、火は水を引き氣は濕を含む、皆海潮の氣相升るなり。若し海潮直に昇るときは乃ち質以て昇るなり、必ず此の理なし。陽昇り陰降る、是れ天地の定數なり。唯だ地氣相昇るの積、雨水と爲り來る、故に雨露更に鹽と作ることなし。海潮を煮て其の積露を取ること、以て攷ふべし。

或ひと問ふ、草木の滴水雨露に鹽なきは其の說を得たり、地下の泉井亦鹽なし。師曰はく、凡そ地中水あり、皆土沙を漉し來る水なり、故に海潮の味なし。水脈地中に

(一) 邵子全書卷五、皇極經世書觀物外篇上に出づ

入るは皆然り。

或ひと、海潮鹹(しほから)きことを問ふ。師曰はく、自然の味なり。凡そ五味の木火土金水に於ける、皆自然にして作爲なし。水の味鹹き是れなり。

或ひと海水の潮消長するの說を問ふ。師曰はく、程子曰はく、「今夫れ海水の潮は日出づるときは水涸る、是れ潮退くなり。其の涸るるは已になければなり。月出づるときは潮水復た生ず。却つて是れ已に涸るるの水を將(もつ)て潮水と爲さず、自然に能く生ずるなり」。邵子曰はく、(一)「海潮は地の喘息(ぜんそく)なり。月に應ずる所以の者は六類に從へばなり」。朱子曰はく、「潮汐の說、余襄公(二)之れを言ふこと尤も詳なり。大抵天地の間東西を緯と爲し南北を經と爲す、故に子午卯酉は四方の正位たり、而して潮の進退は月此の位に至るを以て節と爲すのみ。氣の消息を以て之れを言へば、子は陰の極にして陽の始、午は陽の極にして陰の始、卯は陽中たり、酉は陰中たり」と。愚謂へらく、先儒の說未だ盡さず。天地の定位更に轉ずることなし、只だ天地の氣は消息出入運轉して止まらず。月は水の精なり。月出づるときは天下の水推蕩逆沸せん、是れ日の精に因つて壓倒せらるるなり。涯畔あるの地、是れを以て潮の進むと爲す。月既に出で了

(一) 邵子全書卷六、皇極經世書觀物外篇下に出づ。但し、六類は原典、其類に作る

(二) 余靖、宋代の學者、官工部尚書に至る、襄と諡す、著書武溪集あり

るときは水平なり、而して推蕩逆沸の水相退く。涯畔あるの地、是れを以て潮退くと爲す。月は三辰を以て上下す、故に潮水の進退も亦三辰を以てす。海洋の極處は必ず潮水の進退なし、只だ地水相望むの涯は此の看あるなり。愚案ずるに、涯際水涸るるの時、是れ潮水の平なるなり。進退各〻月の出沒に因つて平ならざるなり。

或ひと潮の進退に大小あるを問ふ。師曰はく、陰盛なるときは水勢甚し、此を以て潮水の大小を爲す。朔は月日を掩ひて陰の盛なり、望は月光缺けずして日月相望の間、陰の盛なり。故に朔望の前後六十度皆潮水大なり、且つ春夏は晝大なり、秋冬は夜大なり。先儒曰はく、「夫れ春夏は晝潮常に大に、秋冬は夜潮常に大なり。蓋し春は陽中たり、秋は陰中たり、歳の春秋あるは猶ほ月の朔望あるがごとし、故に潮の極まつて漲るは常に春秋の中に在り、潮の極大なるは常に朔望の後に在り、此れ又天地の常數なり」。今案ずるに、先儒の說分明ならず。春夏は晝潮大に、秋冬は夜潮大なるも、亦實理あり、詳に之れを究むべきなり。

或ひと、百川海に赴いて海溢れざるを問ふ。師曰はく、朱子此の問に答へて曰はく、「蓋し是れ乾き了る。人あり、海邊旋渦を作し水を吸ひて下り去る者を見る」と。愚謂へらく、天地の間陰陽升降して數般の模樣を爲す、故に百川の水皆海水の相昇りて

降るなり。昇りて降り、降りて昇る、唯だ一元水のみ。人百川の水を以て海潮の外と爲す、豈夫れ然らんや。天地の間、萬物の出沒消息皆然り。

或ひと、張子が海水の潮汐を以て、地に昇降ありと爲すを問ふ。師曰はく、是れ舊說に因りて實理を知らざるなり。地何ぞ升降あらんや。信ずるに足らず。

或ひと問ふ、子が說に因れば、月の往く所常に相推して潮の進退一定せず。師曰はく、然り、月の行く所潮水相推し去つて少しも住まらず。唯だ我が居る所の地、此の看を爲すなり。

或ひと、海水の鳴動を問ふ。師曰はく、陽氣發出の勢なり、陽、陰下に伏し、陰に迫られて升る能はず、以て地動に至る。海水の下、陽升るを得ず、太だ激逆して、鳴動炎光の相發するあるなり。

或ひと、地震の說を問ふ。師曰はく、廬陵の李氏(一)曰はく、周語に伯陽父が曰はく、「夫れ天地の氣は其の序を失はず、若し其の序を過ぐれば民の亂なり。陽伏して出づる能はず、陰遁れて蒸する能はず、此に於て地震あり」と。

(一) 宋代、廬陵の人、李如圭、字は寶之、儀禮古經・釋宮・儀禮綱目等の著あり

聖學九　性心

八五　天の命之れを性と謂ふを論ず

師曰はく、理氣妙合して生々無息底にして能く感通知識する者あり、是れを性と謂ふ。凡そ理氣交感して人物生々するの用は天命にあらずといふことなし、是れ萬物は天地を以て父母と爲し、天地は生々息むことなきを以て妙用と爲す。故に曰はく、「天の命之れを性と謂ふ」と。其の本を推すときは理氣妙合して此の性を具へ、全く天地の極を象る、眇乎たる一物も亦然らずといふことなし。既に然るときは生々の妙已まず、能く感通し能く知識して、方形を以て求むべきなく、聲臭を以て索ぬべからず、而して四支百骸毛髮皮膚の間觸るれば則ち通ず、此の性、理氣の間に充つればなり。其の虛靈言ふべからざるなり。

(一) 中庸首章の初句

師曰はく、人の生ずる所以は理と氣と合するのみ。才に天命あれば便ち氣質あつて相離るべからず、若し一を闕きても便ち生物を得ず。理氣は相互に浩々として窮まらず、此の氣なきときは此の理如何じて頓放せん。此の理なきときは此の氣如何して湊泊せん。理氣交感凝結生聚して、此の間自然の妙用便ち安置し來る。理氣の外に一箇の性ありて這裏に入り來るに非ず。中庸に所謂「天の命之れを性と謂ふ」は、是れ品物形を流くの後、天別に性を以て焉れを賦することを謂ふに非ず。子思は、理氣の妙合便ち此の性あることを謂へり。先後を以て之れを論ずるに非ず。此の性は只だ天の命人物にあるなり、作爲計較すべからず。若し理氣の外に此の性ありと爲すときは、性と理氣と間隔す。程子曰はく、(一)「性を論じて氣を論ぜざれば備はらず、氣を論じて性を論ぜざれば明かならず、之れを二つにするは是ならず」と。此れ性を以て理と爲すは、乃ち理氣相離れざるの謂なり。性は理氣相合の妙用なり、理氣の交感あるときは乃ち此の性固有す。

(一) 朱子語類卷四、性理の條に出づ

師曰はく、天命を理と曰ひ、氣質を氣と曰ふ。生氣を氣と曰ひ、息むことなきを理と曰ふ。陽を理と曰ひ、陰を氣と曰ふ。氣を理と曰ひ、質を氣と曰ふ。此れ等の理氣

相合するときは交感して其の妙用ある、之れを性と謂ふ。凡そ天下の間理氣交感して一箇の象ある底、此の性を具へずといふことなし。

師曰はく、性は能く感通し能く知識し能く流行して已まず、生々窮りなし、只だ已むを得ざるの謂なり。已むを得ずして理氣交感し、已むを得ずして此の象を生ず。此の象あるときは已むを得ずして此の性あり、此の性あるときは已むを得ざるの意情あり、已むを得ざるの意情あるときは已むを得ざるの道あり、已むを得ざるの道あるときは已むを得ざるの教あり。教に因つて道を修む、道を修めて性に率ふ、性に率ふは天命に本づく。是れ始終本末同一體用一源なり。

師曰はく、人物の性は一原にして、理氣の交感には過不及あり、故に其の妙用感通知識各〻萬差ありて一般ならず。人は理に厚く、物は氣に厚し。人の氣稟濁塞するも、亦物の及ぶべきに非ず。人能く教に因つて道を修め其の性に率ふときは、德天地に合す。是れ中庸に天命を以て此の性を論ずるなり。性天命に合ふを以てせざるときは、各〻氣質の變に任して、人と物と更に差別なし、只だ飽食暖衣の謂なり。

師曰はく、先儒皆曰はく、「人の善を爲すこと只だ已れが性の本然是れ善なる者を以

て準據と爲す」とて、孟子の「性は善なり」の語を擧げ、「良知良能は學を待たずして能くし、慮を待たずして知る」を提げて、是れを本然の善と爲し、靜に性の本然を味ひ來れば乃ち不是底なく、不善の來るは氣質の習に因ると爲す。此の說一たび起つて後世の學者頻りに手を下して性の本然を味ひ、終に悟了徹底を加ふるに到る。尤も迷繆の伏する所なり。愚謂へらく、道の大原は天地に出づ、人の生々は天地を以て本と爲す。古昔の聖人は唯だ天地に因り人物の已むを得ざる底に原づきて此の教あり。故に人の性も亦天命に率ふのみ。性は理氣の妙合に因る。性を論ずるに氣質を離るべからず、氣質あるときは未だ嘗て其の習なくんばあらず。其の習あるときは未だ嘗て不善の動なくんばあらず。其の機微を愼み其の意を誠にす、是れ正心の用なり。其の機微を愼み其の意を誠にするは格物致知の功にあり。聖人の教は全く這裏を出でず。若し只だ本然の性を味ひ、其の恬淡を以て作用を爲し來らば、殆ど異端の教に差はず。

師曰はく、孔子の性と天道とを言ふこと[一]、子貢の徒も得て聞くべからず。孟子乃ち口を開けば性善を說く。是れ時の已むを得ずして學の標的を立つるなり。然して孔孟大聖大賢の差も亦見るべし。孔子易に道善性を言ひ[二]、大學に三綱領[三]を述べ、然して更

（一）論語公冶長篇第十二章に出づ
（二）繫辭上傳に「一陰一陽之れを道と謂ふ。之れを繼ぐ者は善なり。之れを成す者は性なり」とあるを指す
（三）明明德・親民・止至善をいふ

に本然の善を味ふ教戒なし。後儒附會して專ら孟子性善の説に泥み、此の性を認得す、豈聖門の學ならんや。

八六　或ひと性の說を問ふを辨ず

或ひと問ふ、理氣妙合して這箇の虛靈底の能く感通知識する者あり、是れを性と謂ふ。是れ物も亦知覺し、只だ一般なり(四)、却つて人の物に異なる所以の者を知らずと。師曰はく、物は氣に厚し、故に感通知覺皆氣に喩し、人は理に厚く感通知識多くは理に喩し。人の稟賦氣に厚き者は、氣質の習深くして、理の感通知識太だ寡し。故に其の體維れ人にして其の氣は物に通ずること亦多し。是れ天地理氣交感の間、人物其の性を異にする所以なり。

或ひと問ふ、知覺運動は氣なり、今の所謂感通知識も亦氣に近し。師曰はく、人の生は皆理氣相合するなり、感通知識理氣皆然り(カ)、視聽・言語・動作・睡覺・痒痛・飲食・情欲、皆氣に因つて感通知識するなり。賢愚・知不肖・昏明・清濁、皆理に因つて感通知識するなり。理と氣とは相離れず、只だ過不及の差あるなり。

(四)人も物と同じとなり

或ひと問ふ、朱子曰はく、「知覺運動は形氣の爲す所にして、仁義禮智は天命の賦する所」と。又曰はく、「佛家は頭より都て識らず、只だ是れ知覺運動を認めて性と做す」。又曰はく、(一)「生之れを氣と謂ひ、生の理之れを性と謂ふ」と。(二)勉齋の黃幹曰はく、「生は人物天に得る所の氣なり、知覺ありて能く運動するは是れなり、各〻知覺運動を以て氣と爲す」と。師曰はく、知覺運動も亦性の用なり、只だ氣質に因りて感通知識するなり。知覺運動皆氣にして理なしと謂はば、便ち物皆此の性なからんや。仁義禮智も亦性の用なり、只だ理に因つて感通知識するなり。形氣は是れ理氣なり、性を論じて形氣を措くときは性の名なし。唯だ知覺運動を以て性と爲すときは誤了す。知覺運動を以て性と爲さざるも亦差了す。理氣に因つて之れを論ずべきのみ。故に虛靈底にして能く感通知識する是れ性なり。理に厚ければ理に深く、氣に厚ければ氣に深し。性の發見此の間に差別あるのみ。

或ひと問ふ、朱子曰はく、(三)「目の視、耳の聽き、手の捉執し、足の運奔するは、皆性なり」と。只だ是れ箇の形よりして下なる者を說き得て、且つ手の能く執捉するが如き、若し刃を執りて胡亂に人を殺すも、又性と爲すべしや。師曰はく、視聽・捉執・

(一) 朱子語類卷五十九に出づ

(二) 宋代の人、字は直卿、朱子の高弟にして、その學を遺託せらる。經解・勉齋文集あり

(三) 朱子語類卷五十九に出づ

運奔は、是れ形氣に因つて性の發動するなり。刀を執つて胡亂に人を殺すも、亦氣質に因つて發するなり、性に非ずと謂ふべけんや。唯だ天命の性に率はざるなり。其の天命の性に率はざるは、教に因つて道を修めざればなり。夫子曰はく、「(四)非禮動くこと勿れ」と。是れ其の動を戒むるなり。今刀を執つて胡亂に人を殺す者は狂人なり、氣の溢狂して胡亂に至れるなり。其の盛大なるや、兵を起し戰を好み、軍を破り國を潰す、是れ等は皆性に非ずとして可ならんや。中庸の「(五)性に率ふ之れを道と謂ふ」、「(六)發して節に中る」等の語、以て味ふべし。

或ひと問ふ、感通知識するを性と謂ふときは、(七)告子が「生之れを性と曰ふ」と、(八)釋氏の「作用是性」と同一意なり。告子の說は孟子(九)之れを闢き、釋氏の說は先儒氣を認めて性と爲すと爲す。師曰はく、告子が「生之れを性と曰ふ」は、只管理氣の妙用を分別せず都て論じ來れり、故に孟子之れを詰るも、告子答ふること能はず。理氣の厚薄を分別せざるときは、人物の性分つべからず。是れ告子言ひ得て終に性を知らざるなり。釋氏の作用是性の說は、只だ運動を認め來りて性と爲し、其の作用を以て性の本然と爲し、作用の從に行ひ來れり。是れ異端の差ふ所なり。

(四) 論語顏淵篇首章
(五) 首章
(六) 首章
(七) 孟子告子上篇第三章
(八) 傳燈錄達磨傳「如何是佛、曰見性成佛、如何是性、曰作用是性」達磨の弟子波羅提の語なり
(九) 孟子告子上篇第三章參照

或ひと問ふ、王陽明曰はく、「(一)『生之れを性と謂ふ』、生の字卽ち是れ氣の字なり。告子も亦說得て是なるも、但だ頭腦を曉り得ず、認めて一邊に作し去る。若し頭腦を曉り得て此の如く說かば、亦是れ氣卽ち是れ性。若し性の明白を悟り得ば、氣卽ち是れ性、性卽ち是れ氣にして、原と性氣の分つべきなし」と。師曰はく、陽明は聖學を知らず、只だ悟り得る底を要め來れり、故に性の明白を悟り得るの語あり。能く天命之れを性と謂ふことを知るときは、性氣の分ち明白にして、混雜して論ずべからず。性の實を知らざれば氣を認めて性と爲し、性を認めて氣と爲し、或は合せて論じ或は分ちて言ふ、皆偏倚にして己れが眼の是非に從ふなり。理氣交感するときは其の妙用人物皆然り、唯だ運動の氣を以て性と爲すときは性は這箇の氣のみ。何ぞ告子が說を以て說き得て是なりと爲んや。陽明は良知を以て悟了と爲し、吾が良知の上に依り說き出し來れば、事を行ふとき便ち是れ停當(二)なりと爲す。其の說甚だ誤謬す、深く味ふべし。

或ひと問ふ、易の太極、是れ人生の性か。師曰はく、性も亦太極の一事なり、理氣相合ふときは其の象已に著はるるの時、這箇の一點子の裏に象數悉く備はる、是れ太極なり。性も亦感通知識の太極なり、是れ一物一太極なり。此の性を以て天地自然の

(一) 傳習錄卷之中、答周道通書に出づるを要約せるなり

(二) 妥當と同意

太極と爲すときは、則ち未だ可ならざるなり。

或ひと問ふ、先儒皆本然の性を認めて學的と爲す。今論ずる所は、性を以て只だ感通知識と爲す。然らば乃ち性の本然を認むと雖も、日用の功に益なく、學的と爲すに足らざるか。師曰はく、本然の性を認めんと欲する、是れ異端の教なり。聖人の學は性に率ふを以て道と爲し、發して節に中るを和と爲す。性に率ひ節に中ることを知らざるときは、性の本然を認め來ると雖も、徒らに工夫を勞するなり。性は氣質に因つて變ず、其の道教を知らずして認め來る、故に或は性惡と曰ひ、或は性善惡混ずと曰ひ、或は無善無惡と曰ひ、各〻己が氣質に因つて其の性を認得するなり。孔子は性(三)と天道とを言はず。豈密にして之れを藏(かく)さんや。學者性の天命を知り、其の性に率ひて其の道を修め、天地流行已むを得ざる底と一般なるときは、日用の功日に新なり。

或ひと問ふ、感通知識する所以の者は又本ありや。師曰はく、是れ理氣交感の妙用なり。其の妙用は天命を以て因る所と爲し、天命も亦天地の理氣交感して、自然に妙用あり來る底なり。强ひて論ずべからず。

或ひと問ふ、人身に(四)痿痺(ゐひ)不仁(ふじん)なるあり、是れ形質ありと雖も、氣の障塞するが故に

(三) 論語公冶長篇第十二章に「夫子之言二性與一天道一、不レ可二得而聞一也已矣」とあるを指す

(四) 近思錄卷二に、「醫書に、手足痿痺するを言うて不仁と爲す」と、これを指すか

此の病あり。然らば便ち知覺運動は必ず氣に屬するか。師曰はく、理氣交感して這の形質あり、形質の間氣血通ぜざるなし、少くも通ぜざるあらば疾病あり。痿痺不仁は是れ氣血の間及ばざるところあり、故に性に率はざるなり。惣べて血氣兩つながら闕すれば乃ち死す、血氣過不及するときは乃ち病あるなり。痿痺不仁底は是れ理氣通ぜず、故に性不及なり。今痿痺不仁を以て、理氣妙用は幷に闕けず、性は理氣に因つて寓し、理氣は性に因つて運動知覺し、更に分つべからざるを知るべし。

或ひと問ふ、今所謂理氣妙合するときは此の性ありと。然らば便ち理氣と性と別にして性と理と異なり。師曰はく、理は天の命なり、象ありて形なし、氣は形質なり、陰陽は理なり、五行は氣なり。血氣を以てするときは血を以て形と爲し、理を以て氣と爲すなり。性は理氣妙合の用にして、理氣を離るべからず、又理氣を以て必とすべからず。

或ひと問ふ、人の性同じく天命に出づ、而して夷狄も亦人なるに、其の性中國の人に同じからざるは何ぞや。師曰はく、是れ氣質の禀くる所に因つて理氣過不及あるの致す所なり。是の地を同じうして南北の位する所、山谷の形する所、各〻禀くる所の

氣を異にするは、是れ日月四時の運行は天下皆一にして、其の土地に依りて形する所差違あればなり。中國・夷狄同じく是れ人にして、其の氣質は土地に因つて變じ、其の習染は風俗に因つて移り、終に中國の人と遙に異なるに到る。故に性は只だ理氣の過不及に因つて一般ならず。(故に)一向泥著して己れが性を認得して本然の性と爲さば、天壤も所を易ふべし。遠く夷華を以て之れを論ずべからず、同じく中國にして四民各〻其の俗を別にす、其の俗別なれば便ち其の性も亦其の風に從つて變ず、以て鑑み戒むべし。

或ひと問ふ、惻隱・羞惡・辭讓・是非の心は是れ性なり、喜怒愛(哀)樂は是れ情なり。朱子又曰はく(一)「凡そ人の能く言語動作し思慮營爲するは皆氣なり。而して理存す、故に發して孝弟忠信仁義禮智と爲るは皆理なり」と。師曰はく、是れ性を以て理と爲すの謂なり。惻隱等の心、喜怒の情、言語動作の用、孝弟忠信の理、悉く皆性の動なり。氣質に因つて感通知識し、理に因つて感通知識す、其の間其の名を異にするなり。惻隱の發、仁義孝弟の誠、各〻其の性に率ふときは、之れを道と謂ひ節に中ると謂ふ。喜怒の情、動作の用、尤も道の繫る所にして、只だ節に中るを要するのみ。性を以て

(一) 朱子語類巻四、性理の一に出づ

理と爲すときは、凡人の情發して節に中るなく、恆に這の理に違ふ。是れ性なきの謂か。太だ公論にあらず。

或ひと問ふ、朱子曰はく、「性は一理の具はらずといふことなし」（一）と。又大學の章句に曰はく、「明德は人の天に得る所にして、虛靈不昧以て象理を具へて萬事に應ずる者なり」（二）と。是れ等の說に因るときは、人の德性は本と備はらざるなくして、氣禀の賦する所不偏なること鮮く、學者能く德性を認得し來りて、聰明事々に好く曉り、睿知物々に好く分らんか。師曰はく、性は虛靈にして感通知識のみ。事物の間、其の應接交際各〻敎へ習ふ所に因つて、知日に長じ才月に益すなり。今赤子を以て見るべし。彼れ出生の時乃ち夷狄に投じ來らば、夷狄の人たるべく、中國に投じ來らば中國の人たるべし。敎戒なきときは君を蔑にし父を無し驕子と爲らん。敎習あるときは父を愛し兄を敬す。故に胎敎あり小學あり。性は是れ一理を備へずといふことなければ、孔子何ぞ「學んで厭はず」（三）の語あらんや。孟子も亦鄰を移すの敎（四）あるべからず。異端の敎は專ら這の性を認得するを以てして、彼れ世事に於て一つも節に中るなし。是れ性は象理を具へざればなり、只だ感通知識の理に喩るなり。事物の理究め盡さずして、

（一）朱子語類卷五、性理の二に出づ
（二）朱子の大學註なり、その第一節に出づ
（三）論語述而篇第二章
（四）孟母三遷の敎

性自ら之れを分明にせんや。太だ差謬せり。

或ひと問ふ、孟子曰はく、[五]「萬物我れに具はらざるなし」と。是れ性は象理を具ふるか。師曰はく、人は天地の正氣を禀く、故に身に反みて之れを求むれば具はらずといふことなし。是れ人の天地に參たるなり。性は能く感通知識す、今深く其の事物の理を究むるときは、觸るる所感通知識せざるなし、是れ性の妙用なり。

或ひと問ふ、感通知識は事物の用に應ずるなり、湛然無事の時は、感通知識すべきの用なし。此の間何を以て性と謂ふや。師曰はく、生々無息底、模樣なく造作なし。

八七　孟子性善の說を論ず

師曰はく、滕[六]の文公世子たりしとき、將に楚に之かんとし、宋に過りて孟子を見る。孟子性は善なりと道ひ、言へば必ず堯舜を稱す。程子の註[七]に曰はく、「性は卽ち理なり、天下の理其の由る所を原ぬるに、未だ不善あらず。喜怒哀樂未だ發せず、何ぞ嘗て不善あらん。發して節に中る、卽ち往くとして善ならざるなし。發して節に中らず、然して後に不善と爲る」と。又曰はく、「性に自つて行へば皆善なり」と。朱子[八]曰はく、

（五）孟子盡心上篇第四章

（六）孟子滕文公上篇首章に詳なり

（七）四書集註の孟子滕文公上篇首章に出づ

（八）同前に出づ

「性は人の天より稟けて以て生ずる所の理なり。渾然たる至善にして未だ嘗て惡あらず。人と堯舜と初めより少しも異なることなし」と。又曰はく、(一)「時の人、性の本善を知らずして、聖賢を以て企て及ぶべからずと爲す」と。愚謂へらく、理氣交感して其の妙用ある、之れを性と謂ふ。性は生々息むことなく、感通知識底のみ、更に善惡を以て言ふべからず。善惡の名は發見の迹に因つて見つべし。孟子性善を謂ふは、只だ性の方象の謂ふべきなく、强ひて之れを名づけて善と曰ふなり。然れども天下の道は不善を以てすべからず、之れを推し充(究むカ)つれば便ち只だ一箇の善のみ。故に性は元と善を以て名づくべからずと雖も、其の已むを得ざるの至大至公、善く其の事理を究めて天地の至德に法るあり、至德何を以てか不善ならん、是れ孟子性善の說の因つて起る所なり。易に曰はく、(二)「一陰一陽之れを道と謂ひ、之れを繼ぐ者は善なり、之れを成す者は性なり」と。方に是れ夫子性を以て善と謂はず、之れを成す者を以て性と爲す。一陰一陽互に相因つて道乃ち立つ。一陰一陽の道を繼ぎ來れば、乃ち發して節に中り、其の用各〻和を得、是れ善なり。這箇を成す底是れ性なり。性の本然は善惡を以て名づくべからず。其の流行已むを得ざるの道に因り、乃ち發して善く節に中るあり、是

(一) 四書集註の孟子滕文公上篇首章に出づ

(二) 繫辭上傳

れ强ひて性善と名づくるなり。後世其の深意を味はずして、文字を弄し高尙に泥み、頻りに性の本然を味ふに至る、甚だ聖人の教に非ざるなり。程子曰はく「(三)善は固に性なり、然して惡も亦之れを性と謂はざるべからず」と。朱子曰はく「(四)性は善惡を以て名づくべからず」と。是れ等の説を見るに、性善に因り體認し來るも、必ず善を以てすべからざるの處あり、故に又此の説あるなり。性の本然は只だ生々息むことなきのみ、以て名づけ方どるべからず。孟子其の迹を名づけて性善と曰ふなり。

師曰はく、人の性は氣禀に因りて厚薄淸濁あり、已れが性を以て之れを論ずるときは、惡の發多くして善の動少し。是れ等の氣禀を以て論じ來つて、終に性惡と曰ひ、善惡混ずと曰ふなり。人は萬物の靈にして聖人は億兆の君師なり。人を論ずるときは、聖人を以て標的と爲し、凡人を以て焉れを論ずべからず。這箇の聖人、事物應接語默動作、更に不善なく、節に中らずといふことなし。是れ聖人の感通知識の跡、看來れば皆節に中る底なり。節に中るときは善なり。(五)故に孟子は性善なりと道ひ、言へば必ず堯舜を稱す。人堯舜を以て的と爲し、性は堯舜の性を以て的と爲す。性の善を道ふと堯舜を稱するとの二句は、正に相表裏するも、是れ人は堯舜に至るを以て、當に法

(三) 二程語錄卷一、及び朱子語類卷九五に出づ
(四) 朱子語類卷九十五に出づ
(五) 以下*符號まで、朱子語類卷五十五、劉棟と朱子の問答と殆ど同じ

則と爲すべしとなり。人堯舜の地位に到り得て、方に一箇の人と做し得、其の性發見の跡只だ節に中るのみ。氣稟薄濁にして力行恆に闕くる底の人は、己れが性を以て準據とし論じ來りて、此の性を認得せば、皆不善の發のみ。

師曰はく、人の性は是れ天命なり。天地の命は唯だ生々息むことなく、善惡を以て論ずべからず。人も亦天命に因つて理氣の妙用を稟け、以て性と爲す、這箇の小天地なり。故に性は唯だ生々息むなくして能く感通知識するのみ。其の本然は善を以て名づくべきなく、其の發して節に中るは皆善なり。後儒究理を詳にせず、天地の命を以て善と爲す、已に誤了し來る。是れ性の本然を知らざるなり。天道流行して品物形を流く、此の間那箇の善惡あらんや。其の生長收藏の迹を見來れば、皆節に中れり、强ひて之れを名づけて善と曰ふなり、人の性更に善惡を以てせず。熟味して後に知るべきなり。

八八　或ひと性善の說を問ふを辨ず

或ひと問ふ、程子曰はく、「人の性は皆善なり。善なる所以の者は四端の情に於て見

るべし」と。以下の諸儒皆性の本善なるを以て的と爲す。師曰はく、後儒孟子性善の說に因つて切に泥著して、性の本然を以て善と爲し、其の證を四端の情と良知良能に於て見るべしと爲す、太だ差謬す。若し性惡の說を以て之れを論ぜば、人の情欲の發動は悉く支體の欲に出でて、一日の應接四端の情なし。同じく天性を禀け來るも、這箇の僕從奴婢、這箇の邊境教なきの民は、五倫の彜を知らず、其の間偶〻一事の善を得るも亦全からず。其の餘は日月に唯だ情欲の發動にして、惡多くして善なし。故に見來れば便ち性惡の論其の說あるに似たり、而して四端の情に於て見るべし等の語用ふる所なし。中庸は性に率ふを以て道と爲し、性を以て道と爲さず。發して節に中るを以て和と爲し、性善を以て教と爲さず。是れ古昔の聖人終に性の本然を以て道と爲ざるなり。

或ひと問ふ、性の本善なるを以て標的と爲さざれば、便ち學者只だ外に向つて標的を尋ねて、人々這の天地明白の性を具ふるを知らず。師曰はく、學の標的は意見を以て準據とすべからず、道統聖人を以て標的と爲す。且つ人は天地を以て父母と爲し、理に厚くして感通知識し、悉く天地の妙用に應じ、己れが性を以て標的と爲さず、聖人

の道を以て學的と爲すに在り。人々賦する所の性は氣習に因りて太だ異なり。若し其の性を以て準據と爲し來らば、多く盜跖(一)が言行に到らんか。詳に其の標的を究むべし。

或ひと問ふ、今聖人を以て標的と爲す、太だ當れるに似たり。然れども人皆天地の正氣を稟け各〻天地一原の妙用を具ふ、是れ自己の天地なり聖人なり。直に自己の本然を認得し來らば、往古の聖人亦這裏より出で來らんか。師曰はく、「各〻天地一原の妙用を具ふ」、「是れ自己の天地なり聖人なり」、是れ等の語大道の要を說き得たるに似て、殆ど聖人の學に非ず。人物天地は其の原一なり、理氣の過不及厚薄に因り、或は天地と爲り或は人物と爲る。已に天地たるときは天地の性を以て人物に混合すべからず、已に人物たるときは人物の性を以て天地に混合すべからず。人物一原にして人と物と亦幷せ論ずべからず。物又類あり、人又品あり、彼我幷せ論ずべからず。格物致知して誠意正心なるときは、天命の性に率ひ、初めて天地と參たるべし。這箇の聖人是れ天地と其の體用を一にすべし。然れども猶ほ人身は天地に及ばざる底あり、何ぞ凡人薄濁の質を以て、此の性天地に同じと爲さんや。只だ言を止めて自ら反みて之れを知るべし。各〻意見を失却して聖人の教を守るに在り。聖人已下大賢亞聖既に聖人

(一) 支那古代の大盜

と間あり、況や末代の後學口に利く高尚に鶩せ、異端の説を雑へ、心を甘んじ性を弄す、尤も聖學の罪人なり。

或ひと問ふ、古聖を師とし來らば、今は古を去ること既に杳なり、其の書も亦秦の火に遇ひて遺篇分明ならざらんか。師曰はく、古昔の聖人も亦未だ嘗て標的なくんばあらず、其の標的天地に在り。萬物は天地に覆載せられざるなく、萬物は天命に在らずといふことなし。一片時も亦天地の間を遁れず、仰いで觀、俯して察す、皆這箇天地の用なり。故に我が標的とする所天地に在り。之れを求むること遠からず、意見を去り文字の泥著を棄て、直に天地を以て學の標的と爲すに在り。

或ひと問ふ、孟子乃ち口を開けば便ち性善を説く、故に告子が門人公都子（二）も亦性善を問ふ。孟子は「仁義禮智は外より我れを鑠するに非ざるなり」を以て答と爲す。今天地を以て之れを論ずるに、孟子は性善を證すること差了するに似たり。師曰はく、孟子は唯だ性善を說いて、性善を認むべしと說かざるに、後學切に性善を認得す、是れ異端の説に同じ。釋家曰ふ、「心外に向つて佛を求めず、卽心是れ佛眞」と。又曰ふ、「卽心是佛、驢に騎つて驢を覓む」と。又曰ふ、「赤肉團上一無位の眞人あり」と。

（二）孟子告子上篇第六章に詳なり、告子は性善にも惡にもあらざるを主張す、故にその門人公都子、孟子にその可否を問へるなり

是れ等の語は後儒が一性の本は善なり、性に自つて行へば皆善なり」と説くと更に差はず。釋氏己れが心を以て佛性と爲し、己れが心を相見するを以て見性成佛と爲し、唯身を以て淨土と爲し、己れが心を以て彌陀と爲す。玆に於て面壁坐禪して心性を認得し、直入投機せんことを欲し、或は失却(一)を認め或は忘懷(二)を認め、雨に風に悟了の期と爲す。然れども唯だ作用是性の説のみ。其の應接感通前の佛祖にも及ばず、終に一(三)棒一喝を以て教外別傳と爲す。見來れば只だ一箇の風顚漢のみ。當時の學者口に經書を言ふと雖も、其の應接語默節に中るなく、言と行と相違ふ。是れ性の本然を認め工夫し來つて、更に日用の功に益なし。孟軻の所謂性善と其の趣同じからざるなり。

或ひと問ふ、佛氏の性を説くや、目に在りては見と爲し、耳に在りては聞と爲し、口に在りては議論と爲し、手に在りては能く持ち、足に在りては運奔すと。朱子曰はく(四)「此の如きは只だ是れ箇の無星の秤無寸の尺なり。若し聖門に在らば、目に在りて見ると雖も、須らく是れ明かにして始めて得べく、耳に在りて聞くと雖も、須らく是れ聰にして始めて得べく、口に在りて談論し及び手足に在るの類も須らく是れ之れを動かすに禮を以てして始めて得べし」と。今の説く所は殆ど釋氏の性を説くに似たり。

(一) 却は語勢を強める助字、全く失ふの意、無我なり
(二) 世事を超脱すること
(三) 禪の修行法をいふ
(四) 朱子語類巻百二十六に出づ

師曰はく、視聽・談論・執捉・運奔は性にあらざるなし。此の性なきときは此の支體何ぞ知覺運動せんや。明聰にして之れを動かすに禮を以てするも亦性なり。唯だ氣に從つて動き來り、理に從つて究め來るの間、或は陷溺し、或は究理するなり。一箇の聰明あるも、亦只だ其の氣の清潔にして理を究めざるときは、此れに明かにして彼れに暗し。這箇の聰明之れを動かすに禮を以てする底、學ばず率はずして豈自然ならんや。朱子は性善を以て本然と爲し、終に此の說を爲すに至れり。

或ひと問ふ、子が說に因るときは、性の本然を待たずして、敎に因つて其の性を善にすべし。是れ告子の曰ふ(五)「性は猶ほ杞柳のごときなり、義は猶ほ桮棬のごときなり、人の性を以て仁義を爲すは、猶ほ杞柳を以て桮棬を爲るがごとし」と。(杞柳は二木の名、桮棬は飮器なり。)是れ人の性本と仁義なく、必ず矯揉を待ちて而して後に成るなり。師曰はく、人敎を待たずして性是れ善ならば、乃ち中庸に道と敎とを說くべからず。已に性に率ふ之れを道と謂ひ、道を修むる之れを敎と謂ふ、是れ敎に因つて道を修め、道を修めて性に率ふなり。敎に因らず道を修めずして、只だ性の本善を以て言を爲すときは、便ち釋氏が直指見性なり。此の性は本と理氣の妙用にして、能く虛靈、能く感通知識す。聖

(五)孟子告子上篇首章

人の道に志し聖人の教に因つて、其の道を修むるときは、天地生々息むことなきの命と唯だ一般なり。盜跖が惡に志し、盜跖が教に因つて、盜の道を修むるときは、禽獸の情欲放蕩の性と唯だ一般なり。人として、天地と一般ならんや、禽獸と一般ならんや。詳に盡し求むれば、人々禽獸に同じきことを欲せず。是れ已むを得ざる底なり。已むを得ざるは是れ天地の誠なり、其の理に厚きなり。若し教を待たずして直に性善を以て證し來らば、大學の條目(一)、中庸の道教(二)、說き得て皆空言なり。孟子言へば必ず堯舜を稱し、堯舜を以て性善の據と爲す、是れ聖人を以て學の的と爲すなり。夫れ堯舜の地位に至ること、教に因り道を修めて初めて企て及ぶべきなり。告子性を以て杞柳と爲すは、是れ已れが性を以て見來り、只だ氣質を指して其の性を論ずるなり。至大至公の性を論ずるに在らずして、終に仁義を以て應接の一事と爲す。淺見薄意論ずべからず。

或ひと問ふ、仁義禮智是れ性か。師曰はく、先儒皆曰ふ、「仁義禮智是れ性なり」と。是れ「性は善なり」の語より說き來れるなり。性は能く感通智識す、應接語默の間、理に就きて感通知識して其の節に中る、乃ち仁義禮智なり。性、仁義禮智を蓄儲し、

(一) 八條目、即ち格物・致知・誠意・正心・修身・齊家・治國・平天下
(二) 「率レ性之謂レ道、修レ道之謂レ教」をさす

事を待つて發し來るに非ざるなり。然して性は二氣五行[三]の妙用なり。仁義禮智信は五行の發見、二氣の分名なり。其の性の發動は太だ此の間に感通す。若し只だ五常を以て性と爲し、其の餘を以て性と爲さざるときは、便ち偏倚して正說にあらず。

或ひと問ふ、程子曰はく、[四]「性に自ひて行へば、皆善なり」と。師曰はく、是れ性善の說に泥むなり。這箇の嬰兒赤子、一事の外物なく、混然たる全體なり。那箇是れ性善の處、那箇是れ彼れが行ふ所の善なる。只だ氣質長成して其の性發動す、其の發動未だ嘗て氣質に因らずんばあらず。氣質に因るときは善あり惡あり。何の處を以て「性に自ひて行へば皆善なり」と爲すや。聖人の道は人に敎ふるにあり、聖敎には「性に自ひて行へば皆善なり」の戒なし。此れ等の語は說き得て只だ口を利くするのみ。

或ひと問ふ、伊川の程子曰はく、[五]「水の淸きは性善の謂なり。濁ることの多き者あり、濁ることの少き者あり、淸濁同じからずと雖も、然も濁れる者を以て水と爲さずんばあるべからず。此の如きときは人以て澄治の功を加へずんばあるべからず。故に力を用ふること敏く勇ましきときは疾く淸み、力を用ふること緩く怠るときは遲く淸む。其の淸むに及んでは、却つて只だ是れ元初の水なり」。朱子曰はく、[六]「性は之れを水に

(三) 陰陽

(四) 二程語錄卷十五に出づ、伊川の語なり。朱子の孟子集註にも出づ。前出一九九頁參照

(五) 二程語錄卷一に出づ

(六) 朱子語類卷四に出づ

譬ふ、本と皆清なり。淨器を以て之れを盛るときは清く、不淨器を以て之れを盛るときは臭く、汚泥の器を以て之れを盛るときは濁るも、本然の清は未だ嘗て在らずんばあらず」と。(一)臨川の呉氏曰はく、「天下の清、水に如くはなし、先儒水の清を以て性の善に喩ふ。人不善の性あることなければ、世不清の水あることなし。然らば黄河の水渾々として流れて以て海に至り、竟に能く清むことなき者は何ぞや。清めるは其の初原に循ふものなり、水の初めなり。水は天に原づいて地に附く、原の初めて出づるや曷ぞ嘗て清まざらんや。岩石の地に出づる者は瑩然湛然として、以て其の本然の清を全くすることを得、泥塵の地に出づる者は、其の初めて出づるよりして其の滓を混ずれば、則ち原清むと雖も流れて濁らざること能はず。水の濁りに非ず、地の然るなり。人の性も亦猶ほ是のごとし」と。師曰はく、先儒水の清を以て性の善に喩ふるは可なり、清を以て水の本然と爲すは未だ可ならざるなり。愚謂へらく、水は五行の首、其の位北方の陰に居り、其の體は流行を以てし、其の用は潤下を以てす。清濁は土地の質に出で、其の終りは海に歸す。海潮は是れ水の始終にして、而も海潮は清濁を以て之れを論ずべからず。一箇の滴泉は只だ山谷地脈の餘瀝なり、餘瀝を以て水の性を論

(一) 呉琮、字は仲方、臨川の人、朱子の門人

ずべからず。且つ人の飲用を欲するは清に在り。大船を載せ魚鼈を生じ、運送利用の大川、豈清を以て之れを好まんや。故に人の飲用や之れを清くし、大川の流行や濁に從ふ。而して共に水の用玆に足る。徹底して淸むことを好むは、一箇の小池泉水にして、大船を載すべからず、魚鼈を生ずべからず。且つ水は靜なるときは淸み動けば濁る。流行の動は水の用にして、久しく靜なるときは水の性損ず。豈水は淸を以て本と爲んや。今人の性を說くに水の淸に喩へ、靜を以て性を觀、潔白を以て性と爲すは、皆性善を說くの謬なり。水は只だ流行潤下して淸濁節に中る、是れ天下の水なり。性は只だ生々感通して情發して節に中る、是れ聖人の性なり。若し水の淸を認めなば、小池泉水の潔を喜びて、黃河の大用を忘れ、若し性の善を認めなば、靜寂明白の味を樂しみて、天下の大用を忘るるなり。且つ水は其の濁を以て水と爲さざるべからず、性は其の不善を以て性と爲さざるべからず。只だ性善を言ひて氣質を言はざれば則ち全からざるなり。

或ひと問ふ、臨川の吳氏曰はく、「孟子の性善を道ふは、是れ氣質の中に就きて其の本然の理を挑げ出して言へるなり、然れども曾て性の不善ある所以の者は、氣質の濁

惡あるに因つて、其の性を汚壞することを分別せず、故に告子と與に言ふと雖も、終に以て告子が惑を解くに足らず」と。吳氏が此の說如何。師曰はく、孟子は性善を道ふに堯舜を以て的と爲すなり。人々敎に因つて力行して道を修むるときは、堯舜の地位に至るべし。堯舜の地位に到り得るときは、其の性發して節に中る、其の跡惟れ善なり、氣質を論ずるに及ばざるなり。孟子性善を道ふの理に通ぜず、故に其の解する所略ぼ似て實は異なれり。

或ひと問ふ、北溪の陳淳曰はく、「天の人に命ずる所、是の理本と只だ善にして惡なきを以ての故に、人の受けて以て性たる所も、亦本善にして惡なし。孟子性善を道ふ、是れ專ら大本の上に就いて說き來り、說き得て極めて親切なり。只だ是れ曾て氣稟一段を發出せず、後世紛々の論を啓く所以なり」。師曰はく、後世氣質の性・天命の性を以て說き出し來る、故に人の性多く兩般に落在す。天命の性・氣質の性、焉んぞ兩般に說き來らん哉。既に性と曰ふときは、性は是れ理氣の妙用なり、只だ氣稟に從つて萬殊あるなり。理氣の妙合なくんば何を以てか此の性を論ぜん。天命の性は乃ち氣質の性なり。陳淳の曰ふ、「是の理本と只だ善にして惡なし」の語は、意見より出し來る。

（一）宋代、龍溪の人、字は安卿、北溪はその號なり。朱子の門弟にして、論孟學庸義・字義詳講・禮詩女學・北溪大全集等の著あり

天の命ずる所、善惡の謂ふべきなし、生々流行の妙用のみ。言を容るべからざるなり。

或ひと問ふ、孟子性善を道ふ、看來れば孟子の言はく、「赤子將に井に入らんとするや、怵惕惻隱の心あり」とは、此れ只だ情の上に就いて見るなり。「孩提の童も其の親を愛せざるなし」と言ふが如きも、亦只だ是れ情の上に就いて說く。朱子曰はく、(一)「未だ發せざるの時、怵惕惻隱と孩提親を愛するの心と、皆裏面に在り了れり。少間にして發出し來る、卽ち是れ未發底の物事なり。靜も也た只だ是れ這の物事、動も也た只だ是れ箇の物事、孟子の說く所の如き、正に人の發動の處に於て、是れ這の物事は卽ち是れ靜時養ふ所底の物事なることを見得せんことを要す。靜時若し這の物事を存守し得ば、日用の流行卽ち是れ這の物事にして、而今の學者且つ動靜只だ是れ一箇の物事なることを識得するを要とせよ」と、此の問答如何。師曰はく、天命の性は是れ氣質の性なり。氣質を離れて天命の性を謂はんと欲すれば、便ち性の字を安頓する所なし。孟子の性善を道ふ、皆性上に就き來る。是れ情上已に發するの睽、只だ節に中るの謂なり。朱子の所謂怵惕惻隱と孩提親を愛するの心と、皆裏面に在り了れり。是れ性衆理を具ふるの說なり。性は能く感通知識す、故に耳目の觸るる所感通し、理

(一) 朱子語類卷五十五に出づ、但し抄出

氣の因る所知識す。其の跡は怵惕惻隱なり、孩提親を愛するなり。此の裏面一物の有なく、一事の設なし。又曰ふ、「靜時養ふ所底の物事」、又曰ふ、「靜時若し這の物事を存守し得」と。是れ等の語性善を認めて工夫を下すの說なり。此の弊終に精神を弄し心性を甘くするに至り、殆ど聖人の教に背き日用の功に益なし。靜時は只だ靜なり、安排を附し來れば是れ動なり。存養し來れば是れ動なり。(一)「弟子入りては孝、出でては弟、行うて餘力あらば則ち文を學ぶ」とは、是れ格物致知の謂なり。焉んぞ終日靜思し、此の物事を養ひ此の物事を存せんや。此の如くなれば乃ち太だ動了して靜ならず、(二)申々如・夭々如たるも也た得べからず。只だ性善の語を要とし守り、其の實理を知らずして文を以て意を害するなり。且つ許多の理皆裏面に在り了る。何ぞ靜時を待つて之れを存し之れを養はんや。裏面にあらざるの故に、靜時に存養の說あり。今存養を說いて格物致知の工夫を言はざれば、則ち竟に異端の觀心禪定に陷らん。或ひと曰はく、存養は是れ格物致知に非ずや。師曰はく、然らば乃ち何ぞ靜時を期せんや。格物致知は語默に動靜に、更に離るべからざるなり。

或ひと問ふ、性は能く感通知識すと雖も、這箇の明白の理具備せざるときは、其の

(一) 論語學而篇第六章

(二) 論語述而篇第四章に「子之燕居、申申如也、夭夭如也」とあり、ゆつくりやはらかなる貌、立派なる態度を云ふ。後出二二一頁と併せ見るべし

感通知識皆愚感に至らんか。師曰はく、事物應接の間、義理節に中るの用、只だ格物致知の力にあり、性の明白を以て言ふべからず。格物致知せざるときは、少く聰明伶俐の徒義利の差を知るに似たれども、其の大要を知らず、終に其の情節に中らず。是れ管仲・晏子も亦聖人の道を知らざるなり。管晏が知、管晏が性、短愚と言ふべからざるも、格物致知の聖教なく、只だ知慮に鶩せて大道を明かにせざればなり。若し性の本然這箇の明白なるありて、能く聖人の道を分ち來らば、管晏格物致知せずとも、須らく聖人の大道を感通知識すべし。是れ性は只だ感通知識す、而して其の明昏は格物致知の有無に在り。聖人の道を知らざる底は、聰明伶俐の用を爲すと雖も、天命の性に於ては論ずべからざるなり。

或ひと問ふ、性は只だ感通知識のみにして、性必ず善なるの稱なく、又衆理を具ふるの說なきときは、性は是れ形よりして下なる者か。師曰はく、感通知識は理氣の妙用なり。這箇の感通知識あり、故に理氣の間感通せずといふことなく、知識せずといふことなし、尤も虛靈にして流行變通し生々息むことなし。是れ豈形よりして下なる者ならんや。此の妙用なきときは非情なり、人物各〻自ら此の妙用を具へて、人は理

に厚くして能く天地の德に感通し、能く天地の用を知識す、是れ萬物の靈たる所以なり。性善衆理の思、亦感通知識の裏面より出で來る底の道理なり。

或ひと問ふ、沈僩問ふ、(一)「或ひと謂はく、(二)『性の發する所、時に不善あることなし、氣稟至惡の者と雖も亦然り。但だ方に發するの時、氣一に之れに乘ずるときは、善あり不善あるのみ』と。僩以爲らく、人心の初發、善あり惡あり。所謂『幾は善惡あり』といふなり。初發の時本善にして、流れて惡に入る者此れ固に之れあり、然れども亦氣稟昏愚の極まれるありて、發する所皆善ならざる者は、子越椒が類の如き是れなり。左傳宣公四年、楚の子良越椒を生む。(三)子文が曰はく、豺狼の聲あり、殺さざれば必ず若敖が宗を滅さん。諺に曰はく、狼子は野心ありといふ、其れ畜ふべけんやと。且く中人を以て之れを論ぜんに、其の發する所の不善なる者固に亦多し、安んぞ之れを不善なしと謂ひ得んや」と。朱子曰はく、「當に此の如く說くべからず。此の如く說き得るときは是ならず。此れ只だ當に人品の賢愚清濁を以て論ずべし。合下(四)に發し得て善なる底あり、發し得て不善なる底あり、發し得ること善にして物欲の爲に奪はれ、流れて不善に入る底あり、極めて般樣多し」と。是れ朱子は惡の發動を以て氣質と爲し人品と爲す、沈僩の謂ふ所は子の說に近し。師曰はく、沈僩は人心の初發に善あり惡あるを以て性と爲す

(一) 宋代、永嘉の人、字は仲莊、朱子の門人にして、地理に精し。ここに引く朱子との問答は朱子語類卷四に出づ
(二) 朱子語類によれば敬子なり
(三) 楚の令尹にして子良の兄、此の言子良の容るる處とならずして、後年越椒の災おこれり、若敖は子良子文の先祖の姓
(四) 其の時ただちにの意。又當下に同じ

なり。善惡は事物應接の上に在り。性は只だ感通知識す、焉んぞ善惡の名づくべきあらんや。人心初めて發する、氣に就いて出づる底あり、理に就いて出づる底あり。情欲の發する、或は節に中るあり、或は節に中らざるあり。子越椒が類の如きは生ながら氣に厚きの處あり、故に豺狼の聲を發するなり。性は各〻氣質に因つて差ふことあり、切に性善の說を認め萬差の人品を論じ來れば、竟に附會の辯あり、人品氣質を以て差別せんと欲するは、尤も過了す。

或ひと問ふ、物に感じて動くに、或は理義の公に發し、或は血氣の私に發す、這裏便ち善惡に分つ。北溪の陳氏(五)曰はく「血氣の私に發して便ち惡を爲すに非ず、乃ち發して後に流れて惡を爲すのみ」と。此の說差あるか。師曰はく、是れ又性善の說に因つて此の偏論あるなり。性は理氣の感通知識するのみなり。其の跡流蕩して節に中らざると、發して節に中るとなり。血氣の爲に傚はるれば節に中らず、格物致知するときは節に中る。性は感通知識を以てして、義理血氣を以て之れを論ずべからず。義理は能く感通知識し、血氣も能く感通知識す。是れ性の妙用なり。格物致知の理を措きて、機微を思ふを以て功と爲すときは、誠意の功盡すべからず。人性は視聽言動に因

（五）前出二一二頁參照

つて其の思あり。視聽言動是れ氣質の用なり。天命の性と雖も視聽言動を措いて感通すべきの處なし。故に性は氣質を措いて論ずべからず。氣質を以てするときは、其の發する所惡なく發して後流れて惡と爲るのみと謂ふべからず。彼の赤子嬰兒は氣質未だ全からず、視聽言動未だ詳ならず、故に父母兄弟も亦分明ならず、禮容究理少しも通ぜず、只だ飲食情欲の習のみ。這の時那箇か是れ性善、又性不善なるや。那箇か是れ理・不理なるや。只だ氣と理と相合ふの妙用言ふべからず、而して其の本原生々息むことなく、止めんと欲して已むを得ざるの謂なり。

或ひと問ふ、子が說に因れば、性に善なく惡なきの謂なり。師曰はく、性を以て無善無惡の稱を爲すときは一偏に落在す。性は理氣の妙用、或は善あり惡あり、或は善なく惡なし。或は善ありて惡なく、或は惡ありて善なし。是れ都て人物の性を論ずるなり。天下の萬物人より貴きはなし、故に教に因つて道を修め、道を修めて性に率ひて、天地の大原と合一底にして、初めて性善を知るべく、初めて聖人の性を知るべし。其の功、格物致知の間に在り。

或ひと問ふ、聖人の性是れ善、而して愚人の性是れ惡か。師曰はく、聖人は理に厚

くして其の氣質正中の正を得。其の性は理に就いて能く感通知識し、其の情は發して天下の物に感ず。其の氣の感通知識も亦正を得、其の情發して節に中るなり。性善なりと謂ふは孟子にして可なり、已下のもの若し性善と謂はば、後世の惑を起すなり。只だ性に率ふ之れを道と謂ひ、道を修むる之れを教と謂ふ。喜怒哀樂發して節に中る、格物致知誠意正心等の教戒、以て聖學の規範とするに足れり。愚謂へらく、聖人の性は發して節に中るのみ、愚人の性は悉く節を失ふに在り。其の間格物致知の裏面に在り了れり。

或ひと問ふ、王陽明曰はく、「吾が[一]良知の上に依り說き出し來り事を行へば、便ち自ら是れ停當[二]なり」と。是れ性善の說か。師曰はく、後世の學者性善を認め來りて、竟に陽明が良知の說に到り、聖人の學泯沒す。此の儆宋儒に起りて元明の間に盛なり。孟子の所謂良知は仁義の發見にして、學ばず慮らずして能く知ることあるの謂なり。是れ聖人人を教ふるの用、仁義を出でずして、仁義も亦作意を假らざる所以なり。陽明が徒此の一轉語を執へ、高尙の話頭を立て、提携工夫して直に思はずして得、勉めずして中るに至らんと欲し、此れを以て聖に入るの脈路と爲す。是れ往古の聖教を措

（一）傳習錄卷之下、黃修易所錄に出づ。但し「事を行へば」は「行ひ將ち去かば」に作る
（二）妥當

き、一の新奇說を以て工夫を附け、衆を惑はし愚を誣ふるなり。其の說に曰はく、「良知は思慮を外にせずして、思慮却つて能く以て良知を蔽ふ、故に孟子尤も其の慮らざる者を指して、而して後に之れを良と謂ふ。孺子(一)の井に入るを見て怵惕するは良知なり、而して交を納れ譽を要め聲を惡むは慮なり。嘑蹴(二)せられて屑とせず、受けざるは良知なり、而して宮室妻妾我れに得て之れを爲すは慮なり。故に曰はく、天下何をか思ひ何をか慮らん」と。此れ正に陽明(三)・龍溪(四)が說く所なり。此に於て彼れが學徒思慮を絕し良知を待ち來る。這箇の良知事物に通ぜず、偶〻應接の用是れ良知より出づと思ふと雖も、節に中らず。此に於て自反と號して靜坐靜默して、此の良知を養ふ。然れども其の情の發皆違ひ、行皆戾る。心を勞し身を苦しめて、事物の日用に益なく、困勉して病を生ずるに至る。又一箇の良知を得たる先覺あれば、只だ口に信せて說き意に任せて行ふ。其の高尙の話頭は說き得來るに似て、事に應じ物に接するの間、天下國家の用竟に節に中らず。只だ口に利く行に危くして隱逸高潔の風顚漢の類の如く、更に天下に益なし。是れ良知を弄し思を費して、格物致知の功なきなり。格物致知の功なきときは、年月を積累すとも亦事物の理に感通知識すべからず、只だ高尙靜寂の

(一) 孟子公孫丑上篇第六章

(二) 孟子告子上篇第十章「一簞の食一豆の羹も、之れを得れば則ち生き、得ざれば則ち死す。嘑爾として之れを與ふれば道を行く人も受けず、蹴爾として之れを與ふれば乞人も屑とせざるなり云々」と出づ

(三) 王守仁、前卷三八頁參照

(四) 王畿、明代、浙江山陰の人、字は汝中、王守仁の門弟、龍溪先生と稱す。龍溪全集・語錄あり

地位に感通知識して、天地の大道を失ふに至るべし。學者の蔽皆此の間に落在す。是れ異端の說世に行はるる所以なり。

或ひと問ふ、詩に曰はく「(五)天烝民を生ず、物あれば則あり、民の彝を秉る、是の懿德を好む」と。是れ性の本善なるを謂ふに非ずや。師曰はく、生民各〻天地生々の性を禀け來る、故に其の氣質に因つて其の情の發する、便ち止むを得ざるの則あるなり。民、情に厚くして其の則を失却す。聖人竟に教を立て道を修め以て格物致知して、民の彝を秉ることを示す。天の性を賦するや、善不善の分ちなく、只だ理氣の妙用を以てするなり。

或ひと問ふ、聞ろ子の教に因り味ひ來れば、今日無事底なれば、善惡の論ずべきの期なし。又多く此の時に認得し見れば、性は只だ感通知識にして、言の容るべきなし。然らば乃ち孟子性善の說未だ審ならず。師曰はく、孟子の性善は、其の節に中る底を見來つて、强ひて性善を言ふなり。無事底は中々如たり、天々如たり、是れ節に中るなり。節に中るときは善と稱すべし。後儒善をして善惡の善に落在せしむ。故に其の說甚だ差了す。

（五）大雅、蕩之什烝民の篇

八九　天命の性・氣質の性を論ず

師曰はく、天烝民を生ず、理氣相合ひ凝滯して一點子の象あり、其の象是れ萌すときは、其の妙用已に具はり、生々息むことなし。是れ「天命之れを性と謂ふ」(一)なり。這の性は理氣の妙合に因つて安頓し來れり。理氣妙合せざれば乃ち性の名なし。故に性の字は生に從ひ心に從ふ、是れ生々の氣其の理相因るときは性の寓する所なり。往古の聖人只だ性心を謂ひて天命・氣質の差を別たず。乃ち差別し來るときは、便ち天命と氣質と間隔し、天地と人物と牴牾し、性と理氣と差別するなり。性の發するや氣質に因り、性のあるや理氣に因る。性は氣質を措いて言ふべきなし。氣質も亦此の性を措いて言ふべきなし。氣質は是れ理氣なり、理氣相支離するときは妙用去る。是れ一箇の死物枯槁底なり。性は少くも理氣を措いて論ずべからず。若し天命の性・氣質の性ありと謂へば、便ち別に這の天命の性在るありて、今氣質に乘じ來る底なり。是れ性を以て氣質に因らざるの一物と爲すなり。然らば天地人物の外に一箇の物ありて之れを性と謂ふべきか。後世口に利く精神を弄して、差別すべからざるの地を差別せ

（一）中庸首章

んことを欲す。聖人の道大いに鑿せり。天地の易簡竟に泯沒す。

師曰はく、北溪[二]の陳淳曰はく、「氣禀の說何に從りて起るや。夫子曰はく、『性[三]は相近きなり、習は相遠きなり、唯だ上智と下愚とは移らず』と。此れ正に是れ氣質の性を說く。子思子の所謂三智[四]三行[五]、及び所謂「愚[六]なりと雖も必ず明に、柔なりと雖も必ず强し」も亦是れ氣質の性を說く。但だ未だ分明に氣質の字を指出して言を爲さざるのみ。二程子に到つて始めて分明に指認して說き出すこと甚だ詳に備はれり。橫渠[七]之れに因つて又立てて定論を爲して曰はく「形[八]ありて而して後に氣質の性あり、善もて之れを反するときは、天地の性存す。故に氣質の性は君子性とせざる者あり」と。氣質の性は是れ氣禀を以て之れを言ひ、天地の性は是れ大本を以て之れを言ふ。其の實は天地の性も亦氣質の中を離れず、只だ是れ那の氣質の中に就いて、天地の性を分別し出す、與に相雜へて言を爲さざるのみ」と。又朱子曰はく、「氣[九]質の說程・張より起り、極めて聖門に功あり、後學に補あり。此れより前未だ嘗て人の說いて此に到るものあらず。孟子性善を說くも、但だ本原の處を說き得て、下面却つて曾て氣質の性を

(二) 前出二一二頁參照 (三) 論語陽貨篇第二章第三章 (四) 中庸第二十章の「子曰はく、學を好むは知に近く、力行は仁に近く、恥を知るは勇に近しと、斯の三者を知れば、則ち身を修むる所以を知る。身を修むる所以を知れば、則ち人を治むる所以を知る。人を治むる所以を知れば、則ち天下國家を治むる所以を知る」を指すか (五) 同前章「或は安んじて之れを行ひ、或は利して之れを行ひ、或は勉强して之れを行ふ。其の功を成すに及びては一なり」を指すか (六) 同章のつづきに出づ (七) 張載、前出一四五頁參照 (八) 朱子語類卷九十八、張子之書に出づ、又張子全書卷之二、正蒙誠明篇にも出づ (九) 朱子語類卷四、性理一に出づ、但し抄出なり

說き得ず、亦諸子の性惡と善惡混ずると說くを、分疏するに費す所以なり。程・張の說をして早く出さしむるときは、則ち這の許多の說話自ら紛爭を用ひず、故に程張の說立つときは諸子の說泯ぶ」と。愚謂へらく、程子は氣稟を論じて未だ天地の性・氣質の性に及ばず、橫渠の張子に至つて分つて天地の性・氣質の性と爲す。然して後に朱子解して曰はく、(一)「天地の性は太極本然の妙、萬殊の一本なり、氣質の性は則ち二氣交運して生ず、一本にして萬殊なり」と。是れより後儒悉く天命・氣質を以て差別し來れり。案ずるに、天地の性・氣質の性、語甚だ理會せず、天地も亦理氣の相合して其の妙用生々窮りなし。是れ天地已に氣質あり來れり、其の間人亦理氣相合ふ、其の妙用名づけて性と謂ふ。已に人と曰ふときは天地の性を混ずべからず。今張子が所謂天地の性は、天地の萬物に賦與し來る本然の性を指すなり。天地萬物に賦與して、萬物理氣稟くる所同じからず、故に其の性亦一ならず、其の賦與底は是れ一なり。賦與底を以て天地の性と爲すときは則ち差了す。性は其の氣質に因つて萬殊あり、其の妙用を言ふときは一なり。天地には天地の命あり、人物には人物の性あり、何ぞ焉れを混合せんや。是れ天地が(二)萬物に賦與するの本然にして、氣質の中に寓するの謂と爲す。

(一)張子全書卷二、正蒙誠明篇の所の解に見ゆ

(二)同前に見ゆる黃勉齋の解にこの事出づ

因つて氣質の中に天命の性ありと言ふなり。天命の性は氣質を以てせずして、別に這箇の名あらんや。後學性善の文義を認め來り、竟に是れ等の說を爲す。只だ教に因つて道を修し、道を修して性に率ふときは、天命と參なり、別に天命の性を求尋するに非ず。性は理氣相合の妙用、只だ感通知識するのみ。此の間切り(しき)に天地氣質の性差別底の工夫を下すは、細は乃ち細なれども而も聖門に益なく、甚だ後學の惑を重ぬ。

　師曰はく、程子曰はく(三)「形易(かは)るときは則ち性易る。性易るに非ず、氣之れをして然らしむるなり」と。此の一節說き得て好し。形易るときは理氣差了あり、故に其の性亦易るなり。性既に易る、同一を以て論ずべからず。性易るに非ずの語に至りては又性善の謂なり。先儒皆性善を立てて本然と爲し來り、竟に天命・氣質を以て之れを差別す。凡そ性善を要(もと)むるときは、則ち認め來つて性の發動不善なきに非ざるを見る。此に於て先儒其の不善を以て氣質の致す所と爲し、氣質の性を以て本然天命の性と別つ。只だ聖人の教に從つて、理氣相合の妙用、能く感通知識する底、皆是れ天の命ずる所と爲すときは、更に紛々の雜說なく甚だ易簡なり。本然性善の味を認知するに至つて、初めて此の諸儒の紛爭あるなり。

(三) 二程語錄卷十五に出づ

師曰はく、横渠の張子曰はく、[1]「氣質の性は君子性とせざる者あり」と。愚謂へらく、視聽言動の用、行住坐臥の便、飲食色情の欲、皆是れ氣質に因つて起り來れり。是れを以て性と爲ざれば、性は何を以て之れを謂はんや。其の發して節に中る者は、教に因つて道を修するの謂なり、性の本然にあらず。教に因らず、道を修せず、慮らずして節に中るの聖者は、萬古未だ聞かず。況や後世をや。性氣質に因らざらんや、何等一箇の物を以て性と爲し來らんや。聖人の教は只だ氣質に因つて發動するの性情をして、其の節に中らしむるに在り。

師曰はく、先儒皆天命の性を以て本然の善と爲し來れども、亦天下の人未だ嘗て氣質に因つて其の情を發せずんばあらず。氣質に因つて發動するときは、善あり不善ありて、本善の性を必とすべからず、故に別に氣質の性を論ず。性善此に到りて論ずるに足れり。皆口を利くし、[2]足を添ふるの說なり。

師曰はく、近く譬を取るに、今鳥銃の藥を[3]製するに、其の藥種相聚まつて、人之れを制すること能く詳にして、而る後に此の火を以て之れに附し、便ち迅速砲爆の勢を爲す。勢は是れ藥の妙用なり、其の勢の善惡大小は、藥制の好惡厚薄に在り。藥は氣

(一) 前出二二三頁參照
(二) 蛇に足を添ふの意
(三) 製と同じ

質なり、制は教なり。藥も亦理氣あり、制も亦理氣あり、此の藥制相合ひて這箇の妙用あり。其の妙用は藥制を措いて之れを論ずべけんや。藥制の疎密に因つて勢の善惡を謂ふべし。這箇の藥制相成るときは、其の勢相應の妙用を爲す、是れ天命なり。此の勢は別に藥制の外に在るに非ず。又云ふ、藥種は出産の宜あり。今其の宜を撰み、其の制詳に窮め盡して、而る後に土地時日を量り其の勢を發す、是れ節に中るの謂なり。是れ等は藥制妙用の極なり。藥の撰宜しからざるときは氣質正しからず。然れども制專ら究むるときは妙用殆ど好し。藥の撰び好しきを得るときは氣質是れ正なり、然れども制詳ならざるときは妙用甚だ輕し。是れ等の術を思量すれば、教を言はず道を修めずして、只だ本然の善を言ふは、則ち全からざることと見るべし。

九〇　或ひと天命・氣質の性を問ふを辨ず

或ひと問ふ、今目は色を視、耳は聲を聽いて、情欲甚だ動く。是れ氣質の性なり。其の思を易へて非禮を視聽せざる底、是れ天命の性なり。師曰はく、是れ實に天命氣質の性を差別するに似たり。然れども情欲甚だ動くの性と、非禮を視聽せざる底の性

と、豈別ならんや。先づ情欲の動に從つて、後に其の己れに克つて禮に復る、先づ氣に厚くして後に理に厚きなり。只だ一般の性の氣質に隨つて動き來ると、理を窮めて節に中るとのみ。故に氣に厚きときは竟に情欲に從つて理に薄く、理に厚ければ竟に己れに克ちて禮に復る、是れ理氣妙合の間厚薄あり來り、其の妙用亦厚薄あるなり。天命本然の善を認得せず、聖人の教に因つて聖人の的に志すときは、性善を言はずして人々皆天地の生々已むなきに同ずべし。此の時更に天命・氣質の性を差別するなし。

或ひと問ふ、人の氣質萬差と雖も、裏面に一箇の明白底の處あり、是れ氣質の性、天命の性の差別すべき所か。師曰はく、裏面に一箇の明白底の處あるの說、是れ精神を弄し聰明を執ふるなり。性は只だ虛靈にして感通知識し、這箇の光明なく、這箇の潔白なし。格物致知に隨つて、其の理の極まる處能く感通知識し來りて、初めて事物に應接するの間各〻節に中り、其の知の及ぶ所各〻明白なり。是れ誠意正心の謂なり。格物致知なくして、裏面に一箇の光明ある底は、妖怪影彩の煦々なり、弄し來れば只だ聰明伶俐にして、須らく大道の用を失却すべし。是れ皆天命の性に本づき、一の性善を立つるなり。且つ赤子嬰兒の習教に薄く、夷狄僕從の固陋なるも、天命の性稟賦

せずんばあるべからず。竟に其の發見を全くすることなきは、只だ氣質の性のみ。氣質の性本と理氣の妙合に出づ、故に理に於て未だ嘗て感通知識せずんばあらず、偶〻其の正を識得するも亦怪しむべからず。彼の禽獸すら猶ほ然り、況や人をや。

或ひと問ふ、先儒天命の性・氣質の性を別つを聖門に功ありと爲す。師曰はく、性を論ずる、皆天命の性にして、而も亦氣質の性なり。先儒氣質の性を以て性にあらずと爲す、是れ天命の性・氣質の性と善惡兩般に分ち來るなり。而今天命の性を知る者、氣質の性裏より認め來り思量し了る。氣質の性は是れ「天命之れを性と謂ふ」ものなり。此の間髮を容れず。

或ひと問ふ、天地の性と天命の性と異なることありや。師曰はく、天地の性・天命の性、先儒一つに之れを論ず。予が所謂天命の性は、這箇の理氣妙合して、妙用あるの天命なり。中庸に曰はく、「天命之れを性と謂ふ」と。天地の性は天地生々息むことなきの生氣、相成りて人の性と爲るなり。先儒只だ性善を以て天地の性と爲し、天に於て命と爲す、故に天命の性と曰ひ、各〻性善を的とす。此の性氣質に因つて成り來る、何ぞ差別せんや。

（一）首章

或ひと問ふ、天地も亦這箇の性あるべし、人天地の正氣を稟けて、而今各自の性も亦天地の性に同じ。然らば天命本善の性相備はるべし。師曰はく、天地人物は理氣の妙合を出でず、天地は理氣妙合の至れるなり盡せるなり。其の妙用亦然り。人物は天地の間萬物の一品なり、理氣妙合太だ微にして、其の妙用も亦然り。只だ人は物より秀づるのみ。故に這箇の眇身の理氣妙合も亦天地を以て論ずべからず。其の妙用比喩するに足らず、企て及ぶべからず。此の性焉んぞ天地の妙用の如くならんや。天地は天地を以て之れを論じ、人物は人物を以て之れを論ず。然して人は萬物に靈長たるなり、格物致知の極、竟に聖人の地位に至るときは、殆ど天地に參たるべし。其の功を窮めずして、己が性を以て天地に思量計校し來らば、太だ差謬せん。

或ひと問ふ、大抵幼兒の間は、其の氣質混然として、其の性外誘の私なし。是れ天命の性氣質の爲に蔽はれざるなり。成人に及んで氣質雜駁して全からず、私欲外物の蔽日に長じ、本然の性竟に是れが爲に昏まさる、是れ氣質の性なり。師曰はく、性は氣質に因つて其の差あり、其の證幼長の際に在り。幼稚の時は氣質未だ全からず、柔弱幽微なり。其の性も亦全からず、情の發する所甚だ寡し。若し幼兒の性質を以て全

しと爲し、天命の性と爲さば、天命の性甚だ昏く、甚だ通ぜざる底なり。彼の幼兒感通知識に薄くして、父兄を知ることとなく情欲を分つことなし、只だ飲食・笑語・啼・嬉戲するのみ。是れ等を以て天命の性と爲さば、天命の性更に善を以て言ふべからず、明を以て言ふべからず。幼兒に外誘の私寡き者は、氣質未だ全からず、其の性も亦然り。故に情の發するや甚だ全からざるなり。長成するに及びて氣質日に備はる、其の性も亦然り、故に情の發するや初めて全きなり。是れ氣質に因つて性を論ずべきの謂なり。凡そ形氣あるの類皆此の如し。各〻形氣に因つて其の性あり來る。形氣に因らざれば性の言ふべきなし。人赤子幼兒を以て混全の質と爲し、天命の性全と爲す。若し長成底にして嬰兒の行を爲し來らば、這箇の愚昧不肖の童蒙なり。是れ他れをして感通知識を失却し、事物の禮容を遺忘せしめ、竟に人倫をして禽獸たらしむるの敎なり。

或ひと問ふ、朱子曰はく、「生ながらにして知る者は氣極めて淸みて理の蔽はるることなし。學んで知るより以下は、則ち氣の淸濁に多寡あり、而して理の全きと闕くることは焉に繫る」と。是れ朱子氣質の性を謂ふなり。師曰はく、此の節說き得て好し。

然れども氣と理とを以て差別を爲す、故に氣質の外に性を以て一箇の物と爲して論じ來るなり。只だ氣極めて清めば、其の性も亦清む、性の感通知識は氣の清濁に從ふなり。「理蔽はるることなし」の言、性善を以て宗と爲ればなり。

或ひと問ふ、而今盜跖が徒も亦盜が惡たることを知る。氣質の蔽ふ所に因つて盜跖が徒と爲ると雖も、本と天命の性あるに因つて、盜の惡たることを知る所あり。是れ氣質・天命兩般の差尤も見るべし。師曰はく、盜を以て惡と爲るは、是れ止むを得ざるの究理なり。我れ既に之れを知識す、故に而今盜跖が徒と爲ると雖も、盜の惡たるを知りて之れを恥づるなり、雖ひ古の戒を知らずとも、理を盡して詳に思ふときは、簒奪の惡なることを知識すべし。是れ人の性は理に厚きの謂なり。理を盡して詳に思はずと雖も、性は自知の謂に非ず、故に盜の惡たるを知るを以て、性善を見るべきの謂には非ず。凡そ國を竊み郡を侵すの侯伯は草業を以て譽名と爲し、(一)鉤を盜み篋を胠くの小盜は賊の名を以て恥汚と爲す。皆世の習俗にして、性も亦之れに從ふ。氣質は俗に因つて易り、性は氣質に因つて差ふこと、以て見るべし。

或ひと問ふ、北溪の陳淳曰はく、(三)「大抵氣の清を得る者は、那の理義を隔蔽せず、便

(一) 小盜の喩、荘子に出づ。
(二) 前出二一二頁參照。
(三) ここに引ける語は、周濂溪集卷一、太極圖說の附解中に出づ。

ち露呈昭著す。銀盞中に淸水を滿ち貯ふるが如く、自然に透見す。盞底の銀花甚だ分明なり、未だ嘗て水あらざるが若く然り。賢人は淸氣を得ること多く、濁氣は少く、淸中微しく些の査滓の在るあるも、未だ便ち能く他れを昏蔽し得ず、聰明も也た開發し易き所以なり。大賢よりして下は或は淸濁相半し、或は淸底は少く濁底は多く、昏蔽し得て厚くし了る。盞底の銀花子看れども見えざるが如く、見得せんと欲せば、須らく十分に澄治の功を加ふべし。若し能く力め學ぶ者は、氣質を變化するを解し、昏を轉じて明と爲す。一般の人あり、稟氣淸明にして理義の上に於て儘看得し出して、而も行爲篤からず、道理を乘載し得ること能はず、多く詭譎を雜ふ。是れ又質を賦すること粹ならず。此れ井泉の甚だ淸く貯へて銀盞に在るが如く、裏面も亦底に透つて淸徹するも、但だ泉脈淤土惡木の根中より穿過し來り、味純甘ならず、之れを以て白米を煮れば赤飯と成り、白水を煎ずれば赤湯と成り、茶を煎ずれば酸く澁し。是れ惡味ありて夾雜し了るなり。又一般の人あり、生下し來つて世味に於て一切簡淡にして、爲す所甚だ純正なるも、但だ與に道理に說到する處、全く發し來らず。是れ又質を賦すること純粹にして氣を稟くること淸からず。此れ井泉脈の味純甘絕佳にして、泥土

渾濁あり了つて、終に透瑩ならざるが如し。溫公(一)の恭儉力行篤く信じて古を好むが如き、是れ甚だ次第正大なるも、資質只だ那の至淸の氣を少くに緣つて、識見高明ならざるなり。又一般の人あり、甚だ好く道理を說くも、只だ是れ執拗にして自ら一家の意見を立つ。是れ氣を禀くること淸中なれども、箇の一條の戾氣を被り來つて衝拗し了る。泉脈の出で來つて甚た淸きも、却つて一條の別水を被つて橫に衝破し了り、反つて險惡の流と成るが如し」と。是れ等の比喩、天命氣質の差を說き出すこと分明なり。

師曰はく、陳淳が水泉の譬說き得て詳なり。見來れば水は皆土地に因つて淸濁を異にす、土地を措いて淸濁の論ずべきなし、是れ性は氣質に因つて論じ來るなり。別に天命の性の論ずべきなし。且つ銀盞に淸水を滿ち貯ふるの事未だ審ならず。人皆理氣妙合して此の質を成す。理は是れ淸に屬し、氣は是れ濁に屬す。大聖君子と雖も此の形氣あるときは、未だ嘗て形氣の習來なくんばあらず。大聖君子も亦飮食睡眠色情動作悉く固有す、是れ形氣に就きて來る底の情なり。色の美を見るときは則ち美を知り、聲の佳なるを聞くときは則ち佳を知り、好色を好み惡臭を惡むは天下の通情なり。美を見て知らず、佳を聞きて辨ぜざるは、是れ金石瓦礫の非情なり。已に其の美惡を知

（一）司馬溫公、前卷四三頁參照

識するときは、氣に厚き底は陷溺し、理に厚き底は節に中る。是れ君子・小人の差ふ所なり。節に中るの極、竟に睽なきに到る、是れを聖人と爲す。故に大聖君子も亦氣質に就くの情欲なくんばあるべからず。銀盞の中に淸水を滿ち貯へ、自ら盞底の銀花子を透見して、呈露昭著するの說、喩へ得て實ならざるなり。假令一般の人あり、洒落高潔なること光風霽月の如きも、亦君子の執らざる所なり。只だ性は感通知識するのみ。理に厚きときは、澄治の功を加へ、淸濁を節にし氣質を變じ、昏を轉じて明と爲す。是れ敎に因つて道を修むるに在るなり。

或ひと問ふ、唯り氣質の性に善惡ありと言ふときは、復た天地の性あらず。子思子又未發の中を言ふことは何ぞや。師曰はく、子思子の所謂未發の中は、喜怒哀樂の情未だ發せず、湛然無爲にして物欲の偏著する所なし、故に之れを中と謂ふ。若し未發の中を求め、未發の時を存養し來らば、中ならざるなり。呂氏曰はく、當に未發の前を求むべし。朱子曰はく、未發の時を存養す。今の學者靜坐を求め世事を厭ひ、切に默靜して以て未發の中を存せんと爲す、既に大いに動了す。是れ節に中らざるなり。靜なるときは則ち中、動くときは則ち節に中る、這箇是れ格物致知誠意正心なり。後儒性善天命の性を認め、未發の中を併せて、以て

之れに據りて手を下す。其の言ふ所危く、其の行ふ所節に中らず、子思子の所謂中和に通ぜんや。人の性是れ性なり、安排を加ふべからず。

或ひと問ふ、目に視耳に聞く、此れ氣質の性なり。然して視ることの明かなる所以、聽くことの聰き所以は、抑も氣質の性か、抑も義理の性か。潛室の陳氏(一)曰はく、「目の視耳の聽くは物なり、視ること明かに聽くこと聰なるは物の則なり。來問は物則に施すべく性を言ふに施すべからず。若し性を言はば、當に聲を好み色を好むは氣質の性、聲を正し色を正すは義理の性と云ふべく、義理は只だ氣質の中にあり。但だ義理を外にして獨り氣質に徇ふは非なり」と。此の説如何。師曰はく、陳埴も亦朱子の門人なり、說き得て詳なり。愚謂へらく、目に視耳に聽き、視ること明かに聽くこと聰く、聲を好み色を好み、聲を正し色を正すは、各〻性の發なり。然して只だ目に視耳に聽くは、是れ觸れ來るなり、故に感通知識せず。「見て見えず、聞いて聞えず」(二)の謂なり。聞かんと欲し見んと欲するは、是れ性の動用なり。故に視聽感通知識せずといふことなく、其の間昏明あり來ることは氣質に因つてなり。聲を好み色を好むは氣に厚きなり、聲を正し色を正すものは理に厚きなり。陳埴が所謂物の則は已むを得ざるの

(一) 陳埴、宋代永嘉の人、字は器之、少くより葉適を師とし、後朱子に師事す。朱子の弟子のつきて學ぶもの多く、潛室先生と稱す。弟子との問答を集めし木鐘集の外、禹貢辨・洪範解等の著あり

(二) 古本大學傳第八章、本全集第十一卷一六四頁參照

謂か。目是れ明かに耳是れ聽きは、是れ耳目の理の已むを得ざるなり。實の聰明を得るに至つては、便ち格物致知せずんば竟に得べからず。「天烝民を生ず、物あれば則あり」[三]と、是れ事物各〻事物の極處あるなり。氣質の性を以て惡と爲し、天命の性を以て善と爲す、故に聲を好み色を好み、聲を正し色を正すを以て之れを別つなり。然して便ち聲色を好まざる底は、是れ氣質の性なからんや。

或ひと問ふ、朱子曰はく[四]「氣禀に拘はるれば只だ一路を通じ得るもの極めて多樣なり。或は此れに厚くして彼れに薄く、或は彼れに通じて此れに塞がる。人能く盡く天下の利害に通じて而も義理を識らざることあり、或は百工技藝を工にして而も書を讀むことを解せず、或は親に孝あるを知りて、而も他人に薄し。明皇[五]の諸弟を友愛するが如く、長枕大被[六]身を終るまで變ぜず、然も君と爲しては其の臣[七]を殺し、父と爲しては其の子[八]を殺し、夫と爲しては其の妻[九]を殺す。明皇三子罪なきを以てして、一日に之れを殺し、子婦[一〇]一朝に之れを奪ひ、張九齡[一一]を罷め周子諒を殺す。此の三者は人倫の大綱なり。便ち是れ通ずる所ありて蔽はるる所あり。是れ他れの性中只だ一路に通じ得たり。故

(三) 詩經大雅、烝民篇に出づ (四) 朱子語類卷四、性理一に出づ (五) 唐の玄宗皇帝 (六) 長き枕、大きなる衾、兄弟共に寢ぬるに宜しきもの。玄宗太子となる、嘗て長枕大衾を作ると、兄弟仲よかりしを唐書にいへり (七) 下の割註の周子諒、玄宗に仕へて監察御史たり、帝の旨に忤ひて死を賜ふ。舊唐書卷九玄宗本紀下に出づ (八) 臣下の讒によりて皇太子瑛・鄂王瑤・光王琚に死を賜ふ、舊唐書卷九玄宗本紀下開元二十五年の條に出づ (九) 開元十二年十月王氏廢后せられて死を賜ふ。王后、子なかりしを以て廢せられんことをおそれて符厭の事ありといふ。舊唐書卷五十一に出づ (一〇) 玄宗の子壽王の妃たりし楊大眞を奪ひしをいふ、太眞は即ち所謂楊貴妃なり (一一) 曲江の人、字は子壽、開元中、同平章事中書令たり、諫めて罷めらる。帝後にその先見の明に服して祀る。曲江集あり

に他處に於て皆礙はるなり。是れ氣稟なり、是れ利害に昏み了るなり」と。朱子の此の論氣質の性を說くなり。師曰はく、性は是れ理氣の妙用なり、敎に因らずと雖も、理氣の厚薄に隨つて感通知識する所あり。敎に因らざるが故に唯だ一偏の得る所に通じて、聖人の大要に通ぜず。此に於て見來れば、性は氣稟に因つて感通知識あり、堯舜の性に到りては、格物致知して情の發する皆節に中るに在り。敎に因らざれば聖人の道を知らず、聰明事々に敏き底あるも、亦他處に於て皆礙はるなり。聰敏を以て天命の性と爲すか、純粹を以て天命の性と爲すか、高明を以て天命の性と爲すか。這箇の聰明純粹高明共に以て氣質なり。發して皆節に中るの地位は、敎に因つて道を修するにあらざれば得べからざるなり。

或ひと問ふ、人の生質には萬品あり、其の差何を以て之れを知らん。師曰はく、人の生質は二氣五行を出でず、其の本を推すときは陰陽にして、其の用は五行に在り。金木水火土の過不及厚薄、各々萬差の品を爲せり。木氣に厚き底は木氣の理に通じ易く、四行皆然り。質に厚き底は質の重きに通じ易し。彼の禽獸は質に厚し、故に能く質の用に通ずること以て見つべし。朱子曰はく、(一)「今人聰明にして事々曉る者あり、其

(一) 朱子語類卷四、性理一に出づ

(二) 第二十章

の氣清めり、而して爲す所未だ必ずしも皆理に中らざるは、則ち(是れ)其の氣醇ならざればなり。謹厚忠信なる者あり、其の氣醇なり、而も知る所未だ必ずしも皆理に達せざるは、則ち是れ其の氣清まざればなり」と。愚謂へらく、聰明謹厚共に皆氣質あり、理に中らず、理に達せざるの異なるあり。便ち教に因つて道を修せざればなり。

或ひと問ふ、子が說に因れば、天性の善不善を論ぜず、唯だ教に因つて道を修するを以て本と爲すなり。然らば便ち內に標的の固有するなくして、只だ外に向つて學び來る底なり。中庸に所謂生知安行(三)の說と違ふことあるに似たり。師曰はく、氣質の禀くる所正しければ、理氣の妙用感通知識も甚だ聰明厚正なり、是れ生知安行なり。生知と稱すと雖も、問はず學ばざる底は、何を以てか感通知識せんや。若し問はず學ばざる底にして感通知識する者あらば、一箇の妖物なり。學は唯だ天地聖人を以て標的と爲す。天地聖人又我れに外ならず、堯舜も亦人なり。學何ぞ外に向つて學び去らんや。

或ひと問ふ、堯を以て父と爲して丹朱あり、鯀を以て父と爲して禹あり。凡そ人の子多く父母に類し、又類せざるもあり。如何。師曰はく、人の生は只だ理氣の妙合な

り、是れ天の命にして而今父母に託するなり、故に感ずる所に因つて、或は父母に類し或は父母に類せざるなり。各〻天命の致す所、人の作爲する所に非ず。然して天又人に因る、是れ乃ち理氣の相合ふなり。

或ひと問ふ、子が說に因れば、天命の性・氣質の性、何れの裏面を執り了らん。師曰はく、人の性は只だ性なり、其の本を推せば便ち天の命人をして此の理氣の妙用を禀受せしむるなり。氣質の性と謂ふときは、須らく天命の性を論ずべし、故に唯だ性と曰ふのみ。天命・氣質を論じ來るも、更に聖學に功なく紛擾の說を起すに足れり。才に理を謂ふときは乃ち氣之れに附く、已に氣と謂ふときは便ち理之れに附く。若し間隔して言ふときは、理氣妙合すべからず。後學專ら文義を執へ、且つ宋儒の說に據つて、今愚の說く所を信ずべからず、是れ習來の久しきなり。學者聖人の道に志し聖人の言に據つて、深く思ひ詳に學びて、初めて予の說く所を信ずべし。

或ひと問ふ、氣質既に天命なり、變ずべからず。然らば便ち敎も亦效なきか。師曰はく、理氣の妙合は天焉れを賦與せしむ、其の厚薄清濁は作爲すべからず。然して人は理に厚し、故に人の氣質を禀く。物は氣に厚し、故に物の氣質を禀く。其の因る所

此の如く、其の性の感通知識する所亦然り。是れ人の教に因つて道を修し、道を修して性に率ふ所以なり。其の間人にも亦氣に厚きあり、又理に厚きの至りなるあり、是れ上智と下愚と移らざるの謂なり。古來幼よりして善なるあり、幼よりして愚なるあるは、是れなり。（一）后稷の克く岐に克く嶷たり。（二）揚食我始めて生れて、人其の必ず若敖氏（羊舌氏）を滅さんことを知るの類なり。凡そ人の氣質は多く是れ中人の質なり。中人は教習に因つて竟に善不善を遂ぐ、是れ氣質を變ずるなり。然れども能く聖人の道を究めざるときは、氣質は裏面に伏し了る。

或ひと問ふ、橫渠の張氏曰はく、「（三）形ありて而して後に氣質の性あり、善も**て**之れを反するときは、天地の性存す」と。（四）上蔡の謝氏曰はく、「其の性は本と一なり、安んぞ變ずべからざること之れあらん。先儒已に氣質を變ずべきの說あり」と。下愚と雖も亦變ずべきや。師曰はく、先儒の所謂氣質を變ずべしとの說は、皆性善を認め來れり。我が性元と天地の性なり、氣質を變ずるときは本性に復るの謂なり。是れ天命氣質を差別するの紕繆に因れり。大抵天質は氣に厚き底あり、又從來の習染に因るあり。氣に厚き底の者は、其の氣質殆ど禽獸に近し。教に因り其の大要を知ると雖も、竟に天

（一）詩經大雅生民の什にあり。后稷幼よりして不稷の資に天分ありしをいへる詩の一句なり。岐も嶷も共に植ゑられし植物の長大にして秀でたるにいへり

（二）國語晉語八に出づ。即ち「揚食我生る、叔向の母之れを聞き、往きて堂に及び、其の號くを聞くや、乃ち還りて曰はく、其の聲は豺狼の聲なり。終に羊舌氏の宗を滅さん者は、必ず是の子ならんと」。揚は叔向の邑、食我は叔向の子伯石なり、羊舌氏はその氏なり。果して魯の昭公二十八年に食我亡ぶ、分註の若敖氏は、左傳宣公四年の條に、楚の子良、子越椒の生れしところに全く同じ事項あり、この家若敖氏なるを以て誤りしなるべし　（三）前出二二三頁參照　（四）謝良佐、宋時代の學者、程伊川の門人、世に上蔡先生と稱す

地の誠を全うすべからず。從來の汚染に因る底は、敎化久しうして新にすべし。大抵人は皆從來の汚染に因り來る。故に聖人德を施すときは其の化久しうして其の命維れ新なり。先儒の說に因りては、人皆聖人に到るべし。堯舜を君として鯀[1]四凶あり。孔子を師として顏[2]・曾が外は大賢亞聖に到らず。子貢・子路は其の志最も深く其の親炙久し、而も其の地位又杳なり。是れ氣質の氣に厚きは、聖人と雖も能はざる所あり。禽獸の人に於けるが如きは、其の類又別なり。故に禽獸は能く人の及ばざる底の術を爲すと雖も、竟に義理の大用に到るべからず。是れ性は氣質に因つて差あればなり。子思子曰はく[3]「博く之れを學び審に之れを問ひ、愼んで之れを思ひ明かに之れを辨じ篤く之れを行ふ。學ばざることあり、之れを學んで能くせずんば措かざるなり。問はざることあり、之れを問うて知らずんば措かざるなり。思はざることあり、之れを思うて得ずんば措かざるなり。辨ぜざることあり、之れを辨じて明かにせずんば措かざるなり。行はざることあり、之れを行ひて篤からずんば措かざるなり。人一たび之れを能くすれば己れ之れを百たびし、人十たび之れを能くすれば、己れ之れを千たびす。果して此の道を能くすれば、愚なりと雖も必ず明に、柔なりと雖も必ず强し」と。是

(一) 四人の惡人、即ち共工・驩兜・三苗・鯀をいふ

(二) 顏淵と曾子

(三) 中庸第二十章

れ教に因つて道を修するの謂なり。本然の善を認めて之れに反らんと欲するときは、學の教聖人の思に違ひて多く異端の説に鶩せん、尤も翫味すべし。

或ひと問ふ、先儒曰はく、「孟子の説未だ備はらざるを以ての故に、程門氣質の説を發す」と、然りや。師曰はく、宋儒の謂ふ所は、「孟子專ら義理の性を説くときは、惡歸する所なし」と。是れ性を論じて氣を論ぜざるなり。孟子の説未だ備はらずと爲し專ら氣禀を説くときは、善別つことなしと爲す。是れ氣を論じて性を論ぜざるなり。程子は氣質を兼ねて性を論ず、是れ宋儒性善を認め、天命の性を未發の中と爲し、人の本然と爲す。此の如く見來れば、發して節に中らざるの情歸すべき所なし。故に別に氣質の性を謂ひて、其の惡を氣質と曰ひ、其の善を天命と曰ひ、初めて性兩般に分別し來れり。然れども兩般と爲すべからざるの處あり、故に又之れを兼ね説けり。聖人終に此の性を指示せず、孟子止むを得ずして堯舜の性を言ひて善と爲し學の的と爲す、而も猶ほ情上に就いて説き出す。是れ情上を措きて性の論ずべきことなければなり。後學聖賢の微意に通ぜず、切りに性の本然を以て學に入るの工夫と爲し來れば、必ず善と謂ひ難き底あり、故に氣質を以て之れを詰るなり。甚だ錯雜して易簡に非

ず。豈聖門の教ならんや。且つ孟子の說備はらずと爲る者は、其の意味未だ通ぜざるなり。

或ひと問ふ、張子が所謂天地の性は、天地の本然を指すか。師曰はく、天地は命を以て之れを論ずべし。已に性と曰ふ、乃ち天地の人に賦與するの性なり。張子は此の性を以て天地に比すべしと爲す、故に天地の性と曰ふなり。釋氏の是心是佛是れなり。

九一　諸子の性を說くを論ず

師曰はく、告子曰はく、「性は猶ほ杞柳湍水のごときなり」と。又曰はく、「生之れを性と謂ふ、食色は性なり」と。公都子曰はく、「告子曰はく、性は善なく不善なし」と。或ひと曰はく「性は以て善を爲すべく、以て不善を爲すべし。是の故に文・武興るときは民善を好み、幽・厲興るときは民暴を好む」と。或ひと曰はく「性善なるあり不善なるあり。是の故に堯を以て君と爲して象あり、瞽瞍を以て父と爲して舜あり、紂を以て兄の子と爲し且つ以て君と爲して微子啓・王子比干あり」と。此れ等の性を說くや、孟子之れを辨じて盡せり。他れは只だ已れが性を以て認め來る、故に此の數

(一) 前出二四一頁參照
(二) 孟子告子上篇首章・第二章。杞柳は、水邊に生ずる柔軟なる枝の杞柳を矯めて、桮棬に爲るがごとしといふ意、即ち性は敎に因つて善に移るの意。湍水は、性は早瀨の如く、東に出口を作れば東に、西につくれば西に流る。性は習慣によつて移るの意
(三) 同第三章・第四章
(四) 同第六章、公都子は孟子の弟子
(五) 同第六章
(六) 周の文王・武王の聖君
(七) 同幽王・厲王の暴君

說あるなり。告子が大旨は只だ是れ善なく不善なしの一句、言ふこころは是れ惡的の物に非ず、亦是れ善的の物にあらず、爲すを待つて然る後に善惡ありと。故に杞柳湍水の喩あり、而して其の根源は則ち生之れを性と爲すより來れり。其の說所以あるに似たるも、是れ只だ己れが性を認め來るの說なり。故に孟子堯舜の性を以て之れを辨析す。

師曰はく、荀卿(一一)が性惡篇に曰はく、「性は惡なり、其の善なる者は僞なり」と。荀子自己の性を認め來るに、多く氣質に蔽はるる所あるに因つて、竟に性惡を以て論を立つ。朱子曰はく(一二)、「荀(一三)・揚・韓の諸人是れ性を論ずと雖も、其の實は只だ氣を說き得たり。荀子は只だ不好(人)底の性を見得て、便ち惡と說き做す」と。愚謂へらく、荀子も亦性を說けり、氣を說くに非ず。只だ聖人の性を期せずして凡愚の性を以てす、故に氣質に就いて性惡の說あるなり。

師曰はく、揚子(一四)法言の修身篇に、「人の性や善惡混ぜり、其の善を修すれば善人と爲り、其の惡を修するときは惡人と爲る。氣は善惡に適く所の馬か」と。揚子は性を以

(八) 告子上篇第六章
(九) 紂の庶兄
(一〇) 紂の叔父、微子と共に紂を諫めて災を被る
(一一) 孟子と同時の人、性惡論を以て名高し、荀子の著あり
(一二) 朱子語類卷四、性理一に出づ
(一三) 荀子・揚子雲・韓退之、下に詳なり
(一四) 漢の揚雄、字は子雲、成都の人にして、訓詁よりも先王の道を修むるに志深く、漢代の代表的儒學者にして哲學者なり。法言はその最も見るべき述作にして、學行・吾子・修身・問道・問神等の十三篇より成る。道家の言を借りて儒を說き、又性善惡混淆說を唱へたり

て善あり惡ありと爲す、是れ亦己れが性より說き出す底なり。伊川の程子曰はく、「(一)荀子の性を言ふは杞柳の論なり、揚子の性を言ふは湍水の論なり」と。

師曰はく、韓子(二)原性篇に、「性は生と倶に生ずるなり、情は物に接りて生ずるなり。性の品三あり、而して其の性たる所以の者五。情の品三あり、而して其の情たる所以の者七。曰はく、性の品上中下の三あり、上は善のみ。中は導いて上下せしむべし、下は惡のみ」と。朱子曰はく、(三)「韓子が三品の說、只だ氣を說き得て曾て性を說き得ず」と。陳氏曰ふ、「韓子謂へらく、『人の性たる所以の者五。曰はく仁義禮智信』と。此の語性の字を看得すること端的なるに似たり。但し分つて三品と爲す、又差了せり。三品は只だ氣禀を說き得。然して氣禀は齊しからず、或は相什百千萬す。豈但だ三品のみならんや」。愚謂へらく、韓退之が原性、性たる所以の者五、曰はく仁義禮智信、是れ性の理に發するなり。情又性の發、更に差別すべからず。情は是れ性の發見なり、情上に於て性を言はざれば、性謂ふべき所なし。三品の說を立つる、是れ的當なり。孔子の曰ふ上智・下愚・中人、是れ三品なり。氣禀千差萬別ありと雖も、分ち來れば大底上中下の品を出でず。是れ說き得て好し。性は氣禀を措いて論ずべから

(一) 二程語錄卷十五に出づ
(二) 韓愈、字は退之、南陽の人、昌黎伯に封ぜられしを以て昌黎と稱す、文公は諡なり。操行堅正、詩文に秀でて不朽の篇を殘す、主として八家文中に收む。原性篇も亦その一なり
(三) 朱子語類卷四、性理一に出づ

ず、韓子只だ性の味を知らずと雖も、其の品を分つことは是れ停當[四]なり。

師曰はく、蘇東坡、性を謂ひて曰はく、「[五]堯舜より以來孔子に至るまで、已むを得ずして中と曰ひ一と曰ふ、未だ嘗て善惡を分つて言はざるなり。孟子が性善と道ひてより、而も一と中と支れたり」と。蘇子も亦性の說を知らず、少く意ありと雖も通ぜざるなり。中と一及び善とは異ならず。孟子の性善を道ふは堯舜を的とし來れるなり。

師曰はく、胡文定[六]公曰はく、「性は善を以て言ふべからず、纔に善を說く時は便ち惡と對し、本然の性に非ず。孟子の性善を道ふは只だ是れ贊歎の辭なり。說いて箇の性を好しとするは、佛言の善哉善哉の如し」と。愚謂へらく、安國は性を以て湛然無爲と爲すなり、故に謂へらく、「纔に善を說く時は便ち惡と對し、本然の性に非ず」と。如何なるか是れ本然の性なるや。安國一話頭を擧げ來れども、聖人の教に非ず、且つ性善を以て贊美の辭と爲す、善の字太だ輕忽なり。孟子の說は重きこと善の字にあり。

師曰はく、五峯[七]の胡氏曰はく、「凡そ人の生は粹然たる天地の心にして、道義全く具はり、適[八]もなく莫もなく、善惡を以て辨ずべからず、是非を以て分つべからず」と。

(四) 穩當の意

(五) 朱子語類卷百一に出づ、但し抄出

(六) 胡安國、宋代の人、字は康侯、高宗の時中書舍人となり、侍講を兼ぬ。卒して文定と謚す。清節の士なり。春秋傳・通鑑擧要補遺等の著あり、この語朱子語類卷百一の抄出なり

(七) 胡宏、安國の子、字は仁仲、楊時・侯仲良に事へて、勉學二十餘年。官に仕へず。張栻はその門人なり。世に五峯先生と稱し、知言・詩文集等の著あり、この語、朱子語類卷百一に、知言の引用句として出づ

(八) 論語里仁篇第十章に出づ、適は執著すること、莫はその反對、可もなく不可もなしといふが如し

愚謂へらく、性は道義全く具はるときは、是れ善なり。惡を以て名づくべからず、非を以て言ふべからず。胡宏の說正しからざるなり。

師曰はく、邵子(康節)曰はく、「性は道の形體なり、道は妙にして形なし。性は則ち仁義禮智具はりて體著はる」と。或ひと性は道の形體なることを問ふ。朱子曰はく、「性は人の禀受する所の實、道は事物當然の理なり。事物の理固に性に具はれり。但だ道を以て言ふときは沖漠散殊にして、其の實を見るなし。惟だ之れを性に求めて、然して後に其の道たる所以の實、初めて此(ここ)に外ならざることを見る。中庸に所謂『性に率ふ之れを道と謂ふ』も、亦此れを以て言ふのみ。(一)康節の這の數句極めて好し。蓋し道は卽ち理なり、父子親あり君臣義あるが如き是れなり。然れども性に非ずんば何を以てか理の在る所を見ん。故に曰はく、『性は道の形體、仁義禮智は性なり理なり』と」。(二)陳淳曰はく、「道は是れ性中の理なり」。「道は是れ泛(ひろ)く言ひ、性は是れ自家の身上に就いて說く。道は事物の間に在り、如何ぞ見得せん。只だ這裏に就いて之れを驗(こころ)みれば、性の在る所則ち道の在る所なり」。　愚謂へらく、邵子が此の說未だ審ならず。道と性と渾合(こんがふ)し來りて分明ならず。中庸に「性に率ふ之れを道と謂ふ」の一章、只だ上面よ

(一) 以下は朱子語類卷百に出づ

(二) 前出二一二頁參照。ここに云へるは朱子語類卷百に出で「道は是れ泛く言ひ」以下は實は朱子の語なり

り序(つい)で來れり。學者德に入るの門、先づ教に因つて道を修すべく、道を修して性に率ふべし。如何なるか是れ道ぞ。百姓日用の間須臾(すゆ)も離るべからざる底なり。人行かんと欲するときは道路あり、行かんと欲するは是れ性の發動にして、行くには必ず道を以てす。道違ふときは效あらず、故に道の正を以てす。道の正に至るには、必ず教に因らざれば惑ふ。是れ中庸の序なり。凡そ道と性と同じからず。「性已に發して節に中る」、「未だ發せざるを中と曰ふ」、是れ動靜の道なり。性は動靜の主なり。主動くときは道を以てし、主靜なるときも亦道を以てす。這箇の道は格物致知に在り。格物致知は是れ教に因るなり。邵子以爲らく、「萬物の道源此の裏面に具はる。然も此の性は自家の身上に在りて象を著はす、故に道の形體を爲す」と。性何ぞ衆理を具へ來らん。凡そ事物の間格物致知せずして誠意正心の應あらんや。是れ皆性の本然を認め來るの通病なり。釋氏心を指して自家の寶藏と謂ひ、無位の眞人と謂ふ、亦之れに異ならず。

師曰はく、延平[三]の李氏曰はく、「惟だ靜を未だ始より動あらざるの先に求めて、性の靜見るべし。眞を未だ始より僞あらざるの先に求めて、性の眞見るべし。善を未だ始めより惡あらざるの先に求めて、性の善見るべし」と。朱子曰はく、「靜の字を謂ふに

（三）李侗、宋代南劍の人、字は愿中、羅從彥に學び、清貧にして學を樂しむ。朱子師事せしことあり、延平先生と稱す。文靖と諡す。延平問答・語錄等あり

至りて、天性の妙を形容する所以なり。蓋し性は動靜の理を該ねて具へずといふことなし。専ら靜の字を以て形容するときは、反つて性の字を偏却す。既に靜を以て天性と爲すは、只だ未だ物に感ぜざるの前、私欲未だ萌さず、渾て是れ天理なるを謂ふのみ。必ずしも靜の字を以て性の妙と爲さざるなり」と。愚謂へらく、李侗專ら胸中の洒落を事とし、「性の靜見るべし」等の語甚だ高尙なり。其の意未發の前に就いて存養し見來る底なり。未發の前に於て存養する底、是れ已發なり。未發の前は只だ中なり。若し未發の前を見んと欲せば、是れ中ならざるなり。凡そ性の靜を謂ふ、是れ異端の靜寂を弄し精神を觀ずるなり。終日終夜默思靜坐すと雖も、寸陰の格物致知には如くべからず。明道曰はく、「人生れて靜なる（以）上は說く容からず、纔に性を說く時は便ち已に是れ性ならず」と。伊川曰はく、「其の本は眞にして靜なり」と。是れ等の話頭說き來つて弊あり。

師曰はく、横渠の張子曰はく、「太虛より天の名あり、氣化より道の名あり、虛と氣とを合せて性の名あり、性と知覺とを合せて心の名あり」と。愚謂へらく、名義甚だ密なり。性は理氣の妙用、今虛と氣とを合せて性の名ありと曰ふ、是れ理氣に因つて

（一）二程語錄卷一及び朱子語類卷九十五に出づ

（二）張載、前出一四五頁參照。この語張子全書卷二正蒙太和篇に出づ

性の名あるなり。氣質の性を說くに至つて、乃ち未だ審ならず。聖學と謂ふべからず。

師曰はく、明道の程子曰はく、「性[三]と天道とは子貢も亦得て聞くべからず。蓋し要は默して之れを識るに在り」と。又曰はく、「[四]天地の大德を生と曰ふ。天地絪縕して萬物化醇す。生之れを性と謂ふ。[五]告子の此の言是にして、犬の性は猶ほ牛の性のごとく、牛の性は猶ほ人の性のごとしと謂ふは非なり。生之れを性と謂ふ、性は卽ち氣なり、氣は卽ち性なり、生の謂なり」と。愚謂へらく、「生之れを性と謂ふ」の生、理氣を指し來るときは、是れ理氣の妙用生々の理なり。「性は卽ち氣なり、氣は卽ち性なり」、此の語未だ審ならず。性は只だ妙用にして、理氣に合して之れを言ふべし。「默して之れを識るに在り」の語、靜を欲するの謂なり。明道の學其の識見甚だ高し、故に數〻高尙に鶩するの弊あるなり。

師曰はく、朱子曰はく、「[六]性は卽ち理なり、心に在りては性と喚做し、事に在りては理と喚做す」と。又曰はく、「[七]生の理を性と謂ふ」と。又曰はく、「[八]伊川が謂ふところの、『性は卽ち理なり』の一句、直に孔子より後に惟だ伊川說き得て盡せり。這の一句便ち是れ千萬世性の根基を說く。理は是れ箇の公共底の物事なり。不善を解會せず、

(三) 論語公冶長篇第十二章、「子貢曰、夫子之言性與天道、不可得而聞也已矣」をいふ

(四) 二程語錄卷八に出づ

(五) 孟子告子上篇第三章にこの問答あり。告子の語は、「生之謂性」の一句なり

(六) 朱子語類卷五、性理二に出づ

(七) 同前

(八) 朱子語類卷九十三に出づ

人不是を做すは、自ら是れ失了す、性は却つて壞了せず、著修せよ」と。愚謂へらく、

朱子中庸の章句に曰はく、「性は卽ち理なり」[一]と。是れ程子の說に因つて之れを攄む。今其の說天下に充てり。案ずるに、性を以て理と爲す、是れ性善を本とし、性を以て天地萬物の理と爲すなり。凡そ事物の間未だ嘗て其の理あらずんばあらず、此の理なきときは事物用ふるに足らず。人此の性なきときは一死物なり。是れ性を以て理に比するの謂なり。然らば便ち性は卽ち理と謂ふべからず、人の性あるや猶ほ事物の理あるがごとしと謂ふべし。朱子の所謂理は直に天地の理を指し來る。是れ一箇の不善なき底、卽ち性善の謂なり。然らば乃ち性と理とは別ならず、尤も錯雜し來れり。聖教の所謂理は然らず。人物止むを得ざるの理あり。是れ乃ち理なり。父子の親・君臣の義・夫婦の別、各〻止むを得ざるの理にして至公なり至大なり。事物の間格物致知し來れば、皆當然の理あり。所謂物あれば則あるなり。父子の親ある、君臣の義ある、夫婦の別ある、豈性豫め此の數箇を具へんや。止むを得ざるの則を以て窮め得る底、便ち止むを得ざるの理あり。此の理感通知識する底是れ性なり。何ぞ性と理とを以て之れを一にせんや。且つ性は理氣相合の妙用なり。理を以て性と爲せば、便ち這箇の

(一) 第一章冒頭の句の註なり

氣は性に屬せざらんや。氣をして發動せしむる底又別の性あらんや。彼の禽獸の偏塞は天理の全なきも、性なしと謂ふべけんや。是れ性を以て天理の全體と爲し、竟に氣質の性を論じ、理の發する所、氣の動く所を別ちて、天命の性・氣質の性と爲すなり。此に於て學者自己の性を以て天地同體の全と爲し、未發已發の間を味ひて其の心性を知らんと欲し、甚だ高尙の話頭と爲し來れり。聖學異端に陷溺し、後儒日用の效を闕く底、悉く這箇の失却に因れり。凡そ性は各〻形氣に隨つて妙用あり、形質は是れ理氣の妙合に隨つて人の形質を受け、便ち人の性あり。物の形質を稟くれば便ち物の性あり。人物は其の形質甚だ異なり、故に其の性も亦差ふ。況や天地の形質は人物に同じくすべからず、其の妙用豈人物に同じからんや。人の性を以て天地の理全く具はると爲すこと、其の差謬至れり。學者性の本善を見んと欲せば、性日に遠ざかり道竟に隱る。是れ見んことを欲するの性の外に、又天理の性なければなり。

師曰はく、朱子曰はく、[一]「性中只だ仁義禮智あるのみ」と。伊川云はく、「天地は精を儲（たくは）へ五行の秀を得る者を人と爲す、其の本は眞にして靜なり。其の未だ發せざるや五性具はれり」と。臨川の吳氏[三]曰はく、「此の理天地に在るときは、元亨利貞是れなり。

（二）朱子語類卷四、性理一に出づ
（三）吳琮、前出二一〇頁參照

其の人に在りて性と爲るときは仁義禮智なり」と。又曰はく、「程子の『性は卽ち理なり』の一語、正に是れ世俗性の字を錯認するの非を鍼砭(一)し、大に功ありと爲す所以なり」。或ひと問ふ、「性既に形なく、復た言ふに理を以てす、理も亦見るべからず」。朱子曰はく、(二)「父子には父子の理あり、君臣には君臣の理あり」と。西山の眞氏(三)曰はく、「性の體を以て言ふときは仁義禮智信と曰ひ、性の用を以て言ふときは、君臣の義・父子の仁・夫婦の別・長幼の序・朋友の信なり、其の實は一のみ。天下豈性外の理あらんや」と。愚謂へらく、仁義禮智信は五行の秀理なり。性は是れ理氣の妙用にして、理氣は二氣五行是れなり。故に理に厚きの人は其の情仁義に發し易し。五者全く發し來りて其の誤なきに至るには、格物致知せざれば全きこと能はず。所謂五の者は是れ五行の理なり。君臣義あり、父子仁あり、夫婦別あり、長幼序あり、朋友信あり、是れ五倫の間に於て格物致知して、已むを得ずして出で來るの理なり。性何ぞ是れ等無窮の理を含藏し來らんや。性は能く虛靈にして感通知識す、故に審に思ひ明かに辨じ來れば、性便ち感知す。之れを見るに性中這箇の衆理あるに似たり。諸儒皆此の關に至りて直に透り得ず、此の地位を以て性を認めて理と爲すなり。然して世間億兆の人

(一) 治療

(二) 朱子語類卷五、性理二に出づ

(三) 眞德秀、宋代、浦城の人、字は景元、又景希。理宗の時參知政事に拜して卒す。文忠と諡す。學者西山先生と稱す。治績あり、朱子を宗とし、その正統を維持するに力む。大學衍義の名著あり

民、古に今に格物致知せずして、作用全く備はり事物全通する底、未だ嘗て一人も在るあらず。是れ性は此の全德を具へざることと見るべし。先儒も亦此の疑あるに因り、是れ等を以て氣質の蔽と爲し、竟に天命の性・氣質の性を別ちて兩般と爲す。學者宋儒の助長を以て執弄し來り、格物致知を措いて性の本善を認得せんと欲す。其の紕繆從來殆ど千載に向(なんな)んとして、後人悉く聖人の言を思はず、宋元明の諸儒に據る。今此の蓬蔽を闢(ひら)かんと欲すれども尤も難し。

師曰はく、朱子曰はく、「『人生れて靜なるは天の性なり』とは、人生の初め未だ感あらざるの時、便ち是れ渾然たる天理なりと言ふなり。『物に感じて動くは性の欲なり』とは、其の感あるに及んでは、便ち是れ此の理の發するなりと言ふなり」。(四)樂記に曰はく、人生れて靜なるは天の性なり。物に感じて動くは性の欲なり。 愚謂へらく、樂記に謂ふ所は、性の動靜なり。人生れて靜なるは、形氣全からず、其の性靜にして動かず、是れ天命の性なり。既に形氣全く物欲感じ來れば、是れ性の感動なり、天の性を以て認め來ること甚だ過了なり。是れ聖人の道を以て一話頭と爲して擧示し來るなり。那箇の聖人是れ等の言行を以て學的聖學と爲し、門人問者に擧する底あらんや。一言一字を執へて全教を失却する、是れ性を認めて意

(四) 禮記の篇名

見を立つるの差謬なり。

師曰はく、朱子余方叔に答ふる書に曰はく、「(一)枯槁も理あり」と。愚謂へらく、朱子は理を以て性と爲し來る、便ち枯槁も亦性あるなり。性は理氣の妙用あるなり。這箇の枯槁何の性かあらんや。然らば乃ち今蠻夷に死屍の久朽せるを以て藥を爲る底あり、人死しても亦此の性あらんや。大黃(二)・附子(三)の類皆氣に厚し、故に枯槁猶ほ枯槁の用あるなり。大底是れ一箇の用處も亦理なり。此の理を以て性と爲し來らば、乃ち魚鳥の嘉殺たる、一截の肉も亦美味の理あり。是れ性と爲すべけんや。理の性と爲すべからざること以て見るべし。

師曰はく、或ひと問ふ、「性は日月の如く、氣の濁れるは雲霧の如きか」と。朱子曰はく、「然り」と。愚謂へらく、是れ等の說甚だ差了す。是れ性善を認め來る底なり。日月は天地の間陰陽の精なり、性は天地理氣の妙用にして、這箇の運行昇降ある底なり。雲霧も亦天地の間未だ嘗て無くんばあるべからざるの物なり。理氣あるときは乃ち天地あり、天地あるときは乃ち這箇の日月雲霧あり、日月雲霧ありて而して後に雨露霜雪の用あり。日月ありと雖も雲霧なきときは全からず。這箇の雲霧又已むを得ざ

(一) 朱子語類卷四、性理一に出づ

(二) 藥草の名、根は下劑となる

(三) 毒草の名、とりかぶと。その老根を普通にふしと稱して、神經痛・リユウマチスの鎭痛劑に用ふ

る底、拂拭せんと欲するも得べからず。宋儒性を以て善と爲し理と爲し、氣質を除却せんと欲するは、是れ雲霧を除却せんと欲するなり。一生只だ紛爭するも得べからず。故に愚言ふ、聖人も亦氣質の蔽なくんばあるべからず、唯だ情の發して節に中るのみと。天地既に天地の形氣あり、既に形氣あれば乃ち日月雲霧あり、是れ其の氣質なり。其の妙用は是れ天地の性なり。天地已に理氣に因るときは、已むを得ずして晴曇明晤あり、風雨霜雪あり。其の節に中るや人物宜を得、其の節に中らざるや人物宜を得ず。宜を得ると宜を得ざるとは、妙用の與り附する所なきなり。

師曰はく、南軒(四)の張氏曰はく、「太極は善ならずといふことなし。故に性も亦善ならざることなし」と。愚謂へらく、太極は衆象已に具はりて眹なきの謂なり。見來れば善惡動靜謂ふべきなし。敬夫(五)は性を以て太極と爲し、性と太極と幷せて之れを知らざるなり。

師曰はく、象山(六)の陸子が曰はく、「一段の血氣あれば、便ち一段の精神あり、此の精神ありて却つて用ふること能はず、反つて以て之れを害す。精神運らざれば愚なり、血氣運らざれば病あり」。朱濟道(七)に示して曰はく、「請ふ尊兄卽今自立正坐し手を拱し

(四) 張栻、宋代の人、衡陽に住す。字は敬夫又樂齋。吏部侍郎に至る、宣と謚し、南軒先生と稱す。南軒易說外著書多し

(五) 南軒の字

(六) 陸象山、前出一六五頁參照、この語象山先生全集語卷三十五、語錄に出づ、但し後の二句なし

(七) 朱桴。宋代金谿の人、濟道はその字、弟と共に陸象山に師事したり、象山先生全集卷三十五、語錄に出づ

て精神を收拾し、自ら主宰と作れ、萬物皆我れに備はれり、何ぞ欠闕あらん」と。又徐[一]中誠、教を請ふ、陸子、孟子の「萬物皆我れに備はれり、身に反りみて誠なるは、樂焉れより大なるは莫し」[二]といへるを思はしむ。仲誠堂に處ること一月にして、一日之れに問うて曰はく、「仲誠、孟子を思ひ得たりや、如何」と。仲誠答へて曰はく、「鏡中に花を觀るが如し」と。曰はく、「見得たり、仲誠や、是れ此の如し」と。左右を顧みて曰はく、「仲誠は眞に善く自ら述ぶる者なり」と。因つて說き與へて曰はく、「此の事他に求むるに在らず、只だ自家の身上に在り」と。楊慈湖[三]は象山が門人なり。慈湖曰はく、「心の精神是れを聖と謂ふ、此の心虛明にして體なく、洞照すること鑑の萬物畢く其の中に見えて藏る所なきが如し」と。又曰はく、「人心は澄然として清明なること、鑑の萬象畢く照して動かざるが如し」と。又曰はく、「渾々融々として萬象畢く水鑑の中に見ゆるが如し」と。愚謂へらく、陸氏が學は此れ正に精神を弄すること、殆ど異端の說に同じ。華嚴經[四]に言ふ、「第一眞空絕相觀、第二事理無礙觀、第三事々無礙觀、譬へば、鏡燈の類の如く、萬象を包含して、究め盡すことあるなし」と。傳燈錄に謂ふ、「盡十方世界、是れ自己の光明、盡十方世界、自己の光明の內に在り」と。

（一）象山の弟子、宋元學案は仲誠に作る、この問答、象山先生全集卷三十四、語錄に出づ
（二）盡心上篇第四章
（三）楊簡、字は敬仲、樂平縣に知として、盜なく、路に遺を拾はざるに到り、民楊父とよべり。文元と諡す。學者慈湖先生と稱す。象山に師事して楊氏易傳の外著述多し
（四）全集第二卷修教要錄、卷之四、陸學の條參照

是れ等の語意に相同じ。是れより性心を認め得て、切に手を下して工夫し來る、尤も差謬せり。朱子甚だ焉れを折開す。然れども衆理を具へて萬事に應ずる底を以て明德と爲し、天地の理を以て性と爲すときは、朱子の性を論ずるも亦同じ。其の間陸子には仙家の所謂長生久視の說あり、精神を以て要と爲るのみ。

師曰はく、王陽明曰はく、「道は卽ち性、卽ち命なり、本然完々全々として增減することを得ず、修飾を假らざる的なり」。又曰はく、「或ひと問ふ、『性は卽ち理なりと。然りや』と。曰はく『理は脈絡微密條派分明なり。天下の理皆然り。而して性の字は生に從ひ心に從ふ、則ち人心具ふる所の生理なり。性は乃ち定石にして理は虛位たり、性は靈を含みて能く應じ、理は體を具へて爲すことをなし。性は郛郭(五)の中に存し、厥れ惟れ恆に乘る。理は事物に隨つて各々不同あるに在り。性卽ち理なりと謂ふことは未だ敢へて然らず。且つ性卽ち是れ理ならば、理は卽ち是れ性なり。而して世に倫理と稱する者あるも、亦之れを倫性と謂ひて可ならんや。文理と稱する者あるも、亦之れを文性と謂ひて可ならんや。固に識るべきのみ』。」王陽明人に答ふる書に云はく、(六)「不思善不思惡の時に本來の面目を認めよ。此れ釋氏の未だ本來の面目を識らざる者の爲

(五) 大きなる郭、或は保障の意

(六) 傳習錄卷之中、陸原靜に答ふる第二書抄出、第二卷修敎要錄卷之四、王學の條參照。但し抄出

に此の方便を設くるなり。本來の面目とは卽ち吾が聖門の所謂良知なり。物に隨ひて格すとは、是れ知を致すの功にして、卽ち佛氏の常惺々(一)も亦是れ常に他れの本來の面目を存するのみ。體段工夫大略相似れり。但だ佛氏は箇の自私自利の心あり、始めて不同ある所以のみ」。又人に答ふる書に曰はく、(二)「聖人致知の功は至誠息むことなし、其の良知の體は皦かなること明鏡の如くにして、妍媸の來るや、物に隨つて形を見はし、明鏡曾て留染なし。所謂『情は萬事に順つて情なき』なり。(三)『住する所なくして以て其の心を生ず』と。佛氏曾て是の言あり、未だ非と爲さず。明鏡の物に應ずる、妍き者は妍く媸き者は媸し。一たび照らして皆眞なり、卽ち是れ其の心を生ずる處なり。妍き者は妍く、媸き者は媸く、一たび過りて留まらず、卽ち是れ住する所なきなり」。諸生に示す詩に云ふ、「(四)爾が身各々自ら天眞なり、用ひず、人に求め更に人に問ふことを。但だ良知を致して德業を成すのみ、謾りに故紙に從つて精神を費さんや。乾坤是れ易原と畫に非ず、心性何の形ありてか塵あるを得ん。道ふなかれ先生禪語を學ぶと、此の言端的に君が爲に陳ぶ」。又無題(五)の詩に云ふ、「同來我が安心の法を問ふ、還つて心を將るを解き汝と與に安し」。安心の說は傳燈錄に達磨が二祖に示すに本づけり。(六) 王龍溪(七)曰はく、「春秋の世、佛氏寂

(一) 傳燈錄に出づ、惺々は本心の明覺なるを云ふ
(二) 傳習錄卷之中、答陸原靜書小跋に出づ
(三) 金剛經に出づと云ふ
(四) 原詩次の如し「爾身各々自天眞、不用求人更問人、但致良知成德業、謾從故紙費精神、乾坤是易原非畫、心性何形得有塵、莫道先生學禪語、此言端的爲君陳」
(五) 王陽明全集卷二十、外集二に出づ、全文次の如し、「嶽頭有石人、爲我下嶙峋、脚踏破履五十兩、身披弊衲四十斤、任重致遠香象力、

發術坐霽金剛身、夜寒雙虎與温足、雨後禿龍來伴宿、手握頑磚鏡未光、舌底流泉梅未熟、夜來拾得遇寒山、翠竹黃花好共看、同來問我安心法、還解將心與汝安」
（六） 雪中達磨に法を求めて小林寺に行き斷臂して入門せし慧可禪師なり
（七） 王畿、明代浙江山陰の人、字は汝中、王陽明の門弟にして、龍溪先生と稱せられ、「全集」・「語錄」あり
（八） 提出し説明す
（九） 前卷二三七頁參照
（一〇） 張九成、宋代、錢塘の人、子韶

滅を以て性と爲す。子思性を言ふは乃ち天命なり、吾が性は則ち天性なり。人は天地の中を得て以て生ず。本と吾が心生々として息まざるの理、此れ之れを性と謂ふ。豈寂滅の謂ならんや」と。愚謂へらく、王陽明一派の學、大概陸子に同じ、共に佛氏の禪機より說き出し來る。只だ象山は禪機深密にして遮掩するに工なり、故に學者他れの破らるることを知得し難し。陽明が若きは、大段漏露し分明に招認して、多く佛祖の語を拈出し來る、其の異端に陷溺して直に見性作用を欲すること見るべし。言を容るるを待たざるなり。

師曰はく、後儒聖人の道を以て心學と爲す、故に曰はく、「聖賢の學は心學なり、禪學・陸學も亦皆自ら謂ふ、心學なり」と。是れ等の說是に似て甚だ非なり。是れより彼れ性心を弄し工夫を凝し、終に性善天命の性を認得して高尙の話頭を爲し、靜坐默識して心通せんことを欲す。是れ本來の面目の話を提撕（八）し來ると更に異ならず。聖人の道は只だ人の道を盡すのみ、別に這箇の模樣なし、後世の饒舌勞口、種差の辨を設く。茲に於て聖人の道竟に泯沒す。

師曰はく、孔叢子（九）に曰はく、「心の精神是れを聖と謂ふ」。張子韶（一〇）が曰はく、「覺の一

字、衆妙の門」。陸象山曰はく、「即心是れ道、精神を收拾すれば萬物皆備はる」。楊慈湖曰はく、「鑑中の萬象」。又詩に、「此の道元來即ち是れ心」。陳白沙(一)曰はく、「一片の虛靈萬象存す」。王陽明曰はく、「心の良知是れを聖と謂ふ。無善無惡は心の體なり」。又曰はく、「那の能く視聽言動する底便ち是れ性なり、便ち是れ天理なり」と。釋氏は「識心見性」と曰ひ、「淨智妙圓」と曰ひ、「神通妙用」と曰ひ、「光明寂照」と曰ひ、「作用是性」と曰ふ。先儒這箇の數說は、其の異端の謂ふ所を去ること遠からざるや以て見るべし。或ひと曰はく、「陸氏・陽明は知覺精神を以て性心と爲し、釋氏も亦然り。周・張・程・朱は天理の本善を以て性と爲す。是れ朱陸氷炭の差なり」と。愚謂へらく、陸氏・陽明も亦精神性心を以て本然の明白と爲す、是れより作用して道と爲し良知と爲す。何ぞ只だ精神知覺を以て性と爲さんや。周・張・程・朱は其の間書を學んで義理を存するを要し、陸氏・陽明は其の間直に指示するを以て用と爲す。是れ五十步百步の間にして、其の性の本善なるを以て標的と爲すに至るは一なり。性の本善を以て標的と爲すときは、此の性より發し來る底を以て皆良能と爲す。故に楊慈湖の訓語に曰はく、「吾が目に視、耳に聽き、鼻に嗅ぎ、口に嘗め、手に執り、足に運ぶ、

はその字。秦檜と和せず、流謫十四年、訓解の書多く、孟子傳・橫浦集あり。朱子これ等の書を斥く

(一) 陳獻章、明代、新會の人、字は公甫、白沙里に居りて學を講ず、門人白沙先生と稱す。書畫にも巧にして、白沙集などの著あり

（二）巻百二十六に出づ。但し語に折略あり。以下又全集第二巻修教要錄卷之四、浮屠の條參照
（三）朱子語類卷百二十六釋氏の條に出づ
（四）地名、今の浙江省麗水縣
（五）葉子奇、元末明初、浙江龍泉の人、字は世傑、靜齋と號す。王毅に從學し、靜を主と爲す。草木子の外太玄本旨・靜齋集の著あり。草木子は四卷、管窺・觀物・原道等八篇にして、天文地理人事物理等の微義に亙る
（六）迦葉尊者、釋迦の十大弟子の一人。

大道の用に非ずといふことなし」と。是れ性の作用を善と爲すの謬なり。宋儒は性の靜を認め性の本善なるを見、未發の中を存養し、義理を以て性と爲し、性の本善に歸らんことを要す、是れ亦性の作用に至らんことを欲するの底なり。其の詞華言葉差別あるに似て、其の實を推せば便ち共に性善の一途、而して性を以て天理と爲し道と爲すの謂なり。

師曰はく、朱子語類に曰はく、「釋氏(二)は專ら作用を以て性と爲す。問ふ、『如何なるか是れ佛』。曰はく、『性を見るを佛と爲す』。曰はく、『如何なるか是れ性』。曰はく、『作用を性と爲す』。曰はく、『如何なるか是れ作用』。曰はく、『目に在りては見と曰ひ、耳に在りては聞と曰ひ、鼻に在りては香を嗅ぎ、口に在りては談論し、手に在りては執捉し、足に在りては運奔す。遍く現(げん)ずれば倶に法界を該(か)ね、收攝(しうせつ)すれば一微塵に在り。識る者は是れ佛性なることを知る、識らざれば喚んで精魂と作(な)す』」と。又曰はく、「(三)佛氏原と曾て這箇の理の一節を識らず、便ち知覺運動を認めて性と做す」と。龐居士(はうこじ)曰はく、「神通妙用、運水搬柴」と。草木子(四)（元の括蒼の(人)葉子奇(五)の著）に曰はく、「釋迦は青蓮花を拈し、(六)迦葉は呵々微笑してより、此れによりて機を示して直に達磨に至り、能く作用するは

德望高く釋迦入寂の後、經典の結集を大成す

(一) 宋代の僧、字は曇晦、妙喜庵に住み、孝宗より大慧の號を賜ふ。臨濟正宗記・正法眼藏の著あり。この僧侍郎等に與へし答書は、大慧書問と稱して一卷を成し、參學の好書なり

(二) おそれ驚く

是れ佛性なりと說き出す。此れより禪宗は皆此れを祖とす」と。愚謂へらく、是れ等の佛氏の性を說くや、釋氏を以て太だ麁義と爲す。彼の釋迦・達磨是れ等の麁義を以て這箇の宗門を立てんや。其の說く所太だ密にして而も大底を以て之れを辨ずべからず。凡そ作用を以て性と爲すの說は、作用又性に非ずと爲すべけんや。此の性なきときは乃ち何物ありて此の作用を爲し來らん。作用も亦性の一用なり。釋氏の作用を以て性と爲す、豈大なる謬ならんや。且つ彼れ悟了すれば、乃ち運水搬柴も皆性の作用節に中ると爲す。故に見性を佛と爲し、未悟了を以て之れを謂はず。悟了すれば是れ天地同一體、此の性通ぜずといふことなし。此の性は只だ天地の性にして、本來一物の有ることなし。見來れば塵埃の惹くべきなく、只だ色身を認め情念に隨ひ來り、竟に這箇の塵埃あり。今悟了する底は本來無一物の地位に歸り、更に別所に至るに非ず。馳せ求むれば乃ち遠し、是れ禪の敎なり。宗杲(一)が曾侍郎に答ふる書に曰はく、「尋常の計較安排底は是れ識情、生死遷流底に隨ふも亦是れ識情、怕慞惶底(二)も亦是れ識情。而して今參學の人是の病を知らず、只管裏許に在りて頭出頭沒し、敎中に所謂識に隨つて智に隨はず。故を以て本地の風光本來の面目を昧却す。若し或は一時に放下して思

（三）忽ちに脱落して眞髄に觸ること

（四）眞空

量計較せず、(三)忽然として失脚し鼻孔に蹋著すれば、卽ち此れ識情、便ち是れ眞空妙智なり、更に別智の得べきなし。若し別に得る所あり證する所あらば、又却つて不是なり。人の迷ふ時の如きは、東を喚びて西と作し、悟時に至るに及んでは卽ち西便ち是れ東にして、別に東のあることなし。此の眞空妙智は大虚空と壽を齊しくす。只だ這の大虚空の中に還つて一物の他を礙げ得るありや否や。一物の礙を受けずと雖も諸物空中に往來するを妨げず。此の眞空妙智も亦然り、凡聖は垢染一點を著くるを得ず、著け得ずと雖も生死・凡聖中に往來するを礙げず。此の如く信得し及び見得し徹する、方に是れ箇の生を出でて死に入り大自在を得る底の漢なり」と。宗杲が是の說は識情は眞空妙智を兼ぬるを差別し、性の體を以て眞空と爲し、作用を以て性の用と爲す、卽ち此の識情便ち是れ眞空妙智、煩惱卽菩提、湛然常寂、應用無方。用にして常に空、空にして常に用。(四)用にして有ならず、卽ち是れ眞空。空にして無ならず、卽ち妙有を成す。妙有卽摩訶般若、眞空卽清淨涅槃。是れ等の說、中庸の大本達道の說と太だ相似たり。故に大底の理を以て辨ぜんと欲すとも、亦破却すべからず。後儒の佛說を以て無眼子の說と爲し來るは、自己の無眼子たるを知らざるなり。愚謂へらく、釋氏は

出世間を以て趣向と爲し、竟に無常觀を以て念じ來る。故に世間彝倫の用、格物致知の功、日に闕け月に却く。若し思量究理する底あれば、情識計較と爲して一時に放下せんと欲す。眞空妙智を建て本來の面目を認め、悟時には西卽ち是れ東、何れの所にか南北あらんとす。是れ乃ち眞空是れ乃ち無差別、若し這箇の世間あり來れば、乃ち情識あり。是れ祖師禪の別傳なり。是れより作用是性の說を立て、節に中り道を修する底を以て模樣と爲し、規範と爲し、形よりして下なる者と爲す。是れ見性を認得し、向上の意味を附するの謬なり。聖人の道は日用の外を論ぜず、止むを得ざるの誠を本とす。是れ天地の大道を以て見得し來ればなり。異端の說に因るときは、全く成り得ても更に日用の功なく天下の益なく、天地の當然に背く。而も彼の釋氏如何ぞ須らく日用を離却して此の氣質の習來を放下すべけん。只だ口を信じて辯を利くするのみ。凡そ天下の人物理氣合生あるの類、氣質の習情日用の當然を離るべからず、離れ來る底は一箇の死物なり。是れ釋氏止むを得ざるの情を却けんと欲して、竟に能はざる所以なり。

師曰はく、先儒皆云ふ、「釋氏は精神魂魄を認めて性と爲し、這箇の當然の理あるを

知らず」と。愚案ずるに、精神魂魄、知覺運動、各〻性の裏面の一用なり。釋氏は精魂を認めて性と爲し、先儒は當然の理を認めて性と爲す。各〻偏見にして五十歩を以て百歩を笑ふもの、羊を亡ふに到りては一なり。(一)故に精神を弄び性善を味ひ、切に勞役して未發の前を求めて、甚だ聖人の道を失却す。共に異端の偏見なり。

師曰はく、朱子曰はく、「(二)儒者は理を以て不生不滅と爲し、釋氏は神識を以て不生不滅と爲す」。愚謂へらく、釋氏は取捨好惡を以て生滅の心と爲し、取捨好惡なきを以て不生不滅本來無事底と爲す。或は性心の形體なきを以て不生と爲し、色身は亡び去り此の性は壞れざるを以て不滅と爲し、竟に天地萬物壞れ去ると雖も、這箇の不壞底の玄妙、是れ乃ち不生不滅と爲す。然れども便ち釋氏も亦理を以て不生不滅と爲し來るなり。案ずるに、天地の間は二氣五行の流行のみ。人物又天地と壽を同じうして、天地生ずるときは人物生じ、天地壞るるときは人物壞る。此の理此の神識唯だ天地と長久なり。天地人物の外に此の理此の神識あるべからず。故に性去れば質斃れ、質斃るるときは妙用亡ぶ。此の間不生不滅を論ずべきなし。若し天地の理を以てすれば、天地あるときは二氣の流行あり、二氣相合するあれば其の妙用あり、是れ自然の道な

(一) 莊子駢拇篇に曰ふ、「臧と穀と二人相與に羊を牧ひ、倶に其の羊を亡ふ。臧に奚をか事とせしと問へば則ち筴を挾んで書を讀みきといふ。穀に奚をか事とせしと問へば、則ち博塞して以て遊べりといふ。二人の者の事業は同じからざれども、其の羊を亡ふに於ては均しきなり」と

(二) 朱子語類卷百二十六釋氏に出づ

り。這裏より見得し來れば、乃ち理と氣とは天地の固有にして、假託すれば生じ、假託せざれば生ぜず。假託是れ理氣の聚なり。假託せざれば是れ理氣の合せざるなり。聚まるときは妙用あり、聚まらざれば妙用なくして、其の理氣は恆に流行して已まず。是れ質と性と、理と氣と、共に不生不滅を以て之れを論ずべし。唯だ理及び神識を以て不生不滅と爲すときは、是れ差了なり。且つ天地萬物壞ると雖も、此の理及び神識壞れざるの說、太だ紕謬す。此の理と神識とは、共に理氣の爲す所なり。天地萬物破壞し來れば、此の理氣の謂ふべきなし。理氣なきときは、理と神識と何物に因つて之れを論說せんや。這箇の理氣更に間斷なし、是れ亦已むを得ざる所以の理氣なり。故に天地萬物竟に破壞すべきの期なく、天地と萬物と共に不滅なり。天地萬物既に生ずるときは、未發と謂ふべくして不生と謂ふべからず。不生不滅等の語は異端の說く所、其の由つて來る所尤も差謬す。

師曰はく、釋氏の性を謂ふと、後儒の性を謂ふと、其の言は異にして其の實は略ぼ同じ。釋氏は眞空妙智を以て性の體と爲し、作用を以て性の用と爲し、體用一原を以て性の本と爲す。是れ等高尙の工夫、末儒亦及ぶべからず、故に陸象山・楊慈湖・王

陽明・王龍溪各〻邪裏に陷溺す。周子・程子の樂しむ所亦殆ど其の意味に似たり。只だ其の間些子の差あるのみ。聖人其の惑ふべきを知りて之れを言はず。聖人の所謂道は、其の本づく所比の間に在らざるなり。

九二　人物の性を論ず

師曰はく、天地成るときは人物在るあり、人物は各〻天地の理氣を稟く。理氣相合するときは其の妙用あり。唯だ人は理に厚くして其の感通知識する所理に喩し。物は氣に厚くして其の感通知識する所氣に喩し。其の發する所の情、其の感ずる所の應、竟に人物炭氷の差あり。性は其の氣質に隨つて其の情を異にす、情異なるときは性も亦異なり。其の感通知識の妙用に於ては一なり。故に人物は其の氣稟の異なるに因つて、其の性情大いに差了す。物は又其の類其の形に因つて、各〻其の性情を異にす。

師曰はく、先儒皆曰ふ、「人と物と其の性は一なるも、其の形を賦すること偏正にして、固に自ら合下(一)に同じからず」と。愚謂へらく、人と物と其の性一ならず。性は只だ氣質に因つて其の情を異にす。性は感通知識底なり。感通知識は人と物と異ならず

(一) ただちにの意

と雖も、其の發する所感ずる所、氣質に因つて尤も差了す。豈物の性人の性に同じからんや。故に人と物とは其の本天地の理氣に出で、萬物各〻氣に因つて一原を同じくし、萬民各〻理に因つて一原を同じくして、人と物と又理氣を離れず、只だ厚薄の間のみ。是を以て人も亦氣に厚く理に昧きの質あり、物も亦些子の理に通ずるあり。

師曰はく、程子曰はく、「無妄[一]は天性なり、萬物各〻其の性を得、一毫も加損せず」と。朱子[二]曰はく、「天の物を生ずるや一物ごとに一無妄を與ふ」と。愚謂へらく、是れ天理の全體、物も亦之れを具するの謂なり。感通知識は人物同じ、是を以て性は一なりと謂ふは則ち幾ど希し。天理の全體は物未だ嘗て有すべからず。故に曰はく、「氣質に因つて各〻其の情を異にす、其の情異なるときは其の性も亦異なり」と。又曰はく、無妄を以て已むを得ざるの處と爲すは可なり。彼れ又氣質に就き來つて、已むを得ざるの情豈人に異ならんや。唯だ氣質に任せて理に薄きは、是れ物の物たる所以なり。無妄を以て天性の誠と爲さば差了す。朱子曰はく、「[三]人物の生は天之れを賦するに此の理を以てす、未だ嘗て同じからずんばあらず」と。是れ等の語皆物も亦仁義禮智の性ありと爲すなり。

(一) 易の卦名にして、實理自然なることを意味す
(二) 朱子語類卷四、性理一に出づ
(三) 朱子語類卷四、性理一に出づ

師曰はく、人物の性は異なりと說くも亦得たり、同じきと說くも亦得たり。異なりと說くは其の氣禀に因つて性を論ずるなり。同じきと說くは其の感通知識を以てなり。只だ人物各〻理氣の妙用を得と謂ふべし。是れ理氣の相合に因つて自ら其の妙用あるなり。人の性は物の性と同じと謂ふべからず。質異なるときは、性異なるなり。

師曰はく、人物同じく天地の氣を禀け、同じく天地の性を禀く、故に共に氣を一にし性を一にすと謂ふ。然れども二五の合聚是れ天命の因る所にして、其の性は其の氣質に隨ひ來る。物の裏面は竟に人の聖なるなし。若し其の性天理の全體を得來らば、何ぞ物の裏面に這箇の聖明なからんや。旣に物の象を禀くるときは便ち物の性あり。是れ氣質に因つて這の性を成すなり。嬰兒の未だ完からざるや、只だ嬰兒の性あり、成長して形氣完きに及んでは、成人の性あり、以て見るべし。故に形氣に隨つて其の性あるも、性に隨つて這の形氣あるにあらず。是れ性は理氣の妙用にして、理氣を措いて性を論ずべからず。性と質と先後なしと雖も、其の象に因り其の性を成すの道必せり。

九三　或ひと人物の性を問ふを辨ず

或ひと問ふ、程子曰はく、[一]「禽獸と人と絶(はなは)だ相似たり、只だ是れ推すこと能はず。然れども禽獸の性は却つて自然にして、學ぶことを待たず敎ふることを待たず。巢を營み子を養ふが如きの類、是れなり。人は至靈(是)なりと雖も却つて斲喪(たくさう)(核)する處極めて多し。只だ一件あり、嬰兒の飮乳、是れ自然にして學に非ざるなり。其の他は皆之れを誘(あざむ)くなり」と。師曰はく、此の說未だ通ぜず。物と人と其の氣質異にして其の性も亦差へり。故に氣質に因つて已むを得ざるの情、其の理少しく明にして、巢を營み子を養ふが如き是れなり。然れども其の始終豈人に同じからんや。嬰兒の飮乳も亦此の如し。是れ氣質に因つて止むを得ざる底あるなり。氣質全く成るに因つて其の情欲亦盛なり、竟に氣質の爲に儆塞せられ了る。此の間理に厚きは乃ち已れに克ちて禮に復る、是れ人の性物に異なるなり。物は只だ氣に厚く、些子の理を存すと雖も、終に全からず。是れ物の性人に異なるなり。禽獸の巢を營み子を養ひ、嬰兒の飮乳するを以て、天理の全體、性の本善なりと爲すは差謬せり。

或ひと問ふ、[二]呂與叔曰はく、「性は一なり。形を流(し)くの分(わかち)に剛柔昏明なる者ある、性に非ざるなり。三人あり、皆目を一にして色を別にす、一は密室に居り、一は帷[三]箔の

(一) 二程語錄卷三に出づ、行間の傍記は原典による

(二) 呂大臨、宋代、汲郡の人、與叔はその字、初め張載に學び、その歿後二程に師事し、程門四先生の一人たり。博學能文、著に攷古圖十卷あり

(三) とばり、すだれ

下に居り、一は廣庭の中に居る。三人の見る所昏明各〻異なるも、豈目同じからざらんや。其の居る所に隨ひて蔽ふに厚薄あるのみ」。朱子曰はく、[四]「氣質に昏濁の同じからざるありと雖も、天命の性に偏全あるに非ず。謂へらく、日月の光の如き、若し露地に在るときは盡く之れを見るも、若し部屋の下に在るときは、蔽塞せらるるありて、見ゆることあり見えざることあり。禽獸に至つても亦是れ此の性なり。只だ他の形體に拘せられ、生得蔽隔することの甚しき、通ずべき處なし。虎狼の仁、豺獺[五]の祭、蜂蟻の義に至つては、却つて只だ這の些子を通ずること、譬へば一隙の光の如し。獼猴に至りては形狀人に類し、(便ち)最も他物よりも靈なり。只だ說話を會せざるのみ。夷狄に到り得ては、便ち人と禽獸との間に在りて、終に改め難き所以なり」と。又曰はく、[六]「人物の性本と同じ、只だ氣稟異なるなり」と。是れ等人物の性を說得して一なり。師曰はく、性は理氣の妙用なり。凡そ理氣の妙合ある者は各〻性あり、然して人の性と物の性同一なりと曰ふときは不是なり。人には人の性あり、物には物の性あり。物の性も亦天地の大道に通じ得來らば、萬物の間一般の聖なる者なからんや。與叔が所謂三人目を一にして色を別にするの比喩尤も近し。然れども常に帷箔の下に在

(四) 朱子語類卷四、性理一に出づ

(五) 豺は冬籠りの前に、獸を多く捕へて、居所の四隣に陳ぶることあり、世にこれを豺祭といふ。獺、春に氷とけて魚の捕へ易くなるや、鯉魚などを捕へて陳ぬるを、人呼んで獺祭と稱す

(六) 朱子語類卷四、性理一に出づ

りて蔽塞せられ、其の視る所正色に非ざるの目、豈目を一にすと爲んや。是れ氣質の禀くる所、其の性情異なるの所以なり。虎狼・豺獺は、些子の明、一隙の光の如しといへる、若し一隙の光あらば、虎狼・豺獺・蜂蟻も仁祭義の外に亦一隙の光を得べきに、竟に其の光の別に發するなき、是れ彼れ因循して習ふ所なり。獼猴の形體甚だ人に類す、故に其の性人に近し、然して禽獸を離れず、其の性人と異なり。已に夷狄の人倫全く此の質を成し得るも、亦天地の偏氣相聚まりて竟に改め難し、況や物の性如何ぞ人の性に一ならんや。

或ひと問ふ、與叔が曰ふ「物の性は人と異なる者幾くも希し、惟だ塞いで開かず、故に知は人の明に若かず。偏にして正しからず、故に才は人の義に若かず」。師曰はく、人の知明かに才の美なる、是れ天性に非ず、唯だ格物致知し來つて然るなり。格物致知の功あるは、是れ人理に厚ければなり。與叔は性の本善を期し、知明かに才美なるを以て性の有と爲す、尤も差了せり。故に物の性は人と異なる者幾くも希しと爲す。人も亦氣に厚き底は格物致知少し。何ぞ知明かに才美なることあらんや。

或ひと問ふ、物々一太極を具ふるときは、是の理全からずといふことなし。朱子曰

はく、(一)「之れを全と謂ふも亦可なり、之れを偏と謂ふも亦可なり。理を以て之れを言ふときは全からざるなし、氣を以て之れを言ふときは偏なきこと能はず」と。師曰はく、是れ太極を以て理と爲すなり。太極の說、別卷に出づ。凡そ人物の性、各〻以て全くして其の闕虛なきなり。物皆其の則ありて更に差はず。牛は馬たらず、馬は犬たらず、各〻自ら其の性を全くす。理氣の間感通知識底少しも離れず、只だ理に厚く氣に厚きの差あるのみ。若し天地の大德を以て全と爲し來らば、太だ差謬せり。

　或ひと問ふ、朱子大學の或問(二)に於て因つて謂ふ「其の理を以て之れを言ふときは、萬物一原、固より人物貴賤の殊なるなし。其の氣を以て之れを言ふときは、其の正しうして且つ通ずるを得る者人と爲り、其の偏りて且つ塞がるを得る者は物と爲る。是れを以て或は貴く或は賤しうして、齊しきこと能はざる所の者あり」と。此の說如何。師曰はく、人物差別なきを以て理と爲し、其の差別あるを以て氣と爲す底は、未だ理會せざるなり。既に天地あるときは人物あり、人物あるときは貴賤あり。無差別底を謂ふは、是れ異端の眞空なり。聖人の道は尤も差別底を以て論じ來れり、是れ知明かに才美なるの謂なり。且つ理氣相離るるの說は不是なり。只だ人物は同じく天命に出

(一) 朱子語類卷四、性理一に出づ

(二) 或問首章の條に出づ

づ、是れ一原なり。理氣の厚薄は、是れ人物の差にして、其の性を異にする所以なり。

或ひと問ふ、程子曰はく、(一)「人と物と共に此の理あり」と。是れ性は一なるの謂か。師曰はく、人と物と共に理氣の妙合なり、故に此の理あり此の氣ありて、其の形質に因りて其の理氣各〻異なり。理氣人と物と同じきときは、人と物との性も亦一なり。理氣同じからず、故に其の形質異なり。何ぞ共に此の理ありと曰はんや。

或ひと問ふ、大學(二)・中庸首章の或問に、皆以て「人物の生は理同じうして氣異なり」と爲す。而して孟子(三)の注には以て「氣同じうして理異なり」と爲すは何ぞや。朱子嘗て曰はく(四)「萬物の一原を論ずるときは、理同じうして氣異なり、萬物の異體を觀るときは、氣猶ほ相近くして理絕だ同じからず」と。此の說如何。師曰はく、氣異にして理異なるなり。朱子の「理同じうして氣異なり、氣同じうして理異なり」の說は太だ錯亂し來れり。理氣相因つて更に間隔せず。氣異なるときは理異なり、理異なるときは氣異なる、是れ人物の差別する所、天下の事物千差萬別なる所以なり。

或ひと問ふ、徐子融(五)謂はく、「枯槁の中に性あり氣あり、故に附子(六)は熱し大黃は寒す。此の性は是れ氣質の性なり」。陳才卿(七)謂へらく、「卽ち是れ本然の性なり」と。朱子曰

(一) 朱子語類巻九十七程子之書に出づ
(二) 朱子の大學或問と中庸或問の二著に於て、いづれも其の第一章の或問中に、生と氣のことを云へりとの意
(三) 孟子集注告子上篇第三章の註に出づ
(四) 朱子語類巻四、性理一に出づ
(五) 徐昭然、子融は字。宋代、鉛山の人、朱子の弟子、守る所あるを稱せらる、この問答、朱子語類巻四性理一に出づ
(六) 前出二五六頁參照
(七) 陳文蔚、才卿はその字、克齋先生と稱

す。宋代上饒の人。余正叔・朱子等の學を奉ずること篤く、躬行實踐の德に長ず、朱子語類卷四性理一に出づ
(八)(九) 朱子語類卷四、性理一に出づ
(一〇) 大路、大道
(一一) 道の煉瓦
(一二) 竹製の椅子
(一三) 朱子語類卷四、性理一に出づ

はく、「子融(八)は知覺を認めて性と爲す、故に此れを以て氣質の性と爲す。性は卽ち是れ理、性あるときは氣あり、他(か)れ許多の氣を稟け得たり、故に亦只だ許多の理あり。才卿の謂ふ、性に在つては仁なしと。此の說も亦是(ぜ)なり」と。師曰はく、物は氣に厚く、氣は質に屬す、故に物の質能く利し能く長ず。枯槁に及んでも亦其の質人(ひと)を利するは、是れ氣に厚きの證なり。先儒性を以て理と爲し、竟に一物に一用あるを以て一物一理と爲す。是れを以て其の性を論ずること尤も謬れり。性は感通知識の妙用、這箇の死枯底、理氣既に絕す、性と謂ふべからず。朱子曰はく、「天(九)下性外の物なし、行(一〇)衜に因つて云はば、階磚(かいせん)(一一)は便ち磚の理あり。竹椅(一二)に坐するに因つて云はば、便ち竹椅の理あり。枯槁の物之れを生意なしと謂ふは可なり、之れを生理なしと謂はば不可なり。朽木の如きは用ふる所なきも、止だ之れを爨竈(さんさう)に付すべし。是れ生意なきなり。然れども甚麼の木を燒くときは、是れ甚麼の氣なり、亦各〻同じからず。這れ是の理元(も)と此の如し」と。朱子の是れ等の說は一理を以て性と爲し來るなり。

或ひと問ふ、金木水火の用、是れ其の性に非ずや。師曰はく、五行は二氣の形にして各〻妙用の寓する所なり。是れ其の性に非ずや。朱子曰はく、「舟(一三)の如きは只だ之れ

を水に行るべし、車は只だ之れを陸に行るべし」と。朱子道を以て性と爲すの失なり。舟の水に行り車の陸を行るは、皆其の道なり、性を以て之れを論ずべからず。

或ひと問ふ、禽獸草木の萬差、各〻其の由る所ありや。師曰はく、唯だ二氣五行過不及の間、這般の模樣あるなり。朱子曰はく「[一]草木は都て是れ陰氣を得、走飛するものは都て是れ陽氣を得、各〻之れを分てば、草は是れ陰氣を得、木は是れ陽氣を得、走獸は陰氣を得、飛鳥は陽氣を得たり」等說き得て甚だ近し。

或ひと問ふ、動物と植物、其の差如何。師曰はく、動物は血氣ありて殆ど人に類す、故に其の知覺運動、其の感通知識、數〻相似たり。植物は人類に遠く、其の闕處する所尤も多し、然れども亦天地の理氣相因つて其の性を具ふるなり。鳥獸の飛走、草木の根蔕、各〻其の氣に厚きことと見るべし。

或ひと問ふ、人の質甚だ美厚なる、是れ理に薄きか。師曰はく、夷狄の人品各〻質に厚し、其の力其の氣專ら剛勢を得る、是れ氣に厚きなり。故に太だ理に薄し。女子の柔質美容も亦氣に厚し、故に其の理に遠し。是れ天地自然理氣妙合の當然なり。

左傳(昭廿八年)に曰はく、「叔[二]向申公巫[三]臣氏に娶らんと欲す、其の母之れを止めて曰はく、『甚だ

(一) 朱子語類卷四、性理一に出づ

(二) 魯の宣公の母弟

(三) 申公巫臣氏は夏姬の女

美なれば必ず甚だ惡しきことあり』と。(叔向)懼れて敢へて娶らず。平公彊ひて之れを娶らしむ、子伯石を生む。其の母將に之れを視んと欲す、堂に及びて其の聲を聞き還つて曰はく、『豺狼の聲あり、(四)是れ必ず羊舌氏を喪はん』と。遂に之れを視ず」。是れ質に厚きときは理に薄きなり。

或ひと問ふ、(五)北溪の陳淳曰はく、「人の形骸の如きは、却つて天地と相應ず。頭の圓にして上に居るは天に象どる。足の方にして下に居るは地に象どる。北極は天の中央と爲すも、却つて北に在り、故に人の(六)百會の穴は頂心に在るも、却つて後に向ふ。日月の來往は、只だ天の南に在り、故に人の兩眼皆前にあり。海の鹹水歸する所は南の下に在り、故に人の小便も亦前の下に在り。此れ氣の正を得たりと爲す所以なり。物の如きは、禽獸は頭を横にして植物は頭下に向ひ、枝葉却つて上に在り。此れ皆氣の偏處を得」と。此の說如何。師曰はく、是れ先儒の說く所皆此の如し。愚謂へらく、天地の間人物の生、悉く乾を父とし坤を母とす。人物其の形骸各〻天地と相應ずべし。唯だ人の形體のみ相應じて、而も物然らざるべけんや。鳥獸魚鼈の形骸以て見るべし。草木は甚だ氣に厚く、其の質文華あり、故に其の根蔕は皆土に藏れ、其の枝葉は皆上

(四) 左傳本文は、この一句文意異なる

(五) 前出二一二頁參照

(六) 漢法醫學にて百脈の會する箇所、經穴と云ふ、頭頂に在りと

に發す。古人植物の頭は下に向へりと爲す。案ずるに、植物何ぞ頭を下にせんや。植物は氣に厚く質に厚く、其の枝葉花實外に大にして、其の全體を土に藏す、是れ地上發する所の枝葉は皆文華にして、其の本體は土中に在りて見えず、竟に盤根の大を成すなり。若し根を以て頭と爲し、枝葉を以て四體と爲さば、草木の生天地に違ふ。其の枝葉の發するや、氣の逆上なり。萬物は皆天を頂にし地を下にす、草木のみ獨り逆流せんや。只だ質を厚うして文華上に盛なるなり、其の全體は天を上にし地を下にし、土に藏れて見はれざるなり。

或ひと問ふ、人は物に化し物は人に化し、男は化して女と爲り、女は化して男と爲る。思士(一)は妻らずして感じ、思女は夫がすして孕むありと。是れ等の變如何。師曰はく、天地の間其の本は二氣五行にして、其の用は千差萬別なり。人物の品節枚擧すべからず。只だ二氣五行の過不及、或は時に感じ或は處に感じ、或は其の偏塞に感じて、竟に這般の模樣と爲り來れり。是の故に天地の造化究りなく、人物の變化も亦究りなし。然して理氣相合ふときは、其の妙用ある底、更に差別なし。

(一) 列子に出づ、思は慕の意なり

聖學十　性心

九四　心を論ず

師曰はく、理氣相合ひ天地既に分るるときは、人物相成る。是れ天道の流行（此れは理を以て之れを言ふ）にして造化の發育（此れは氣を以て之れを言ふ）なり。凡そ聲色貌象ある者、各〻此の心あらずといふことなくして、而も自ら已むべからず、皆天の賦する所を得て、人の作爲する所に非ざるなり。此の心感に隨つて能く應ず。身の具ふる所を以てするときは、口鼻耳目身體四支の用あり、身の接する所に及ぶときは、君臣父子夫婦長幼朋友の常あり。其の大を極むるときは、天地の運、古今の變、其の小を盡すときは一塵の微、一息の頃（あひだ）、都て是れ天地の妙用にして、人物の性心能く外ならず、能く遺（のこ）さず。大舜曰はく、（二）「人心惟れ危く道心惟れ微なり」。孔子曰はく、（三）「其の身を修めんと欲する者は先づ其の心

（二）書經虞書大禹謨、舜が禹を戒めし言なり
（三）大學、經一章

を正す。(一)顔子は其の心三月仁に違はず」。曾子曰はく、(二)「心焉に在らざれば視れども見えず、聽けども聞えず、食へども其の味を知らず」。孟子曰はく、(三)「仁は人の心なり」。孔子の言を引きて曰はく、(四)「操るときは則ち存し、舍つるときは則ち亡す。出入時なく、其の鄕ふところを知るなし」。又曰はく、(五)「其の心を盡す者は其の性を知るなり」。又曰はく、(六)「學問の道は他なし、其の放心を求むるのみ」。又曰はく、(七)「我れ四十にして心を動かさず」。又曰はく、(八)「豈仁義の心なからんや。其の良心を放つ所以の者、亦猶ほ斧斤の木に於けるがごとし」。易に曰はく、(九)「天地の心を見る」。(一〇)心を洗ふ。(一一)性を盡す」。是れ等の心の說以て見るべし。

師曰はく、人の性は能く生々息むことなく、能く感通知識す。詳に盡し審に思ふときは、許多の道理を包藏し、天地に(一二)彌綸し古今を該括す。推し廣め得來れば蓋天蓋地通ぜずといふことなし。是れ性の妙用なり。其の性形體の間に充ち、方形の指すべきなし。然れども身體の裏に於て、其の舍寓すべきの地、是れを心胸と謂ひ、一身の中央五臟の第一なり。故に此の臟の伏する所を以て胸臆と爲す。此の心は是れ神明の舍り、性情の具はる所、一身の主宰なり。

(一) 論語雍也篇第五章
(二) 古本大學傳第八章
(三) 告子上篇第十一章
(四) 同前第八章
(五) 盡心上篇首章
(六) 告子上篇第十一章
(七) 公孫丑上篇第二章
(八) 告子上篇第八章
(九) 復の象
(一〇) 繫辭上傳第十一章に「聖人以レ此洗レ心、退藏二於密一、吉凶與レ民同レ患」と出づ
(一一) 說卦傳に「窮理盡性、以至二於命一」と出づ
(一二) あまねくなさむ

師曰はく、字書に曰はく、「心は火の藏、身の主、神明の舍なり」と。祝無功(一三)曰はく、「庖羲の一畫直に之れを竪にすれば丨と爲り、左右に之れを倚すれば丿と爲り乀と爲り、之れを縮むれば丶と爲り、之れを曲ぐるときはしと爲る。しと丶は圓にして神なり。一丨丿乀は方にして以て直し。世間字の變化浩繁にして、未だ能く一丨丿乀を外にして、之れを結構する者あらず。獨り心の字動かんと欲し流れんと欲し、圓妙にして居らず、之れを一丨丿乀の外に出づ、更に一字の與に對を作すを索むとも得べからず」。愚案ずるに、心は其の臟火に屬す、是れ生々息むことなく、火の炎上少くも住らず能く流行運動するの理なり。此れに因つて便ち心は是れ生々の氣、人の形體血脈の運動、唯だ此の心に在るのみ。火は少くも住るときは滅す。心は少くも運動せざるときは死す。是れ心は一身の主宰五臟の第一たる所以なり。此の心未だ滅せざるときは、此の身生氣運動す、此の心已に滅するときは、此の身斃る。天地の流行も亦焉れに別ならざるなり。

師曰はく、心は性情を具ふるの謂なり。這箇の性は此の心より感通知識し、這箇の情は此の心より發動し來る。故に其の形よりして上なる者は是れ性なり、其の形より

(一三) 明代、鄱陽の人、字は延之、無功はその號、萬曆の進士なり。耿定向の高弟にして、祝子小言・環碧齋詩集等の著あり

して下なる者は是れ情なり。心は性情の舍、其の象を指すときは心の臟と曰ふ。性は全く方象なし。心は已に方象あるも、又方象すべからず。

師曰はく、心は穀種果心の如し。其の穀種核殼裏一點の中心、是れ則ち心の象なり。一箇の象包藏該載し來る、是れ穀種果仁の心なり。人の心も全く此の如し、故に心を以て五臟の一と爲す。五行に於ては火に屬して生々の氣と爲る。此の心の包藏該載し來る、是れ性情を具ふるの謂なり。

師曰はく、心は性情を具ふ、其の方象を謂ふときは之れを心と謂ひ、其の妙用の所以を指すときは、之れを性と謂ひ、其の發動應用を指すときは、之れを情と謂ふ。其の本は一にして其の殊なるところに心性情あるなり。朱子曰はく、(一)「大抵都て心に主どる。性の字、心に從ひ生に從ふ。古人字を制するも亦先づ心の字を制し得。性と情と皆心に從ふ」と。此れ等の說道ひ得て好し。

師曰はく、程子曰はく、(二)「心は穀種の如し、仁は則ち其の生の性」と。是れ等甚だ理會し了る。張子曰ふ、(三)「心は性情を統ぶる者なり」と。朱子の註に曰ふ、(四)「統は是れ主宰、性は心の理、情は心の用、心は性情の主なり」。孟子（曰はく）(五)「仁は人の心な

(一) 朱子語類卷五、性理二に出づ
(二) 二程語錄卷十一に出づ、伊川の語にして、「心譬如穀種、生之性便是仁也」と見ゆ
(三) 張子全書卷十四及び近思錄道體類にも出づ
(四) 近思錄同前の註に出づ
(五) 告子上篇第十一章

り」。又曰はく、「[六]惻隱の心」と。性情の上に都て箇の心の字を下す。心の性情を統ぶるの義を見るべし。愚謂へらく、心は性情を具ふるの謂なり。心を以て性情の主と爲し來る底は差了す。心は唯だ性情の舍なり。故に性情を論ずるに、都て心の字を以て下し來るなり。横渠の統の字未だ切ならず。

師曰はく、古人皆性情を指して心と曰ふ。大舜の人心[七]・道心、孟子の惻隱の心、皆性情を以て論ずる底なり。是れ心は性情を具ふるの謂なり。人の四支の運動、百骸の應用と、夫の飢ゑて食を思ひ渇して飲を思ひ、夏は葛(かたびら)を思ひ冬は裘(かはごろも)を思ふと、其の已むを得ざるもの、思慮究理して其の節に中るに及びては、是れ乃ち上帝降す所の衷(まごころ)、烝民秉(と)る所の彜(つね)、皆那裏に固有す。是れ心は性情を具ふればなり。心を曰ふときは性情相擧す。邵子[八]が擊壤集の序に曰はく、「[九]心は性の郛廓(ふかく)」と。[一〇]北溪の陳淳曰はく、「心は只だ箇の器に似たり、一般の裏面に貯ふる底の物は、便ち是れ性」と。是れ等の說道(い)ひ得て好し。愚案ずるに、滿腔子是れ生々の氣運動して住らず。其の舍を推すときは、胸臆裏に在りて心の臟たり、一身の主宰たるなり、神明の舍たるなり。

(六) 公孫丑上篇第六章、告子上篇第六章

(七) 前出二八一頁參照

(八) 邵康節撰の詩集。二十三卷附錄一卷あり。邵子全書中に收む

(九) この語は朱子語類第百卷にも引用せり。郛廓は外廓の意

(一〇) 前出二一二頁參照

九五　或ひと心の說を問ふを辨ず

或ひと問ふ、朱子曰はく、「(一)心の物たる、實は身に主とし、其の體は則ち仁義禮智の性あり、其の用は則ち惻隱羞惡恭敬是非の情あり」と。是れ朱子は體用を以て心を論ずるなり。又曰はく、「心に體あり用あり、衆理を具ふるは體なり、萬事に應ずるは其の用なり」と。師曰はく、心は象體あり其の理あり。所謂心の象體とは神明の舍、五臟の一、是れなり。所謂心の理とは生々の氣少く(しばら)も止まらず、故に孟子に「仁は人心なり」といひ、大象に曰はく、「(二)復は其れ天地の心を見るか」といふ、是れなり。心能く運動し血脈能く流行し來り、其の觸るる所能く感通知識するは、是れ心の方象なり、心の理なり。其の理は則ち性、其の用は則ち情、是れ心の性情を具ふるの謂なり。朱子は仁義禮智を以て心の體と爲し、四つの情を以て心の用と爲す。是れ性善より說き出し來るなり。

或ひと問ふ、張子曰はく、「性と知覺とを合せて心の名あり」と。知覺は是れ心か。師曰はく、宋儒皆知覺を以て心と爲し、其の善なるを性と爲す。是れ張子知覺を認めて心と爲る(す)の謂なり。朱子曰はく、「知覺ある之れを心と謂ふ」。又曰はく、「(三)知覺便ち

(一)　大學或問に出づ

(二)　易經復の象

(三)　朱子語類卷五、性理二に出づ。但し纔は靈に作る

是れ心の德なり」。又曰はく、「虛靈自ら是れ心の本體」と。黃榦曰はく、「心の能く性情の主宰たるは、其の虛靈知覺を以てなり」。陳淳曰はく、「性は只だ是れ理なり。全く是れ善にして惡なし。心は理と氣とを含み、理は固に全く是れ善なり。氣は尙ほ兩頭を含み、未だ便ち全く是れ善底の物ならざるに在り」と。是れ等の說は心性を分ち、理の善を以て性と爲し、知覺を以て心と爲す。甚だ差了れり。先儒皆知覺を以て氣と爲す。故に朱子曰はく、「心は氣の精爽」と。是れ皆性心の說未だ分明ならざればなり。凡そ知覺底と理と如何か分別せんや。理は知覺に因つて通じ、知覺は理に因つて應ず。故に感通知覺底は、二氣五行相合の妙用にして、其の善不善は盡究し得るに在り。先儒性を以て仁義禮智の善と爲す、而して其の感通知覺の言ふべき所なきを以て、竟に心を指して知覺の說と爲す。愚謂へらく、心の理是れ性、性は生々止まず感通知識するのみなり。心の方象是れ五臟の一にして火に屬し、心の發動是れ情にして、其の用は格物致知の功に在るなり。

或ひと問ふ、心性は唯だ一なり。程子曰はく、「心は則ち性なり。天に在りては命と爲し、人に在りては性と爲し、主る所を心と爲す。實は一道なり。道に通ずるときは

(四) 同前
(五) 朱子の門人にして女婿なり、勉齋と號す
(六) 朱子語類卷五、性理二に出づ
(七) 二程語錄卷十一、伊川の語に出づ。文字少しく異なる

何の限量か之れ有らん」と。師曰はく、心性豈別ならんや、唯だ其の方象と其の理とを指すなり。然れども限量分別なきときは、混合して通ずべからず。而今擧げて喚ぶときは人と言ふも、人の一身各〻分數あり來る。心も亦此の如し。一擧するときは、心は性・情を具ふ、故に心と曰はば、乃ち性・情相具はる。然れども心と性は混ずべからず。性・情は是れ心の分數なり。伊川曰はく「(二)性の形ある者よりして之れを心と謂ふ」と。說き得て好し。

或ひと問ふ、五行は人に在りて五臟と爲す、然して心は唯だ五行の理を具得す。是れ心の虛靈なるを以てなりと。否や。師曰はく、心は火に屬す。生々の氣流行する底、是れ心の理なり。五臟各〻得ることありと雖も、這箇の運動流行に因りて其の能を施す。是れ心五臟の長たる所以なり。

或ひと問ふ、人心は形よりして上なるか、下なるか。師曰はく、其の體形方象を指すときは、一箇の象あり。是れ形よりして下なり。故に肺肝五臟の一と爲す。其の本理を指すときは、感通知識涉らずといふことなし。是れ形よりして上なるなり。

或ひと問ふ、朱子曰はく「(三)靈なる處只だ是れ心にして、是れ性にあらず。性は只だ

(二)朱子語類卷五十九に出づ

(三)朱子語類卷五、性理二に出づ

是れ理なり」と。師曰はく、知覺を以て心と爲し、理を以て性と爲すの謂なり。心は只だ知覺して理なきときは、人心・道心・正レ心等の説明かならず。且つ知覺も理ならずして何ぞや。只だ性善に泥み來つて、竟に性心を分つこと差了れり。[三]或ひと問ふ、「心は是れ知覺、性は是れ理ならば、心と理と如何して貫通して一たることを得ん」。朱子曰はく、「須らく貫通し去るべからず。本來貫通せり」。問ふ、「如何か本來貫通せる」。朱子曰はく、「理、心なきときは著く處なし」と。是れ朱子も亦理と知覺と貫通を言ふなり。理は則ち知覺なり、知覺は則ち理なり、更に支離すべからず。

或ひと問ふ、朱子曰はく、[四]「心の字一言以て之れを蔽はば、曰はく生のみ」と。此の説如何。師曰はく、心の理は只だ生々息むことなし。觸れ來れば便ち感通知識す。程子云はく、[五]「心は生道なり」と。朱子の此の説、各〻孟子の「仁は人の心なり」の句に因り來れり。天地の妙用本と生々して已まず、人物今天の稟賦に因つて此の天地の心を接ぎ得、方に能く生々の氣あり。是れ心の全體、性の妙用なり。

或ひと問ふ、朱子曰はく、「是の心あれば斯ち是の形を具へて以て生ず、是の心乃ち天地に屬して未だ我れに屬して在らず」と。此の説如何。師曰はく、象あるときは此

(三) 以下朱子との問答、朱子語類卷五に出づ

(四) 朱子語類卷五に出づ

(五) 二程語錄卷十三、伊川の語に出づ

の心あるなり、理氣妙合して其の妙用自在なり。「是の心天地に屬す」の句未だ通ぜず。此の象此の心各〻天の稟賦する所にして、作爲すべからず。

或ひと問ふ、心性情を具ふる、是れ太極象數を具ふるの謂か。然らば乃ち心と太極と別ならずや。師曰はく、太極は這箇の心も亦相具ふるなり。心は只だ性情を具ふ。太極は人物內外始終の間悉く包藏し來るなり。趙致道[一]謂へらく、「心を太極と爲す」と。林正卿[二]が「心は太極を具ふ」と謂ふを、致道擧げて以て問を爲す。朱子曰はく[三]「這般の處極めて細かにして說き難し。看來れば心に動靜あり、其の體は則ち之れを易と謂ひ、其の理は則ち之れを道と謂ひ、其の用は則ち之れを神と謂ふ」と。朱子の此の說は、心に動靜あるを以て太極と言ひ難く、動靜亦太極より出で來るが故に、太極にあらずとも言ひ難しとなり。是れ太極の說明相差了(あやま)ればなり。朱子且つ曰はく[四]「太極は心の理なり。心の動靜は是れ陰陽」と。是れ性を以て太極と爲すなり。

或ひと曰はく、朱子嘗て心の說を著はす、如何。師曰はく、朱子は虛靈知覺を以て心と爲し、仁義禮智を以て性と爲し、敬を主とするの功を說き來る、尤も學者に益あるに似たり。愚謂へらく、凡そ心は言の容るべきなし。學者の力行は只だ格物致知に

(一) 趙師夏、致道はその字、遠庵と號す。朱子の門人にして、師に許されし學者なり。
(二) 林學蒙、一名羽。正卿はその字、朱子の門人、龍門庵に學を講じて鄕人を教ふ。
(三) 朱子語類卷五、性理二に出づ
(四) 朱子語類卷五、性理二に出づ

在り。切に心の說を著はす底は、是れ心を甘んじ性を弄するの徒なり。夫子曰はく、(五)「其の心を正すには其の意を誠にするに在り」と。是れ聖人の教なり。更に心の說くべきなし。朱子心の說を著はし道ひ得て好しと雖も、其の本已に聖教に違へり。

九六　心の應用を論ず

師曰はく、心の應用を論ずるに情意思慮を以てす。情の節に中り意の誠ある、思慮の理を詳かにする、各〻格物致知の功に在り。故に(六)大舜の十六字、危微を以て其の機を正し、允に中を執るを以て其の教を戒む。夫子は心を正し其の意を誠にするを以て其の序と爲す。情意思慮是れ盡し是れ誠なるときは、此の心實に天地と其の大を同じうして、萬物通ぜざる所なく、顯微を一にし表裏を徹し、始終間なく、毫髮も差ふことなし。格物致知し來らざれば、氣禀の値ふ所に拘はり、耳目身體の欲に繫がれ、此の心形器の間に梏られて、天地の大公に違ひ、萬物の品節を失ふ。其の感通知覺、其の生々息むなき、唯だ是れ己が私の爲にして萬物の上に伸びず、常に情欲の下に屈し、無知の禽獸と更に差ふことなし。是れ日用の工夫格物致知の間に在る所以なり。

(五) 大學經一章

(六) 書經大禹謨の「人心惟危、道心惟微、惟精惟一、允執厥中」政治の根本主義にして、殊に朱子學の尊重するところなり

師曰はく、中庸を以て孔門傳授の心法と爲し、堯舜禹受授の十六字を以て、萬世心學の源と爲す。心法心學の說、後儒因循して之れを論ず。此に於て聖人の學其の機已に異端に入り、竟に心學の妙を味ひ、存心の用を成し、格物致知の功初めに失却し來る。[一]西山の眞氏曰はく、[二]「大舜の十六字、萬世心學の源を開く」と。臨川の呉氏曰はく、「心學の妙、周子・程子其の祕を發してより、學者始めて悟る所あり、以て其の心を存するの功を致す。周子曰はく、[三]『欲なきが故に靜なり』。程子曰はく、[四]『主あるときは則ち虛なり』。此の二言は萬世心學の綱要なり」と。是れ等の說、聖人の道を以て心學心法と爲すの差了なり。

師曰はく、明道の程子曰はく、[五]「學者全く此の心を體すれば、學未だ盡さずと雖も、若し事物の來るときは應ぜずんばあらず、但だ分限に隨つて之れに應ずれば、中らずと雖も遠からず」と。伊川の程子[六]朱張文に答ふる書に曰はく、[七]「心、道に通じ、然して後に能く是非を辨ず。權衡を持して以て輕重を較るが如し」と。朱子曰はく、[八]「間獨り惟だ念ふ、昔延平先生の教を聞き、以爲らく、學を爲すの初め且つ當に常に此の心を存すべし、他事の爲に勝たるること勿れ」と。愚謂へらく、是れ等の說は詳に說き下

（一）眞德秀
（二）呉澂、前出二一〇頁參照
（三）通書聖學篇
（四）二程語錄卷九、伊川の語
（五）二程語錄卷二、朱子語類卷九十六、程子之書にも出づ
（六）字は伯原。書を著はして仕へず、鄉人を教化せり
（七）近思錄致知類に出づ
（八）朱子語類卷百四に出づるも文字やや異なる

さざる底にして、多くは心を體認するに陷溺す。「此の心を體すれば中らずと雖も遠からず」、「心道に通ずるときは能く是非を辨ず」、「常に此の心を存し他事の爲に勝たるること勿れ」等、格物致知せずして豈直に其の地に入らんや。格物して知至るときは意誠あり、故に心自ら正しうして道に通ず。唯だ玆の心を存して其の功を待たず。其の理に通ぜんと欲すれば、心竟に正すべからず。心の應用は意の誠あると情の節に中るに在り、遠く求め近く覔むべからざるなり。

師曰はく、明道の程子、張子厚に答ふる定性書に曰はく、(九)「所謂定とは動も亦定まり靜も亦定まる。將迎なく內外なし」と。(將は送なり、迎は接なり。)朱子の心說に曰はく、「此の心澄然惺々として鑑の虛しきが如く、衡の平なるが如し。蓋し眞に上帝に對越して、萬理皆其の中に定まることあり、夫の物の旣に感ずるに及ぶや、則ち姸媸(一〇)高下の應皆彼れが自ら因るのみ」と。又王子合(一一)に答へて曰はく、「心は猶ほ鏡のごときなり、但し塵垢の蔽なきときは、本體自ら明かにして、物來れば能く照らす」と。西山の眞氏曰はく、「事物の來るや理を以て之れに應ずること、猶ほ鑑の此に懸つて形の逝るること能はざるがごとし。鑑未だ嘗て物に隨つて照さざるに、性其れ物に隨つて外に在りと謂ふ

(九) 近思錄爲學類に出づ。子厚は張横渠の字。この問答を定性書と稱す

(一〇) 美醜に同じ

(一一) 晦菴先生朱文公文集卷四十九に出づ、王子合は朱子の門人のごとし

べけんや。故に事物未だ接せざるときは、鑑の本と空しきが如き者は性なり。事物既に接して鑑の形あるが如き者も亦性なり」と。愚謂へらく、先儒皆云ふ、「心の應用は更に將迎なきこと、鑑の空にして能く萬像を照すが如し」と。是れ說き得て甚だ近し。然れども心の應用を知らざるなり。性能く感通知識し、心能く之れを具ふ。故に生々止むことなくして、其の事物の觸れ來る底、感通尤も速に能く焉れを知識し、以て堯舜たり天地に參たり、鬼神を格すべし。千萬里の遠と雖も一念すれば便ち到り、千古人情事變の祕と雖も、一照すれば便ち知る。是れ心能く將迎し心能く物に隨ひ事を計る底、至靈至妙の用なり。心將迎なきときは、寒至りて寒を知り、暑來りて暑を知る、寒きときは暑の用を計らず、暑きときは寒の至るを思はざる底なり。是れ性心の應用、聖人の大道ならんや。霜を履んで冰の至るを知り、(一)其の亡きを時つて往きて之れを拜するは、(二)易の教戒聖人の幾を知るなり。隱れたるより見るはなく、(三)微より顯なるはなき者は、君子の其の獨を愼むなり。幽暗の中細微の事跡未だ形せずと雖も、而も幾すときは已に動き、心能く之れを感通し之れを知識す、是れ心の將迎底なり。將迎思量して格致の功甚だ盡して、初めて天地と參たるべし。將迎なく內外なく、鑑

(一) 易坤卦初六に出づ。その象に、履霜堅氷、陰始凝也、馴致其道、至堅氷也とあり
(二) 論語陽貨篇首章「陽貨欲見孔子、孔子不見、歸孔子豚、孔子時其亡也、而往拜之」をさす。亡は不在の意、聖人の幾微を察するの明をいふ
(三) 中庸首章に出づ

空衡平の地を欲するときは、是れ異端の虚靜恬淡止水明鏡の論なり。銅を以て鏡と爲し、鏡能く磨き來れば姸媸能く明かなるは、是れ鏡の理なり。心能く格致し來れば邪正能く通ず、是れ心鏡の喩なり。若し心の本體を以て鑑空の一過して止めず隨はざるが如しと爲し、是れを以て心の應用と爲さば、心は是れ一箇の死物にして、其の靈妙何れの處にか在らんや。聖人の道は唯だ已むを得ざるを以て教と爲し、人物各〻此の心あるときは、這の感通知識あり。是れ作爲せず計校せず、自然の天誠なり。而今將迎なきこと鑑空の如しの教を立て來らば、感通知識を絶つなり。凡そ生ある者は死に至らざれば此の地に及ぶべからず。尤も異端の邪説なり。

師曰はく、程子の心を以て心を使ふの説は、道心を一身の主と爲して、人心其れ命を聽くとするなり。朱子曰はく、「飢ゑて食を欲し渴して飲を欲するは人心なり。飲食の正を得るは道心なり」と。愚謂へらく、人心は都て人の感通知識底の心なり。此の心多く情欲に流れ意見に蕩る、故に「[四]人心危し」と曰ふ。此の間天地の至大至公と聖人大道の心を以て格致し來るときは、心悉く這の道に安頓す。然れども人々大抵氣質の過不及に流蕩す、此れ道心は惟だ微なればなり。人心・道心は二つならず、此の心

(四) 書經大禹謨に出づ、前出二八一頁參照

正しきときは道心なり、此の心を正しくすることは是れ誠意あるなり。先儒人心を以て不是底の心と爲し、形氣の私を生ずるを以て人心と爲し、天命の性に原づくを以て道心と爲すは、太だ支離せるなり。人心は只だ人の心を指す。人の心は唯だ危きなり。道心は常に微なり、其の用は「惟れ精惟れ一、允に厥の中を執る」に在り。惟れ精惟れ一、允に其の中を執るは、是れ格致の功なり。

師曰はく、先儒心をして內に主たらしむるの說あり、此れを以て心の靜定なりと爲す。伊川云はく、(一)「人心主と作りて定まらざれば、破屋の中に寇を禦ぐが如し」と。又云はく、(二)「一箇の翻車(三)の如し、毎毎學者を教へて箇の主を做さしむ」と。愚謂へらく、心は一身の主宰、是れ感通知識生氣流行して、一身の應用悉く此の心に因るなり。人物の生各〻此の心を以て一身の主宰と爲すなり。學者唯だ此の心をして常に管攝收住することありて、自家の主張たらしむ、是れ流蕩底の人に比すれば少く益あるも、聖人の道に於ては太だ遠し。凡そ心の感通知識は學問思辨行に因らざれば、乃ち其の知未だ盡さず、其の才未だ明かならず。故に學者日用の力行は學問思辨の間に在り。此の教を言はずして只だ心をして主張たらしむ。心は是れ收住し來らば、其の理の明分

(一)二程語錄卷一及び同卷三に出づ
(二)同前卷三に出づ、但し下の一句なし
(三)水車

なく、其の知の能く及ぶことなく、唯だ一箇の沈默底の人なり。是れ心は活物にして神明不測なりと雖も、心竟に管攝繫收せられて死物と爲り了る、尤も熟味すべし。

師曰はく、心如何してか收住せん。先儒嘗て主たる所以の實を求めて、一箇の敬を安頓し、竟に主一(四)の說を爲す。是れ敬を以て收束し得來つて謹密に、正に是れ力を著けて主と做す處、敬せざれば便ち掉散疎放して、復た主と做し了らずと爲す。是れより敬の說を立てて存心の工夫と爲す。南軒(五)の張氏主一の箴に曰はく、「惟れ學要あり、敬を持して失ふこと勿れ。其の操捨を驗むれば、乃ち出入を知る。曷爲ぞ其れ敬、妙は一を主とするに在り。曷爲ぞ其れ一、惟れ以て適くことなく、居るに越えて思ふことなく、事の他に及ぶなし」と。伊川曰はく、(六)「主一之れを敬と謂ひ、無適之れを一と謂ふ」と。明道曰はく、(七)「惟だ是の心主あり。如何なるを主と爲す。敬のみ」と。是れ各〻敬を以て心を收住するの謂なり。愚謂へらく、心流蕩放僻するときは、敬を以て其の正を究むるなり。唯だ一向に敬を以てする底は、是れ心の繫住なり、豈聖人の教ならんや。心能く靈妙にして事物の際其の應接尤も速なり。今敬を以て此の心を繫住し來らば、心靈妙を失し知識を去つて一箇の死物と爲らん。聖人の教は此の心をし

(四) 所謂主一無適の意、程朱學派の術語にして、心を一に專らにして他に適かしめざるの意
(五) 張栻、前出二五七頁參照
(六) 二程語錄卷九に出づ
(七) 同前

て能く其の理を感通し、其の則を知識せしむるに在り。心已に事物の理則を感通知識すれば、便ち其の靈妙天地と其の誠を一にして、感通知識せずといふ所なし。其の感通知識する所至大至公にして、惟れ精惟れ一、允に其の中を執るなり。那裏より見得し來れば、則ち後來の主一の說甚だ心の繫收なり。

師曰はく、孟子の曰ふ(一)「仁は人の心なり、義は人の路なり、其の路を舍てて由らず、其の心を放ちて求むることを知らず、哀しい哉。人鷄犬の放たるることあれば、則ち之れを求むることを知るも、放心ありて求むることを知らず。學問の道は他なし、其の放心を求むるのみ」と。愚謂へらく、孟子が「放心を求む」の放の字甚だ重し。放は放逸流蕩して其の則を知らず、其の節に中らざるの謂なり。大抵人々日用動靜の間、這裏の心放逸流蕩して其の則を知らず、竟に其の節に中らず。故に學問の道は唯だ此の教に在るなり。是れ孟子心の應用を指示するなり。凡そ情の發動して事物に及ぶや、身體の動靜寤寐各〻則あり節あり、其の則を失ひ其の節に違ふときは、乃ち是れ放心なり。後儒唯だ繫著し放去するのみを以て放心と爲す、故に又主一の敬を以て放心の工夫と爲し、此の敬此の主一乃ち放心たることを知らず。是れより放心を求むるの句

(一)孟子告子上篇第十一章

を擧げて、一話頭と爲し來り、心を以て收拾して自家の主張と爲さんことを欲す。然れども心に方形の收拾すべきなし。故に敬を以て心の主と爲し來るなり。愚案ずるに、心は元と一身の主宰、又別に此の心を以て主張と爲すことを覓むべからず。唯だ學問思辨せざる底は、多く氣禀の厚薄に放流す。此の心をして放流せざらしめんと欲すれば、便ち學問思辨の力に在り。學問思辨せずして主一自(無)適し、靜坐存養せば、枉(ま)げて工夫を費し、沉默謹厚の一魯士なり。是れ乃ち放心なり繫著なり、日用の間に益なく、人物の事に功なし。是れ豈孟子放心を求むるの謂ならんや。學問の道、孟子斷然として放心を求むるに在りと說く。其の開示切要の言、曲(つぶさ)に其の指(むね)を盡して服膺して失ふことなきに非ざれば、其の實を知るべからざるなり。

九七　或ひと心の應用を問ふを辨ず

或ひと問ふ、程子曰はく(三)、「心は腔子裏に在らんことを要す」と。是れ孟子の放心を求むるの說か。師曰はく、心は恆に腔子裏に在り、心腔子裏に在らざれば乃ち死了す。孟子の放心を求むるは、重きこと放の字に在り。心腔子裏に在りと雖も、放蕩して節

（三）二程語錄卷六及び朱子語類卷第九十六にも出づ

に中らず、多くは皆情欲に之いて止まらず、故に這裏に學問するなり。是れ「學問の道は他なし」とする所以なり。放蕩底を學問せずして只だ此の心を收住す、是れ心の繋著する所にして、尤も大蔽あり。

或ひと問ふ、孟子曰はく、(一)「其の心を盡す者は其の性を知るなり、其の性を知れば、則ち天を知る。其の心を存し其の性を養ふは、天に事ふる所以なり」と。是れ心を盡し心を存するは、皆心說を工夫するや。師曰はく、盡すとは致さずといふことなきなり。這箇の心感通知識すと雖も、盡し致さざるときは、其の知至らず、其の知至らざるときは、性の應用天地と參たらず。天地と參たらざるときは、其の性を知らざるなり。此の性と天地と參にして而して后に聖人たり。故に其の心を盡す者は其の性を知るなり。其の性を知るときは天を知るなり。是れ(二)「天命之れを性と謂ひ、性に率ふ之れを道と謂ひ、道を修むる之れを教と謂ふ」の謂なり。教に因つて道を修め、道を修めて性に率ふ。性に率ふときは天命に一なり。孟子盡心の章、中庸の首章、表裏二ならず。心を存するは心を盡すの謂なり、乃ち放心を求むるなり。這箇の心を收拾して焉に主張と爲るにあらざるなり。盡の字・存の字・放の字、各〻熟味玩索すべし。

(一) 盡心上首章

(二) 中庸首章

或ひと問ふ、孟子[三]に曰はく、「孔子曰ふ、操るときは則ち存し、舍つるときは則ち亡す。出入時なく、其の鄕を知ることなしとは、惟れ心の謂か」と。此の語這の心を收拾すべきの謂か。師曰はく、是れ夫子心の方形なきことを論ずるなり。心能く感通知識す、故に操るときは感通知識し、舍つるときは方形なく、右を收むれば右に通じ、左を收むれば左に通ず。或は外事に走り或は內靜に閑に、或は語默或は動靜、是れ箇の活物にして收拾緊著を須ひず、是れ出入時なく其の鄕を知るなきなり。聖人は格物致知を以て誠意正心の用と爲す。是れ操るときは存するなり。存心の工夫なり。此の教至り盡さざるときは其の養を失ひ、物として消ぜずといふことなし。是れ舍つるときは亡するなり。放心の開示なり。今心を盡し心を存し放心を求め來るときは、心斯れ明かに心斯れ定まり、自ら鄕ふ所ありて其の應用節に中るべし。是れ學者の功用なり。夫子の論ずる所は、只だ心の方形なきを指として心の工夫を謂はず。後世心を存し心を識る底の說話を附會す。尤も孟子の心に非ざるなり。

或ひと問ふ、孟子曰はく、[四]「心を養ふは寡欲より善きはなし」と。此の說心を存養するの意ありや。師曰はく、是れ乃ち其の心を正すことは、其の意を誠にするに在り。

（三）告子上篇第八章

（四）盡心下篇第三十五章

心、情意に因らざれば論じ言ふべからず。欲は情欲なり。寡は其の理を盡して欲をして節に中らしむるの謂なり。情欲發して節に中るときは心を養ふなり。是れ孟子は格物致知の說を言ふに非ずや。宋の周子曰はく「心を養ふは寡にして存するのみに止まらず。蓋し焉れを寡うして以て無に至る。無なるときは誠立ちて明かに通ず」と。周子は無を以て養心の要と爲す。無は是れ情欲をして之れを無からしむるなり。喜怒哀樂發して節に中る者は聖人の教なり。是れをして無に至らしむる底は、是れ異端の斷見なり。人は竟に無に至ること能はざる所なり。朱子は無を以て心の欲に流るることなきを指（むね）と爲す。少く（しばら）說き得て好きに似たりと雖も、周子が意見は悉く此の無の字より流出し來るなり。

或ひと問ふ、心は動に屬するや、靜に屬するや。師曰はく、心は動靜を該ぬ、動くべき底は是れ動き、靜かなるべき底は是れ靜かなり。然して心は火に屬し、運動流行して生々止むことなきもの、是れ心の體なり。故に動は是れ心の用なり。情の發して物に應じ、意の動いて機微なる、皆是れ心の動用なり。心能く虛靈にして、心能く感通知識し、心能く活物なり。朱子曰はく「心は活を要す、周流窮りなし。活すれば便

ち能く此の如し。是れ心は動に屬するなり。然して靜も亦心の用なり、靜の時にも此の心なきに非ず、只だ靜の時も這箇の生氣少くも息むことなく、靈妙感通底更に離れず、彼の寐睡の間も亦運動流行の妙用は止まらず、故に心を以て動に屬するなり」。

或ひと問ふ、孟子曰はく、(一)「我れ四十にして心を動かさず」と。是れ心の動かざるなりや。師曰はく、孟子の所謂心を動かさざるは、惑はず畏れざるの謂なり。志厚く道明かにして、德立ち行正しきときは、富貴・貧賤・威武・死生の間、疑惑する所なく、畏怖する所なく、恆に萬物の上に伸ぶ。是れ孟子の心を動かさざるなり。而今の所謂「心は動に屬す」とは、運動流行の動なり。西山の眞氏曰はく、「北辰常に移らず、故に能く列宿の宗たり。人心常に動かず、故に能く萬物の變に應ず。動かざるは運用する所なきの謂に非ず、理に隨つて應じ、物に隨つて遷らず。動と雖も猶ほ靜なるがごとし」と。西山言ひ得て好し。然れども物に隨つて遷らざるの說分明ならず。心能く遷轉して止まらず、是れ運動の用なり。物に隨ふべからざるときは隨ひ遷らざるの底、是れ心の遷轉節に中るなり。乃ち格物致知の功なり。北辰の其の處に居て能く遷轉し、列宿之れを守りて宗と爲し、人心胸臆に在りて能く流行して、身體之れに因つて用を

(一) 公孫丑上篇第二章

爲す。皆能く動かし來る底なり。

　或ひと問ふ、心の惑はず懼れざる、其の應用道ありや。師曰はく、（一）公孫丑問うて曰はく、「心を動かさざるに道ありや」と。孟子曰はく、「我れ善く吾が浩然の氣を養ふ」と。敢へて問ふ、「何をか浩然の氣と謂ふ」。「曰はく言ひ難し。其の氣たるや至大至剛、直を以て養ひて害することなければ、天地の間に塞がる。其の氣たるや義と道とに配す、是れなければ餒う。是れ集義の生ずる所の者なり、義襲ひて之れを取るに非ざるなり。行、心に慊からざることあれば、則ち餒う」と。愚謂へらく、孟子の此の答、開示切要、言を容るべからず。是れ便ち格物致知の謂なり。心は氣を離るべからず、氣已に餒ゑざるときは、其の氣至大至剛にして天地の間に充塞す。若し私あり邪あれば、乃ち心に慊からずして氣忽ち餒う。餒うるときは則ち屈惑して、竟に情欲の爲に暴はる。是れ惑懼の因る所なり。孟子の所謂不動心は、只だ其の氣を說いて心に及ばず。是れ心を論ずること未だ嘗て情意を以てせずんばあらざるなり。後世の末學深く泝はず、殆ど異端の說に陷溺す。

　或ひと問ふ、心に善惡ありや。師曰はく、程子曰はく、（二）「心は本と善なり、思慮に發

（一）孟子公孫丑上篇第二章

（二）二程語錄卷十一、伊川の語及び朱子語類卷九十五に出づ

するときは善あり不善あり。若し既に發するときは之れを情と謂ふべし、之れを心と謂ふべからず」と。朱子曰はく「(三)心は是れ動底の物事、自然に善惡あり、且つ惻隱の如きは是れ善なり。孺子の井に入るを見て惻隱の心なくんば、便ち是れ惡なり、善を離著るれば便ち是れ惡。然れども心の本體は未だ嘗て善ならずんばあらず、又却つて惡と說くべからずと。(四)遺書に曰はく『心は本と善なり、思慮に發するときは善不善あり』と。此の段徹しく未だ穩ならざる處あり。蓋し凡そ事は心の爲す所に非ざることなし。放僻邪侈と雖も、亦是れ心の爲なり。善惡は但だ手を反覆するが如きのみ、翻一轉すれば便ち是れ惡。止だ安頓し著せざるや、便ち是れ不善。當に惻隱すべくして羞惡し、當に羞惡すべくして惻隱するが如きは、便ち不是なり」と。愚案ずるに、程朱心の善惡を論ずること此の如し、是れ性を以て理と爲し、心を以て知覺虛靈と爲すの說なり。性心は善惡の論ずべきなく、只だ氣稟の成る所に因り、或は善、或は不善なり。學問の道は他なし、其の氣稟習染の因る所を正し、詳かに學び審かに問ひ、愼んで思ひ明かに辨ずるときは、其の邪正是非、其の理甚だ究まる。此に於て固く執りて篤く行ふときは、日用の間、事物の應接、身體の動靜、各〻節に中りて通ぜざる所

(三) 朱子語類卷五、性理二に出づ

(四) 程子遺書なり。以下は朱子語類卷九十五、程子之書に出づ

なし。心性初めて明かに初めて善にして、昏昧不善なし。心性は只だ生々の理息むことなく、能く虛靈し能く感通知識す。善惡を以て之れを論ずべからず。善惡は氣稟習染に因り來る底なり。

或ひと問ふ、「[一]赤子の心を以て已發と爲すは、是なりや否や」。程子曰はく、「已に發して道を去ること未だ遠からざるなり」。[二]曰はく、「赤子の心と聖人の心とは若何」。程子曰はく、「聖人の心は明鏡止水なり」と。[三]呂與叔曰はく、「赤子の心は良心なり。天の衷を降す所以、民の天地の中を受くる所以なり。寂然として動かず、虛明純一にして天地と相似し、神明と一たり。[四]傳に曰はく『喜怒哀樂の未だ發せざる之れを中と謂ふ』とは、其れ此れを謂ふか。此の心自ら正し。人を待つて而る後正しきにあらず。而して賢者は能く喪ふことなし」と。是れ等の說、赤子の心を以て人の本心を見るべしと爲す。師曰はく、氣質未だ全からざれば乃ち性心も亦全からず。赤子は氣質未だ全からず、故に情欲太だ薄し。此の心を以て中と爲し正と爲すは大いに差了れり。赤子の性心に於けるや、尤も生々無息にして感通知識も亦淺薄底なり。程子は以て道を去ること遠からずと爲し、呂氏は以て天地と相似し神明と一なりと爲すも、此れ等の

(一) この問答、初より二程語錄卷十一、伊川と蘇季明との問答なり
(二) 蘇季明
(三) 呂大臨、前出二七三頁參照
(四) 中庸首章

說更に通ぜず。昏昧愚蒙にして感通知識の淺薄なるを以て、天地神明の理と爲さば、乃ち草木の識なく、昆蟲の蠢動せる、皆以て良心ならんや。「大人は赤子の心を失はず」(五)といふは、其の純一にして欲を營み知を巧にするの思なきに取れり。豈大人にして赤子童蒙の昏愚底を以て、我が本心と爲し來らんや。赤子は氣質薄くして其の心亦厚からず、其の長ずるに及びて氣質全く具はり、其の心尤も厚し。竟に情欲の流蕩放僻に因つて、疑惑昏昧雜り出づ。聖人教を立て道を修むるの用此の間に在るなり。教に因つて道を修むるときは、初めて天地の大源を知り、人の人たるの地に安頓す。是れ天命の性心なり。朱子亦呂氏の說を詰りて曰はく「赤子の心は動靜常なく、寂然不動の謂に非ず。故に之れを中と謂ふべからず」(六)と。程子は聖人の心を以て明鏡止水と爲す。是れ格致の功盡して適くとして節に中らざるなきなり。若し心の體を以て明鏡止水と爲さば甚だ差了れり。

或ひと問ふ、程子曰はく「人心必ず止まる所あり、止まることなきときは物に聽ふ、惟れ物之れ聽はば、何ぞ往く所として妄ならざらんや」と。又曰はく「人心は繫る所あるを得ず」と。又曰はく「人心常に活を要するときは、則ち周流究りなくして一隅(七)

(五) 孟子離婁下篇第十二章

(六) 晦菴先生朱文公文集卷六十七、已發未發說に出づ

(七) 朱子語類卷九十六及び九十七に出づ

に滯らず」と。此の說或は止まる所あるを以てし、或は繫る所なきを以てす。師曰はく、人心は只だ詳に其の理を盡し、情の發して節に中るに在るのみ。是れ心の應用なり。詳に其の理を盡し來れば止まる所あり、周流する所あり、流行活然として至靈至妙なり、更に別法の求尋すべきなし。

或ひと問ふ、明道が張子（橫渠）に答ふる定性の書(一)は如何。師曰はく、朱子曰ふ(二)、「定性書の一篇『廓然として大公、物來つて順應す』の二句を出づることなし。自後の許多の說話は都て只だ是れ二句の注脚なり。(三)『其の背に艮つて其の身を獲ず、其の庭に行きて其の人を見ず』と、此は是れ廓然として大公を說く。『孟子曰はく(四)、智に惡む所の者は其の鑿するが爲なり』と、此は是れ物來りて順應するを說くなり」と。此の解太だ可なり。明道云はく(五)、「事物を惡まず、亦事物を逐はず。今の人惡むときは全く之れを絕ち、逐ふときは物の爲に引將ち去らる。惟だ拒まず流れず、泛く應じ曲に當るときは善し。蓋し橫渠は外物を絕つて其の內を定むるに意あり。明道の意は以爲らく、「須らく是れ內外合一なるべし。動も亦定まり靜も亦定まるときは、物に應ずるの際自然に物に累はされず」と。是れ張子・程子が意なり。然れども只だ事物を惡まず、亦事

(一) 近思錄にあり、前出一九三頁參照
(二) 朱子語類卷九十五に出づ
(三) 易の艮卦彖の辭にして、定性書に引用せらる
(四) 孟子離婁下篇第二十六章より定性書に引用せるもの
(五) 朱子語類卷九十五に出づ

物を逐はざるを謂ひて、其の用教を謂はざるときは、何れの處を以て節に中ると爲し、何の應を以て曲に當ると爲すか。若し意見を以て推し來らば、皆己が私にして其の實を得べからず。其の用教、定を以てせんとならば其の定も亦審に究むることあるべし。詳に糺さざれば、定は是れ繋縛底なり。

或ひと問ふ「廓然として大公、物來つて順應す」の二句、定性書の要語說き得て好し、然して其の地に至るの工夫如何。師曰はく、來問尤も好し。明道指す所の廓然大公は知るべからず。其の語說き得て好しと雖も、若し意見臆說を以て究め推すときは、廓然大公の義甚だ差了れり。朱子曰はく「(六)聖人は自ら聖人の大公あり、賢人は自ら賢人の大公あり、學者は自ら學者の大公あり。大公は是れ順應を包ね說く。公は是れ忠、便ち是れ『維れ天の命於穆として已まず』なり」と。(七)黃榦曰はく「蓋し遽に其の怒を忘るるを以て大公と爲す」と。愚謂へらく、大公は聖人賢人學者各〻以て大公ありといふ、是れ朱子の說なり。凡そ大公は聖人より學者に至るまで差別すべからず、差別し來らば乃ち大公ならず。案ずるに、大公は天地の大德、道の大源、古今を以て變ずべからず、聖愚を以て改むべからず。心性の究め盡すこと此の大公を期するなり。事

(六) 朱子語類卷九十五に出づ、但し抄出なり

(七) 前出一九二頁參照

物の應接も亦此の大公を期するなり。此の大公は積累して究め盡すに在らずしては、更に得べからず。直に廓然大公を以て說き來り、此の句を以て工夫を爲し、定性の應用を思量すれば、乃ち竟に得べからず。明道の語意甚だ高くして、後學に益なく、聖學に弊あるなり。

或ひと問ふ、定性書に論ずる所、固に是れ外誘を除くに意あるべからず(一)。然して此れは地位高き者の事なり。初學に在りては、恐らくは亦然らざることを得ざるや否や。師曰はく、定性書の論ずる所、都て太だ高し。事物を惡まず、事物を逐はず、將迎なく內外なし。外誘を除くに意あるべからず等の語、殆ど老莊釋氏の書より出でて、聖門の教に在らず。聖人の道は只だ學問思辨の格物致知に在り。其の積累迹(あと)なきに至りては、外誘を除くに意あるべからずと雖も、是れ安行の謂にして、意あるべからずと謂ふべからず。學者此の說を期し來らば、竟に異端の高尙に入らんか。

或ひと問ふ、定性の說如何。師曰はく、朱子は曰ふ(二)「定性は存養の功至つて性の本然を得るなり。性定まるときは動靜一の如くにして內外間(ひま)なし。天地の天地たる所以、聖人の聖人たる所以、其の定を以てせざらんや。君子の學も亦以て定を求むるのみ」

(一) 書中に「苟も外誘を除くに規規たらば、將に東に滅して西に生ずるを見んとするなり。……得て除くべからざるなり」とあり

(二) 晦庵先生朱文公文集卷六十七、定性說に出づ

と。愚謂へらく、定の字未だ審ならず。性心の用は只だ格物致知の間に在り。學者定性の說に因りて專ら靜を執りて主張と爲すことを求むるなり。「止まることを知りて而して后に定まる」(三)、是れ聖人の敎なり。直に定性を以てするときは、格致の力を措いて默識心通せんことを欲し、高尙の工夫を爲し來る、尤も聖人の學に非ず。凡そ後世の學者切に虛靜を認めて以て工夫と爲す。象山の陸氏人に敎へて放心を求めしむるに、則ち是れ靜を主として以て精神を收拾すといふ、是れ定性の說に近し。先儒定性を以て定心と爲すは、是れ性は定むべきなし、心の知覺定むべしとの謂なり。案ずるに、心性本と一なり、只だ正を以てすべきも、定を以てすべからず。

或ひと問ふ、范淳夫(四)が女、孟子(五)牛山の章を讀みて曰はく「孟子心を識らず、心豈出入あらんや」と。伊川之れを聞きて曰はく「此(六)の女孟子を識らずと雖も却つて能く心を識る」と。朱子曰はく「此(七)の女必ず天資高見にして、此の心常に湛然として安定し出入なきならん。然して衆人は皆此の如くなること能はず。若し衆人に通じて之れを論ぜば、却つて是れ走作底の物なり」と。此の說如何。師曰はく、范淳夫が女、孟子を以て心を知らずと爲す。伊川は此の女心を識ると爲す。太だ會せず。心を識るとき

(三) 大學經二節
(四) 范祖禹、淳夫はその字。この女のこと朱子語類卷五十九に出づ
(五) 告子上篇第八章。牛山の木美なりしも、必要ありて伐れば禿山となる。人の良心も物欲に蔽はれ易き故に、存養の功を盡せよといふ意味の教訓を含める一章なり。その末句に「孔子曰、操則存、舍則亡、出入無レ時、莫レ知二其鄕一、惟心之謂與」とあり
(六) 朱子語類卷五十九に出づ
(七) 同前、但し文字に多少相違あり、或は他にもこ

は人の大源を知るなり。先儒數輩皆心を知らず、故に或は理を執へ或は知覺を執ふ。已に心を識れば、是れ聖門の學道、其の用初めて明かなるべし。心を識らざれば悉く精神を弄し高尙に馳す、聖學の入門を知らざるなり。此の女只だ運動底を以て心と爲し、精神を認めて心と爲し、口に信せて孟子を難ずるなり。朱子曰はく、「心は却つて識り易し、只だ是れ孟子の意を識らず。（ゆゑに）此の語差了れり。心を識れば乃ち孟子の意を知る、心を識らざれば乃ち孟子の意を識らざるなり。孟子口を開けば必ず性心を談ず。性心を識らずして孟子の意を識るべけんや」。愚案ずるに、心の說は却つて識り易きも、其の應用道に當るは、只だ是れ易しとすべからず。異端の入定坐禪樣は皆心を存し心を識るの說にして、應事接物の時に於ては、事々理に中らざる底、是れ其の存心識心已に差ひ來ればなり。今予竊に此の論を爲して心の說を盡すと雖も、其の應用道に當る樣は、格致積累の功に在らざれば得べからず。是れ心の說は却つて識り易く、其の應用道に當ることは只だ是れ易とすべからざるの謂なり。

或ひと問ふ、程子曰はく[一]、「張天祺[二]昔嘗て言ふ、『自ら數年を約し牀[三]に上著してより、便ち事を思量するを得ず。事を思量せずして後に、須らく强ひて他の這の心を把り來

の問答あらんか

（一）近思錄存養類の中に出づ
（二）張戩、天祺はその字、橫渠張載の弟にして、性篤實寬裕、地方官として功績多し。學者二張と稱す
（三）靜坐するを云ふ

つて制縛すべし、亦須らく寄寓して一箇の形象に在らしむべし』と。皆自然に非ず。司馬君實自ら謂ふ、『吾れ術を得たり、只管に箇の中の字を念ず』と。此れ又中の爲に繫縛せらる。且つ中の字亦何の形象ぞ。愚夫の思慮せざるが如き、冥然として知ることとなし、此れ又過と不及との分なり。其の志を持して氣をして亂る能はざらしめば、此れ大いに驗あるべし」と。師曰はく、張天祺牀に上著してより事を思量し得ざらんことを約す、是れ禪の坐禪拂拭なり。事を思量し得ざることを思量す、甚だ思量底に落在す。他れ這の思量麻の如く生ず。故に一箇の心を執捉して百の思想を斷つ、是れ公案を提撕し來るなり。司馬氏箇の中の字を念じて百の思量を制す、是れ中を以て思量に易ふるなり。是れ等の說甚だ造作し來る、豈聖人の道ならんや。道は須臾も離るべからず。語默動靜日用事物の際、皆當然の道あり。或は事を思量し得ざらんことを欲し、或は箇の中の字を念ずる、無事無物の時に於て、一箇の有事有物を立つ、是れ道を以て日用を差別し來るなり。聖人の道更に作爲なし。是れ等は皆作爲し來つて繫縛するなり。程子は以て自然に非ずと爲す、說き得て好し。然れども其の志を持し、氣をして亂ること能はざらしむ、是れ敬をして主張ならしむるものにして、所謂主一

(四) 資治通鑑の編者、宋の碩儒司馬光
(五) 以下「分なり」までの三句、近思錄に見えず
(六) 禪學の問題を提出するを云ふ

の意なり。是れ又張天祺が事を思量せざらんことを欲し、司馬君實が只管箇の中の字を念ずると、其の優劣遠からず、又敬の爲に繫縛せらるるなり。只だ敬は嚴肅の味亂れざるの様あり、中の字は形象の捉ふべきなし。事を思量せざれば亦象なきも、比校し來れば敬の字少し檢束するに足る。檢束底は是れ繫縛尤も大なり。各〻心を味ひ執捉を欲するの弊此に至るなり。

或ひと問ふ、張子(一)曰はく、「心を虛にして然して後に能く心を盡す」。又曰はく(二)、「心を虛にするときは、外以て累(わづらひ)を爲すことなし」。又曰はく(三)、「心既に虛なるときは公平なり、公平なるときは是非瞭(皎)然として見易し」。又曰はく(四)、「心清(す)む時は常に少く、亂るる時は常に多し。其の清む時は卽ち視ること明かに聽くこと聰(さと)し。四支(體)羈束を待たずして自然に恭謹なり。其の亂るる時は是れに反す」と。此の說如何。師曰はく、程子曰ふ(五)、「主あれば則ち虛なり」。又曰はく(六)、「主あれば則ち實なり」と。朱子之れを釋して曰はく(七)、「中に主あるときは外邪入ること能はず、其の中に主あるより之れを言へば、則ち之れを實と謂ひ、其の外邪入らざるより之れを言へば、則ち之れを虛と謂ふ」と。因つて林擇之（宋の古田の人、朱子之れを稱して友と爲す）が作れる主一の銘を擧げて云はく、「主あると

(一) 前出張横渠、張子全書卷十二、語錄抄に出づ
(二) 同前
(三) 張子全書卷六、學大原篇上に出づ。又近思錄存養類に出づ
(四) 同前卷七、學大原篇下に出づ。又同前
(五) 朱子語類卷九十六、程子之書に出づ
(六) 同前
(七) 同つづきに出づ

きは虛にして、神其の都を守る。主なきときは實にして、鬼其の室を闞ふ」と。是れ等の說に因れば、張子が所謂虛は主ありて外邪入らざるの謂か。是れ心主張を安頓し了して百の思想なし。故に號して虛と曰ふ、少く異端の虛無に差へり。然れども心に一箇の主張ある、是れ虛ならざるなり。且つ心は元と虛靈なり、今心を虛にせんと欲する、是れ虛中に虛を覓むるなり。張子繫著底を去らんと欲し、因つて心虛の說を爲せり。心の繫著多くは氣質の習染に因れり。格致の功積累するに非ざれば、遷轉すべからず。今日究理し去り、明日格物し去つて、其の知日に新に又日に新にして、心初めて能く遷轉流行す。張子が曰ふ「心既に虛なるときは則ち公平なり、公平なれば則ち是非瞭然として見易し」と。愚案ずるに、心主ありて外邪入らずと雖も、公平と謂ふべからず、是非見易しと謂ふべからず。此は是れ禪家悟了底の說なり、更に聖人の教に非ず。心主あるときは外邪入ることを得ず、都て心に一箇の思念底ありて他念の生ぜざる、是れ心焉に在らざれば見聞して見聞せざるの謂なり。張子心に於て主張を立てて之れを思念し來る、故に外邪入らざるに似たり。少く湛然靜寂なり。此に於て味ひ來つて以て公平と爲し、此に於て味ひ來つて以て是非見易しと爲す。是れ心少く

定まり靜にして浮躁紛擾なし。故に此の間を認め得て心虛の說を爲すなり。學者此の說に因らば、多く靜寂を執り浮躁を厭ひ、日用事物の應接、切に靜坐を好み常心を欲す、是れ聖人の教を去ること遠く、異端の見に入ること近し。凡そ動靜虛實共に道の寓する所、日用の常なり。若し一方に落在せば、偏倚過不及なり。張子が「心清むとは是れ又心を虛にするなり」と曰ふは、尤も異端の說に近し。熟讀して初めて覺るべし。

或ひと問ふ、橫渠の云はく、(一)「心は洪放を要す」。又曰はく(二)「心大なるときは則ち百物皆通じ、心小なるときは則ち百物皆病む」。又曰はく、「常心は少し」と。師曰はく、心の大とは寬平弘遠を指し、心の小とは偏陋固淺を指す。其の說尤も好し。其の百物皆通ずと曰ふは未だ會せず。事物の理を究め得ざるときは貫通すべきの處なし。常心の說、予(われ)久しく之れを執る、且つ常の一字を揭げて戒と爲し、以て心亂るれば多くは放僻遺失す、此の間速かに這箇の常を認得し來れば、客慮少くして知明かなりと爲せり。間竊(このごろ)に以爲(おもへ)らく、紛擾すべからざるの地に紛擾する底は、是れ格致の功積まざればなりと。格致の功を加へざれば、只だ常に復らんことを欲するも、是れ得べからず、

(一) 近思錄爲學類に出づ
(二) 同前

切に手を下し常に復することを得るも、亦只だ沈默底にして事物に益なし。雖常に復するも豫て格致せざるの知は、如何ぞ俄に貫通することあらんや。今案ずるに、事物の理を究めずして常心を言ふときは、老子の常を觀じて其の日用靜寂沈默を好み、其の應接重緩に過ぐるものにして、輕忽に比するときは少く優ることあるに似たるも、輕忽も亦事物に因りて大益あり、優劣を必とすべからず。張子が常心の言も亦此の弊あるか。

或ひと問ふ、唐の孫思邈(三)云はく、「膽は大ならんことを欲して、心は小ならんことを欲す」と。師曰はく、白虎通(四)に曰はく、「膽は肝の府なり、肝は木の藏(精)なり、肝膽は勇に屬す」と。思邈の所謂大小は其の指す所明かならず。膽大なるときは懼れず屈せずして大任に當るの謂にして、氣質の厚を指す。心小は能く思量して麁からざるの謂か。然して懼れず屈せずして大義に任ずるの用は、是れ心にあらずして何ぞや。思邈の所謂膽大は只だ質の厚を指す底ならん。思邈只だ醫術に通ずるのみ、其の言稱するに足らず。

或ひと問ふ、或ひと曰はく、「覺は是れ人の本心、泯滅すべからず、故に間に乘じて

(三) 華原の人、百家の説に通じ、老莊を語る。隋末唐初召さるるも仕へず、太白山の下に退き住む。陰陽にも精しく、千金要方の著あり。この文近思錄爲學類に出づ

(四) 正しくは白虎通義、漢の班固の集。爵・號・謚より始めて、軍事・日月・天地・喪祭等に及び、多く經書を引けり。この文は同書三卷情性の條に出づ

發見の時は直に是れ昭著す。物と雜（まじ）はらず。此に於て自識するときは、本心の體卽ち其の眞を得」。上蔡(一)謂へらく、「人須らく是れ其の眞心を識るべし。蓋し此の心或は燕閑靜一の時に昭著し、（(二)孟子の平旦の氣と言ふが如し、）或は事物感動の際に發見し、（(三)孟子の、人乍ちに孺子の將に井に入らんとするを見るや、皆怵惕惻隱の心ありと言ふが如し、）或は之れを文字に求めて怡然（いぜん）として得ることあり、（伊川の所謂、論語を讀み了つて後、其の中の一兩句を得て喜ぶ者あるが如し、）或は之れを講論に索めて恍然として悟ることあり。（(四)夷子が、孟子の一本を極論するの説を聞きて、遂に憮然として、爲間（しばらくあつ）て命を受くるが如し。）凡そ此れ恐らくは皆是れ覺處ならん」。朱子曰はく、「論ずる所甚だ精し」と。此の覺の說如何。師曰はく、此の所謂覺は所見あるの謂なり。所見あるときは學必ず意見に落ち、竟に異端の悟道見性の說に到る。凡そ意見ある底は、各〻聖人の言行を以て己が所見に陷れ、萬殊を率ゐて一見に定め來り、此の關に留まりて極と爲し、見聞覺知の及ぶ所を誘ひ、之れをして這箇の地に入れしむ。是れ意見の誤なり。聖人の教は詳かに其の事物の極を究めて、之れを推すに已むを得ざるの理を以てし、之れを定むるに天地公大の則を以てす。初めて其の理明かに其の則正しうして、天地に亙り鬼神に通じ、幽明盡く感ぜざるなし。今來問する所の覺は、間（ひま）に乘じ發見するの時に、是れ昭著する底、尤も微にして盡し難し。況や氣に厚く習に久しきの徒は、燕閑靜一の時

(一) 謝良佐、宋代、上蔡の人、字は顯道。二程の弟子にして、程門四先生の一人。論語說・上蔡語錄の著あり
(二) 告子上篇第八章
(三) 公孫丑上篇第六章
(四) 滕文公上篇第五章

は不善を爲して至らずといふことなく、事物感動の際は、皆已が習ふ所に從ふ。故に文字の熟讀講論の討習自暴自棄し來りて、或は意見を立て、或は所見ありて、恍惚髣髴を認め得て覺と爲す。豈聖人の教ならんや。是れより學者大いに精神を弄し虛遠に馳せて、高尙の一句を味はひ來れるなり。

或ひと問ふ、先儒曰はく、「孔門每に見を說き、陸學も亦每に見を說く」。論語に曰はく、[五]「前に參り衡に倚る」。曰はく、[六]「立つ所あるが如く卓爾たり」と。大學に曰はく、[七]「諟の天の明命を顧る」と。此れ孔門の所謂見なり。[八]楊慈湖曰はく、「鑑中の萬象」と。[九]徐仲誠曰はく、「鏡中花を觀る」と。[一〇]陳白沙曰はく、「隱然として呈露し常に物あるが若し」と。此れ禪陸の所謂見なり。此れ等の處甚だ相似たり。是れ孔門又所見あるの說か。師曰はく、孔門竟に見を謂はず。前に參り衡に倚るは、是れ敬戒なり。立つ所あるが如きは德の高きを稱するなり。明命を顧るは天德を期するなり。何ぞ見と謂ふべけんや。陸子の學は悟了底を立て來り、本然の性を認得す。是れ覺見の弊なり。

或ひと問ふ、[一一]胡文定公が所謂「起らず滅せざるは心の體、方に起り方に滅するは心の用、能く常に操りて有するときは、一日の間百起百滅すと雖も、而も心固に自若た

（五）衛靈公篇第五章、「立則見其參於前也。在輿則見其倚於衡也」と。隨所に於て忠信篤敬を念々忘れざるの意をいへり
（六）子罕篇第十章
（七）傳首章。書經太甲の引用語
（八）楊簡、前出二五八頁參照
（九）陸象山の弟子にして、象山と孟子を思ふといふ問答の時に答へし語なり（宋元學案）
（一〇）陳獻章、前出二六二頁參照
（一一）胡安國、前出二四七頁參照

り」と。朱子曰はく、「是れ好語なり、但だ讀者當に所謂起らず滅せざる者は是れ塊然として動かず、知覺する所なきに非ずと知るべし。又百起百滅の中別に一物の起らざる滅せざるものあるに非ず。但だ此の心瑩然として全く私意なし。是れ則ち寂然不動の本體、其の理に順つて起り理に順つて滅す、斯れ乃ち(一)『感じて遂に天下の故に通ず』る所以の者と云ふのみ」と。師曰はく、胡氏が所謂起滅の說は異端の說より出で來るなり。愚謂へらく、心は唯だ生氣流行して留まらず、起滅を以て論ずべきなし。凡そ起滅は心、物に應ずるを起と爲し、物去り心靜なるを滅と爲す。然れば則ち動靜を以て起滅と爲すなり。動靜の外起滅あるべからず。心の應用は是れ動靜なり、起滅の字を以てするときは、靜を以て滅と爲すなり。心は唯だ靜なり、滅と謂ふべからず。心唯だ動なり、起と謂ふべからず。七情の發するは是れ動なり、七情の未だ發せざるは、是れ靜なり。起らず滅せざるを心の體と爲すは、不生不滅を以て心と爲すなり。其の不生不滅底は、是れ異端の說にして文義甚だ害あり。

或ひと問ふ、先儒皆謂へらく、「心の體固に本と靜なり、心の用固に本と善なり。然して亦動ぜざる能はず、流れて不善に入らざるに非ず。然れども亦之れを心と謂はず

(一) 易の繫辭上傳に出づ

んばあるべからず、但だ其の流れて不善に入るは、物に誘はるるなり。數〻紛擾すればの止まる所なし。各〻心の本然の體用と謂ふべからず」と。此の說に依るときは、靜と善とを以て心の體用と爲すなり。師曰はく、動靜と善不善とは心の事物に應接する底なり、心更に之れに預らず。心は生々息まず能く虛靈にして感通知識するなり。體用を論ずるときは、性を以て體と爲し情を以て用と爲す。其の善に至りては是れ格致の力なり。動靜は只だ節に中るを以て教と爲す。先儒虛靜を以て主と爲し善を以て本然と爲す、故に此れを以て心の體用を論ずるなり。

或ひと問ふ、程子曰はく、「人無心と說くものあり、無心は便ち是ならず、只だ當に私心なしと云ふべし」と。此の說如何。師曰はく、當に心をして私意に至るなからしむと云ふべし、是れ乃ち心を正すなり。程子の說尤も可なり。

或ひと寐夢の說を問ふ。師曰はく、寐夢を以て能く心の虛靈にして感通知識することを知るべし。凡そ人の夜間夢あるは、多くは一日接し來る底を知識して思夢するなり。亦數十年前の事夢に之れを見る者あり、是れ心中舊と此の事あればなり。又睡眠の間傍人の語る所、音聲の入る所、手足の觸る所、悉く夢中に計會し來つて數般の

夢を爲す。是れ心虛靈にして觸るる所能く感通し能く知識するなり。身體甚だ困勞すれば、乃ち夢なし。是れ氣厚うして心之れに從へばなり。人心は本と靜にして本と善ならば、睡裏に外物の應接することなく、私欲の誘率することなく、夢中只だ靜にして夢なし、夢みるも亦本然の善を夢むべし。夢中皆從前の事を夢みて更に天命の善を夢みることなし。是れ心の感通只だ氣質の習染に因ること必せり。凡そ人は夢みざることなし、是れ又心の生々息むことなきなり。伊川曰はく、(一)「人夢寐の間に於て亦以て自家學ぶ所の淺深を卜ふべし」と。此の語說き得て太だ好し。心は夢寐の間に於て其の習來する所を明白に自知すべく、更に奇巧底なし。

或ひと問ふ、聖人に夢なしと。(二)孔子嘗て夢に周公を見るは當に如何。師曰はく、聖人に夢なきの語未だ審ならず。聖人何ぞ夢なからんや。都て氣質生々あるの輩は、聖賢愚不肖を分たず此の心流行運動して少くも止まらず、能く感通し能く知識す。身體に動靜屈伸ありと雖も、這箇の心は恆に生々のみ、故に假寐の間も夢なくんばあらず。其の夢みる所善不善あるは、是れ習來の是非積累の舊新に因るなり。夫子周公を夢みるの事、一夢寐と雖も此の大道を忘れず、道の行はるべきを期すること周公を以てす

(一) 二程語錄卷十一に出づ

(二) 論語述而篇第五章に、「甚矣吾衰也。久矣吾不復夢見周公」とあり

ればなり。夢寐は聖人と雖も猶ほ人のごとし、只だ夢みる所其の差あり。聖人夢なしの語を解するに、聖人惑なしの說を以てすること、是れ亦附會の說なり。

或ひと問ふ、李愿仲(三)虛一にして靜なるを以て心の用と爲す、如何。師曰はく、是れ亦程子・張子が虛靜主一の說なり。多くは異端の說に落在す。都て周子より李侗に至るまで、皆其の學流這裏に在り。朱子に至り、少く究理の論を立て、殆ど聖人の教に近く、大いに學者の用に益あり、然して其の指とする所又差了ち來る、尤も惜しい哉。

或ひと問ふ、「(四)仁は人の心なり」と。仁を指して心と謂ふべきや。師曰はく、人の心は只だ生々止まず。生々止まざる底是れ用ひ來れば仁なり。仁を指して心とは謂ふべからず。仁は生々の理、物に應ずるの名なればなり。伊川曰はく、「(五)心は譬へば穀種の如く、生の性は便ち是れ仁」と。愚謂へらく、生の性は性なり、仁は已發の惻隱底なり。

或ひと問ふ、象山の陸氏は精神知覺を以て心の應用と爲す。是れ禪學の說、所謂知の一字、衆妙の門。「覺るときは則ち了せざる所なし」と曰ふ。陸氏曰はく、「精神を收拾すれば萬物皆備はる」。楊慈湖曰はく、「鑑中の萬象」。陳白沙曰はく、「一片の虛

(三) 李侗、前出二四九頁參照

(四) 孟子告子上篇第十一章の言

(五) 朱子語類卷五、性理二に出づ

靈に萬象存す」。王陽明曰はく、「心の良知」と。皆是れ精神知覺を以て心の用を言ふものなり。先儒曰はく、「孔孟皆義理を以て心の用を言ふ。聖賢の學は心學なり。禪學・陸學も亦自ら心學なりと謂ふも、心を言ふ所以は則ち異なるなり」と。

師曰はく、陸氏・王氏の徒は全く異端に陷り、高く虛遠に鶩せ、其の指とする所亦心性を以て本然明白にして道義存すと爲す。陸學の所謂即心是れ道なり。楊慈湖が詩に云ふ、「此道元來即是心」と。王氏曰はく、「良知の作用、是れ心の作用を以て善と爲し明白と爲し、竟に心の作用を覓め來るなり。先儒の所謂義理の心も亦之れに異ならず」。愚謂へらく、孔子は心性の作用を認得することを說かず、適もなく莫もなし(一)。這箇の義に因りて爲し來る底なり。這箇の義、是れ究理より顯出し來る。孟子口を開けば心性を論じ、曰はく、「仁義禮智は心に根ざす(二)」。曰はく、「豈仁義の心なからんや(三)」。曰はく、「人に忍びざるの心(四)」。曰はく、「仁は人の心なり(五)」と。是れ人の義理に厚く、其の感通知識する底、義理に喩きの謂なり。故に或は盡と曰ひ、或は存養と曰ひ、皆事物の極を究むることを専らとす。後世に至りて人心道心を分ちて二箇と爲し、氣質天命を以て兩般と爲し、靜中に一箇の主を安頓して、人心をして此の命を聽かしめん

(一) 論語里仁篇第十章、「君子の天下に於けるや、適もなく莫もなきなり」と。適もなく莫もなく放過もなきを云ふ。
(二) 盡心上篇第二十一章
(三) 告子上篇第八章
(四) 公孫丑上篇第六章
(五) 告子上篇第十一章

と欲し、竟に格致の功を闕く。此に於て學者切に工夫して虛靜を專らとし、心の作用を認む。其の禪・陸・王氏の學を去る殆幾し。只だ其の言辭の數〻異なるのみ。

或ひと問ふ、精神靈覺の用は尤も至妙にして、朱子の語類に乃ち謂はく、「神は只だ是れ形よりして下なる者」と。(六)文集の釋氏論に曰はく、「其の指して識心見性と爲す所の者は、實に精神魂魄の聚に在り」と。而して吾が儒の所謂形よりして下なる者といふは何ぞや。師曰はく、朱子の大學或問の中に心を論ずる處、每々虛と言ひ靈と言ひ、或は虛明と言ひ或は神明と言ふ。孟子盡心の注(七)に云はく、「心は人の神明なり」と。存亡出入の集注には以て心の神明不測と爲す。心說を著はして曰はく、「故に體は方寸の間に具はると雖も、其の體たる所以は、則ち實に天地と其の大を同じうす。萬物は蓋し備はらずといふ所なくして、而も一物も是の理の外に出づることなし。用は方寸の間に發すと雖も、而も其の用たる所以は、則ち實に天地と相流通す。萬事蓋し貫かざる所なくして、一理も事の中に行はれざるなし。此れ心の妙たる所以にして、動靜を貫き顯微を一にし、表裏に徹し始終間なき者なり」と。愚謂へらく、心の體用は、能く義理を究むるに至るときは已に天地と參たり、其の象あるを指すときは、形よりし

(六) 晦庵先生朱文公文集別集卷八に出づ

(七) 孟子集注盡心上篇首章を指す。存亡出入とは同じく告子上篇第八章の「操則存、舍則亡、出入無ㇾ時、莫ㇾ知二其鄕一云々」の處を指す

て下なる者なり。神は不測の謂にして尤も妙靈なり。然れども天地の大道より見來れば、形よりして下なる者なり。狐狸の能く他に通じ妖物の能く物を感ずる、不測と謂ふべく、精神ありと謂ふべく、靈妙と謂ふべし。然れども太だ形よりして下なる者なり。人心の用不測と謂ふべく、精神ありと謂ふべく、靈妙と謂ふべし。然れども其の極を究めざるときは、只だ昏蔽して利に喩く、尤も形よりして下なる者なり。但し其の形體に比すれば形よりして上なる者なり。朱子は形よりして下なる者と謂ふ。其の說大いに當れり。禪陸王氏各〻精神靈覺を認め、其の妙用を以て工夫を爲す、是れ形迹を執るなり。陸學に曰はく、「鏡中に花を觀る」。曰はく、「鑑中に萬象形迹顯はる」と。是れ這箇の虛靈を認め得て實用と爲し來る。其の形よりして下たること疑なし。案ずるに、心に定論なくして理を究め道を盡すときは、其の精神の感通知識する所、皆形よりして上なるものなり。理を究め道を盡さずして靈妙を弄し高談を好むは、共に形よりして下なるものなり。心の虛靈感通知識する者は、天地二氣の妙用にして、其の形體に比すれば形よりして上なり。

或ひと問ふ、陸氏精神を收斂すること、孟子の放心を求むると甚だ相似たり。師曰

はく、孟子の放心を求むといふは、是れ放の字重し。陸氏は精神を收斂するも、精神は收斂すべきなし。是れ方形なきの地に於て方形を覓むるなり。

或ひと問ふ、程朱は是れ將に放心を求めんとして敬を主と做し、看て以て學問の基と爲す。陸氏人に放心を求むるを教ふるときは、是れ靜を主とし以て精神を收拾し、心をして一事に泊まらしめず、復た言語文字を以て意と爲さず。是れ程朱陸が放心を求むるの差か。師曰はく、共に孟子放心を求むるの說に非ず。放心を求むるは格物致知の功に在り。敬を以て主と爲すも、靜を以て主と爲すも、各〻一事を以て一事に易ふるなり。格致の益なきときは敬も亦放心なり、靜も亦放心なり、其の言異にして其の實は同じ。只だ陸氏は全く異端に陷り、開示して性心を言ひ知覺を弄し、以て緊要の處と爲す。性心は緊要ならざるなく、至靈至妙ならざるなし。若し認得し味ひ來るときは、其の心杳に遠く、其の理益〻暗し。

或ひと問ふ、王陽明專ら悟を說く。是れ心の覺了見所か。師曰はく、陽明曰ふ、「那の能く視聽言動する底、便ち是れ性、便ち是れ天理」と。是れ陽明性心を悟るを以て教と爲し、悟了を以て良智の作用と爲すなり。故に六經と雖も猶ほ視て糟粕・影

響・故紙・陳編と爲す。雜詩に云はく、「至道不二外得一、一悟失二群闇一」と。又曰はく、(一)「一悟後六經無二一字一、靜餘孤月湛虛明」。又云はく、(二)「設道六經皆註脚、憑二誰一語一悟二眞機一」と。是れ悟を以て則と爲すなり。各々異端の法にして論ずるに足らず。心元と悟るべきなく味ふべきなし、事物の理を究盡して、初めて則るべし。究盡し來らずして悟を覓むるは、是れ日を終へ年を終へて、彌々昏く益々昧きなり。

或ひと問ふ、子が說に因るときは、心の應用は學習に在るなり。師曰はく、心の應用は只だ學習染習に在り。染習は氣質習汚の應用なり。學習は義理究盡の應用なり。染習を以て小人と爲し、學習を以て君子と爲す。心は只だ虛靈にして感通知識す。其の應用は全く敎に因つて道を修する底に在り。心必ず意見に因つて或は違失し或は沈默す。只だ氣質の重き所に隨ひて、各自の心を以て期すべからず。

九八　性心の差異を論ず

師曰はく、心は性情を具ふ、性は生々息むことなく、虛靈にして感通知識するなり。情は已に發して物に及ぶなり。性情は是れ體用、心は兩箇を具へて少く方象あり、故

(一) 王陽明全集卷第二十、外集二の送蔡希顏の三首中に出づ
(二) 同卷第二十、外集三の、送劉伯光の詩中に出づ

に性情は心より云ひ來る底なり。程子(明道)曰はく、「(三)人に在りては性と爲し、身に主たるを心と爲す。心は思慮に發す、之れを情と謂ふ」と。此の如きときは、性は乃ち心情の本にして、横渠は則ち以て「(四)心は性情を統ぶ」と爲す。此の兩說差あるに似たり。愚謂へらく、心は只だ性情を具ふるの舍(やど)なり、其の感通は是れ妙用、是れ性なり、其の發見は是れ情なり。心なきときは、性情寓する所なく、性情なきときは心妙用なし。心を謂ふときは、性情共に擧ぐ、是れ性情を具ふるなり。性情を謂ふときは心は擧げず、古人皆心を以て論じ來る底是れなり。(五)潛室の陳氏曰はく、「心は二者の間に居て之れを統ぶ」と。是れ横渠の說に因るも、統の字尤も不審なり。只だ心を以て知覺と爲し、性を以て理と爲すの差謬なり。

師曰はく、先儒性を以て仁義禮智と爲し、心を以て知覺と爲す。愚謂へらく、仁義禮智の智、是れ知覺底なり。假令體用本末の差ありと雖も、知覺底は是れ一なり。且つ仁義禮智各〻感通知識する所にして、其の迹名づけて仁義禮智たり。故に知識感通を措いて仁義禮智の言ふべきなし。仁義禮智は感通知識の理に應用するなり。飲食情欲は感通知識の氣に應用するなり。先儒皆偏(かたつかた)に泥んで竟に性心を失却す。

(三) 二程語錄卷十一に出づ

(四) 前出二八四頁參照

(五) 陳埴、前出二三六頁參照

師曰はく、或ひと心と性の別を問ふ、朱子曰はく、「這箇極めて說き難し」(一)と。愚謂へらく、理を以て性と爲し、知覺を以て心と爲すも、理と知覺と尤も差別し難し。知覺は是れ理なり、理は是れ知覺なり。人の人たる所以は此の妙用あればなり。妙用は是れ理、是れ知覺、故に這箇極めて說き難しと謂ふ。先儒の說に因るときは、赤子嬰兒は只だ知覺運動のみ。然らば乃ち這箇心ありて性なしと謂ひて可ならんや。

或ひと、未發の前、心と性の別を問ふ。朱子曰はく、「心に體用あり、(二)未發の前是れ心の體、已に發するの際乃ち心の用、如何して指定して說き得んや。蓋し主宰運用する底は便ち是れ心、性は便ち是れ恁地に做す會き底の理」と。愚案ずるに、知覺を以て心と謂ふときは、未發の前何の知覺あらん。然らば則ち未發の前は心なきなり。故に這の來問あり來る。朱子辨じ難くして竟に體用を以て焉れを言ひ、運動を以て心と爲し、其の理を以て性と爲す。運動は氣なり、心と謂ふべからず。然して心は五臟の一に屬す、氣に非ずと謂ふべからず。此の間太だ差異あるべし。

師曰はく、或ひと問ふ、橫渠云はく、「心は性情を統ぶ」。伊川云はく、「性の形ある(三)者より之れを心と謂ひ、性の動ある者より之れを情と謂ふ。是れ性は心情を統ぶる者

(一) 朱子語類卷五、性理二に出づ

(二) 同前に出づ

(三) 朱子語類卷五十九に出づ

なり」と。朱子曰はく、「(四)横渠の說最も穩當と爲す。程子の說話の如き、恐らくは是れ記錄する者の誤のみ」と。愚謂へらく、心を以て知覺と爲す。知覺して理に通じ情に發す、故に橫渠は以て「心は性情を統ぶ」と爲し、程子は「性の形ある者より之れを心と謂ふ」とす。此の說尤も可なり。心は性情を具へて五臟の一と爲し、人身の中に主宰たり、生々運動少(しばら)くも住まらず。是れ方象あるなり。形の執り見るべきなしと雖も、其の方象は思ふべし。性は其の感通知識にして、是れ形よりして上なるものなり。心已に方象あり、是れ氣に屬し形よりして下なるものなり。

師曰はく、人は理氣の妙合を以て此の形あり。此の形は乃ち妙用を具ふ。其の妙用を心・性・情と曰ふ。心は其の體なり、性は其の以てする所なり、情は其の應用なり。

(四) 同前のつづき

九九　意を論ず

師曰はく、意は性の發動して未だ迹あるに及ばざるの名なり。既に迹あるときは乃ち情と曰ふ。發動の機微是れ意なり。字書に曰はく、「志なり、思なり、心の嚮ふ所なり」。朱子曰はく、「(五)情は是れ發出する恁地(このち)なり。意は是れ主張して恁地たらんことを

(五) 朱子語類卷五、性理二に出づ

要す」と。是れ等の說、主とする所あるを以て意と爲すなり。愚謂へらく、大學に誠意と曰ふは、是れ機微を愼んで自ら欺くことなからしむるの謂なり。心は意に因つて發動し來り、意は格物致知に因つて自ら欺くことなし。自ら欺くことなきときは其の心是れ正し。然らば便ち意を以て主張ありとすべからず。已に主張あるときは、是れ物に及んで情あるなり。

師曰はく、心性は體にして情意は用なり。心性又體用あり、情意又體用あり。心意は體にして性情は用なり。心は生々の氣息まず、性は靈妙感知、意は其の動の機、情は其の迹あるなり。體用以て見るべし。然して古人情意を以て一擧して之れを論ず。各〻心性の發見なればなり。

師曰はく、大學に曰はく、(一)「其の意を誠にす」。論語に曰はく、(二)「子四を絕つ、意なく必なく、固なく、我なし」と。愚謂へらく、意情は是れ心性の發見、人物各〻之れあり、之れを誠にせざれば乃ち私欲に隨ひ意見に任せ去つて、竟に心性をして天地の大に參ならしめず。故に其の心を正さんと欲せば、先づ其の意を誠にするなり。聖人は唯だ誠意のみありて、這箇の私欲意見の流蕩なし。是れ乃ち格物致知し來る底なり。

(一) 古本大學傳第二章、第十一卷一三九頁參照
(二) 子罕篇第四章

故に他の私意なし。人皆私意に任せ、天の明命を顧みず、竟に心性をして禽獸に同じからしむる所以なり。

一〇〇　情を論ず

師曰はく、情は心の動にして物に及んで迹あるの名なり。或は耳目鼻口身體に因りて、止むを得ざるの情あり、或は視聽言動に因りて、其の情を生ず。或は事物に因りて止むを得ざるの情あり、或は其の應接に隨ひて其の情を生ず。或は天地に感じ或は鬼神に通じ、都て感通知識底、已に發して物に及んで其の效迹あるは、皆是れ心性の動いて其の形を生ずるなり。故に曰はく、性は心の以てする所なり、情は心の用なりと。

師曰はく、惻隱・羞惡・辭讓・是非・仁義禮智の名あり、皆是れ情なり。只だ本末體用ありて其の名を異にするも、都べ來つて是れ情なり。喜怒哀樂の已に發し、飲食男女の大欲、好色を好み惡臭を惡むの意、是れ悉く感通知識の已に迹あり形あるなり、故に心は性情を具へ、性情は體用たり。其の內に在るより是れを性と曰ひ、其の物に

及ぶより是れを情と曰ふ。

師曰はく、動いて已に發するの情、其の大目二氣五行を出でず。中庸に只だ喜怒哀樂の四箇を說く。孟子は惻隱・羞惡・辭讓・是非の四端を指して言ふ、大抵仁義禮智信の發するや、木火土金水の具はるに因れり。喜怒哀樂の四箇も亦金(怒)木(喜)水(哀)火(樂)に在りて、其の極は兩般を出でず。所謂陰陽なり、喜怒哀樂なり、好惡なり。其の情欲(土に屬す)は那箇の裏に涉りて、有らずといふことなし。是れ其の情の大目、二氣五行を出でざる所以なり。二氣五行は是れ人物止むことを得ざるの固有なり。聖人の教は唯だ仁義を以てし、其の委(こまか)に於て禮智信を述ぶ。是れ其の情の發に因つて、他(ひと)をして之れを教へて道を修するに至らしむるなり。所謂仁義は陰陽なり、惻隱・羞惡・辭讓・是非は、金木水火の發する所なり。

師曰はく、心・性・情の三者は人皆之れを有す、物も亦然り。凡聖を以て增減を爲さず、人物を以て有無を論ぜず。但し聖人は氣清く心正しうして、性情各〻其の理を得、動いて節に中らずといふことなく、其の應用更に迹なし。學者は教に因つて道を修し、他(かれ)の情の發をして究理し來つて節に中らしむ。故に其の心を正すことは其の意

を誠にするに在り。凡そ性心は情に因らざれば其の迹なし。聖人の教は其の極誠意に在り。這箇の格物致知し來る底、這の情に因らざることなし。是れ中庸に、喜怒哀樂の發して節に中るを天下の達道と爲す所以なり。性心の虛靈感通知識ありと雖も、其の情發して節に中らざるときは、只だ情の欲に隨ひて、天地止むを得ざるの物則を得べからず。性心の用全く情上に在り來れり。

一〇一　或ひと意の説を問ふを辨ず

或ひと問ふ、朱子曰はく、(一)「情は舟車の如く、意は人の那の舟車を使ひ去るが如きと一般なり」と。又曰はく、(二)「情は是れ動く處、意は則ち主向あり。好惡の如きは是れ情なり。好色を好み惡臭を惡むは、便ち是れ意なり」と。北溪の陳氏曰はく、「大抵情は性の動、意は心の發にして思量運動の義あり」。是れ等の説如何。師曰はく、朱子は意を以て趣向主張ありと爲す、然らば乃ち發動して已に大いに迹あるなり。愚謂へらく、意は發動の機微なり、大學・中庸に所謂獨を愼む是れなり。其の機微を愼み、其の發動する所、天然の至誠を以てするときは、其の心正し。誠を以てせざれば只だ放(ほしいまま)に

(一) 朱子語類卷五、性理二に出づ
(二) 同前

私意情欲に隨ひ、其の心竟に正しからざるに至る。是れ誠意の一章、太だ學者に益あり。陳淳、情意を以て心性を別つ、尤も差謬し來るなり。

或ひと問ふ、夫子の四絶(一)に意なきを以てするは、是れ意は唯だ心の動用にして、悉く知覺に出で來つて、義理の發見なしや否や。師曰はく、夫子の意なきは是れ從に意を是れ用ふることなきなり。意に從つて用ひ來れば、乃ち義理の極めなし。大學に所謂「其の意を誠にす」とは、是れ意なきの謂なり。都て心の動用は情欲に隨ひて流蕩し來る底多く、義理の發見少し。聖人教を立て道を修すること、全く此の間に在るなり。

或ひと問ふ、格物し來つて知至り了る。何ぞ意を誠にするに及ばんや。師曰はく、格物致知は是れ這箇の意を誠にするなり。格物致知の間各〻意あり、此の情意を以て此の情意を究理し來る底なり。格物致知は是れ誠意の教なり。意は此の教に因つて而る后に惟だ誠あり。是れ道を修するなり。道を修するときは惟れ心正し。心正しきときは性に率つて、天命の性初めて全し。

(一) 論語子罕篇第四章。前出三三二頁參照

一〇二　或ひと情の說を問ふを辨ず

或ひと問ふ、性は善にして情は善ならずや。師曰はく、程子曰はく、「情は性の動なり。要は之れを正に歸するのみ、亦何ぞ不善を以て之れを名づくることを得んや」。愚謂へらく、性は只だ感通知識なり、善惡を以て論ずべからず。情の物に及ぶや理を究め詳に盡さざるときは節に中らざることあり。節に中らざるは是れ不善なり。情の物に及ぶや、善不善なくんばあらず。格致して之れを正に歸するなり。

或ひと問ふ、先儒仁義禮智を以て性と爲し、惻隱羞惡の四を以て情と爲す。而今共に以て情と爲すは、其の說疑なくんばあらず。師曰はく、先儒各〻性を以て理と爲し善と爲し、仁義禮智を以て性の發見、固有本然の善と爲す。愚謂へらく、惻隱羞惡辭讓是非と仁義禮智と、那箇か差別し來らんや。共に是れ心の動いて物に感ずる底なり。但し其の理に當るを仁義禮智と爲す。然れども惻隱羞惡辭讓是非は、仁義禮智に非ずと謂ふべからず、究理し來つて全く節に中るの名なり。是れ其の情意を正すに在り。如何ぞ仁義禮智惻隱羞惡等を分ち得ん。是も亦情、非も亦情。性は只だ感通知識の本體のみ。

或ひと問ふ、古人情を論ずるに七を以てして曰はく、「喜怒哀樂愛惡欲なり」と。今二氣五行の說を以てして七情に及ばざるは何ぞや。師曰はく、二氣五行の發して物に及ぶ、是れ七情なり。中庸に喜怒哀樂を以てし、孟子に惻隱等の四箇を以てして、愛惡欲に及ばず。愚謂へらく、人の情は其の本二氣に出で、其の用五行に發し、其の流末擧げて言ふべからず。然して人各〻吉凶軍賓嘉の禮あり。吉禮は喜に屬し、凶禮は哀に屬し、軍禮は怒に屬し、賓嘉は樂に屬す。是れ情の物に應ずる底なり。認め來れば克伐怨欲驚懼苦あり、好惡敖敬憂思謀あり、事物の差太だ多くして其の情の應ずるも亦一ならず。故に世に七情と謂ふも其の差ありて定まらず、只だ喜怒哀樂を以て之れを論ずるの的當なるに如かず。

或ひと問ふ、人五行を具ふ、故に其の情發して五と爲るとは、是れ先儒の所謂性は仁義禮智と爲し、心は衆理を具ふると爲すか。師曰はく、天は只だ流行して生々止まず、地は之れを稟けて萬物を生じ、人之れを名づけて四時と爲し四德と爲し、人物各〻其の用を遂ぐ。性も亦此の如し。性は只だ生々止むなく能く感通知識するなり。人物之れに觸れ、事之れに應じて、各〻其の用あり、名づけて五常五倫の差あり。人は

二氣五行を出でず、身體の全きも亦此の二五の精に在り。故に其の感通知識する所尤も二五の用に速かなり。仁義禮智の理を全くし、事物の象理を正すことは格物致知の功に在り。

或ひと問ふ、事物の間格物致知し來る底、是れ性か、是れ情か。師曰はく、思量究理する底、是れ性の事物に及ぶなり。故に格物は是れ情、致知に至りては理に感通し理を知識す、是れ性なり。然して推して格物致知と曰ふときは、各〻情上に在し來る、是れ格物致知して誠意正心に至る所以なり。故に性情は水波の如く本と差別すべからず。程子曰はく[一]、「纔に識る所あれば便ち性あり、性あれば便ち情あり。喜怒は性に出づるは、固に是なり」と。說き得て太だ可なり。

或ひと問ふ、多く怒り多く驚くを、程子以爲らく[二]、主心定まらざるなりと。是れ怒驚を以て心と爲すなり。師曰はく、怒驚は心にあらざるには非ず、主心定靜すと雖も、理を究め來らざれば、只だ怒驚せざる底を以て要と爲す。理に於て何ぞ分明なるを得んや。

或ひと問ふ、程子の定性書[三]に曰はく、「夫れ人の情、發し易くして制し難き者は、惟

(一) 二程語錄卷十一、伊川の語に出づ、原典には「纔有レ生識一便有レ生、無レ性安得レ情」と見ゆ

(二) この意味、前出近思錄定性書に出づ

(三) 前出二九三頁參照

だ怒を甚しと爲す、第だ能く怒る時に於て、遽に其の怒を忘れて理の是非を觀る、亦外誘の惡むに足らざることを見るべし。而して道に於ても亦思半ばに過ぎん。」朱子(一)曰はく、「力を著くる緊要は只だ此の一句に在り、遽に其の怒を忘るるは、便ち是れ廓然大公なり。理の是非を觀るは、便ち是れ物來つて順應するなり。明道の言語渾淪なり」と。師曰はく、情欲の事物に於ける、人各〻辟する所あり。(二)大學に忿懥・恐懼・好樂・憂患を以て正心を論ずる、以て見るべし。唯だ怒を甚しと爲るのみに非ず、少艾(三)にしては色を慕ひ、壯にしては鬪を好み、老いては得るに在る、皆質に因つて偏辟する所なり。此の間詳に其の事物の理を盡して其の極に至るときは、喜怒各〻其の節に中る。明道の「遽に忘る」の字下し得て未だ全からず。(四)夫子既に顏淵を稱するに怒を遷さざるを以てす、怒豈忘るべけんや。其の說話尤も高過す。只だ其の怒に於て其の至極を觀ひ究むるなり。

或ひと問ふ、人の情は怒に於て其の弊尤も甚し。易に曰はく、(五)「山下に澤あるは損なり。君子以て忿を懲し欲を窒ぐ」と。明道は怒を忘るるを以てす、亦切ならずや。師曰はく、喜怒哀樂の情に於けるや、相表裏す、只だ怒は生氣を傷り事物を害す、是れ

(一) 朱子語類卷九十五程子之書に出づ

(二) 傳第七章の語の要約。第十一卷一六一頁參照

(三) 艾は老年なり、少艾即ち幼少の意なるべし

(四) 論語雍也篇第二章「好レ學、不レ遷レ怒、不レ貳レ過」に出づ

(五) 損の象

聖人の戒むる所なり。慾の事物に於ける、其の名一ならずして其の根を深くす、學者尤も究理すべし。明道の定性書に唯だ怒を擧げて慾を以てせず、其の說未だ混然たらず。

或ひと問ふ、聖人は恐らくは怒れる容なからん、否や。師曰はく、聖人能く喜怒す、情の事物に於けるや、凡聖を以て有無を論ずべからず、只だ節に中ると節に中らざるとに在り。或ひと曰はく、然らば乃ち聖人も亦忿厲の氣ありや否や。師曰はく、天の雷霆大いに震ひ風雨暴迅なる、是れ忿厲の氣あるなり。聖人怒るべきに當りて自ら笑の容を爲して可ならんや。喜怒節に中りて私を以てせず、只だ生々息むことなく、天地の大德に法るなり。

或ひと問ふ、人の情尤も動き易く驚き易き、是れ主なきの謂か。師曰はく、孟子は浩然の氣を養ひて心を動かさざることを論ず。愚謂へらく、其の事物の極を盡さざるが故に驚動あり。凡そ驚動底は皆昏昧し來つて其の理明かならず、竟に驚動に到るなり。富貴貧賤の動かす所、好色惡臭の動かす所、妖物異類の驚かす所、戰場死地の驚かす所、是れ驚動底は其の情にして、疑惑底は其の理昏昧すればなり。若し驚動を以

て可ならずと爲し來らば、是れ驚動せざる底を立てて一箇の用と爲す、太だ造作するなり。且つ豫め修し常に習するときは、其の理詳に盡して疑惑なし。一を主として驚動なからんと欲するは、聖人の教に非ざるなり。恆の人も亦一箇を主張して驚動なきを要すれば、驚動せざる底あり。(一)告子が心を動かさざること併せ案ずべし。異端は專ら驚動せざる底を以て至れりと爲す。是れ皆驚動せざるを以て要と爲し關と爲すなり。(二)孟軻の不動心と年を同じうして語るべからず。

一〇三　志氣を論ず

師曰はく、志は心の之(ゆ)く所にして意情定まり嚮ふ所あるの謂なり。論語に曰はく、(三)「志士仁人」。又云はく、(四)「博く學んで篤く志す」。孟子に曰はく、(五)「士は志を尙ぶ」と。是れ志は心の定まり向ふ所、意情に比すれば尤も重し。

師曰はく、(六)「文王は我が師なり、周公豈我れを欺かんや」。(七)「舜何人ぞや」。(八)「伊尹が志す所を志す」。是れ各〻志なり。志の定まる所、心性乃ち定まる。志の趨く所、遠しとて達せざることなく、山を窮め海を窮めて限ること能はず。志の向ふ所、堅とし

(一) 孟子公孫丑上篇第二章に「告子先レ我(孟子)不レ動レ心」とあるを指す、不動心に各種の方法あるをいへり
(二) 同前に出づる「我四十不レ動レ心」をいふ
(三) 衞靈公篇第八章
(四) 子張篇第六章、但し孔子の門人子夏の語
(五) 盡心上篇第三十三章
(六) 孟子滕文公上篇首章の公明儀の言
(七) 孟子同前に引用さる顏淵の語
(八) 同盡心上篇第三十一章、孟子の語

て入らずといふことなく、鋭兵精甲も禦ぐ能はず。故に匹夫も志を奪ふべからず。

師曰はく、君子小人の別は、志の義と利とに於けるに在り。善惡の二途、堯・桀・舜・跖(九)の繇りて以て異なる所は、惟だ這裏にあり。理義之れが主と爲るときは、情欲移すこと能はず。情欲之れが主たるときは、理義入ること能はず。故に志の立つ所謹まずんばあるべからず。張横渠曰はく、「志は公にして意は私あり」と。愚謂へらく、志は主とする所ありて、意は主とする所なし。夫子七十にして矩を踰えざるは、十有五にして學に志すの處に在り。志の繫る所尤も重し。君子小人の成る所、志の裏に落在す。

師曰はく、志も亦氣質に因る、故に志氣と曰ふ。人は少にして勇あるも、老いて怯る。少にして廉なるも、老いて貪なり。是れ氣に因つて志の變ずる所なり。志能く氣を使ふときは一定して變ぜず。程子曰ふ「志、氣を御するときは治まり、氣、志を役するときは亂る」とは是れなり。愚謂へらく、格物致知して能く詳に其の義理を盡すときは、志は是れ卓爾として乃ち氣常に志に從ふ。是れ乃ち君子なり。情欲に從ひて志を立て來れば、乃ち志常に氣に從ふ。是れ乃ち小人なり。曾子易簀(一〇)の時、氣已に微

(九) 跖蹻、惡人の代表者として引けり

(一〇) 禮記檀弓上篇に出づ。曾參まさに死せんとするや、大夫より賜はりし簀を撤して他の簀と取りかへて死せり

なること知るべし、其の志は是れ卓爾として易簀して死に至るも、竟に氣の爲に奪はれず。然して志も亦未だ嘗て氣に從はずんばあらず。人の少壯老、其の志氣大いに變ず、以て證すべし。志氣は更に離るべからず。

一〇四　思慮を論ず

師曰はく、思慮は意情の內に詳なるなり。思慮必ず事物の觸れ來る底に因る。大抵事物の應用は、詳に思ひ具に慮るときは、各〻已むを得ざるの理義を得。思慮徹洞せざるときは皮膚の上に涉る。其の表面知るに似たりと雖も、這裏實底は盡く究めざるなり。然れども學習に因つて思慮を盡さざれば、思慮只だ心氣の勞耗のみなり。心氣勞耗するときは影光を弄し虛妄を味ひ、以て心の作用至れりと爲す。禪の坐禪入定、後儒の精神靜坐、皆心氣勞耗底の影響罔兩（景外の微陰なり）を認めて、悟了夢覺の論を爲すなり。

師曰はく、程子曰ふ、(一)「思慮を息めんと要すれば便ち是れ思慮を息めず」と。朱子曰(二)はく、「思慮は息め得ず、只だ敬すれば便ち都て沒了す」と。(三)呂與叔嘗て言ふ、「思慮多くして驅除する能はざるを患ふ」と。程子に問ふ、「先儒各〻思慮を息むるを以て

（一）朱子語類卷九十七に出づ
（二）同前つゞきに出づ
（三）前出二七二頁參照。ここに見ゆる語は近思錄存參類に出づ

す」と。愚謂へらく、思慮は是れ知の應用なり、如何ぞ去り得ん。「思に容と曰ひ、[四]容は聖を作す」と。大學に曰はく、「慮つて得」[五]と。論語に曰はく、「遠く慮り、[六]謀を[七]好む」と。聖人以て教と爲す。只だ學ばずして思ふ、故に其の思慮紛擾し來りて的當ならず。是れ學思の相因る所なり。後世は學ばず問はずして、只だ思慮を費し、竟に閑思雜慮の紛擾妄動に至る。

師曰はく、常の人亦事に臨んで思慮なきに非ず、而して其の得ることあるを見ざるは何ぞや。只だ學習に因らず、己が私意を以て思慮し來ればなり。私意を以て思慮し來れば則ち悉く妄思にして、以て得る者あるべからず。詳に思慮すれば詳に違背す。只だ天地の準則あり、之れに因つて思慮し來らば、其の思慮する所尤も得べし。

(四) 書經洪範に出づ、上の句は所謂五事の德の一つをいへるものにして、下の句は、その五德の用の一つをいへるなり。睿は思慮の綿密なることをいふ
(五) 釋一章
(六) 衞靈公篇第十一章
(七) 述而篇第十章

山鹿語類　巻第四十三

聖學十一　大原

一〇五　道の大原を論ず

師曰はく、道の大源は天地に出で、人亦之れを具ふ。聖人は其の極を合せて萬世に規範たり。噫大なる哉、噫至れる哉。天能く覆ひ地能く載せ、法象變通、顯象著明、至大至公にして、於穆として已まず、生々して息むことなし。故に能く萬物に父母たり、能く萬物を覆載し、能く萬物に變通す。千萬世を歴て毫末を損益せず。人物皆斯に出で各ゝ此の源を具へ、日に此の道を用ひて知らず。默識せんと欲するときは遙に遠く、心通せんと欲すれば杳に隱る。唯だ大人は性德睿明自ら彊めて息まず、中和を致して天地の化育を贊け、以て天地と參たるべし。(一)古は包犧氏の天下に王たるや、仰いでは象を天に觀、俯しては法を地に觀、鳥獸の文と地の宜とを觀、近くは諸れを身

(一) 易繫辭下傳に出づ

に取り、遠くは諸れを物に取る。是に於て始めて八卦を作り、以て神明の德に通じ、以て萬物の情に類す。

師曰はく、道の大原は聖人恆に言はず、而も須臾も離れず。後世の學者聖人を知らず、切に工夫を下し、道源を索め其の深を釣り、終に學の異端に陷ることを覺らず。最も歎息すべし。凡そ聖人の源とする所は道を修するに在り、故に道を修する之れを教と曰ふ。道如何にして修するや、唯だ教に在るのみ。教を以て道を修し、道を修して性に率ふ。性に率ふときは上帝に對越す。中庸に曰はく、(一)「大なる哉聖人の道、洋々乎として萬物を發育し、峻きこと天に極まる」と。

師曰はく、詩に(二)曰はく、「德輶きこと毛の如し」と。毛は猶ほ倫あり、上天の載は聲もなく臭もなし。凡そ道の大原は天地に在り、天地の德は言語を以て語るべからず。唯だ厚く聖人の教に志し、其の言を信じ其の行を見、至誠息むことなくして始めて自得すべし。聖人の教を立つること、人をして自ら天地の本然に復らしめ、更に作爲して言はず、又別法の教なく、其の言簡にして其の行易きなり。簡易にして博厚高明なり。悠久にして疆りなし。其の用其の法象、四海に彌綸し萬物を覆載す。之れを言へ

(一) 第二十七章
(二) 詩經大雅、烝民篇に出づ

ば彌〻明かに、之れを用ふれば彌〻公なり。而して生々皆其の德を含蓄す。

師曰はく、天地の道は多言に渉らず、多思に及ばず、觸目皆是れなり。一言にして盡すべし。百姓日に用ひて知らず、學者其の所以を認めて其の精神を弄すれば、道終に隱れて日用と間隔す。

師曰はく、聰明睿知思うて通ぜざるなき者は聖人なり。人の大原は聖人なり。聖人の大原とする所は天地に在り。聖人の道更に造作することなし。乾坤又簡易なり、而して分殊あり次序あり。學者言語を以て聖人を觀て其の實を認めず、言を待たずして著明なることあるを知らず。夫子曰はく[三]「予れ言ふことなからんと欲す、天何をか言ふや、四時行はれ百物生(な)る」と。是れ直に全體を指して日用造作することなきの謂なり。若し言語を認むるときは「天何をか言ふや」の語に因つて、又手を下し工夫造作して訛謬(くわびう)に陷つて終に高見を爲すに到り、異見于(ここ)に立ち、異端于に溺る。夫子を以て師と爲し親炙するを、猶ほ日用を棄てて異問を爲し異言を求む。人の道に遠ざかることと此の如し。

師曰はく、今世道(みち)を談ずるの徒、其の源を言ふときは默寂空平にして分殊皆闕き、

(三) 論語陽貨篇第十九章

其の分を言ふときは支離決裂して、一貫各〻絶ゆ。是れ道の大原を以て空寂に歸し、分殊を以て世俗に屬し、彼の空寂無爲より分殊皆出づと爲す。其の言語とする所、其の日用とする所、唯り空寂にして通ぜず、分殊にして序でず。是れ道の大原を知らずして、或は古人の言語に依り後儒の書冊を證とし、虛を傳へ足を添ふ。尤も戒むべし。中庸に曰はく(一)「天地の道は一言にして盡すべし。其の物たる貳ならざれば則ち其の物を生ずること測られず」と。又曰はく(二)「唯だ天下の至聖のみ能く聰明睿知にして、以て臨むことあるに足れり、寬裕溫柔にして、以て容るることあるに足れり、發强剛毅にして、以て執ることあるに足れり、齊莊中正にして、以て敬することあるに足れり、文理密察にして、以て別つことあるに足れりと爲す。溥博淵泉にして、時に之れを出す。溥博は天の如く、淵泉は淵の如し。見て民敬せずといふことなく、言ひて民信ぜずといふことなく、行ひて民說ばずといふことなし。是を以て聲名中國に洋溢し、施いて蠻貊に及ぶ。舟車の至る所、人力の通ずる所、天の覆ふ所、地の載する所、日月の照す所、霜露の隊つる所、凡そ血氣ある者尊親せずといふことなし。故に曰はく天に配すと」。是れ聖人と天地と天下に參して易簡無爲、而も其の間德行・言語・政事・

(一) 第二十六章
(二) 第三十一章

變通、能く厚く能く明かに、次序分殊して更に差謬なく、一言萬象を含蓄し、分殊一貫に歸依し、上帝に配し、人物の上に立つなり。

一〇六　古聖各〻天地を稱するを論ず

師曰はく、往古の聖人は、事物の至極、皆天地日月四時を以て據と爲す。唐堯の治は、乃ち(三)羲・(四)和に命じ欽みて昊天に若ひ、日月星辰を暦象し、敬みて人に時を授けしむ。虞舜の治は、(五)璿璣玉衡を在にし、以て七星を齊ふ。又歌を作つて曰はく、(六)「天の命を勑み、惟れ時惟れ幾せよ」と。(七)大禹曰はく、「昭かに上帝に受く」と。(八)中虺の誤 湯誓に曰はく、「欽んで天道を崇び、永く天命を保て」と。(九)湯誥に曰はく、「惟れ皇たる上帝、衷を下民に降せり」と。伊尹曰はく、(一〇)「克く天心に享り天の明命を受く」と。周書泰誓に(一一)曰はく、「天地は萬物の父母なり」と。周公曰はく、(一二)「昔在殷王中宗嚴恭寅畏にして、天命自ら度る」と。詩に曰はく、(一三)「天烝民を生ず、物あれば則あり、民の彝を秉る、是の懿德を好す」と。又曰はく、(一四)「克く上帝に配す」と。頌に曰はく、(一五)「天に在せるに對

(三) 書經堯典に出づ　(四) 羲氏・和氏の二人　(五) 書經舜典に出づ、璿璣は後の渾天儀の如きもの、玉衡はその中に直徑に置かれし管。七星は又七政とも書く。日月五星の謂なり　(六) 書經益稷に出づ　(七) 同前　(八) 行間は後の書入れか。正しくこの語は中虺の誥の末句なり。中虺・湯誓、いづれも書經の篇名　(九) 書經篇名、衷は中に同じく、天稟の仁義禮智信の理　(一〇) 書經咸有一德篇に出づ　(一一) 同書經の篇名、ここは泰誓上に出づ　(一二) 書經、無逸篇に出づ　(一三) 詩經大雅、烝民篇　(一四) 大雅文王篇　(一五) 詩經周頌、淸廟篇

越す」と。又曰はく、「(一)惟れ天の命、於穆として已まず」と。書・詩各〻昊天上帝を稱す。(二)聖人の易に於けるや、嘆ずるに數年を假すを以てす。而して易の書たるや、乾坤に起れり。繫辭に曰はく、「(三)乾坤は易の蘊か、乾坤毀るるときは以て易を見ることなし」と。又曰はく、「法象は天地より大なるはなく、變通は四時より大なるはなく、縣象著明なるは日月より大なるはなし」と。又曰はく、「易は天地と準ふ、故に能く天地の道を彌綸す。仰いで以て天文を觀、俯して以て地理を察す」と。又曰はく、「廣大は天地に配し、變通は四時に配し、陰陽の義は日月に配し、易簡の善は至德に配す」と。又曰はく、「天地位を設けて、易其の中に行はる」と。文言に曰はく、「(四)夫れ大人は、天地と其の德を合せ、日月と其の明を合せ、四時と其の序を合せ、鬼神と其の吉凶を合す。天に先だつて天違はず、天に後れて天の時を奉く。天すら且つ違はず、而るを況や人に於てをや、況や鬼神に於てをや」と。說卦に曰はく、「聖人の易を作るや、將に以て性命の理に順はんとす、是を以て天の道を立てて、陰と陽と曰ひ、地の道を立てて柔と剛と曰ひ、人の道を立てて仁と義と曰ふ」と。序卦に曰はく、「天地ありて然る後に萬物生ず」と。是れ堯・舜・禹・湯・周公・孔子、聖々相繼ぎて、天地日月四

(一) 周頌、維天之命篇
(二) 論語述而篇第十六章、「子曰、加ニ我數年一、五十以學レ易、可ニ以無ニ大過一矣」をいふ
(三) 繫辭上傳の終に出づ、蘊は又縕に作る。蘊奧の意
(四) 乾の文言

時を以て則と爲す。其の伏義・神農・黄帝の上世も、夫子尙ほ之れを稱するに天地を以てす。夫れ萬物は皆天地に生ず、人亦萬物の一にして萬物の靈なり。萬物其の極を推すときは則ち天地に歸す。是れ道の大原は天地に本づくの謂なり。學者上古の聖神を錯き、末學の利口を師として、天地已前を以て論を立つ。其の議する所殆ど空寂虚無に入り、高く見遠く索めて今日に益なく、心氣勞擾して日用皆違ふ。以て愼むべきの至りなり。

一〇七　或ひと道原の說を問ふを辨ず

或ひと問ふ、聖人は道の大原を論ぜず、唯だ漢の董子(五)に到つて、道の大原は天に出づるを以て言を爲す。今天地を以て道の大原と爲すは、殆ど聖人の言はざる處を論ずるに似たり。師曰はく、是れ學者文を以て意を害するの弊なり。聖人の日用皆天地を以て則と爲す。易の象卦は乾坤を以て極と爲す。詩・書は天を以て證と爲す、天何をか言ふやの教見るべし。聖人の言行、唯だ天地の則のみ。何ぞ道源を以て別に之れを稱せんや。後世聖人を去ること甚だ遠く、聖學を知らずして終に道の大原を建てて論

(五)董仲舒、廣川の人、武帝に用ひられて江都の相となる、後退いて著書に心血を濺ぎて産を治めず、現に殘れる著書には春秋繁露あり。儒教を支那の國教の如き位置におきし學者なり

を作し說を爲して虛遠に騖せ、或は道原の言を以て聖人に出でずと爲す。皆實に薄きの至りなり。或ひと曰はく、然らば何ぞ又道原を立てて此の說を爲さんや。曰はく、予が道原を立つるは、是れ世俗に隨ひて世俗の惑を破らんことを欲するなり。

或ひと問ふ、漢の董仲舒曰はく、「道の大原は天に出づ」。朱子曰はく、「道の本原は天に出でて易ふべからず、其の實體己れに備はりて離るべからず」と。今道の大原天地に出づと謂ふ、各〻同一意か。師曰はく、董子が策(一)に曰はく、「道の大原は天に出づ、天變ぜざれば道も亦變ぜず」と。是れ道の行はるると行はれざるとは天に在りと爲すなり。其の語意甚だ輕し。況や董子も亦一曲の士なり、其の語間道ひ得て好きことあれども、眞に聖人を知る者に非ず、彼れの策及び繁露(二)等の書に於て見るべし。朱子の言ふ所の者は、中庸第一章の章句なり。是れ亦天を以て性を賦するの本なりと爲す。言ふこころは本原にして、其の意は初始と謂ふが如し。故に語意輕し。今予が道の大原は天地に出づと言ふ所の者は、人々の日用本末前後の間、皆天地を以て大原と爲すの謂なり。聖人の道は始より終に至り、修身より平天下に到るまで、一箇の微事も亦天地の準則を出でず。而も至大にして至公、生々息むことなくして文質彬々たり、其

(一) 武帝に上りし策の第三策に出づ、前漢書五十六、董仲舒傳に在り

(二) 春秋繁露、十七卷、多く公羊傳によりて春秋を研究したるもの、學者多少の疑を入るるもありといふ

の序更に違はず。是れ天地に準ずるなり。
　或ひと問ふ、易に曰はく、「(三)始を原ねて終に反る。故に死生の說を知る。精氣物と爲り、游魂變を爲す。是の故に鬼神の情狀を知る」と。又曰はく、「(四)廣大は天地に配し、變通は四時に配し、陰陽の義は日月に配し、易簡の善は至德に配す」と。是れ等の語は死生・鬼神・始を原ねて終に反る・天地・四時・日月の外至德を以てす。是れ天地の外其の極隱るる所あるか。今唯だ天地を以てするは、是れ等の奧儀通ぜざるに似たり。師曰はく、易に、「乾坤を以て立つ、乾坤毀るるときは、以て易を見ることなし」と。死生鬼神は是れ天地の間陰陽の變通なり。天地は其の象を指し、至德は其の至德なり。始を原ねて終に反るは物の始終なり。聖人の學は乾坤並び行はるるの間に在り。天地の前後は論ずるも益なし、錯いて言はず。或ひと曰はく、然らば「天に先だつて天違はず、天に後れて天の時を奉く」の語は何を以て言ふや。曰はく、能く天地に通ずるの聖人、天に先だち天に後れて而も亦一天地の則のみ。故に違はず能く奉くるなり。天に先だつは未だ形せざるの象なり。天に後るるは已に發するの形なり。
　或ひと問ふ、道の大原は天地に出づと。天地何をか謂ふや。唯だ默識心通す、冊な

(三) 繫辭上傳
(四) 同前、前出三五二頁參照

く篇なくして可なり。易も亦一畫に止まるべくして此の言あり此の書あるときは、天地の本原に違ふや。曰はく、然らず、上世は言はずして化四海に行はる、是れ德は天地に同じきなり。伏羲一畫して道乃ち通ず。後世實薄くして口に利し、故に後聖之れを傷み、文王・周公相繼いで其の言あり。孔子衰世の爲に具に說き詳に述べて、其の趣初めて明かなり。聖々相說くの言、千言萬句一貫して間隔せず、理一にして分殊なるの謂なり。秦に斯に焚かれて(一)經籍幾ど熄む、尤も人生の不幸何事か之れに加へんや。後世聖人の微意を知らず、人の言語を追ひて口に利く、篇冊甚だ多し。道の遠ざかる所、聖の蔽はるる所、尤も歎息すべし。

　或ひと問ふ、道原の說、大抵始學者の事に非ず。子恆に卑より高に升り近より遠に及ぶことを以てす。今の所謂道の大原は、學者必ず卑近を厭ひて高遠に騖せ、等を躐え節を陵ぎ、空虛に流れ、依據する所なきに迄ばんか。師曰はく、學者道の大原を會せざるときは、其の學ぶ所雜りて純ならず。聖人の道德と云ひ仁義と云ふは、皆是れ道の大原なり。後の說く者、道德仁義を以て自ら大原を說き出さず。故に其の說く所言は似て其の本は違ふ。是れ道源を貴びて說かざるは、大原を會せずして別物と爲る

(一) 李斯、始皇帝に獻言して書を焚けるなり

なり。卑より高に升り近より遠に及ぶは、是れ箇の大原の序なり。

或ひと問ふ、然らば則ち後出晩進は義理の本原に於て未だ驟（にはか）に語るべからずと雖も、苟も茫然として其の梗概を識らざるときは、亦何の底止する所ぞ、故に先づ道の大原を以てするか。師曰はく、「後出晩進は義理の本に於て未だ驟に語るべからず」との言甚だ謬れり。義理の本源は始學より終末に至るまで、恆に表出して須臾も離るべからず。其の言其の行、忠と云ひ孝と云ふ、各〻學者をして此の趣向に底止せしむべし。此の大原に底止せざるときは、言行忠孝其の事業相似ると雖も、大原杳（はるか）に違ふ。是れ(三)管仲・晏子が功少からざるも、聖門の徒之れを言はざるなり。日用躬行の實大原を離るるときは實ならず。

或ひと問ふ、道の大原は學者の趣向を底止して雜駁ならしめざる所以ならば、聖人何ぞ易を以て恆に論ぜずして、唯だ詩・書・執禮を以てするや。師曰はく、日用躬行の實は、是れ學者の急務にして大原の次序なり。彼の易は直に全體を指し淵源を著明にする書にして、盡せり至れり。初學の徒の速かに通ずる所に非ず。人各〻急務あり、急務を先にして大原を失はざるは、是れ聖人の教ふる所なり。易は聖々相傳へて、是

(二) 孟子梁惠王上篇第七章に「齊桓・晉文之事、可レ得レ聞乎。孟子對曰、仲尼之徒、無下道二桓・文之事一者上」又公孫丑上篇首章にも、孟子が管仲・晏子に比せられしを喜ばずして、曾西も己れが管仲と孰れか賢と問はれて、功烈彼が如く其れ卑しとて艴然たりし例をあげたり

れを以て萬世の師と爲す所以なり。故に恆に說かざるなり。

或ひと問ふ、孟子既に沒して理學明かならず、有宋の諸儒大いに正宗を明かにす、是れ道の大原に非ずや。師曰はく、理學の說甚だ謬れり。漢の儒者專門に陷り、唐人は詞華に泥む。宋元明の諸儒理學を執る、各〻五十步百步にして、聖人の旨を亡ふことは相同じ。專門・詞華の學者は、訓詁章句にして其の弊浮華偏倚なり。理學に到るときは虛遠を談じ高尙を事とし、寂然を味はひ世俗を蔑し、聖學に於て其の害甚だ深く、日用に於て其の弊尤も切なり。理學遂に盛にして、儒の佛なる者老莊なる者皆然り。道の大原何の處にか存せんや。偶〻其の說を爲すの徒精神を弄し空無を味ふ。凡そ學は理氣を論じ合妙を存す、故に事理一致して本末共に具はる。唯だ理學とのみ曰ふときは、其の言泥著して大原終に隱る。

或ひと問ふ、後學の證する所各〻六經に在り。子の言ふ所も亦六經に本づけり。是非甚だ決し難きか。師曰はく、易に曰はく、(一)「乾は易を以て知り、坤は簡を以て能くす」と。又曰はく、(二)「易簡にして天下の理得」と。是れ聖人の道日用事物の理にして、甚だ易に甚だ簡なり。其の間自然の妙用あり。妙用を欲し思慮を欲すれば、乃ち違ひ

(一) 繫辭上傳に出づ
(二) 同前つづき

乃ち遠し。論語の一貫(三)・點(四)に與する等の語、易(五)の寂然不動の言、學者焉れを執へて思慮を費し工夫を勞し、終に虛無靜寂に陷溺し、鑑空衡平の地と爲し、無聲無臭の至と爲し、之れを日用に及ぼし、之れを政事に施して更に用なし。唯だ清談を事とするのみ。象山・陽明が學者を惑はし大原に違はしむる、寔に千載の罪人、鼓を鳴らして之れを攻むるも猶ほ未だ足らざるがごとし。學者證すべき所は、日用究理の上、事物致知の間に在り。其の高尙其の虛遠、清談潔行稱すべしと雖も、日用究理せず事物致知せざるときは、知日に暗く理日に遠くして、權謀術數虛無寂滅の間なり。

或ひと問ふ、道の大原は天地に出づるの說は聞くことを得たり。天地の然る所以の者は是れ何ぞや。師曰はく、天地の然る所以の者は、理氣の妙合にして然り、象を以て名づけず、言を以て語らず。或ひと曰はく、理氣の妙合は是れ何の故ぞや。師曰はく、天地の然る所以なり。或ひと曰はく、天地の然る所以の者は理氣の妙合にして、理氣の妙合は天地の然る所以なり。是れ二箇底にあらずや。師曰はく、何ぞ相分たんや。多言は數〻究まる。

(三) 論語里仁篇第十五章「吾道一以貫レ之」

(四) 同先進篇第二十五章「夫子喟然歎曰、吾與レ點也」に出づ。點は曾子の父、他の同門皆治國平天下を以て語りしに、點獨り風流を語りし時の孔子の言葉なり

(五) 繫辭上傳に出づ

一〇八　易に太極あるを論ず

師曰はく、「易に太極あり、太極兩儀を生ず」(一)と。太は古の泰の字、極なり甚なり。極は至なり窮なり。太極は象數已に具はりて未だ發せず眹なきの稱なり。這箇の理氣妙合して、幽微の間、廣大變通、縣象著明の象、盡く具はりて一點の闕くることなく、甚だ相至極せるの謂なり。這箇太極の象已に發して、天地便ち廣大なり、四時便ち變通し、日月便ち縣象著明なり、雲行き雨施し萬物品節す。是れ幽微の間太極の象已に發するなり。始終唯だ太極のみ。

師曰はく、太極の說、近く譬を人生胎託の初に取るに、理氣混合して一點子の象を爲す。是の時象數已に具はりて一箇の闕なし。然して唯だ一點子にして沖漠無眹(二)なり。這箇の一點子、天地自然の妙、日用事物の理、四支百骸の象、既に太極す。而して日に成り月に長じて、終に此の形を爲す。是れ一點子の間象數已に太極するの發なり。今一箇を損益せず、鳥獸魚鼈昆蟲の出生、草木の種子卵胎含靈、萌芽甲拆(三)、凡そ理氣妙合の物皆此の如し。象數已に具はりて眹なし。其の象數已に發して用を爲すなり。故に太極は始終の至極せるなり。

(一) 繫辭上傳
(二) 空漠として何等のきざしなきを云ふ。漠又朕に作る
(三) 草木の芽を出すこと

師曰はく、聖人事物の間應接の用唯だ此の太極のみ。所謂聖人は天地の物則に依り衆理を含蓄す。是れ未發の時、已に象數相具はる、故に感じて天下の物に通じ、思ひて通ぜずといふことなし。其の未だ感ぜず未だ應ぜざるや、冲漠にして無眹なり。然も象數は悉く具はる。是れ太極なり。其の方寸の間に已に太極す、故に致知格物の功、正心修身の要、父子君臣に、國に天下に、千緒萬端の事物皆相通じて序あり。是れ日用の太極なり。

師曰はく、夫子易を論ずるに太極を以てし、理氣妙合太極して、此の一箇裏に六十四卦、三百八十四爻、其の象數悉く具はる。已に兩儀・四象・八卦を發するに及び、終に六十四卦に迄る。人皆其の著明にして形あるを執りて、而して冲漠無眹の時這箇の太極なることを知らず。故に或は理便ち太極、性便ち太極と曰ひ、次序を立て太極を論じて天地の先と爲すに至る。

師曰はく、天地自然、理氣混合するときは、其の象已に具はる。其の象已に具はるときは、妙用ありて太極なり。彼の作爲妄制の事物は、理氣妙用ならず、故に唯だ一理にして、太極を具ふと謂ふべからず。聖人君子の爲す所思ふ所、皆理氣妙用の發見

なり、故に一物各〻一太極なり。是れ聖人君子のみ、德知天地に同じければなり。小人惡人の事物に應ずるは、唯だ偏塞して敝辟(へいへき)多し。是れ幽微の間象數具はらず太極せざればなり。

一〇九　或ひと太極の說を問ふを辨ず

或ひと問うて曰はく、太極は形なく象なきや。師曰はく、朱子曰はく、「太極は象數未だ形せざるの前、其の象數悉く具はりて朕(あと)なきの目なり」と。此の言說き得て太極の說に近し。凡そ象は形の幽微なるものにして、形は象の已に著はるるなり。無形無象の處、何の論ずる所かあらん。唯だ象數含み萌して未だ縣象著明に到らず、此の裏に於て這箇一太極なり。彼の鳥の卵、木の核、其の初は一點子にして、而も見るべく執ふるべきこととなきの間に、(一)大鵬の搏扶搖、(二)松柏の棟梁の器、既に太極す。一點子の象なくして、太極何に因つて焉れを論ぜんや。故に太極象數已に具はりて發見の形なし。

或ひと問うて曰はく、一點子の間象數已に具はる、是れ便ち天命の性なり。天命の性を以て太極と爲すか。師曰はく、然らず。一點子の象數は理氣相共に具はる、性も

(一) 莊子逍遙遊篇の「鵬の南冥に徙るや、水に擊つこと三千里、扶搖に搏つて上るもの九萬里、去つて六月を以て息ふ者なり」に出づ。扶搖は大風の卷上るものをいふ。

(二) 松は世說新語賞譽篇に和嶠を稱して「森々如二千丈松一有二棟梁之用一」といひ、柏は南史韋叡傳に「豫章括柏、雖レ小已有二棟梁之器一」に出づ

亦其の裏に在り。唯だ理氣混合して相離れず、互に包持し來る。必ず天命の性を以て太極と爲す者は甚だ近からず。性も亦太極の一事なり。

或ひと問うて曰はく、一點子又何れの處より成り來るや、其の成り來る所以、是れ太極ならずや。師曰はく、一點子は、理氣混合の物なり、混合して一點子たらざるときは、太極を論ずべからず。是れ妙用なければなり。理氣妙合して一點子の象ある、是れ太極なり。

或ひと問ふ、太極是れ象なりと。然らば則ち太極は理氣相聚の後に此の象あり。是れ理氣先にして太極後なるか。師曰はく、理氣妙合するときは太極あり、太極あるときは理氣具はる。更に差別せず、又先後を論ずべからず。天地の相生る、先づ理氣ありて而る後に天地あるに非ず。此の理氣妙合すれば此の天地生ず。理氣妙合して天地生ずるときは太極なり。此の間髮を容れず。曰はく、然らば太極兩儀を生ずるの次序あるは何ぞや。師曰はく、太極は幽微にして象數已に具はるの象、其の已に發するに動靜あり。是れ亦動靜相因つて更に分離せず、故に相對して兩儀を生ずるなり。其の本を推すときは已に具はるの象數今著明するなり。已むを得ずして其の次序先後を述

ぶる。是れ又太極の理なり。

或ひと問うて曰はく、太極は專ら靜を以てするか。師曰はく、或ひとの問ふ「南軒(一)の云ふ太極の體至靜なりとは如何」。朱子曰はく、「然らず」。又問ふ、「太極は動靜を兼ねて言ふや」。朱子曰はく、「是れ太極が動靜を兼ぬるにあらず、太極に動靜あるなり」。又問ふ、「動靜是れ太極の動靜なりや、是れ陰陽の動靜なりや」。朱子曰はく、「是れ理の動靜なり」。曰はく、「此の如くなれば則ち太極模樣ありや」。朱子曰はく、「無し」と。是れ等の數語、太極動靜の說を論ず。凡そ太極は、象數已に具はり理氣妙用す、故に生々息むことなくして、天命の流行少くも舍まらず。今言ふ所の動靜は已發の動靜なり。已に形して模樣なきを以て靜と爲し、模樣あるを以て動と爲す。太極は象あるを以て靜と爲し、生々息むなきを以て動と爲す。是れ便ち理氣の妙用にして、已むを得ずして然るなり。或ひと曰はく、一點子の象、何を以てか流行するや。師曰はく、是れ乃ち二氣の妙用にして言ふべからず。今人の默靜せる、猶ほ元氣流行して瞬息の止まることなきがごとし。是れ天地の流行して息まず、四時行はれ百物生るの謂なり。尤も熟味すべし。

(一) 張栻、前出二五七頁參照、この語の一部は朱子語類卷九十四に出づ

或ひと問ふ、一點子の象是れ陰陽なり、陰陽を指して太極と謂はんか。師曰はく、或ひとの問ふ、「陰陽便ち是れ太極なりや否や」と。朱子[二]曰はく、「某[三]は圖を解して云ふなり、然れども以て陰陽を離るることあるに非ず、陰陽に卽して其の本體を指す、陰陽を離れずして言を爲すのみ。太極は只だ陰陽の中に在りて、能く陰陽を離るるに非ず。然して太極を論ずるに至るときは、太極は自ら是れ太極、陰陽は自ら是れ陰陽なり」と。是れ朱子陰陽に卽して、其の本體を指して太極と曰ひて、陰陽を離れずして言を爲すのみ。愚謂へらく、太極は陰陽及び其の本體共に具ふるの象を指すなり。本體を指して太極と謂ふときは、性便ち太極なり。性は本體にして、氣質作用は用なり。若し性を指して太極と曰ふときは、氣質作用是れ漏脫す。或ひと曰はく、性は則ち氣焉れに屬すと。然らば又理氣を以て太極と爲すなり。共に本說ならず。

或ひと問うて曰はく、人の性、形象の見るべきなくして、而も衆理を具へ萬事に應ず。是れ太極ならずや。師曰はく、人の生るるや理氣妙合して一點子の象を爲す、是れ天地自然の太極にして、此の生既に理氣の妙用を含藏す、天命の性なり。是れ一物は一太極を具ふ。人も亦天地の一品、故に一身の主宰は妙用ありて、能く萬事に應ず、

(二) 朱子語類卷九十四周子之書に出づ
(三) 某は朱子、圖は周子の太極圖

便ち一身の太極なり。直に性を指して太極と謂ふときは差あり。

或ひと問うて曰はく、朱子以下の諸儒、太極を以て理と爲す、此の理の字は理氣の理に非ずして、本然の理を指すや。師曰はく、本然の理、理氣の理、何ぞ差別せんや。理氣の理是れ本然の理なり。本然の理を以て理氣の先と爲すは、是れ異端の空談なり。

一〇　諸儒太極の説を辨ず

師曰はく、朱子曰はく、「[一]極の名を得る所以を原ぬるに、蓋し樞極の義に取る。聖人之れを太極と謂ふは、夫の天地萬物の根を指す所以なり」。又曰はく、「[二]太極は只だ是れ一箇の理の字」。又曰はく、「[三]太極は理なり、動靜は氣なり」。又曰はく、「[四]太極は只だ二氣五行の理、別に物ありて太極と爲すに非ず」。又曰はく、「動靜は太極に非ずして、動靜する所以の者乃ち太極なり」。又曰はく、「[五]性は猶ほ太極のごとく、心は猶ほ陰陽のごとし」。又曰はく、「太極は陰陽を生じ、理は氣を生ず」と。是れ等の數語及び太極の圖解、各〻理を以て太極と爲し、妙用を以て理と爲すの差謬なり。理は氣を

(一) 朱子語類卷九十四周子之書に出づ
(二) 朱子語類卷一に出づ
(三) 同前
(四) 同前
(五) 朱子語類卷五性理の條に出づ

兼ね、氣は理に屬す。言を以てするときは理と曰ひ氣と曰ふも、其の自然の妙合は更に分別せず。理を以て太極と爲すときは、性を指して太極と曰ふの謂なり。易に、指して性理と言はずして太極と曰ふ、是れ聖人性理の說を隱すか。今太極を以て性理と爲す、故に後學皆太極を以て聖學の淵源と爲す。愚謂へらく、太極は易の象數生々無息の本論なり。是れを以て學者平日の工夫と爲すは、甚だ差謬し了る。學者聖學の德知積累して思ひ通ぜずといふことなければ、太極の象數相具はる。是れ學者の太極なり。凡そ太極は作爲して何ぞ爲らん。唯だ理氣妙合して自然の太極にして眹なきなり。

師曰はく、朱子曰はく、(六)「太極は便ち只だ陰陽の裏に在り。所謂陰陽は便ち只だ太極の裏に在り。今の人『是れ陰陽の上別に一箇無形無影裏あり、是れ太極なり』と說くは非なり」と。是れ等の語道ひ得て好し。只だ太極は、幽微の間萬象共に太極するなり。此の如く說き得るときは、何ぞ一箇の別物と做し來らんや。

師曰はく、邵子(七)云はく、「道を太極と爲し心を太極と爲す」と。宋の胡安之(八)(萍鄕の人、字は叔器)云はく、「先師文公云へることあり、無極は卽ち是れ無形、太極は卽ち是れ理あり、今多く之れが詞を爲すと雖も、以て此の言を易ふることなし。邵子の道を太極と爲すとは、流

(六) 朱子語類卷七十五に一部出づ
(七) 邵康節、前出一六頁參照。この語邵子全書卷五、皇極經世觀物外篇上に出づ
(八) 朱子の門人、郡守に聘せられて學を講じ、自齋先生と稱す

行する者を以て之れを言ふ。心を太極と爲すとは、統會する者を以て之れを言ふなり。流行する者は萬物各〻一理を具へ、統會する者は萬理同じく一原に出づ。統會を知らざれば以て操存することなく、流行を識らざれば以て物に處することなし」と。愚謂へらく、邵子が說く所亦理を以て太極と爲す、故に道を太極と爲し心を太極と爲す。然らば則ち理と曰ひ道と曰ひ、心と曰ひ太極と曰ふ、各〻只だ一事の分名なり。是れ聖學を知らず、推して一原を以て之れを論じ、次序を明かにせず、分殊を詳かにせず、畢竟其の見る所甚だ高くして、其の本づく所甚だ虛し。而して日用の妙用を理會せざるなり。胡安之が解は、是れ邵子の說を信じて附會するの謂なり。太極の裏面、道の行はるるあり、心の正しきあり、理の明かなるあり、含蓄せざるなし。只だ一事を指して太極を謂ふときは、則ち一物の一太極なり、易の太極にあらず。

師曰はく、陳淳[一]、字は安卿、北溪先生と稱す、朱子に從ひて學ぶ。熹[二]が曰はく、「南來して吾が道一安卿を得」と。嘗て性理字義[三]を著はして曰はく、「太極は只だ是れ理を以て言ふ。理は何に緣つて又之れを極と謂ふぞ。極は至なり、其の中に在りて樞極の義あるを以てなり。皇極・北極等の如き、皆中に在るの義あり。便ち極を訓じて中と

（一）前出二一二頁參照

（二）朱子の名

（三）正しくは北溪字義と稱す。二卷、門人王雋の錄に係る。命・性・心・情・才・志・意・仁義禮智信等二十六門に分ち論ぜり

爲すべからず。蓋し極の物たる、常に物の中に在り、四面此に到りて都て極まり至り都て去り得ず。屋の脊梁の如き、之れを屋極と謂ふ者は、亦只だ是れ屋の衆材四面湊合して此の處に到りて、皆其の中に極まり、此の處に就きて分出し去つて、衆材を四面に布き爲す。又皆停匀[四]にして偏剩偏欠の所なし。太極と云ふ者の若き、乃ち是れ理に就きて論ず。天の萬古常に運る所以、地の萬古常に存する所以、人物の萬古生々息まざる所以、是れ各〻自ら恁地にあらず、都て是れ理其の中に在りて之れが主宰たり」と。愚謂へらく、是れ亦理を認めて太極と爲し、妙用を以て理と爲す。各〻朱子の說に同じ。天地人物の然る所以は、是れ唯だ理氣妙合の自然已むを得ずして然るなり。已むを得ずして然る、是れ理氣の妙用なり。太極を以て論ずべからず。

師曰はく、陳安卿曰はく、「未だ天地萬物あらざる先に此の理あり。然して此の理是れ懸空にして那裏に在るにあらず。纔に天地萬物あれば、便ち天地萬物の氣あり。纔に天地萬物の氣あれば、則ち此の理便ち全く、天地萬物の理あれば、天地萬物の中に在り」と。愚謂へらく、是れ理を以て先と爲すなり、故に理を以て天地萬物の先と爲すなり。天地萬物の先を謂ふときは、則ち老子は[五]「物あり混成し、天地に先だつて生ず」と說き、莊子は[六]、

(四) 停り齊ふの意

(五) 第二十五章

(六) 內篇大宗師に出づ

「道は太極の先に在り」と謂へり。是れ空無を立てて高尙を論ず、彼の理學の弊なり。天地萬物の先、聖人は錯いて焉れを論ぜず。

師曰はく、漢志に謂はく、「太極函三(かんさん)(一)は一と爲す」と。乃ち是れ指して天地人の三箇氣形已に具はりて、渾淪未判底の物と做す。此れ說き得て近し。只だ太極は未發の象、始終本末悉く具はるの稱なり。

師曰はく、象山の陸氏朱子に與ふる書(二)に曰はく、「極は中なり、無極と言ふときは是れ中なし」と。是れ陸學は太極を以て太中と爲すなり。其の說甚だ差へり。勉齋の黃榦(三)、字は直卿、朱子に師事す。太極を注して云はく、「極の字訓じて至と爲すと雖も、實は則ち方所形狀あるを以て名を指すなり。北極・皇極・爾極・民極の類の如き、皆諸(こ)れを此に取る。然して皆物の方所形狀あり、適〻極(むなぎ)(四)に似るを以て、極の義を具ふ。故に極を以て之れを明かにし、物を以て物を喩(たと)ふ。蓋し曉(さと)り難きことなし。惟れ太傳(五)に易の至理は易の中に在りて、衆理の總會萬化の本原たるを以てす、而して天下の理を擧げて能く焉れに加ふるなく、其の義得て名づくべきなし。而も極(むなぎ)に類するものあり。是に於て極を取り之れに名づけて係くるに太を以てす。則ち其の尊くして對する

(一) 函は含に同じ、ここは天地人をいふ

(二) 象山先生全集卷二、與朱元晦書に出づ

(三) 前出一九二頁參照、朱子の門弟にして又女婿たり

(四) 屋背の橫木

(五) 易の繫辭傳に、「易簡にして天下の理得」と出づ

ものなきこと、又他の極の比に非ず。然らば則ち太極は、特だ是の物を假りて以て是の理を名づけ、其の方所形狀あるに因つて以て名づくと雖も、而も方所形狀の求むべきあるに非ず、他書の用ふる所の極の字と、義を取るの思同じと雖も、實を以て虛に喩へ、有を以て無に喩へ、喩ふる所言外に在り」と。是れ等の語、太極の字を說き得て甚だ詳なり。其の說を解するに及んで曰はく、「太極は只だ是れ極至の理、形容すべからず」と。是れ說き得て過了す。太極を以て極至の理と爲すときは、聖人何ぞ說き得て恆に此の地に至らざらんや。

師曰はく、西山の眞氏(六)曰はく、「蓋し極は至極の理なり、天下の物を窮めて尊ぶべく貴ぶべきこと、孰れか此れに加ふる者あらん。故に太極と曰ふなり」と。是れ亦至極の理を指して太極と爲すなり。朱子已下諸儒の說、訓詁字解に於ては取りて用ふべきも、其の說を爲すに到りては數〻差了てり、焉れを執り用ふるに足らず。臨川の吳氏(七)曰はく、「開物の前、渾沌たる太始混元の此の如き者、太極之れを爲す。開物の後、天地あり人物あり、此の如き者、太極之れを爲すなり」と。山陽の度正(八)、字は性善、早く朱子を師とす。太極を解して曰はく、「太極は本然の妙なり、初より方所の名づく

(六) 眞德秀、前出二五四頁參照

(七) 吳[illegible]、字は仲方、臨川の人にして、朱子の門弟

(八) 字は周卿、合州の人。國子監丞・禮部侍郎を經、致仕す。少より朱子に師事し、周子年譜・爽伯齋詩話・性善堂稿の著あり。性善は字に非ずして、その書齋の名なるべし

べきなく、聲臭の議すべきなし。學者の之れを求むる、其れ將た何を以て之れを求めんや。亦之れを此の心に求むるのみ。學者誠に能く自ら其の心を識り、反つて之れを日用の間に求むるときは、將に得て言ふべき者あらん。夫れ寂然不動、喜怒哀樂の未だ發せざる者、此れ心の體にして、太極本然の妙是に於てか在るなり。感じて遂に通じ、喜怒哀樂の既に發する者は、此の心の用にして、太極本然の妙、是に於て流行す」と。是れ等の說皆理學の弊なり。凡そ聖人の道は、日用平生の間に在り。若し遠く索め深く考ふるときは、道遂に隱る。世の太極を說くもの皆高く鶩せて、其の言詰する所、得て言ふべからざるに到り、甚だ聖人の意に違ふ。愚何を以てか聖人の意に違ふことを知るや。孔門の學者は唯だ日用の切なるのみ。今の人は口を開けば太極の至理を談じ、手を下せば寂然不動の事を以てす。是れ一箇の理の字に泥著し、敝塞偏倚して聖人の道を知らざればなり。故に力行日に欠了し、知仁月に闕如し、唯だ泥塑人の如し。學者是れを以て極と爲さば、那箇か是れ修身、那箇か是れ新民（一）、見來れば只だ異端の異端なり。聖學既に泯びて、人々意見を專らにす、尤も歎息すべし。

師曰はく、後儒皆朱子の說に依り、太極を以て理と爲すなり。理氣更に離れず、離

（一）素行は四書句讀大全大學に於て、朱子の新民は親民なるべきを論ず、今素行の文として新民とあるは筆寫の誤か、或は强ひて用ひたるか、本全集第十一卷八五頁參照

るるときは妙用なし。妙用なければ則ち理氣なし。太極は理氣相聚まり、其の間に其の眹なきの象あり。已に發見して兩儀を生ずる、是れ妙用の象、必ず發して事物に應ずるの用あり。故に太極あるときは應用あり、應用なきときは太極は一箇の死物にして、用ふるに足らざるなり。(二)易に太極は兩儀・四象・八卦の應用を生ずるを論ず。以て味ふべし。

師曰はく、朱子曰はく(三)「太極は一木の生ずるが如く、(上)本分れて枝幹と爲り、又分れて花を生じ葉を生じ、生々不窮にして果子を成すに到り得て、(裏面に)而して又生々無究(窮)の理あり、生じ將つて出で去る又限りなし。箇の太極、更に停息なし。只だ是れ果實を成す時に到りて、又却つて略ぼ少く歇む。是れ止まるにあらず、這裏に到りて自ら合に少く止まるべし。所謂(四)萬物を終始すること、艮より盛なるはなし。艮止は是れ生息の意なり」と。此の語譬へ得て近し。太極は一木の生ずるが如く、其の生既に枝幹花葉果子を含む、是れ太極なり。生長するに及んで其の形を見はすも、元と是れ其の生ずる時の含藏無究の象、今相著明するなり。「既に果實を成すの時、却つて略ぼ少く歇む、是れ止まらずして、這裏に到つて自ら合に少く止むべし」。此の語差了てり。果

(二) 繫辭上傳

(三) 朱子語類卷七十五に出づ、底本一二誤寫あるか

(四) 易艮の卦の「上九、艮まるに敦し。吉なり。象に曰はく、艮まるに敦きの吉は、終を厚くするを以てなり」をいふ

實の時に到りては、果實既に各〻一點子の象を具ふ、是れ太極なり。生々無息なり、少くも歇まざるなり。少くも止まらざるなり。只だ天地の氣に隨つて收藏するも、是れ亦太極なり。一花の結ぶや、其の一點の蘂、紅白雜品を具ふ、是れ亦太極なり。日月に長じて其の花綻び來る時、更に先後甲乙なく、一般に長じ來つて數般の模樣を爲す。其の內既に一果の象あるも、見るべからず索るべからず。是れ太極の妙用なり。故に一葉の落つる、既に下に一葉の太極あり、一花の綻ぶる、既に裏に一果の太極あり。生々無息、天地の理氣、流行の機なり。疑ふべからざるのみ。

師曰はく、日本書紀神代の上に曰はく、「古天地未だ剖れず、陰陽分れず、渾沌たること鷄子の如く、溟涬りて牙を含めり。其の淸み陽なる者は薄靡て天と爲り、重く濁れる者は淹滯て地と爲るに及びて、精しく妙なるが合へるは摶ぎ易く、重く濁れるが凝りたるは場[一]り難し。故れ天先づ成りて而して地後に定まる。然して後に神聖[二]其の中に生れます」と。是の語道ひ得て好し。溟涬りて牙を含む、是れ既に象あるなり。說き下して「然して後に神聖其の中に生れます」に到つては、其の語に弊あり。神聖は天地の神聖、乃ち至神の聖人なり。天地の神聖何ぞ天地の後に生ぜん。芽を含むの間、

（一）場又竭に作る
（二）中朝事實は神明に作る。第十三卷一一頁參照

(三) 地方官として治績多く、清風高節を稱せらる。義烏志・日損齋稿等の著あり

天地乃ち神聖具はる。是れ芽を含むの時象數相具はる、乃ち太極なり。人の天地の中に生ずる、又更に先後なし。天地成るときは人物具はる。先後を論ずべからず。凡そ後世の(ひと)天地聖人の道を謂ふ、一語一句の微は說き得て近きも、說き下し來るに及んで則ち甚だ遠し。是れ天地聖人の道に通ぜずして、唯だ文義に據るのみなればなり。師曰はく、元の黃滑が太極の賦は太極の稱美を謂ひて可し。太極の說を謂ふときは、則ち甚だ遠くして取るべからず。

(三) 字は晉卿、元の學士、文を以て當世に名あり。

一二 一物一太極の說を論ず

師曰はく、天地の間理氣妙合して相生々する物は、其の本源を同じうす。故に萬物太極を一にして、一物又一の太極を具ふ。理氣妙合せず、人作妄爲の事物は、只だ一物一理にして、一物一太極と謂ふべからず。理氣妙合の物は、幽微眇茫の間と雖も、各〻箇の太極あり。草木の一花一葉文縷相對し、一毫の差錯なきが如く、一枝の長、一葉の生、一花の包、一果の結、皆各〻含象して太極す。萬古常然として一點の過了するなし。人力を待つときは十分に安排し撰作し來るも、終に相似るべからず。是れ

理氣の妙合は天地自然の誠に因りて、造作することなければなり。故に曰ふ、一物一太極なりと。

師曰はく、聖人は人の至れるなり盡せるなり。天地を以て萬物の大原と爲し、聖人を以て億兆の大原と爲す。故に聖人の事物に於ける、各〻一太極にして、發して中らずといふことなし。凡そ未形の前、其の始終を含み其の法象を具ふる、皆是れ太極なり。聖人は事物應感の前、既に其の象數悉く具はる、故に發して節に中らずといふことなし。其の事々、其の物々、各〻一太極なり。是れ力を用ひ作爲して含蓄收藏を爲すにあらず、這箇の理氣妙合して、其の已に發して此に到るなり。故に事物の成るは太極にして、發すれば則ち其の事物各〻太極あり。然らざるときは爲して節に中らず、發して數〻違ふ。何ぞ各〻太極あらんや。

一一二　或ひと一物一太極の說を問ふを辨ず

或ひと問ふ、朱子の太極圖說(の解)[一]に曰はく、「萬物よりして之れを觀るときは、萬物各〻其の性を一にして、而も萬物は一太極なり。蓋し合せて之れを言ふときは、

(一) 周敦頤の太極圖說に解を與へし朱子の太極圖說解のことなり。この言同解の第五節目に出づ

萬物は統體一太極なり。分けて之れを言へば、一物ごとに各〻一太極を具ふ」と。師曰はく、是れ朱子が太極を以て性と爲すの說なり。今一木を以て之れを譬へん。一木は其の本原なり、枝葉花實は其の萬物なり、生長收藏は其の應用なり。合せて之れを言へば、一木の太極已に其の萬物其の應用象數悉く具はる、是れ一木の太極なり。分ちて之れを言ふときは、一枝の萌芽、一葉の含芽、一花一實の一點子、這箇の太極ありて這箇の著明を爲す、是れ一物各〻一太極を具ふるなり。性を以て之れを論ずるときは、枝葉花實只だ一木の性に本づき、別に枝葉花實の性あるにあらず。枝葉花實の生々は一木の性なり。枝葉花實の折れ去るは、只だ其の枝花の折れ去るにして、其の性を損せず、其の生々を傷ふのみ。豈太極を具ふるの意味あらんや。今一箇の萌芽を折り去る、此の萌芽許多の象あり、一太極を傷ふなり。此の一太極、生々無息の性あり、大厦高梁の質あり、枝葉茂盛の榮あり、是れ一箇萌芽の太極なり。只だ其の性を以て太極と爲すときは差了てり。

或ひと問ふ、無形の間既に象數を具ふ、是れ太極なるときは、人物皆太極を同じくするなり。人物差別せざらんや。師曰はく、理氣の妙合は、人物何ぞ差別せん、唯だ

各〻一太極なり。是れ天地理氣の妙用なればなり。或ひと曰はく、然らば則ち人物一太極にして、人物妙用を同じうす、何ぞ人物の日用差別あるや。師曰はく、人物各〻其の理氣妙合に隨ひて、各自の太極を爲す。前に一木を以て比喩す。一木の眇たる、其の中に枝葉花實の異あり、而して各〻枝葉花實の太極あり、更に錯雜せず、分殊粲然たり。是れ一木の中にも這箇の差別あり。天地を以てするときは、其の中の萬象各〻理氣妙用して、萬象の差を爲す。彼の日用の不同あるは、是れ理氣妙合の用に萬差あるの謂なり。是れを以て太極を論ずべからず。

或ひと問ふ、朱子曰はく(一)「萬物の一原を論ずるときは、理同じくして氣異なり。萬物の異體を觀るときは、氣は猶ほ相近くして理絶だ同じからず。氣相近きは、寒を知り煖を知り、飢を識り飽を識り、生を好み死を惡み、利に趍り害を避くるが如く、人と物と都て一般なり。理同じからざるは、蜂蟻の君臣、虎狼の父子の如き、是れ一點子の萌あるも、其の他は更に推し去らず」と。是れ等の語、人と物は性を同じうして、其の用差別するときは、太極も亦人と物と同じからざるか。師曰はく、人と物と相異なるは、是れ理氣妙合して、或は偏塞し或は正通す、故に其の性、氣質に因つて差別

(一) 朱子語類卷四、性理一に出づ

あり。太極の如きは、人と物と各〻同一にして、皆一點子の間に象數あるなり。人と物との太極は、其の物に因りて差別ありと雖も、各〻一太極を具ふるの事は異ならず。朱子の此の說は、其の性を指せり。故に不同の論分明ならざるものあり。

或ひと問ふ、物々各〻一太極なるときは、是の理全からずといふことなきか。師曰はく、或ひと朱子に問ふに此の說を以てす。朱子の曰はく、(二)「理を以て之れを言ふときは全からずといふことなし。氣を以て之れを言ふときは偏なき能はず」と。是れ朱子は理を以て太極と爲す、故に或ひと問ふの答明かならず。理を以て太極と爲すときは、物々各〻一太極にして、是の理人物共に全くして剩偏剩欠なく、皆天地の正德を以てせん。故に朱子は理氣を分ちて之れを辨ずるなり。愚謂へらく、理氣更に分つべからず、只だ理氣妙合の間、剩偏剩欠正通あり、而して其の太極は乃ち各〻同一太極なり。

或ひと問ふ、西山の眞氏曰はく、「萬物各〻一理を具ふ、是れ物々の一太極なり。萬理同じく一原に出で、萬物は一太極を統體するなり」と。此の說一理を以て一太極と爲す。師曰はく、眞西山が所謂一理は一用の謂か。一器各〻一器の用あり、一物各〻

(二) 朱子語類卷四、性理一に出づ

一物の用あり。用を以て理と爲すときは、太極は一箇の淺薄底なり。若し天地の理を以て一理と爲すときは、一箇淺薄の器械何ぞ這の深厚の理あらんや。其の本原を謂ふときは、器械の成るも亦五行の質に因る。是れ天地を離れざるの謂なり。何ぞ至極の理を具へん。故に曰はく、天地自然理氣妙合の物は、幽微の象と雖も一太極を具ふ。人力作爲の事物は、只だ一用の理を具ふるも、一太極を具ふとは謂ふべからずと。

或ひと問ふ、天地の間、人物器械各〻天を上とし地を下とし、各〻天地の氣を稟る。是れ一太極を具するに非ずや。師曰はく、是れ只だ天地を離れざるなり。萬物天地を以て父母大原と爲す。其の始や天地に出で、其の終や天地に歸す。天地を以て太極と爲すときは此の問あり。

或ひと問ふ、一箇の器械も亦制作の理あり、五行の質あり、作爲の用あり。太極も理氣妙合なるにあらざるか。師曰はく、一箇の事物も更に理氣を離れず、而して其の妙用は天地の自然に非ざれば成らず。作爲の用は人力の用なり、妙用と謂ふべからず、故に其の形一定して通ぜす變ぜざるなり。土石金玉の如きも亦天地の妙用、其の形一定す。然れども人力を以て之れを爲すべからず。

或ひと問ふ、今器械を制作し事象を諜考するに、各〻其の形事を作さざるの前に、先づ其の象數の思あり、是れ一理か。師曰はく、是れ先づ其の象數の思ある、是れ象なり。一理にあらず。此の象始終本末を含蓄するときは太極と謂ふべし。故に聖人の事物に於けるや、悉く一太極なり。是れ天地聖人は同一太極の相具はればなり。天地生々の萬物各〻一太極を具へ、聖人制作の事物各〻亦一太極を具ふ。或ひと曰はく、器用を制作するの巧なる者、其の未だ制作せざるの先に無量の思あり、而して後に此の器用を造る、是れ太極か。師曰はく、器械の巧を得る、是れ器械の制其の妙を得、故に象數早く具はる。技藝術數者家も亦然り。只だ聖人制作の器用は、實に天地同體の太極を得。一奇巧一技術の其の妙を得るも、亦豫め含藏せざれば全からず、其の象太極の用に似たり。故に奇巧技術は稱するに足るも、直に指して一太極なりとは謂ふべからず。尤も味あり熟翫すべし。

一一三　濂溪が太極圖を論ず

師曰はく、(一)太極の圖は、宋の周惇頤字は茂叔が作る所なり。朱子の圖說に曰はく、

(一) 前に圖あり、後に說あり、僅に二百數十字なれども、宋學の根本なり

「(一)先生の學其の妙太極の一圖に具はれり。(二)通書の言も亦皆此の圖の蘊(三)にして、程先生兄弟の語性命の際に及ぶも、亦未だ嘗て其の說に因らずんばあらず」と。又曰はく、「(四)熹既に此の說を爲し、嘗て錄して以て廣漢の張敬夫（南軒の張栻）に寄す。敬夫書を以て來して曰はく、『二先生門人と講論問答する所の言、書に見はる者詳なり。其の西銘(五)に於ける、蓋し屢〻之れを言ふ。此の圖に至りては未だ嘗て一言も及ばず。謂ふに其れ必ず微意あらん』と。是れ則ち固に然り。然れども所謂微意とは果して何の謂ぞや。熹竊に謂へらく、以て此の圖の象を立て意を盡し幽微を剖析することを爲すは、周子已むを得ずして作れるなり。其の手づから授くるの意を觀るに以爲らく、惟だ程子能く之れに當れりと爲すと。程子に至つて言はざるは、則ち其の未だ能く之れを受くる者あらざるを疑ふのみ。夫れ既に未だ言意の表に默識すること能はざるときは、心を空妙に馳せ、耳に入れ口に出して、其の弊必ず言ふに勝へざる者あり」と。又曰はく、「今の人多く濂溪の學は希夷(六)（宋の陳摶、字は圖南、希夷先生と號す）より出づることを疑ふ。(七)某曰はく、濂溪の書具に存す、太極の圖の如き、希夷如何して此の說あらん」と。西山の眞氏曰はく、「(八)大率此の理文公より盡く其の祕を發し、已に洞然として疑なし。慮る所は學者自ら一等

(一) 朱子の圖說にはなし
(二) 同じく周子の著、太極圖說の理論に、その應用を說けるが如きを、本書の内容とす。誠・誠幾德・聖・愼動等の四十篇より成る
(三) 蘊奥の意
(四) 國學基本叢書周濂溪集卷一の附辨に出づ
(五) 張橫渠の作文の一
(六) 易に精通し、三峯寓言・高陽集・釣潭集等あり
(七) 朱子。以下の語、朱子語類卷九十三、孔孟周程の條に出づ
(八) 同前周濂溪集卷一の附辨に出づ

の新奇の論を立てんと欲して、文公の言に於て反つて疑を致さんことなり。知らず此の老先生、是れ幾(十)年の功を用て沉潛反覆參貫融液して、然る後に發出して以て人に示すや。今其の書を讀んで未だ底蘊を究竟すること能はず、已に先づ其の說の未だ盡さざるを疑ふ、愈〻惑亂して明かなる所なき所以なり」。愚謂へらく、周子太極圖を作り、朱子圖に據つて其の義を釋して圖說を作る。後に諸儒の注解あれども、各〻亦朱子の意を推す。凡そ太極の圖上に一圈を安んじ、下に陰靜陽動の圖を置き、次に五行循環の象あり、下に二圈を置き、坤道は女と成り乾道は男と成り、萬物化生するの圖と爲す。是れ惟だ陰陽五行、人物生々の一圖のみ。河[九]、圖を出し、洛、書を出す。其の說已に至れり盡せり、是れ何ぞ贅せんや。更に聖道日用の功に益なく、又後世空妙の說を起すに足れり。天地の間、人物の生、理氣妙合して陰陽互に因る、圖を以て盡すべからず。言多く圖詳なるときは本理大いに違ふ。實に後人の惑、理學の說、因つて起る所なり。

師曰はく、太極圖の最上の一圈、是れ周子が所謂「無極にして太極」なり。太極の上何物の層ありや。(詳に無極の論に出す。)次に太極の圈、黑白左右行を以て、陰靜陽動の象と爲す。

(九) 易の繫辭上傳に出づ。前卷一七七頁參照

此の時只だ象數悉く具はりて、又別に黑白を別つて見るべきの物なし。見るべきの形あるときは已に發するの謂なり。次に五行名分の圖を設け、各〻一小圈を爲し、繫けて以て交系す。是れ五行各〻一太極（圈を以て太極と爲す）にして、環の端なきが如きの說なり。五行根を互にし、陽變じ陰合ふの象にして、間髮を容れず。圖を以て圈々を別ちて以て交系するときは、扞格して合一せず。下層は小圈を以て眞精妙合と爲し、又一大圈を下して乾道男と成り坤道女と成ると爲して、男女一太極の儀を示し、最下の一太圈は萬物の化生と爲す。凡そ陰陽五行の互に根ざし、理氣の妙合する、只だ一點子の象あり。其の間扞格なし。五行分殊して而る後に眞精妙合するに非ず。眞精妙合するときは、人物悉く其の間に生ず。先づ人を生じて後に物を生ずるにあらず。周子が此の圖は、人の生出胎託の象か。然らば則ち萬物化生の一圈甚だ差謬す。人物の天地の間に生ずる、各〻乾坤を父母とす。人先づ生じ物後に生ずるの說、豈謂ふべけんや。人も亦天地の一物なり、只だ理氣に過不及あり。或ひと曰はく、周子假に此の圖を作りて二程に示せり。故に二程も亦之れを謂はざるか。然れども周子の學多く無極を以て本意と爲し、主靜を以て工夫と爲す。是れ又此の圖の大原なり。假に設けざること識る

べし。

師曰はく、永嘉の權近[陽村先生と號す]撰する所の入學圖說、前集の初に天人心性合一の圖幷に說を爲り、其の所以は周子が圖に依ると爲す。其の圖に天の字を以て一圈と爲し、其の下に心字の圖を爲り、左右に三圈を幷べて黑白の圖を爲り、善惡の別を說く。中に一圈を置き敬の字を書き、存養省察の工夫と爲す。甚だ詳にして益あるに似たり。愚謂へらく、是れ聖人の道を知らず、天地の妙用を味はず、只だ意見を以て經書に交へ、交系して詳說を爲す。詳は乃ち詳にして、道は益〻遠く、理は彌〻暗し。學者是れに因らば殆ど聖學に違はん。玩味すべからず。天と人とは更に隔つべからず、只だ同一にして、天地は人の大なる者、人は天地の眇なるものなり。天の元亨利貞、人の仁義禮智は、只だ一箇の妙用なり、何ぞ別圖を爲さん。氣質相因り淸濁相包む、何ぞ左右を爲さん。善惡も亦一に出で、人と物と本と一氣なり。聖人は天地と太極を同じうす、何ぞ此の如く相別かたんや。氣は理を離れず、理も亦氣に因り、一毫の先後差違なし。陽は陰に根ざし陰は陽に根ざして相別つべからず。是れ天地の自然なり。故に其の大原を知らず、漫りに口に利くして言を多くす。既に合一の言あるときは道に

違ふ、尤も笑ふべし。

師曰はく、繫辭傳に曰はく、「河、圖を出し、洛、書を出し、聖人之れに則る」と。是れ聖人天地の自然に感じて易を作る所以なり。河圖洛書の圖たる、一箇の龍馬神龜此の一圖を負ふ。其の象只だ數點の觀るべきのみ。此の象數、天地人物、陰陽五行生成の事、言はずして既に相具はる。聖々相續ぎ、易の書全し。而して其の源流始末、此の圖の象數を出でず。後人作爲の圖說、年を同じうして語るべからず。凡そ河圖・洛書、一圖の間、數を以て差別を爲す、而して根を互にす。生成相因りて太極を一にするなり。是れより萬別の相生又此の中を出でず。周子の圈々並べ置きて其の說を作爲するが如くならんや。

師曰はく、繫辭に曰ふ(一)「子曰はく、書は言を盡さず、言は意を盡さずと。然らば則ち聖人の意は其れ見るべからざるか。子曰はく、聖人象を立てて以て意を盡し、卦を設けて以て情僞(二)を盡し、辭を繫けて以て其の言を盡す。變じて之れを通じて以て利を盡し、之れを鼓し之れを舞して以て神を盡す」と。愚謂へらく、天地自然の妙用は言を以て盡すべからず、況や其の書其の圖其の言を盡すべからず。易の象を立て卦を設

(一)　上傳
(二)　眞情と虛僞と

くる、聖人已むを得ずして畫一點して其の象其の卦相成るなり。後世良醫の五運六氣(三)(四)の事を論ずるや、脈絡臟腑の象を圖し、銅人の形を著はして、細密の儀を說く。然れども世の醫は一箇の脈絡を知らず、況や臟腑をや、況や心氣をや。是れ一箇の脈絡にも這の天地自然の妙用を具ふ。言を以て究め圖を以て看るべからざることあればなり。纔に言に涉れば扞格して通ぜず。聖人只だ卦爻を以て其の數を象るのみ。後人若し一箇の意見を加へば、天壤所を易へん。這箇の周子何ぞ聖人の未だ言はざるの處を說くことを得んや。

師曰はく、聖人の教は、天地に則り(五)、己れに克ちて禮に復り(六)、廣く衆を濟ひ(七)、天下仁に歸するの道のみ(八)。說き得て奇なるも亦此の用なきときは用ふるに足らず。周子が太極の圖見來れば更に日用の學に益なく、多く異端の空妙に陷る。只だ人物の最初を圖し來るも尙ほ全からず。二程此の圖を得て門人と講論問答する所(九)、未だ嘗て一言も焉に及ばず。其れ必ず微意あらん。朱子微意を以て未だ能く之れを受くる者あらずと爲す。是れ太極の圖を貴びて附會の說を爲すなり。二程此の圖を以て弊ありと爲すか。然れども二程も亦專ら靜坐を說き主一を專らとす。其の說信ずるに足らざるなり。

(三) 五行の運行
(四) 好惡喜怒哀樂をいふ
(五) 易繫辭上傳の語
(六) 論語顏淵篇首章
(七) 同雍也篇第二十八章
(八) 同顏淵篇首章
(九) このこと朱子語類卷九十四、周子之書に出づ

師曰はく、古人太極の圖を以て妄作と爲す者あり、是れ二程指示するなきを以て證と爲すも、尤も信ずべからず。朱子は書に於て緖正(しよせい)(一)せずといふことなし、而して周子(二)二書の解は乾道九年に在り。已に脫藁して淳熙(三)十五年に至り、始めて出して以て學者に授く。慶元(四)五年三月將に終へんとする前五日、猶ほ諸生の爲に太極の圖を講じて夜分に至る、則ち其れ是の書に於て身を終れり。此の圖周子の作る所疑なし。朱子始めて之れを信用して聖學の淵原と爲せり。其の從來すること甚だ久し。能く聖人の道を體認せざるの輩は、猶ほ我が辨を信ずべからず。

一一四　濂溪が無極の說を論ず

師曰はく、濂溪の周子が太極圖說に曰はく、「無極にして太極」。又曰はく、「太極本と無極なり」。又曰はく、「無極の眞」と。朱子圖說の注に曰はく、(五)「上天の載(こと)は聲もなく臭もなくして、實に造化の樞紐(すうちう)にして、品彙(ひんゐ)の根柢なり。故に『無極にして太極』と曰ふ。太極の外に復た無極あるに非ず」と。又曰はく、(六)「無極にして太極、正に恐らくは人太極を將(も)つて一箇の形象ある底と做し看んことを。故に又無極と說く。只

(一) 其の本源に遡つて尋ね正すこと
(二) 太極圖說・通書の解題乃ち太極圖解・通書解各一卷を指す。乾道は孝宗の年號にして、その九年は朱子四十四歲の時に當る
(三) 著述の成りし十六年後に當る
(四) 寧宗の年代、吾が朝は源賴朝の薨年なり
(五) 太極圖說解の第一句にあり
(六) 朱子語類卷九十四、周子之書に出づ

（七）晦庵先生朱文公文集卷三十六、答陸子靜に出づ

だ是れ此の理なることを言ふなり」。又曰はく、「無極と言はざるときは、太極は一物に同じうして、萬化の根と爲すに足らず」と。又曰はく、「之れを無極と謂ふは、正に其の方所形狀なきを以てにして、無物の前に在りと以爲ふも、而も未だ嘗て有物の後にも立たざるにあらず。又初より聲臭影響の言ふべきなし」と。又曰はく、「無極は、只だ是れ這の道理を說く。當初元と一物なく、只だ是れ此の理あるのみ」。又曰はく、「(七)無極の二字、乃ち周子灼に道體を見ること、迥に常情を出づ。勇往直前して人敢へて說かざる底の道理を說き出し、後の學者をして曉然として太極の妙を見得し、有無に屬せず、方體に落ちず、眞に千聖より以來不傳の祕を得しむ」。又曰はく、「太極の上復た所謂無極あらんや。近世の讀者以て此れを識るに足らずして、或は妄りに之れを議して、既に以て先生の病と爲す。史氏の先生を傳する者も、乃ち其の語を增して曰はく、自二無極一而爲二太極一、則ち又依据する所なし。而して重ねて以て夫の先生を病とす。知らず其れ何の据る所あつて此の自爲の二字を增すや。若し此の字を增さば其れ前修の累と爲り、後學の疑を啓くこと益〻以て甚し」。又曰はく、「伏義が易を作る、一畫より以下なり。文王が易を演ぶる、乾元より以下なり。皆未だ嘗て太極を言

はず。而も孔子の易を賛する、太極より以下なり。未だ嘗て無極を言はず。而も周子之れを言ふ。先聖後聖豈同條にして共に貫かざらんや」と。勉齋の黃榦曰はく、「太極本と無極なり、蓋し之れを極と謂ふときは、方所形狀あり。故に又反（かへ）つて之れを言ひて無極と謂ひ云ふのみ。本と極の實あるに非ず。人の方所形狀を以て求めずして當に意を以て會すべきを欲す」と。又曰はく、「猶ほ形なくして至形、方なくして太だ方と曰ふがごとし」と。北溪の陳淳曰はく、「無極は只だ是れ理の形狀なく方體なきを說くこと、猶ほ無聲無臭と言ふ類のごとし」と。西山の眞德秀曰はく、「無極にして太極といふ、豈太極の上に別に所謂無極あらんや。無形無象にして至理存すと謂ふに過ぎざるのみ」と。謝方叔(一)曰はく、「考亭(二)の朱先生曰はく、『上天の載（こと）は無聲無臭』と。則ち周子の無極にして太極の意なり」と。又曰はく、「太極の外に別に無極あるに非ざれば、則ち周子の太極本と無極の意なり。是れ諸氏周子が無極の說を注す。而も只だ無極を以て太極を注すと爲し、形象なくして至理存するを以て極致と爲すなり」。愚謂へらく、周子「無極而」の三字を以て「太極」の字上に層（かさ）ぬ。甚だ聖人の罪人、後學の異端なり。凡そ聖人の道は唯だ日用事物の間に在るのみ。日用事物の間、格物致知する

(一) 宋の威州の人、字は德方、南宋末知樞密院事、左丞相に至る。後謫せられ、致仕して卒す。
(二) 朱子のこと。晩年建陽の考亭に卜築し、考亭はその講學の所なりしを以てかくよび、又朱學を考亭學派とも稱す

ときは、天地自然の妙、言はずして著はれ、求めずして來る。故に聖人恆に性と天道とを語らず。上古の伏羲易を作る、既に一畫を以てす。一畫已に成るときは天地の象著はる。一畫未だ成らざるときは方形象數なし、何に据つて論ぜんや。論じて示すは聖人の意にあらず。天地未分の空妙を以てし、不生不滅の虛靜を以てする者は、異端の奥儀なり。聖人の學、物を開き事を明かにし其の惑を辨ず。易に曰はく、(三)「子曰はく、夫れ易は何爲る者ぞや。夫れ易は物を開き務を成して天下の道を冒ふ、斯の如きのみ」と。今周子の所謂「方形の見るべきなし」を以て太極の上層と爲すときは、聖人の太極を言ふ其の本意已に失す。故に諸儒太極の上に所謂無極あるに非ずと爲す。然らば則ち太極是れ無極なり。何ぞ無極の言贅せるや。太極を以て一箇の形象ありと爲すの看を恐る。無極と說くときは、太極は無形無象なり。是れ甚だ聖人の意を失ふ。太極は象數已に具はれり、何ぞ方形なきを以て焉れを論ぜんや。方象なきときは以て生くべき所なし。聖人は唯だ象數の間を詳にし、日用の功を正す。周子聖人の淵原を知らず、漫りに意見を以て聖人の語を冒す。是れ聖人の罪人なり。後世の學者此れに因つて終に精神を弄し空妙に騖せ、日用事物の學を忘れ、儒にして老莊、儒にして浮

(三) 繫辭上傳

居たり。是れ無極の説に据ればなり。故に曰はく、後學の異端なりと。朱子無極の説を以て孔子の未だ嘗て言はざる所と爲し、先聖後聖同條共貫の稱あり。凡そ伏羲易を作る、一畫より以下にして、文王其の説を演ぶ。孔子其の象數を見、之れを贊して太極の語を下す。是れ只だ一畫の象數を以て辭を繋くるのみ。先聖の言はざる所を謂ふに非ず。周子が無極の言は、聖々未だ嘗て言はざるの所なり。言はざるにはあらず、言ひて益なく、論じて正しからざればなり。言論するときは聖學終に泯ぶ、故に性と天道とは天理人倫の大原にして、猶ほ常に語らざるがごとし。況や無方無象の説をや。朱子專ら太極の圖を宗とす、故に這の附會の稱美あり。

一一五　或ひと無極の説を問ふを辨ず

或ひと問ふ、太極は其の因つて出づる所なくんばあるべからず。朱子曰はく(一)「是の理ありて而る後に此の氣を生ず」。又曰はく、(二)「理氣は先後の言ふべきなし、然れども必ず其の從つて來る所を推さんと欲するときは、須らく先づ此の理あるべし」。又曰はく、(三)「先づ理ありて後に氣あるの説、此の如く説くを消ひず。而今他の合下(四)に是れ先

(一) 朱子語類卷一に出づ
(二) 同前
(三) 同前
(四) 合下は俗語、其の時又はただちにの意

づ理ありて後に氣あらんや、後に理あり先に氣あらんや、皆得て推究すべからざることを知り得て、然して意を以て之れを度るときは、疑ふらくは此の氣は是れ這の理の行くに依傍し、此の氣の聚まるに及んでは、則ち理も亦焉に在り」と。是れ等の語、先後なくして又先後あり。今臆計するに、一理先づ成りて物生ずる、是れ無極にして太極か。師曰はく、一理先づ成るとは、是れ太極の象數なり。物生ずとは、是れ兩儀四象八卦の並せ生ずるなり。一理未だ成らざるの前は工夫を下す所なし。若し工夫を下さば則ち此の象數成るなり。理氣の妙用は天地自然にして、少くも間隔なし。理は氣に因り、氣は理に因る。尙ほ强ひて之れを推すときは、象を以て先と爲す。包犧氏の一畫は、天地人物の象を以てす。此の象を以てするや性心に在り。性心は此の理氣妙合の象に因る。象に因らざるときは依託して理の見るべきなし。故に愚は象を以て先と爲す。象を以て先と爲すときは、周子の無極何處にか焉れを用ひんや。

或ひと問ふ、諸儒已に人の無極說に惑はんことを恐る。是れ異端の虛無寂滅に陷溺し易きことを知ればなり。然らば則ち無極の說も亦以あらんか。師曰はく、問ふ「無極は且く無形無象と做して說くことを得んや」。朱子曰はく、(五)「形なしと雖も却つて理

(五) 朱子語類卷九十四、周子之書に出づ

あり」と。又問ふ、「無極太極只だ是れ一物か」。朱子曰はく、「本と是れ一物なるも、他れに恁地に說かれて却つて兩物に似たり」と。又問ふ、(一)「無極にして太極、固に是れ一物なるも、積漸ありや否や」。朱子曰はく、「積漸なし」。曰はく、「上に無極と言ひ、下に太極と言ふ。竊に疑ふ、上に無極無究と言ひ、下に此に至りて方に極まると言ふ」。朱子曰はく、「無極は無形、太極は理あり。周子人の把つて一物と作し看んことを恐る、故に無極と云ふ」と。是れ等の問答、無形無象の時、此の理あるを以て說を立つ、禪學の昭々靈々、空妙の說、亦是れに外ならず。禪も亦虛空にして眞なきを以て外道の見と爲し、箇の空虛の裏靈妙にして能作用底なるを認め得て、直指見性と爲す。諸儒無極にして太極の注、更に焉れに別ならず。是れ無極を論ずるが爲の謬なり。

或ひと問ふ、朱子曰はく、(二)「無極而太極の此の五字、一字を添減し得ず」。又曰はく、(三)「此の而の字輕し」と。此の兩說差あるに似たり。師曰はく、聖人の道を說く、尤も皆緊要なり。更に文章を以てすべからず。故に學者一字を增減せずして則るべし。朱子は周子の語を以て聖人の語と爲す、故に一字を添減すべからざるに及ぶ。然れども「而」の字を見來れば、則ち太極の上無極あるに似たり。故に人の差謬せんことを恐

(一) 朱子語類卷九十四、周子之書に出づ
(二) 朱子語類卷九十四、周子之書に出づ
(三) 同前

れて、「而」の字を輕しとす。北溪の陳淳曰はく、「而の字は只だ輕く接過して、此の句の中間に就きて截つて兩截と作し看るべからず」と。是れ皆周子の言は弊ありと爲すなり。

或ひと問ふ、朱子曰はく、[四]「太極の圖未だ嘗て人に隱さず、然れども人の太極を識る（者は少し）、禪學の中に於て認め得て、便ち此れは是れ太極と謂ふ。而して太極は乃ち天地萬物自然の理にして、古に亙り今に亙り、顚撲して破れざる者なるを知らず」と。又曰はく、「學者易を看ると雖も、聖人曾て學者に易を看ることを教へず、詩・書・執禮、皆以て教と爲す。易は是れ箇の形影なき底の物、如かず、且く先づ詩・書・禮を讀むの却つて緊要なるに。[五]程子は太極圖を以て門人に授けざるなり」と。是れ等の語を以て無極太極の説を理會すれば、則ち聖人の學の極至か。師曰はく、詩・書・執禮は歴代の遺事聖人の遺跡、以て見るべし。易は包犧・文王・周公の、天地を以て一圈象と爲し、一畫に始めて三百六十四爻に終る。古今天地の妙用斯に至つて至れり盡せり。然して易の書たる、其の辭を繫くること、唯だ事物日用の間を詳究するに在り。一種玄妙の説を爲さず。周子が太極圖説の如きは、見來れば異端に陷り、熟

（四）晦庵朱文公文集巻三十六、答陸子靜に出づ。原典は太極圖の圖を囫に作り、自然の理を本然の理に作る

（五）朱子語類巻九十四に出づ

味すれば空妙を弄す。何ぞ聖人の書に比せんや。二程の語此れに及ばざるの事は甚た可なり。呂與叔(一)東のかた程子に見ゆ。程子之れに語つて曰はく、「(二)横渠人に教ふるや、本と只だ是れ世學膠固すと謂へり、故に一个の淸虛一大を說く、只だ人稍に損得を闘り得、沒し去りて道理に就き來る。然して人又更に別所に走る。今日且く只だ敬を道ふ」と。程子の此の語說き得て好し。

或ひと問ふ、「無極而太極」の「而」の字輕きときは、無極太極同一なり。周子の說如何。師曰はく、周子の「而」の字を下す甚だ重し。太極は無極に因らざるときは出でざるの謂なり。先儒皆「而」の字を輕んず。愚は今「而」の字を重んず。各〻後學の意見にして、周子の說何の處にか落在する、尤も臆計し難し。然れども先儒の謂ふ所は、後學の虛遠に陷溺せんことを恐るる故に、「而」の字を輕んず。是れ周子が言を變ずるなり。案ずるに、周子が無極を以て無形容の極と爲し、是れを以て聖學の工夫と爲す。是れ周子の學要なり。其の圖說に「太極本無極」を以てするは、便ち太極の本原は無極に出づると爲すなり。太極無極同一ならば、「本」の字を入るべからず。「(三)中正仁義を以てし、而して靜を主として人極を立つ」と。是れ靜を以て無極と爲す

(一) 呂大臨、藍田先生のこと。前出二七二頁參照
(二) 張子全書卷十五に出づ
(三) この語、周子が太極圖說の本文の語なり

なり。通書に、[四]「靜は無にして動は有」、[五]「一とは無欲なり。無欲なれば、靜なるときは虛しくして動くときは直し」、[六]「其の背に艮まるとは、背は見ゆる(所)に非ず。靜なるときは則ち止まる」等の言、皆靜無を以て本と爲す。明道の程子曰はく、[七]「昔學を周茂叔に受く。毎に仲尼・顏子の樂處、樂とする所何事ぞと尋ねしむ」。又曰はく、[八]「再び周茂叔に見えて後に、風に吟じ月を弄んで以て歸る、吾れ點に與するの意あり」。又曰はく、[九]「周茂叔窓前の草を除去せず。之れを問へば云ふ、自家の意志と一般」と。是れ意味なきの處を以て工夫と爲す。張宗範の亭に名づけて養心と曰ふ。周子序說を作つて云はく、「予謂へらく、心を養ふは寡にして存するに止まらざるのみ。蓋し寡にして以て無に至る、無なるときは誠立ちて明通ず」と。又[一〇]愛蓮說を作つて曰はく、「予獨り蓮の淤泥より出でて染まず、清漣に濯うて妖ならず、中通じ外直にして蔓らず枝あらず、香遠くして益〻清く、亭々として淨く植ち遠く觀るべくして、褻れ翫ぶべからざるを愛す」と。此の數言に因るときは、周子の學は唯だ無極の二字に在り。後儒其の說の異端に近きことを厭ひ、「而」の字を輕んず。殆ど周子の意に非ず、却つて周子を病ましむるなり。

（四）通書誠下篇
（五）通書聖學篇
（六）同彖艮篇。易の艮卦の彖を引いてその義を解けるなり
（七）二程語錄卷二に出づ
（八）同卷四に出づ
（九）同前
（一〇）古文眞寶後集に收む

一一六　諸說の無極を論ず

師曰はく、老子曰はく、「無極に復歸す」(一)と。柳子曰はく(二)、「無極の極」。邵康節曰はく、「無極の前、陰、陽を含む。有極の後、陽、陰を分つ」と。是れ周子以前已に無極の說あり。北溪の陳淳曰はく、「其の主意同じからず、老子・柳子・邵子は氣を以て言ひ、周子は專ら理を以て言ふなり。是れ老・柳・邵皆氣を言ふの徒なればなり。然も各〻無形無象を以てするときは、其の說同じ」。

師曰はく、陸象山朱子に與ふる書の略に曰ふ(三)、「梭山兄（梭山、名は九韶、字は子美、嘗て太極圖說の非を議る）謂へらく、太極圖說は通書と類せず。疑ふらくは、周子が所爲に非じ」と。此の言殆ど忽にすべからず。極は中なり、無極と言ふときは是れ中なきなり。豈宜しく無極の字を以て太極の上に加ふべけんや。無極の二字は老子に出でて、聖人の書にあることなき所なり。朱子の陸子に答ふる書の略に云ふ(四)、「周子の之れを無極と謂ふ所以の者は、正に其の方所なく形狀なきを以て、老子が無極に復歸すといふが如ければ、乃ち無窮の義にして、周子の言ふ所の意の若きに非ず」と。陸子朱子に答ふる書の略に云ふ(五)、「老子は無を以

(一) 道德經第十四章の「復歸於無物」か
(二) 柳宗元か、但し唐宋八大家文集の柳宗元の卷には見當らず
(三) 象山先生全集卷二、與朱元晦に出づ
(四) 晦庵先生朱文公文集卷三十六、答陸子靜に出づ、甚しき抄出なり
(五) 象山先生全集卷二、與朱元晦第二書に出づ

（六）藏す

（七）晦庵朱文公文集卷三十六、答陸子靜に出づ

て天地の始と爲し、有を以て萬物の母と爲し、常無を以て妙を觀、常有を以て竅を觀、直に無の字を將て上面に搭在す。（六）正に是れ老子の學豈諱むべけんや。尊兄の所謂眞體不傳の祕及び逈に常情を出で方外に超出する等の語は、是れ曾て禪宗を學んで（得る所）莫きこと（此の如し）」。朱子の陸子に答ふる書の略に云ふ（七）、「熹、老子の有無を言ふを詳にするに、有無を以て二と爲す。周子の有無を言ふは、有無を以て一と爲す。正に南北水火の相反するが如し。請ふ更に子細に眼を著けよ、未だ容易に議評すべからず。逈に常情を出づ等の語は只だ是れ俗談なり。卽ち禪家の能く專有する所に非ず」と。是れ陸象山が中を以て極と訓じ、無を以て虛無と爲すの論なり。勉齋の黃榦曰はく、「後の讀者字義明かならずして、中を以て極と訓じ、已に之れを失ふと爲す。然れども又極の字但だ爲に譬を取ることを知らず」と。是れ等の語象山が惑を破つて、己れが惑を知らず。極の字何すれぞ譬を取らん。尤も信用すべからず。各〻聖人の道を味はず、只だ其の說を肆にす。故に無極の說を破ること正しからず。無極の說を破るを正すことも亦麤辨なり。

師曰はく、或ひと問ふ、「既に易に太極ありと曰ふときは、之れを無と謂ふべからざ

るに、濂溪乃ち無極の說あるは何ぞや」。朱子曰はく、「太極あるは是れ此の理あるなり。無極は是れ形器方體の求むべきなし。兩儀は象あり、太極は則ち象なし」と。是れ或問の說道ひ得て好し。朱子の答ふる所分明ならず。（說は前に出づ。）

師曰はく、山陽の度氏(一)曰はく、「或者は察を此に致すことを知らずして、所謂無極と云ふ者に於て、眞に以て無と爲し、以て周子立言の病と爲し、之れを失すること遠し。先生（朱子）嘗て正に語つて曰はく、『萬物は五行に生じ、五行は陰陽に生じ、陰陽は太極に生ず。其の理此に至つて極まれり』云々」。朱子の此の語說き得て好し。然れども無極を以てするときは、其の說終に言を容るべきに在り。

師曰はく、或ひと謂はく、「無極の二字、老・列に出づ」と。或ひと謂はく、「圖は之れを穆脩（字は伯長、宋の眞宗東封して進士を賜ふ。嘗て學を李挺之に傳ふ。邵子に至つて大いに顯はる）に得」と。或ひと謂はく、「當時指畫して以て二程に示すも、未だ嘗て書と爲る所あらず」と。或ひと謂はく、「二程の言論文字至つて多し。未だ嘗て一も無極の字に及ばず。疑ふらくは、周子の爲る所に非じ」と。或ひと謂はく、「周子は陸詵(二)が婿なり。說は司馬溫公の涑水記聞(三)に見ゆ。一に篤實長厚の人なり。安んぞ傳授する所なきを知らん」。或ひとは周子と胡文定公(四)とは同じく鶴

(一) 名は正、字は周卿、少にして朱子に從學し、國子監丞を經て禮部侍郎に累遷して致仕す。周子年譜・東白齋詩話・性善堂稿の著あり

(二) 餘杭の人、字は介夫。地方官として武備に勳功多し、王安石の青苗法の不便を陳じて官を罷めらる。この事朱子語類卷九十四、周子之書通書の條に出づ

(三) 十六卷、宋代舊事の雜記なれども、國政の爲となるもの多し

(四) 胡安國、宋の學者

林寺の僧壽涯を師とすと爲す。是れ等の諸說、偶〻無極の非を論ずれども、皆据を求めて之れを糺すに、實說ならざるなり。聖人の道は天地と同じく、更に已むことを得べからず。故に易に太極ありて天地の事物既に極まれり。又無極を以てするときは、其の詞甚だ贅せり。贅せずと爲すときは玄妙を弄するに似たり。之れを辨ずるときは多言數〻窮まるのみ。夫子は易に太極あるを以て、其の言簡易にして辨ぜざるも、理明かに事至る。只だ字訓を以てするときは、其の妙用盡く。聖人の言豈後人の能く及ぶ所ならんや。

一一七　理氣妙合して人物生ずるの說を論ず

師曰はく、易に曰はく、「(五)太極兩儀を生ず」と。又曰はく、「(六)乾道男と成り坤道は女と成る」と。又曰はく(序卦)、「天地ありて然る後に萬物生ず」と。又曰はく、「(七)天地絪縕して萬物化醇し、男女精を構へて萬物化生す」と。竊に謂へらく、象數已に太極して其の發生する者は陰陽の兩儀なり。陰にして陽を含み、陽にして陰を含みて四象相生ず。陽、陰に根ざし、陰、陽に根ざして更に間隔すべからず。故に其の發生するや先後な

(五)(六)　共に繫辭上傳
(七)　繫辭下傳

し。推して謂ふときは、動を以て先と爲すに似たりと雖も、動は是れ靜に根ざし、靜既に動を具ふ。動究まるときは靜。是れ動は靜を以て根と爲すなり。靜も亦然り、更に先後を謂ふべきなし。是れ太極兩儀を生ずといふ所以なり。兩儀發生するときは、其の象輕く上る者を天と爲し、其の形重く下る者を地と爲す。上下已に定まれば理氣謂ふべし。而して一陰一陽、一寒一暑往來し、理氣妙合して萬物生ず。其の間陽に根ざすときは男と爲り雄牡と爲り、陰に根ざすときは女と爲り雌牝と爲る。是れ乾道を男と爲し、坤道を女と爲すなり。天地萬物の生も亦先後を論ずべからず。強ひて謂ふときは、天地あり、而して後に萬物あるなり。是れ萬物は天地を以て父母と爲せばなり。人の一體頭より足に至るまで、其の間百骸の生成一二を以てすべからず。天地萬物の生成も亦此の如きなり。

師曰はく、理氣妙合の間、又過不及なくんばあるべからず。其の氣を稟くるの過不及は、異類品物を爲す。其の間剛柔強弱輕重あり、其の質各〻羽毛甲鱗爪牙觜角の具、枝葉花實の差を異にし、其の質必ず其の理に過ぐ。故に天地の大道を知らず、其の理を稟くるの過不及は人と爲るなり。其の間賢知愚不肖あり、其の質亦剛柔輕重あり。

然して質は恆に異物の能あるに及ばず。其の德其の知は各〻天地の大道を具ふ。愚不肖の至りと雖も、猶ほ異物の及ぶべきに非ず。是れ人の萬物の靈たる所以なり。唯だ聖人は聰明睿智天地と其の德材を同じうし、氣は其の精秀を得、理は其の中を得て過不及なきなり。小人の權謀術數に通じ、奇巧謀計に得る者は、理の過ぎて其の鑿(一)するなり。凡そ人物の差、唯だ理氣の過不及に在り。理氣又支離せず、或は理に根ざし氣に根ざし、或は過不及す。是れ人物の間萬殊ある所以なり。

師曰はく、人は正氣を稟け、物は偏氣を稟く。正氣は理の正を得るの謂なり。偏氣は質の厚を得るなり。正なるときは其の氣偏ならず、故に人の質一方に偏ならず。偏なるときは其の氣通ぜずして一方に長ず、故に物の質各〻得る所あり。又曰はく、人は理に厚くして氣に薄く、物は質に厚くして理に薄し。故に人の質に厚きは皆理に薄きの發著なり。

師曰はく、理は其の然る所以なり。氣は陰陽五行なり。陰陽は理にして五行は氣なり。陰陽は其の象にして五行は其の形なり。理氣尤も差別すべからず。互に相根ざし相因るなり。唯だ其の妙合の間過不及の差あるのみ。其の差あるものは天の時と地の

(一) 穿鑿に過ぐるを云ふ

宜に因り、感ずる所一ならざればなり。

一一八　或ひと理氣妙合して人物生ずるの說を問ふを辨ず

或ひと問ふ、周子曰はく、(一)「太極動いて陽を生じ、動極まりて靜。靜にして陰を生じ、靜極まりて復た動」と。「(二)今象數已に太極して、其の發生する者は陰陽の兩儀なり」。此の說周子が說に差ふに似たり。師曰はく、予が所謂其の發生する者は陰陽の兩儀なりとは、易の太極兩儀を生ずるの說に因れり。象數已に太極して、其の發生何ぞ次第を論ぜん。唯だ兩儀相生ずる、周子は生を以て動と爲す、故に動いて陽を生ず、動必ず極まるときは靜なり、靜にして陰を生ずといふ。是れ動は靜に根ざし靜は動に根ざして、更に間隔なきことを知らず、而して太極を以て方形なきの理と爲す。故に兩儀を生ずるを以て、新に發動して物云に生ずと爲す。太極は象數已に具はりて未だ發見せざるの稱。此の內悉く兩儀四象八卦差萬別を具ふ。今時ありて長大發生するなり。其の象輕く上る者は自ら昇りて人呼んで天と爲す。輕く上りて自ら昇るものあるときは、其の重く下りて形する者自ら凝りて、人呼んで地と爲す。天先づ成り地豈後に

（一）太極圖說の首に出づ
（二）との說即ち素行の說なり

成らんや。輕重上下昇降各〻陰陽の相對偶するなり。更に差別先後を以て論ずべからず。故に易に太極あり、太極兩儀を生ずるなり。太極の時只だ陰陽相合して萬品の象を含み、今已に發するときは、陰陽其の形相定まりて合せ論ずべからず。是れ天を以て地と爲すべからず、地を以て天と爲すべからず、然も亦互に根ざし、其の理氣離れず、天地相對偶す。天は地に因つて流行し、地は天に因つて生々す。是れ太極已に發するの說なり。故に太極の時は、只だ象數相具はれり、眹を以て論ずべからず。兩儀を生ずるの時、形成を以て之れを論ずべからず。深く味はざるときは通ずべからざるなり。

或ひと問ふ、繫辭に曰はく、「天一地二」と。是れ先後を以て論ずるなり。易は乾坤を以て序す。是れ次序あるなり。今先後なきの說を以てするは何ぞや。師曰はく、天を以て一と爲し、乾坤を以て序と爲す、是れ聖人天地を論ずるの言なり。今謂はんと欲するの辭又先後なき能はず、强ひて謂ふときは天地を以て次序す。易の書たる、乾坤を以て大源と爲す。天地に則り乾を上とし坤を下とす。是れ今日日用の道なり。予が所謂先後なしとは其の大原を推すなり。周子太極の說を論じて動靜を以て先後を定

むるは、大原を論じて其の説を失ふなり。易に曰はく、(一)「日月運行して、一たびは寒く一たびは暑し」と。一陰一陽、各〻兩儀を生ずるを以て之れを論ず。未だ嘗て其の先後を論ぜざるなり。

或ひと問ふ、周子曰はく、(二)「無極の眞、(三)二五の精、妙合して凝る。乾道は男と成り、坤道は女と成り、二氣交感して萬物を化生す」と。此の説少しく今說く所に差(たが)へり。師曰はく、周子は無極を以て本と爲す、故に眞の字を以て太極に充て、妙合して凝るを以て無極は太極の後と爲し、妙合已前を以て一箇の無聲無臭の物と爲す。甚だ差謬す。凡そ妙合して凝るは、只だ陰陽の兩儀なり。何ぞ五行を以て之れを論ぜんや。陰陽兩儀互に根ざし、流行して息まず、生々相具はり、五行の象亦具はる。今精の字を以てする、是れ味あるに似て甚だ明ならず。此の時理氣妙合して一點子を成す、是れ太極なり。此の妙合已に男女の象あり、發生して萬物化生す。二五の精妙合して凝り、又二氣交感すといふ。是れ人と物とを別つの再言なり。人物共に理氣の交感なり、何ぞ焉れを別たん。故に理氣交感して人物生じ、乾道は男と成り坤道は女と成り、生々して變化究(きはま)りなしと謂ふべし。易に曰はく、(四)「萬物ありて然る後に男女あり」といふ、

(一) 繫辭上傳の首章
(二) 太極圖說の語
(三) 朱子これを注して理といひ、又いつはりなきの謂といへり
(四) 序卦

是れなり。

或ひと問ふ、朱子が周子の説を註して曰はく、「(五)是れ人物の始は、氣化を以て生ずる者なり。(六)氣化形を成すときは、形交はり氣感じて遂に形化を以てす。而して人物生々變化窮りなし」と。師曰はく、朱子は氣化形化を謂つて曰はく「(七)氣化は是れ當初一箇の人種なくして後に自ら生出し來る底なり。形化は却つて是れ此の一箇の人ありて後に、乃ち生々して窮まらざる底」と。又曰はく「(八)天地の初如何ぞ箇の種(九)を討ねん。自ら是れ氣蒸結して兩箇の人と成り、後方に許多の物事を生ず、而今人身上の蝨に似て、自然に變化し出で來る」と。愚謂へらく、朱子氣化の説、天地の初め氣蒸結して兩箇の人と成ると、是れ何と謂ふことぞや。天地已に發するときは、人物悉く具はる。其の多少增減を謂はゞ、後來生々究りなし。天地開闢已後氣蒸して人物生ずるときは、人物を以て天地の後と爲す。人物は天地の有なり。人物なきときは天地も亦なし。天地あるときは人物則ち生ず。故に理氣妙合して天地已に發するときは、人物其の中に固有し、更に先後を論ずべからず。人身裏の諸象具はりて發生するに似たり。蝨は是れ天地の間萬物の一品なり。此の出生も亦理氣の妙合あり、一蝨多子を生じ來るにあ

(五) 太極圖說解に出づ
(六) 原典は、「氣聚つて形を成す」に作る
(七) 朱子語類卷九十四、周子之書に出づ
(八) 同前
(九) 原典は、人種の二字に作る

らず、此の汚垢臭穢に、蝨虫の象あり、理氣の妙合を得て悉く發生し、而る後に生々無窮なり。氣化と雖も這の理氣具はらざるなし。形化も亦然り。

或ひと問ふ、周子曰はく、(一)「惟だ人のみ其の秀を得て最も靈なり。形既に生ずるや、神、知を發す。五性感動して善惡分れ、萬事出づ」と。師曰はく、人物の生は理氣の間にして、人は其の理を得ること只だ厚く、物は其の氣を得ること只だ厚し。然れども人物理氣を離れず、惟だ過不及厚薄あるのみ。人は理に厚し、故に神知能く發し、物は氣に厚し、故に形質能く利を得。人は氣に薄し、故に質、物に及ばず。物は理に薄し、故に知、人に及ばざるなり。人得二其秀一の四字は理を指すや氣を指すや。理氣幷び指すや。若し理を指すときは物も亦此の靈あり、故に人の及ぶ能はざるの妙用を爲すことあり。氣を指すときは、人の質、物に及ばず。理氣合せ指すときは、聖人も亦質の利は物に及ぶべからざるなり。「五性感動して善惡分れ、萬事出づ」の語、説き得て好し。二氣交感の節に映ず。

或ひと問ふ、朱子曰はく、(二)「其の氣の精英を得る者は人と爲り、其の査滓を得る者は物と爲る」と。又曰はく、「只だ一箇の陰陽五行の氣天地の中に(三)袞在して、精英なる者

(一) 太極圖説の語
(二) 朱子語類卷九十四、周子之書に出づ
(三) 瀰滿の意

は人と爲り、查滓なる者は物と爲る。精英の中又精英なる者聖賢と爲り、精英の中查滓なる者愚不肖と爲る」と。師曰はく、淸は陽なり、濁は陰なり。淸濁流行して上下相分ち、天地是れ成る。淸を取り濁を捨つるときは、天を論じて地を錯くなり。是れ偏見にして全からず。周子が精秀の字に因つて誤了し來れり。氣の淸濁を以て論ずるときは可なり、精英查滓を以て論ずるときは不可なり。查滓は是れ無用の物なり。其の精英を撰ぶときは查滓存す。人存して物なくして可ならんや。人物具に存して天地終に全し。故に理氣の厚薄を以て論ずべし。

或ひと問ふ、朱子曰はく「血氣知覺を有することある者は、禽獸是れなり。血氣知覺なきことありて但だ生氣ある者は、草木是れなり。生氣已に絶えて但だ形質臭味を有するある者は、枯槁是れなり」と。此の說如何。師曰はく、物は各〻氣に厚し、故に其の質甚だ密にして用を爲すに足り、枯槁猶ほ用物と爲る。是れ氣に厚ければなり。禽獸魚虫は、血氣知覺・視聽言動あり。草木は、血氣知覺ありて視聽言なく、只だ動用を存す。朱子は草木を以て血氣知覺なしと爲す。是れ只だ疎論のみ。草木各〻液汁を存し、能く寒暑南北を知り、發生の節を覺る。折截すれば傷凋し、培糞すれば肥長

す。其の血氣知覺見るべし。生氣は二氣交感の物には須臾も離るべからず。是れ天地息むことなきの理なり。

或ひと問ふ、陳北溪曰はく、「若し人品の類に就いて論ずるときは、上天の付する所皆一般にして、人の値ふ所に隨ふ。又各〻清濁厚薄の齊しからざるあり。聖人の氣を稟くるが如きは至つて清めり、合下に便ち能く生知なる所以なり。質を賦すること至つて粹なる、合下に便ち能く安行なる所以なり。堯舜の如きは既に其の至清至粹を得、聰明神聖たり、又氣の清高にして寬厚なる者を得。所以に貴きこと天子たり、富四海を有ち、國を享くるに至りて皆百餘歲。是れ又氣の最長を得る者なり。夫子の如きも亦至清至粹を得、合下に便ち生知安行なるなり。然れども天地の大氣那の時に到つて已に衰微す、所以に夫子稟け得て高からず厚からず、止だ栖々[一]として一旅人と爲る、而して得る所の氣も又甚だ長からず、僅に中壽七十餘歲を得て、堯舜の高に如かず。聖人よりして下各〻分數あり。顏子も亦清明純粹にして聖人に亞げり、只だ氣を稟け得て長からざるに緣り、所以に夭死す」と。此の說得たりや否や。師曰はく、聖人は、聰明睿知天地と其の德材を同じうす。是れ氣其の精秀を得て、其の理中和を得、過不

(一) 栖々として東奔西走する貌、論語憲問篇第三十四章に「丘何爲是栖々者與」と見ゆ

及の論ずべきなきなり。壽の長短は氣を禀くるの剛柔に因れり、富貴は天命に在り、故に共に作爲すべからず、氣の厚長を論ずべからず。堯舜及び夫子と謂ふが若き、堯舜は其の氣英粹、其の理溫和、天の命是れ全し。夫子は、道德高厚材知分明にして、教化究りなく、天地と參たり、日月四時と同じ。堯舜の盛も亦夫子に到りて著明す。天命至らずして棲々たる一旅人と爲る、是れ又萬世の師たるの命なり。夫子命を得て貴く、天子と爲りて、寅んで四海を有たば、唯だ一堯舜のみ。一旅人たるを以て詩・書・禮・樂の書を修し、春秋・易傳を作り、戒示教化す。其の言行の少に存する、是れ殆ど聖人の道を知るに足れり。人々夫子を祀り德を報じ功に報ゆるも、之れ盡くることなし。故に曰ふ、「棲々たる一旅人たり」と。天命じて萬世の師と爲すなり。富貴を以て論ずるときは、足らざるに似て、其の德其の知の應用は、古今の人品を以てしても、吾が夫子を論ずべからざるなり。

一一九　周子の太極圖說に靜を主とするの說を論ず

師曰はく、周子の太極圖說に曰はく、「聖人之れを定むるに中正仁義を以てし、靜を

主として人極を立つ」(一)と。此の一句周子太極圖說の要なり。中正仁義の四字甚だ會せず。中正の字は易に(二)對して說き出すときは可なり。聖人人極を立つるを以て說き來らば未だ可ならず。易に中正を言ふは、是れ卦爻を以て論ずるなり。凡そ中は天地の中、道の大本なり。正の字は邪に對するの言なり、其の不正を正すの謂なり。中と併せ論ずべからず。仁義は人心の應用、天地の流行焉(こ)れに出でず。中正を以て體と爲し、仁義を以て用と爲すときは、正の字を以て論ずべからず。中仁を以て體と爲し、正義を以て用と爲すときは、仁は是れ發動の用なり。朱子曰はく、「聖(三)人は人極を立つるに、仁義禮智を說かずして、却つて仁義中正と說く。中正は卽ち禮智なり。中正尤も親切なればなり。中は是れ禮の宜を得る處、正は是れ智の正當の處なり」と。朱子禮智を以て中正と爲す。然らば則ち仁義中正と說かずして、中正を以て仁義の上に置く。此の說通ぜざるに似たり。靜を主とするの說は、是れ周子無極を以て主と爲すの實意なり。易の乾の象に曰はく、「天行健なり、君子以て日に彊(つと)めて息まず」と。是れ聖人天の道を形容し來れり、何ぞ靜を以て主と爲(せ)んや。繫辭(四)に、「夫れ乾は、其の靜なるや專らにして、其の動くや直なり。夫れ坤は、其の靜なるや翕(あつ)まり、其の動くや闢(ひら)く」と。

(一)人道の原則又は手本と云ふが如し
(二)姤の卦、象曰、九五含章中正也、井の卦、象曰、寒泉之食、中正也等の中正ないふか
(三)朱子語類卷九十四、周子之書に出づ
(四)上傳

是れ動靜を論じて專ら靜を論ぜず。周子の學は無極の說に泥み、無聲無臭の意を味ふ。是れ後學聖人の道を以て異端の工夫を爲すの弊、因つて起る所なり。故に謂ふ、「周子無極而の三字を以て太極の字上に增す。甚だ聖人の罪人、後學の異端なり」と。

師曰はく、天地の間唯だ其の動に於て其の用あり。繫辭に曰はく、(五)「易の道たるや屢〻遷り、變動して居らず、(六)六虛に周流して上下常なく、剛柔相易る」と。又曰はく、(七)「動靜常ありて、剛柔斷まる」と。又曰はく、(八)「日往くときは月來り、月往くときは日來る。日月相推して明生ず。寒往くときは暑來り、暑往くときは寒來る。寒暑相推して歲成る」と。又曰はく(九)「剛柔相摩り、八卦相盪き、之れを鼓するに雷霆を以てし、之れを潤ほすに風雨を以てす。日月運行して、一たびは寒く一たびは暑し」と。(一〇)彖に曰はく、「雲行き雨施して品物形を流く」と。是れ皆變易交易して而る後に萬物の用通ずるなり。聖人の道天地と參なるも、亦天下の故に感通すればなり。周子靜を以て主と爲す、甚だ相差謬す。

師曰はく、朱子主靜を注して曰はく、(一一)「無欲なり、故に靜なり」と。蓋し無欲の字は通書に本づけり。曰はく、(一二)「聖學ぶべきか。曰はく、可なり。曰はく、要ありや。曰は

(五) 下傳
(六) 陰陽・卦の六位。位もと體なく、爻に因つて始めて見ゆる故に虛といふ。
(七) 繫辭上傳
(八) 同下傳
(九) 同上傳
(一〇) 乾の卦の彖
(一一) 圖說の割註、及び朱子語類卷九十四、周子之書に出づ
(一二) 通書聖學篇に出づ。周子の門弟との問答なるべし

く、あり。請ふ焉れを聞かん。曰はく、一を要と爲す。一とは無欲なり。無欲なれば、靜なるときは虛に動なるときは直なり。靜なるとき虛なれば則ち明なり。明かなるときは通ず」と。是れなり。無欲の說味あるに似て話頭甚だ高く、人皆異見に陷るなり。凡そ聖人の學、日用事物の間、語默動靜の用皆欲なり。情欲に於て天理に循ひ私欲の弊を去り來る底のみ。無欲を以て之れを論ずるときは、槁木死灰の謂なり。人として少(しばら)くも欲なくんばあるべからず。日用事物・語默動靜、這箇是れ情の欲なり、無欲と謂ふべからず。靜默は無欲に似て唯だ靜默なり、無欲と謂ふべからず。無欲の說一たび起つて、聖學を以て虛無恬淡の味と爲し、日用事物の間を力行せず、淸談を好み虛遠に騖(は)す。尤も周子の謬なり。是れ易の無思・無爲・寂然不動等の語を以て、異見を認爲して、聖人を假りて異端を說くに到らしむるなり。

師曰はく、朱子曰ふ「苟も此の心寂然無欲にして靜なるに非ざるときは、又何を以てか事物の變に酬酢(しうさく)(一)して、天下の動に一ならんや」と。是れ朱子は無欲を以て寂然不動の地と爲して之れを論ずるなり。聖人の靜寂を說くは、動感に對するのみ。靜寂は動感の用なり。靜と動と、寂と感と、互に交易して支離せず、陰陽相因るが如し、專

（一）應對の意

ら靜寂を主とするときは、恬淡を甘んじ虛無を主とするなり。聖人の靜寂を以て、恬淡虛無と爲し、無欲の地と爲すときは、靜は是れ一箇の死物なり。聖人の靜寂を說くは全く活物なり。若し靜寂を以て未發の時と爲すときは、是れ太極象數已に具はり、流行息むことなし。豈必ず主靜を以て之れを論ぜんや。唯だ動靜幷び具へて未だ發せざるなり。聖人の事物の變に酬酢する、是れ一箇の太極、能く象數を具へ、能く事物に通ずるなり。其の象眹（あと）なく形なく、聲もなく臭もなし。此の時動靜を以て之れを論ずべからず、其の無眹・無形・無聲・無臭を以て、靜を主とすと爲すときは非なり。是の靜や唯だ已むことを得ず、其の動や唯だ已むことを得ざるなり。故に聖人の靜默只だ此の如くして、更に求索すべからず。應（感カ）ずべきときは則ち感じ、默すべきときは則ち默し、靜默を以て必とする所に非ざるなり。今朱子は周子の語を以て附會して、靜寂を以て事物の變に酬酢すと爲す。是れ泥著して附會せるなり。

師曰はく、朱子曰ふ、「大凡人須らく是れ沈靜なるべし。周先生主靜の說ある所以は蒙・艮の二卦の如く、皆靜止の體あり」と。是れ朱子沈靜を以て主と爲すなり。人に敎ふるの敎戒は其の質の重きに因つて之れを除く。各〻必ず沈靜を以てせば未だ可な

らざるなり。動は靜を以てし靜は動を以てして兩般なし。天地日月四時流行少くも息まざるは沉靜と謂ふべからず。周子の通書蒙艮の篇に終る、是れ周子の意見を以てして、此の二卦を以て附會するなり。夫子乾の卦を象して曰はく、「天行健なり」と。坤の卦を象して曰はく、「地の勢坤なり」と。是れ行勢の二字甚だ活潑地なり。君子の日用動靜、唯だ天地に循ふ。夙に起き夜に寢ねて、出入起居屈伸往來、更に偏倚する所なし。何ぞ沉靜を以て必とせんや。是れ等の弊に因り、江西(一)の說く所靜を主とし、後學靜坐を專らとす。聖學の用終に泯沒す、於歎息すべきなり。

師曰はく、朱子曰ふ(二)「濂溪は主靜を言ふ。靜の字只だ好く敬の字に作りて看よ。故に又『無欲なり、故に靜なり』と言ふ。若し以て虛靜と爲さば、恐らくは釋(老)に入る者と云はん」と。是れ朱子も亦靜寂の認め難きを恐るるなり。伊川既に只だ箇の敬の字を說きて人に敎ふ。主靜の說を併せ言ふときは、少く執るべき所あり。而れども敬も又一箇の敎戒なり。這裏認め得れば敬も亦一箇の添物と爲す。周子の靜を主とすると、程子の敬を主とすると、計校し來れば、敬を主とするときは聖學の害少し。靜を主とするときは聖學泯沒す。若し意味の高尙を以て之れを論ぜば、敬を持するは頗

(一) 揚子江の西、即ち周程朱等の學派を指す
(二) 朱子語類卷九十四、周子之書に出づ

る力を費すに似て、無欲擺脱するに如かず。是れ異端の洒落なり。人伊川の說に從ひて敬を主とするときは、朱子の所謂沉靜底なり。學流の害少し。靜を主とするときは明鏡止水を認めて之れを味ふなり。是れ聖學の泯沒する所以なり。

一二〇　或ひと主靜の說を問ふを辨ず

或ひと問ふ、中正の二字、朱子以下の諸儒各〻禮智を以て中正と爲す。中は禮なり、禮は天理の節文なり。節なれば大過なく、文なれば不及なきなり。便ち是れ中なり。智は正に屬す、先儒皆正を以て之れを訓ず。惟だ正なれば是を是とし非を非とするを知り、確然として易へずと。此の義如何。師曰はく、周子の太極圖說に中正仁義を言ひ、通書に又仁義中正を言ふ。其の說錯雜す。聖人の人極を立つる、禮智を以て先と爲し、仁義を以て後と爲すや。殆ど周子が意に非ず。周子は唯だ中正を以て體と爲し、仁義を以て用と爲す。故に曰はく、(三)「人の道を立てて仁と義と曰ふ」と。是れ仁義を人の道と爲し、中正を道の本と爲すなり。中は天下の大本なり、道の本と謂ふべし。正は其の不正を正すの謂にして、道の本と謂ふべからず。唯だ其の教戒を指すなり。聖

(三) 易の言なり、しばしば出づ

人人極を立つ、豈是れ等の言を以てせんや。周子、易の中正を以て之れを論ずるのみ。後儒周・朱の言に因り附會論談し、究理すべからず、眼目の弊なり。

或ひと問ふ、朱子曰はく「人動かざる能はずと雖も、人極を立つる者は必ず靜を主とす。惟だ靜を主とするときは、其の動に著はるるや節に中らずといふことなし。而して其の本然の體を失はず」と。又曰はく「性の分は靜に屬すと雖も、而も其の蘊は動靜を該ねて偏ならず。故に樂記に靜を以て性と言ふは則ち可なり。遂に靜字を以て天地の妙を形容するは則ち不可なり」と。朱子の是れ等の說は動靜を以て焉れを論ずるなり。師曰はく、朱子の動靜を該ぬるの說は可なり。然して人極を立てては必ず靜を主とし、性の分は靜に屬すといふは、是れ只だ靜寂を以て主と爲すなり。人極を立つるは動靜を該ねて節に中るの謂なり。凡そ人の日用は是れ動靜の間なり。靜も亦動の對、何ぞ靜を以て之れを主とせん。未發を以て靜と爲すは則ち不可なり。未だ發せざるや、只だ太極のみ、靜を以てすべからず。

或ひと問ふ、易に曰はく（一）「易は思ふことなきなり、爲すことなきなり、寂然として動かず、感じて遂に天下の故に通ず。天下の至神に非ざれば、其れ孰れか能く此れに

（一）繫辭上傳

與からん」と。是れ靜を以て主と爲すに非ずや。師曰はく、周子の靜を主とするは、尤も此の言に本づけり。通書に曰はく、「聖人は思ふことなし」と。亦此れに因れり。易は聖人の深を極め幾を研く所以なり。凡そ天地の太極は含藏せずといふことなし、故に發して節に中らずといふことなし。更に思慮造作なくして事物來り感ずれば、通ぜざるなし。靜寂にして思ふことなく爲すことなきを求むるに非ず。天下の故來らざれば感ずべきなし、故に寂然として動かず。天下の故來るときは感ぜずといふことなし。若し靜寂にして思爲なきを提携し來る底は、是れ寂然不動に非ず、甚だ思慮作爲するなり。無思なり無爲なりと謂ふべからず。周子の說に因れば、天下の故未だ來らざるの前、寂然不動を以て存養と爲るときは、天下の故來り感じて通ぜずといふことなきの謂なり。天下の故未だ來らざるの前、寂然不動を以て存養と爲るときは、心數〻思慮作爲ありて已に動し來る。那箇か是れ不動地ならん。易の所謂寂然不動とは、天下の故來らず應ぜず、故に寂然不動なり。其の本は太極なり。故に感ずるときは通ぜずといふことなし。聖人と天地と參たり。其の日用事物天下の故に於ける、皆此の如し。動靜只だ節に中るのみ。周子專ら靜を主とす、甚だ動し來りて、早く靜底を失

(一)朱子語類卷九十四、周子之書に出づ文々稍や異なる

(二)よりかかり附著するなり

(三)相待つ一得る意

却す。後學此れに因つて玄妙を談じ高尙に騖せ、手を寂然不動に下して無聲無臭を求むるに、無聲無臭彌〻遠く去つて、索むべきの迹なし。太だ差謬す。

或ひと問ふ、朱子曰はく(一)「常に箇の靜底に靠著(二)して本(主)と做す。夜なければ晝と做し(做し得こ)て分明ならず、秋冬なければ春夏と做し得て長茂せず、且つ人の終日應接するが如き、歸り來り歇むこと霎時にして却つて出で去るときは、便ち分外の精神春夏の生長の如し。若し一向に恁地に去らば、却つて甚だ了期あらん、元氣も也た須らく解蝎すべし。所謂復は其れ天地の心を見るか」と。師曰はく、勉齋の黃榦も亦云ふ、「今人終日紛擾して心定疊せず、須らく片時も那裏に去つて靜坐し這の心を收むるを著すべし」と。是れ朱子の說と一般なり。天地の晝夜四時あり、動靜節に中る、唯だ已むを得ざるなり。天地必ず夜陰秋冬を待ちて、晝と春夏と做し得るならんや。若し待得(三)の思慮あらば、是れ太だ造作し來るなり。晝あるときは夜あり、晝は事に應じ物に接するも、夜は靜寂無爲なる、是れ自然の理なり。春夏は生長し秋冬は收藏し、動靜端なく始終息むことなし。人の終日は紛擾すべきときは紛擾し、靜坐すべきときは靜坐す。若し紛擾すべきの節靜坐して這の心を收め來ると爲さば、是れ節を失するなり。紛擾の時、

這の心放蕩浮躁する者は聖人の道を知らず。太極の實を盡さざればなり。併論するに足らず。唯だ語默動靜節に中るのみ。語默節を失ひ動靜時を違ふ底は、是れ一箇の風顚漢なり。

或ひと問ふ、人多く紛擾するときは、心も亦放蕩す。今事物の來る、默思靜慮するときは其の失少し。紛擾放蕩より爲し來れば皆違失すと。是れ主靜の說か。師曰はく、伊川易を解して曰はく「專一ならざれば直遂する能はず、翕聚せざれば發散すること能はず、是れ只だ天地造物の迹を見來るなり。天地の間秋冬は是れ陰靜、此の時凝肅藏閉して、春に至つて許多の氣發生長茂す、其の跡を見來れば、天地は閉藏極凍に意あるに似て、太だ生長收藏に意あるなし。天地一太極、生々息むことなく、已むを得ざるのみ。物之れに感じて生長收藏あるなり。人多く紛擾するときは、心亦放蕩す」一と。多の字已に差了す。紛擾すべからずして紛擾す、故に心放蕩するなり。默思靜慮是れ靜ならず、只だ形の靜默なり。凡そ事豫め太極するときは通ぜずといふことなし、今其の事に當りて俄に思慮する底は靜默のみにして通ずべからず。沉默して泥塑人の市中に坐するが如し。紛擾浮躁底の人も亦一般なり。聖人の道は、日用事物の間其の

理を究むるに在り。其の理を究めず其の事を盡さざるときは、天下の故に更に感通すべからず。年を累ね沈默すと雖も、日に暗く月に惑ひて、終に槁木死灰の地に到らんか。

或ひと問ふ、呆齋の李氏曰はく、「人生れて靜なるは、性の本體なり」と。李正叔も亦朱氏の高弟なり。此の說非か。師曰はく、人は生ありてより卽ち知識あり、事物交〻來り應接暇あらず。其の間初より頃刻の停息なく、事物と應接せざるの時も亦天命流行して生々已まざるの機、未だ嘗て歇み去らず、獨坐の間、目に觸れ耳に聞き、手足の物に接する、閑思の雜慮、更に已むことなし。假寐の時も亦流行の機流轉す。是れ天地の本然なり。人生れて靜なる者は未だ事物に接せざればなり。是れを以て性の本體と爲さば、性は是れ一箇の沈默靜恬の死物なり。其の言說き得て皆差謬す。樂記に「人生れて靜なるは天の性なり、物に感じて動くは性の欲なり」と謂ふが如きは、動靜を該ぬるなり。

或ひと問ふ、周子の通書に曰はく、「靜は無にして動は有」と。此の說如何。師曰はく、或ひと問ふ、「心の本は是れ箇の動物なり、不審未發の前は全く是れ寂然として靜

なり、還つて是れ靜中に動意あり」と。朱子曰はく「是れ靜中に動意あるにあらず。周子が謂ふところの靜は無にして動は有とは、是れ無にあらず、其の未だ形せざるを以て之れを無と謂ふ、動に因つて而る後に有なるに非ず。其の見るべきを以て之れを有と謂ふのみ。其の靜時に方りて動の理只だ在り。伊川の謂ゆる中の時に當つて、耳聞くことなく目見ることなし、但だ見聞の理在り、始めて動に及ぶの時を得るも、又只だ是れ這の靜底のみ」と。是れ朱子說き得て好し。周子が靜無の說大いに學者を過了す。有無動靜皆事物の用なり、其の本然なり。有無動靜を以て論ずべからず、只だ本然のみ。朱子は猶ほ靜を以て主と爲す、故に「其の靜時に方りて動の理只だ在り」の語あり。

或ひと問ふ、朱子曰はく(一)「嘗て試みに之れを泯然(二)無覺の中に求むるに、虛明應物の體に非ざるに似たり。而して機微の際一たび覺あれば、又便ち已發と爲り、而して寂然不動の謂に非ず。是に於て退いて之れを日用の間に驗む。凡そ之れに感じて通じ、之れに觸れて覺る、蓋し渾然たる全體ありて、物に應じて窮まらざる者、是れ乃ち天命流行、生々已まざるの機、一日の間と雖も常に起り常に滅して、其の寂然の本體は

(一) 晦庵先生朱文公文集卷三十、與張欽夫に出づ
(二) 滅亡の樣

未だ嘗て寂然たらずんばあらず」と。朱子の此の說尤も親切なるに似たり。師曰はく、是れ未發の時寂然の本體を認得して、以て主と爲すの說なり。異端の見性悟入の意と同じくして、尤も聖學の本意に非ず。天命流行生々已まず、渾然たる全體、是れ天地理氣の妙合に因りて、此の如き底なり。人物各々一太極の具はればなり。認得し來つて更に日用の功あるべからず。數々之れを泯然無覺の中に求むるは、味あるに似て、年月を累積すれども、亦只だ心を甘んじ虛を味ひて、日用に日新の功なく、事物に究理の詳なし。其の應接心と行と太だ差了して、釋老と一般なり。

　或ひと問ふ、西山の眞氏曰はく、「朱子嘗て論じて云へるあり、明道人に靜坐を教へ、(一)李先生も亦人に靜坐を教ふ、『須らく靜坐して始めて能く收斂すべし』と。又曰はく、『始學の工夫須らく是れ靜坐して則ち本原定まるべし』と。又曰はく、『心未だ事あらざる時に於ては、須らく是れ靜なるべし、事に臨んで方に用ひて便ち氣力あり』と。伊川も靜專の處を解して云ふ、『專一ならざるときは直遂すること能はず、閑時須らく是れ收斂すべし。事を做して便ち精神あり』と。又曰はく、『學を爲すの工夫須らく靜を要すべし、靜多きは妨げず、才に靜なれば事都て見得す、然も總て是れ一箇の敬な

(一) 李延平

り』と。又曰はく、『靜を主とするは其の動を養ふ所以なり』と。以上の數條、蓋し周子主靜の說を祖とす。其の門人[二]、靜坐の工夫と彼の應接と同じからざるを以て問を爲すに至る。則ち之れに答へて云はく(朱子)、『必ずしも此の如くせざれ、反つて坐馳を成さん。但だ收斂して放逸ならしむることなかれ。究理の精に到つて後は自然に思量して妄動に至らず、凡そ云ふ所も至理ならざるはなしと爲す。亦何ぞ必ず兀然として靜坐し、然して後に敬を持すると爲さん』。又曰はく(朱子)、『明道靜坐して以て學を爲むべきを說き、上蔡も亦多く靜に著くを妨げずと云ふ。此の說終に是れ少しく偏せり。才に偏なれば病を做す。道理は自ら動なる時あり、自ら靜なる時あり。學者只だ是れ敬以て內を直くし、義以て外を方にす、世間を見得するに處として是の道理ならざるはなし。必ずしも專ら靜處に於て求めず。所以に伊川謂へらく、只だ敬を用ひて靜を用ひずと。便ち說き得て平なり』。又云はく(朱子)、『事なきときは靜坐し事あるときは應酬す』。其の南軒に答ふる書に云ふ[三]、『來教に謂はく、靜を言ふときは虛無に溺ると。然れども此の二字佛老の論の如きときは、誠に此の患あり。若し天理を以て之れを觀るときは、動の靜なき能はざること、猶ほ靜の動なき能はざるがごときなり。靜の字を下すと雖も元

(二) 朱子の門人、以上の數說を朱子が列擧せるに對して反問せるなり

(三) 晦庵先生朱文公集卷三十二に出づ、但し文字少しく異なる

と死物に非ず、至靜の中自ら動の端あり。是れ乃ち天地の心を見る所以の者にして、先王の至日[一]には關を閉づる所以なり。蓋し此の時に當りて則ち安靜にして以て此れを養ふ、固に事を遠ざかり物を絕ち目を閉ぢ兀坐して靜に偏なるの謂に非ず。但だ未だ物に接せざるの時、便ち敬ありて以て其の中に主たるときは、事至り物來りて善端昭著なり。之れを察する所以の者益〻精明のみ』と。以上の數條則ち又程子敬を主とするの說に本づくも、而も專ら靜を主とせざるなり」と。西山說き得て明かなり。朱子も亦或は靜を主とし或は敬を主とす。師曰はく、西山は、朱子が靜敬兩ながら存し用ふることを論じ、其の據る所尤も著明なり。朱子、主靜の說を論じ來れば弊あるに似たるが故に、敬義夾持して間斷すべからざるの意を以てす。是れ聖人の道に通ぜず、只だ周・程等を以て證と爲し、遂に一決せず、或は曰はく靜、或は曰はく敬と。共に百步五十步にして其の實を得と謂ふべからず。先に靜敬の說を論じたれば、今焉れを措く。

或ひと問ふ、勉齋の黃榦曰はく、「苟も一念の掛著底あらば、都て是れ欲にして、一切の嗜好の類の如きも、此は是れ一路、又須らく欲を識得すべし。其の中に沈溺して

（一）易經の復の象に「先王以て至日に關を閉ぢて商旅行かず」と出づ、冬至には關門を閉ぢて行かしめず、靜かに春の來るを待つの意なり

而る後に之れを欲と謂ふを待たず。程子云はく『纔に向ふ所あれば便ち是れ欲』と。這箇甚だ微なり。纔に念を起す處、便ち是れ欲、譬へば止水の上打ちて一たび動くが如きと相似たり。若し酒池肉林に到りては已に狼當し了る」と。黄榦が此の說如何。師曰はく、勉齋の此の說皆異端の見を認得し來れり。人と物とは各〻動生の物なり。念々相續し生々息むことなし。纔に念を起し一念向ふ所あるを以て欲と爲さば、木石瓦礫を以て認得して無欲と爲んや。人物は天地の理氣妙合の用なり、止水の如きを求むべからず。止水は是れ水の本然に非ず、水は潤下を以て用と爲す。飲食男女の欲、許多の情、皆已むを得ざるなり。是れ等の情を以て欲と爲し、無欲を索め來らば、死去の後に到らざれば周子が無欲を得べからず。黄榦は親しく業を考亭に受け、朱子女を以て之れに妻はす。其の學世擧りて之れに與し、而も此の說を以てす。噫、周子が主靜無欲の說、人を惑はすの甚しきこと此の如し。

或ひと問ふ、然らば則ち聖人の學には主靜靜坐なきか。師曰はく、聖人の學は只だ日用事物の間に在り。自己身心の運用は天地に循ふのみ。靜を必とするなく、敬を必とするなし。事なければ靜、事あれば動。動は是れ情欲なり。動靜枉須ち體用離れず、

更に認め得て偏倚することなし。子曰はく、(一)「吾れ嘗て終日食はず終夜寢ねず、以て思ふも益なし、學ぶに如かざるなり」と。是れ認得し來る底を破了するの戒なり。靜を主とし虛靜寂然を以て道原と爲さば、更に日用に益なし。心を勞して以て聖學を求むれば彌〻遠し。何ぞ靜を主とし、或は靜坐を事とせんや。

或ひと問ふ、無事の時は聖人も亦閑居すべし、何ぞ靜坐なからん。師曰はく、(二)「子の燕居するや申々如たり、夭々如たり」と。靜坐を以て一物と爲さず、只だ靜かに坐するのみ。何ぞ靜坐を以て教戒と爲さんや。且つ聖人の道は凡人に異ならず、惟だ日用事物の應接能く節に中るのみ。若し坐するに靜坐を以てし、行くに靜を以て主とせば、是れ一箇の奇人の如し、凡坐して靜に偏するの謂ならん。

(一) 論語衛靈公第三十一章

(二) 論語述而第四章

枕塊(三)記上

寛文五乙巳年十二月小

廿二日甲戌　快霽。先考病疾(四)なり。

先考昨廿一日より疾病にして、醫療施すべからず。今日大いに病にして氣息漸く衰ふ。故に席を正し帳を掃ひ、褻衣(五)を去り衾枕を新にし、香を焚きて内外をして安靜ならしめ、豫め主人及び行事者を定む。

追つて案ずるに、主人は喪主(六)なり。喪大記(七)に曰はく「喪は後なきことあれども主なきことなし」と。行事者は喪を護るなり。凡そ喪の事は皆之れに稟く。喪に主人なきときは神憑る所なし。行事者なきときは情に從つて禮を失ふ。古來此の制

(三)　喪に居るの禮、土塊を以て枕と爲すなり、儀禮の喪服に出づ。孝行が父の喪に服したるを記したるなり

(四)　疾の重くして危篤に近きを病と云ふ

(五)　平常服

(六)　孝行の兄の遺兒千介正明なり、後出四三六頁參照

(七)　禮記の篇名

あり。子孫の哀に過ぐる、必ず其の失は過ぐるに在り、其の及ばざるや必ず疎に到る。行事者禮を知り、幹能の者は其の禮を中す。豫め定むるは孝子の意に非ず。然れども既に沒せば慟哭して知るべからず、其の禮を失することを恐る。

主婦・予及び阿弟・阿妹・阿孫・野婦は　先考の左右に侍して手足を奉じ、顏色を窺ふ。（男は左女は右）舊古の侍女は席下に在り。他人を遠ざけて、各〻悲泣働（慟）涕す。然れども聲をして發せしめず、先考の顏色氣息を窺ふ。

追つて案ずるに、古來纊を屬けて以て氣の絕ゆるを俟つ。纊は乃ち搖動を爲し易し、口鼻の上に置きて以て候と爲す。然れども子孫少くも未だ嘗て慈顏を窺はずんばあらず、且つ纊を屬くるに忍びず、唯だ慈顏を護り奉りて永訣を悲しむ。凡そ終りに臨むは人の大節なり、動搖周章すれば鬼神の憑る所正しからず。故に聲を發せざらしむ。

竟に沒す。

巳の上刻　先考竟に沒す。各〻哭擗慟傷して聲の發するに從す。將に絕え入らんとす、其の間尤も久し。靈體を汚し奉らんことを恐れ、強ひて靈體を正寢に遷し、帳

を下し覆ふに新衾を以てし、新枕を置き北首す。予及び阿弟は帳の側を護り、侍女御者兩人は靈體の左右に在ること、生ける時の如くして其の旁に復(たちもとほ)(一)す。(二)主婦・阿妹・野婦をして別所に居らしむ。各〻髮を被り華飾を去り、哭擗數なく、食する能はず。

追つて案ずるに、古禮に復の禮あり、近來は其の詳かなるなし。唯だ亡者の姓名を呼ぶ、是れ復禮なり。少くも氣息の絶えざらんことを欲する、是れ孝子の意なり。

此の間行事者は棺を治め、沐浴の具を設け、親戚僚友に訃告し、主人を立て賓客弔者使价を禮す。此の間太だ哀戚し、守則なし。行事者は火燭及び非常の儀を戒む。

沐浴

既に沒して晩日に迄(いた)れば生氣愈〻絶ゆ、竟に蘇復すべからず。行事者强ひて沐浴を命ず。各〻猶ほ肯んぜずして生氣を待つ。然れども止むを得ずして行事者に從ふ。新器新衣を設け、水盤・水器・汲器・明衣・巾皆新を用ふ、御者を定む。古舊の老侍女及び御者各〻四人、監士一人。外人を遠ざけ屛風を設け、沐浴の處を構ふ。御者は靈體を奉じ、衾を抗(あ)げ粹(すいこ)を襢(あらは)にして浴盤を置く。御者愼んで浴湯を奉じ、新巾を用ひて謹みて沐浴すること平日の

（一）招魂の意

（二）案行の娘ならん

如く、髪を櫛り爪を剪り、拭ふに新巾明衣（一）を用ふ。湶濯（二）を新盤に盛り、坑を屏處の潔地に掘りて之れを棄つ。巾櫛髪爪の殘りは皆白布を袋にして之れを納む。監士は其の輕疎動搖悲涙を戒む。

沐浴の後に、御者別に白服新帶を奉じ、禮服を襲せ、幎目巾・綿襪を加へ、腰刀を帶び、用具を佩くこと生ける時の如くす。

追つて案ずるに、古來は飯含（三）・小斂（四）・大斂の制あり、世俗之れを詳にせず、且つ甚だ爲すに忍びざるの意あり。故に平日の如く、衣服を正し襲覆するに衾を以てす、是れ禮なり。腰刀・用具は皆側にあり、今遺命に從ひて帶佩す。

靈座を設く。

靈體の正服終りて、幎目巾を深くし、靈體をして南面に座せしめ、前に卓子を設け、上に香爐を置く。各〻位を爲して拜禮し、哭擗して哀を盡す。南面は生者の禮を以てするなり。

追つて案ずるに、古禮は三月にして葬る（五）。沐浴の後、椸を戸の南に設けて魂帛と爲し、卓子を設け、香菓を具へて靈座と曰ふ。今の所謂靈座は靈體を拜するなり。世俗久しく殯（六）すること能はず、故に主婦子孫をして靈體を拜せしめ永訣を爲

（一）浴衣に同じ
（二）入浴に使用したる水
（三）支那の古禮にして、死者の口中に米を含ましむ
（四）小斂は死者に衣を著せ帝中に安んずる儀式、大斂は死者を棺に納むる儀式
（五）禮記王制に「大夫士庶人は三日にして殯し、三月にして葬る」と出づ
（六）死者を棺に納めて埋葬せずに置くこと

すなり。尸の象形は人の爲に惡まる。因りて冒を設けて幎目巾を幅にす、是れ古禮なり。

執友親厚の人入りて哭す。

大斂

棺既に成る。各〻靈座を拜するの後、棺を擧げて堂中の少し東に置き、侍女御者靈體を奉じ、衾を抗げ以て棺中に納め、平生の用具、生時落す所の齒髮及び剪る所の爪（大浴の時の布袋等）を棺の角に實れ、其の空缺の處を揣り、衣を卷きて之れを塞ぎ、務めて充實して搖動せざらしむ。靈體をして端坐拱手せしむること平日の如くし、（是れ遺命なり）覆ふに新衾を以てして蓋を加へ釘を下す。

追つて案ずるに、古禮は死の明日に小斂し、又明日に（死の第三日なり）大斂し、棺中に納む。今俗禮に從ふ。凡そ棺の制は禮經(七)に出づ。今遺命に從つて棺を高くす。其の高さ三尺七寸、徑二尺五寸なり。是れ端坐して傾かず、又寬にして窕がざる爲なり。尤も厚木を用ふ。下に白布を敷き新褥を置き、靈體を安坐し、用具を實れ、衣衾を以て堅く之れを充實す。乃ち匠を召して蓋を加へ、大鐵釘（八寸）を下すこと三十箇

（七）禮記、喪大記に出づ

所、白布を以て縦横に之れを結ぶ。白布の端を長くして縣封（一）の補(たすけ)となす。古來主婦哀子孫尸を奉じて棺に納む。然れども各々慟哭して之れを爲すに忍びず、故に御者を以てす。

大斂して靈柩をして南面せしむ。

奠(そなへもの)を設く。

靈柩の前に白布を貼(つ)けて、先考の姓名を書す。日既に暮れて燭を左右に立て、卓子を設け、茶菓の盞(さう)を具へて香を焚く。主婦以下位を爲して哭擗すること數なし。追つて案ずるに、古禮は木を鑿(けづ)りて重(かたしろ)（二）となし、又束帛を用つて神を依(よ)す、之れを魂帛と謂ふ。又銘旌あり。今の俗之れなし。白布白紙を貼(は)りて其の姓名を誌(しる)し神を憑(よ)らしむ、是れ銘旌なり。

竟に葬る。

期に前(さきだ)ち地の葬るべき處を擇ぶ。行事者豫め監士疋夫を宗三寺に遣はし、地を撰び壙(あな)を穿(ほ)る。深さ一丈、泉に至らず、徑四尺。　炭末を壙底に布く。

追つて案ずるに、古禮は、天子諸侯大夫士の各々葬るに其の月あり。今の俗は久

（一）棺を壙に下げて埋むるを云ふ。禮記の王制に出づ、又後出四三七頁參照

（二）假の位牌にして後に木主又は神主即ち位牌と取換へらるるものなり、後出四三八頁參照

しく殯すること能はず、多く即日を用ふ。貴族權門も亦然り。未だ嘗て俗に從はずんばあらず。（然らざれば事を奉行に告ぐ。）地を擇ぶこと古法あり。世俗專ら浮屠(三)の地を借る、故に擇ぶべき所なし。幸に遺命ありて雲居山宗三寺(四)に葬る。(五)（寺は宮内少輔藤原勝行が建つる所なり。勝行は武州牛込城に住み、天文十三甲辰年此の寺を建て美田を寄す。本の氏大胡を改め牛込と號す。）寺地最も廣く、山水幽閑の處あり。寺は江城を去ること遠し、故に檀越寡くして許多の卵塔(六)なく、又火災の恐れなく、幸に家を去ることも遠からず。（凡そ葬地は參詣の近きを好んで地を擇ぶことを詳にせざれば終に安からず、孝子の實に非ず。）壙を穿ること、古禮の棺は只だ浮んで土上に在り、深き者も僅に一半は地に入り半は地上に在るものあり。然れども壙淺ければ盜之れを發き、螻蟻虺蛇相侵し、地氣皆上に在りて其の腐朽尤も速かなり。一丈に及ぶときは盜發くべからず、虫侵すべからず、草木の根入ることを得ず、地氣少し、故に今一丈を以てす。檀弓(七)に、延陵の季子(八)が長子の葬に、孔子往きて焉れを觀る、「其の坎の深さ泉に至らず」と。

發引

戌の初刻、靈柩を發す。其の行列生ける時の如し。

追つて案ずるに、刻限に及びて柩を載するの輿を納る。是れ古來の所謂大轝の略

（三）僧侶

（四）今の牛込辨天町宗參寺境内山鹿家墓地これなり

（五）今此の人の墓碑は宗參寺山鹿家墓地の隣に在り。

（六）墓石。本來はその形よりかく名づく

（七）禮記の篇名

（八）吳の公子札、國を讓りて延陵に居る、延陵の季子と號す

なり。御者は各々柩を奉じ、謹んで輿に載す。主婦以下位を爲して擗哭慟哀す。行事者強ひて之れを制し、竟に從者及び留守を定め、行列を詳にし、門戸を掃ひ道を清め、發引を催す。（主婦・阿妹・野婦歩にて從はんことを欲す、今強ひて之れを止む。）各々別れを告げ、涙を垂れて靈柩を發す。先づ張燈前驅二輩（各々戎服を著、長兵を持たしむ）・主人（嫡孫千介正明、長兵を持たしむ）・長兵（左右、方相に擬す）・靈柩（前後張燈四、左右に護士二人、步卒三人、擔夫八人）・前輳（義昌之れを舁ぐ）・後輳（某之れを舁ぐ。）孫族次を守りて行く。舊友顧恩の輩葬に從はんことを欲して扈從するもの數十人なり。後驅後に在りて動揺遲速するを戒め、宗三寺に到る。堂上堂下に於て諷經念呪あり、（浮屠の法は用ふべからず、然れども地を寺に借る、乖戾すべからず。）其の制は堂庭に於て登几（其の諷經念呪は父亡者に害あらず、切に之れを拒まんと欲するときは、乃ち官に訟へ俗を驚かす、尤も亡親の靈を安んぜず。唯だ流俗の澱に從ふも亦可なり。）子を置き、靈柩を安んじ、四方に帷幕新席を設け、靈柩の前に兩卓を高くして奠供を具ふ。（飲酒菓茶。）香爐燭臺を置き、后土を墓の左に祭り、各々香を焚き禮拜哭擗す。群參の濟々次を守りて燒香す。古來は主婦兒女步して從ふも、今強ひて之れを止む。

壙に及びて縣け窆る。

追つて案ずるに、后土を祭り香を焚き別れを告げ哀を盡し、賓客を遠ざけ匹夫を

除き、壙の邊を安靜にして松明を燃やし張燈を下し、詳に壙の内を窺ふ。然して後に載轝を脫して靈柩を出し、子孫壙の四方に相列び、柩に縣けたる四條の布を拜して取り、靈柩を傾隊搖動せしめず、灰隔(一)の中央に窆め南面せしむ。哭擗して永訣を告げ、銘布を其の上に加へ、靈柩の前後左右上に厚く末炭(五寸許)を鋪き、縣布張燈を側に埋む。乃ち土を實れて之れを築かず、墳を高くして四邊に假に竹籬を設け、新木に題して姓名を誌し、卓子を置き香を焚き葬の終りを告ぐ。各〻位に就いて哭擗して哀を盡し、歸らんとするに處なく、踟蹰躊躇して猶ほ存するが如し。行事者强ひて家に歸らしむ。(古來明器誌石等あるも今從はず。灰隔の制(二)は家禮に詳なり。今は久しく準せず、故に其の法詳に盡す能はず。唯だ末炭を以て土と柩との隔りと爲す。又后土を祭るの祝文等あり、予哀慟太だ切にして言はんと欲して辭なし、只だ鬼神の宥恕に在り。)王制(三)に所謂「庶人は縣封(四)するなり」と。

反哭

各〻家に歸りて甚だ哭擗して食せず、尙ほ存するが如し。先づ縞潔(五)の白紙を撰び、愼んで姓名を誌して堂壁に貼り、席几を新にし卓子を設け、兩燭を立て香爐茶菓を置き、危坐拜禮して更に親を喪するの意なく、生けるに事ふるが如し。哀哭泣血して母君を慰め、夜闌けて私に歸る。

(一) 下の割註に詳し
(二) 朱子の文公家禮
(三) 禮記の篇名
(四) 棺に繩をかけて下し、土を以て覆ふ
(五) 純白

追つて案ずるに、問喪(一)に曰はく、「門に入りて見えざるなり、堂に上りて又見えざるなり、室に入りても又見えざるなり。亡びたり喪ひたり、復た見るべからず。故に哭泣擗踊して哀を盡して止む」と、是れ反哭なり。古人は三月にして葬る。其の間木主(二)成る。今は然らず、故に假りに之れを設く。

喪の禮を定む。凡そ奸人は人の緩怠を窺ふ。喪に居ると雖も平日の守禦は忽にすべからず。故に番兵火難の守禦太だ嚴にして、喪中をして騷動せしむべからず。

喪の次(やどり)を定む。

中門の外淨潔の處を掃きて次(やどり)を爲(つく)り、鋪(し)くに新席(あらむしろ)を以てす。喪の用に非ず、時々(よりよりに)母君に見ゆるに非ざれば、此の次を出でず。

追つて案ずるに、喪大記(三)に曰はく、「父母の喪には倚廬(いろ)に居て塗らず(四)、苫(とま)に寢ね、凷(つちくれ)を枕にす。君は廬を爲りて之れを宮にす。大夫士は之れを襢(あらは)にす。倚廬は中門の外東墻の下に於てす。木を倚(よ)せて廬と爲すなり。宮は宮墻の如きなり。襢は袒なり、其の廬を露して帷を以て之れを障(ふせ)がす。既に葬りて柱楣(ちゆうび)す。先の時は木を牆に倚せて以て廬と爲す。今は其の木を擧げ起し、之れを楣に柱とし日光を納る。廬を塗ること顯(あきら)かなる者(ところ)に於てせず、君大夫士皆之れを宮にす」。禮せざるなり。

喪服を定む。

麁綿を染めて黲色(うすぐろ)と爲し、肩衣(かたぎぬ)・袴・帶・襪(たび)皆一色なり。下に素綿の服を著け、上

(一) 禮記の篇名
(二) 神主と同じ、位牌なり
(三) 禮記の篇名
(四) 壁を塗らざるなり

に黲服を襲ぬ。嚴寒甚しければ最下に疎帛服を以てす。

追つて案ずるに、父の喪には斬衰(五)三年、苴の杖竹を用ふ。黲服は本朝の服色なり。

其の色の厚薄を以て親疎を分つは、古の禮なり。

喪食を定む。

朝に粥を歠り、菜羮を加へず。夕に疎食を以てす。

追つて案ずるに、古來未だ葬らざるの間は、朝夕粥を歠ること各〻一溢米なり。(一溢は二十四分升の一なり。)粥を食ふこと能はざれば、羹に菜を以てするも可なり。疾あるときは肉を食ひ酒を飲むも可なり。既に葬りて而して後に疏食水飲し、菜菓を食せざるは是れ定法なり。今既に葬る。然れども之れを葬れりと爲すに忍びず、少く粥を歠るの禮を存す。

美食鹽梅を好まず、好甘の物を食はず、酒を飲まず、菓を食はず、濃茶を飲まず、魚肉を禁じて家に入れず、飽滿逸食せず。

飲食の器及び米水の調羹悉く之れを潔滌す。器多く新素を用ひ、平日の器を用ひず。

喪に居るの禮を定む。

(五) 喪服なり、裁つたまま縫はざるを以て云ふ

苫に寢ね木を枕にし、夙に興きて喪服を整へ、盥ひ漱ぎ櫛り、兵器用具を傍にし、動靜起居生に事ふるが如くす。寒けれども火邊圍爐に依らず、耳に八音(一)を聞かず、非禮を聞かず、目に美色華采金銀を見ず、遠望せず眺望せず、顏を正して視る。口笑はず、世事淫佚非禮を談ぜず、郢曲(二)謠歌せず、喪の事に非ざれば多く言はず、手に器物を翫ばず、不淨に觸るるときは忽ちに盥ひ、足非禮の地を蹈まず、顏色溫順柔和にして怒らず喜ばず、手の容は是れ拜拱し、足の容は是れ敬恭す。動容周還(三)速かならず遲からず、專ら禮を守つて唯だ生に事ふるが如く、喪を終るまで中門に入らず。

神主を安んずるの處を正しくす。

喪の次の內、潔朴の處を擇び、高く神主の座を安んず。南面して戸帳を設け、大卓子を立て、上に平日用ひし所の具を置く。是れ神主を安んずるの處なり。遠境は未だ親の亡せしを知らずして、書を通ずる等あり、乃ち神主の大卓上に置く。

朝夕奠の禮を定む。

夙に興き盥ひ漱ぎ櫛り喪服を整へ、卓上に香爐を具へ、而して後に戸帳を開上し、香を焚き沈香稽顙(四)三拜して夜既に白きことを告ぐ。自ら茶を奉じ菓を獻じて唯だ生に

(一) 八種の鳴り物、鐘・磬・絃・管・笙・塤・鼓・柷敔
(二) 卑俗な音樂
(三) 禮記玉藻篇に「周還には規に中り」と出づ、起擧動作なり。還はセンと讀む
(四) 額を地につけて拜禮すること

對するが如くし、顏色を和げ往事を思ひ、哭擗して哀を盡す。久しうして後に戸帳を闔下し、神主を息はしむ。茶盞を徹し、菓を置きて食時に迨る。夕奠には左右に燭を置き、茶盞を徹し、菓を具へ朝奠に迨る。古來脯醢(五)を設けたるも、今之れに從らず。朝夕奠は陰陽交際の時其の親を思ふなり。今案ずるに、朝暮を亡親に告ぐるは孝子の情なり。

神主を拜するの情を正しくす。

朝晝暮神主を拜するの時、心に往事を思ひ、生に事ふる如くし、閑思雜慮すること勿く、或は往事を告げ、世事を談じ、生けりと致すことも亦爲すべからず。(六)檀弓に曰はく、「孔子曰はく、死に之きて之れを死せりと致すは不仁なり、爲すべからず。死に之きて之れを生けりと致すは不知なり、爲すべからず」といふ是れなり。 慈顏に謁するが如く、親の外に在り土に在ることを思ひて、哀を盡して哭擗す。

食時に食を上るの禮を定む。

食時に到りて自ら盥ひ漱ぎ喪服を整へ、案上に香を焚き、戸帳を開き拜して告げ、自ら膳を奉ず。野婦兒孫各〻茶羹を奉じて、喪の次の戸外に在りて予に傳ふ。飲羹を奉ること平日の如し、唯だ一加するのみ、酒を斟むこと三獻なり。食頃久しくして湯を奉り、自ら之れを徹す。餅を獻ず。或は新に炊き、或は饋奠のもの。 茶を點して而して後に菓

(五) 乾肉

(六) 禮記の篇名

屬を具ふ。皆自ら獻じ自ら徹す。又香を焚き、少頃して稽顙三拜して戸帳を闔下し、菓類を止む。凡そ饌は二汁五菜、別に卓子を設け、盛るに素器土器を以てす。金銀華飾を用ひず、中華の祭器を用ひず、但だ平日飲食の器を用ふ。滌濯嚴潔にして敬を竭す。其の庖割鹽梅尤も詳にす。古來牲を省み祭器を陳ぶるの儀あり。（朔望月忌、或は事あるときは盛饌を具へ、三獻の後自ら神盃を拜して退く。）

（一）葬後の祭

追つて案ずるに、古來未だ葬らざるの間は、朝夕奠し食時に食を上る。既に葬りて乃ち虞祭して朝夕奠を罷め、食を上らず。今流俗に從つて既に葬る。然れども孝子の意饋奠を罷むるに忍びず。故に五旬を以て朝夕奠し食を上る。（世俗は五旬を以て忌と爲す。故に五旬を以て限りと爲す。）百日の間は唯だ朝夕奠を以てす。（五旬の後は家に魚肉を入る。故に食を上らんと欲するも尤め汚れ多し。）凡そ百日は殆ど虞祭の期に近し、生時不順の罪を謝せんことを欲して、強ひて此の事に及ぶ。

墓前に詣づるの禮を定む。

親の外に在るを哀しみ、親の土に在るを哀しむは、孝子の意にして、墓側に倚廬し、苫に寢ね凷を枕にして、尙ほ慕思の情止むべからず。世俗は然らず、情の從にすれば人を駭かし、世に乖きて以て禮に中らず。故に墓前に詣づるも亦情に從ふことを

得ず。因りて某は隔日に墓に詣で、其の間の日は千介と二孫（二）とをして交〻詣でしむ。五旬の間然り。五旬の後は某竊に隔日に墓に詣づ。凡そ墓に詣づること早旦を以てす。故なければ晝夕を用ひず。情の從にして期を定めざれば、墓に詣づるを以て遊景と爲すなり。豈孝子の實ならんや。寺門に入るの前は禮服を整へ、公門に入るが如くし、道路の間は微服潛行して人に逢はざらんことを要す。凶服喪者は人の惡ふ所なり、且つ今は歳暮年頭の佳節あり、專ら夙に詣で潛かに行くことを用ふ。凡そ大風迅雨雷鳴地震火災等の變には、必ず墓に行き其の安否を見る、或は即日を用つてし、或は明日を用つてす。

喪中沐浴の禮を定む。

或は朔望・俗節・月忌の前日に沐浴す。身の垢汚の爲には之れを用ひざるなり。

追つて案ずるに、古來未だ葬らざるの間は沐浴せず、已に葬りて虞祭するの時は主人以下皆沐浴す。今既に葬る、故に焉れに及ぶ。

朝夕の奠と上食の間、休息及び弔者に對するの禮を定む。

既に朝奠し食時に食を上り、神主の戸帳を闔下して、而して苫に坐し少頃安居す。其の閑思は唯だ亡親の往事に在り。哀至れば哭す。案上に手澤の書札玩器を置き、

（二）亡兄の子、或は梁行の子ならん

禮書を書格(一)に載せ、（禮に曰はく、喪に居て未だ葬らざれば喪禮を讀み、既に葬れば祭禮を讀むと。）熟讀す。然れども悲涙眼に滿ちて玩味すべからず、唯だ追案を加へ前行を悔い、不孝の罪謝すべきことなきを歎ず。

一七日の後懇弔及び深切の人あるときは、喪の次の別室に招き、喪服を脱ぎ朝服の新しきを著て以て對謝す。（世人喪服を知らず、故に喪服を著ることを憚るなり。）權門貴族の使价或は寄書は、以て誌して、脫漏して某に告げざること勿からしめ、五旬の前期を以て報謝す。

奠賻惠貺の禮を定む。

弔者奠賻あるとき、（奠は香茶燭酒果を用ひ、賻は錢帛金銀を用ふ、）其の好あれば焉れを納れ、然らざるときは皆辭して之れを受けず。（親族舊友賻あるは皆之れを受く。香茶果酒の如きは多くは之れを受く。）其の奠賻は詳に神主に啓げ、（香を焚く、）惠貺の鮮新なる物あるときは之れを薦む。

廿三日乙亥　晴。朝奠、食時に食を上り、夕奠禮の如し。墓に詣でて哀を盡す。使价を宗三寺に發し、白銀（二百兩）を贈る。

廿四日丙子　快霽。朝夕奠と食を上ること、禮の如し。

今日亡親の第三日に當る。世俗は今日墓前に到りて香を燒く。故に俗に從つて主婦子孫親族野婦各〻宗三寺に詣づ。墓の傍に會席を設け、墓前に卓子を置きて香爐花

（一）机に同じ

枕茶菓を具へ、位を爲り香を焚きて哭擗して哀を盡す。舊友門生及び貴族の使价、群參して燒香禮拜して去る。且つ奠賻あり。

寺僧齋會を設け、懺法・行道・點茶・點湯あり、男女席を異にして座に著き、法齋終りて香を焚き、拜哭して退く。

今日喪服成る、喪の次に在りて喪服を脱せず。

廿五日丁丑 快霽。禮法前の如し。

廿六日戊寅 晴。禮法前の如し。自ら墓前に詣でて哀を盡す。

廿七日己卯 晴。禮法前の如し。

廿八日庚辰 晴。禮法前の如し。

今日亡親の第七日に當る。主婦子孫各〻墓前に詣で、第三日の儀の如し、香を焚き哀を盡す。

追つて案ずるに、七日を以て追悼するは浮屠の說なり。世俗皆然り、乖戾すべからず。且つ日々に參詣哭擗を欲せしが、今幸に此の七日の託あり、孝子少く哀を盡すに足れり。凡そ世俗、子生るる時は七日五十日百日を以て賀祝を爲す。死の時も亦然り、少しく因る所あり。

廿九日辛巳　晴、夜中微雨。禮法前の如し。

歲云に暮れぬ。故に夕に盛饌を具へ、酒を斟みて神盃を拜し、泣血して退く。

薄暮に墓前に詣で、卓を置き香を焚き、歲暮を告げて哭擗す。

昨日に迄るまで、七箇日、晝夜喪服を脫せず、他人に對せず、寺に詣で母君に謁するの外は、喪の次を出でず、飮食喉に塞る。然れども世俗は然らず。聞く者をして驚駭せしむるも、亦太だ禮に過ぐ。母君最も慰勞す、故に他人に對して此の頃の深悃を謝し、門生に向つて情の切なるを告ぐ。其の間は喪服を脫ぎ禮服の新なるを著す。再三の慰弔惠貺の書音は以て之れを報ぜしむ。

明日は元旦なり。御者尋ぬるに門松の儀を以てす。予曰はく、門松は天下の通禮なり、私の故を以て之れを闕くべからず、予が家禮に非ず。外門には之れを用ひて疎儀を以てするも、內門には之れを用ひず。家の佳禮は悉く之れを除く。只だ哀情を盡すのみ。今日石碑の儀を始む。

寬文六丙午年正月大

元日壬午 曇、晩晴。朝奠禮の如し。夙に墓前に詣で、年始を告げて哭擗して哀を盡す。食時に盛饌を上り、酒を斟み神盃を拝す。凡そ元三は家例あり、今平日の例に從ふ。夕奠す。

二日癸未 曇、晩雪。朝奠、食時に食を上り、夕奠す、禮の如し。今夜儺（おにやらひ）す、故に神主を護り哀を盡す。

三日甲申 雪、夕止む。立春 朝奠禮の如し。夙に歩行して雪を履み自ら墓前の雪を掃ひ、嚴寒の亡親を侵すことを哀しむ。食時に食を上り、夕奠す。

四日乙酉 曇、少雪。朝奠、食を上り、夕奠す、禮の如し。

五日丙戌 疎雪降る。朝奠、今日沒後十三日、戌の日なり。自ら墓前に詣で、光陰の過ぎ易きことを思ひ哭擗す。食を上り、夕奠す、禮の如し。

六日丁亥 晴。朝奠、食を上り、夕奠す。

第二七日、各々墓前に詣で、香を焚き哭擗す。

七日戊子 晴。朝奠、食を上り、夕奠す。今日七種の粥を獻す。

八日己丑 晴。朝奠、食を上り、夕奠す。自ら墓前に詣づ。

九日庚寅 晴。前禮の如し。

十日辛卯　晴。前禮の如し。自ら墓前に詣づ。

十一日壬辰　晴。前禮の如し。

十二日癸巳　晴。前禮の如し。自ら墓前に詣づ。

十三日甲午　細雨。前禮の如し。

昨夜再び地動す。且つ三七日に當る。故に自ら墓前に詣り、卓を設け香を焚き禮拜哭擗す。

十四日乙未　細雨。前禮の如し。石碑至る。監士匹夫を遣はして石碑を奉ぜしめ、而して自ら其の地に到り、善く書する者をして碑の銘を摸せしむ。哀傷少からず。

十五日丙申　晴。前禮の如し。自ら墓前に詣で望日を禮す。石匠銘を鏤る、自ら行きて之れを監し、碑を奉じて汚染せしめず。

十六日丁酉　晴。前禮の如し。

十七日戊戌　晴。前禮の如し。自ら墓前に詣づ。石碑銘既に成る。自ら墨漆を抹りて哀を盡す。石碑立つ。

十八日己亥　曇。前禮の如し。

十九日 庚子 曇。前禮の如し。自ら墓前に詣づ。
碑外に栗の柱を環り立てて藩垣と爲す。其の外に著座の地を設け、竹籬を構へ、小松樹を植う。

廿日 辛丑 昨夜より疎雪降る。前禮の如し。
自ら墓前に詣づ。四七日に當る。各〻參詣哭擗前の如し。

廿一日 壬寅 細雨。前禮の如し。
今日石碑・石燈籠・盥水の石盤・外藩各〻成る。明日は月忌と爲す。故に自ら墓前に詣で拜哭して後に、掃灑して水を盤石に入れ、火を石燈籠に挑(かか)ぐ。

石碑の制
碑の高さ四尺有餘、趺石(ふせき・あしだい)の高さ八寸、大盤石高さ一尺五寸、以上地上に出づること六尺、碑の厚さ一尺三寸四方、四面同じく平なり。上を圓にし下を方にす。大盤石博(ひろ)さ四尺三尺、大石二箇を以て相合す。墳上、土を高くして上に大栗柱數株を横(よこた)へて石碑を置く、前は南に向ふ。

追つて案ずるに、古來大石碑小石碑あり、皆秦漢以來の制なり。夫子防墓の封(一)は

(一) 土を積みて塚とすること

其の崇さ四尺、是れ聖人の制なり。禮は繼ぎ難きことを爲さず。何ぞ必ずしも石を以てせん。然れども末俗墳を發くの盗多し。小石を壘ぬれば發くに便なり。故に此の制を以てす。（四尺は土を封ずる墳の崇さなり。一尺二寸を以て銘の處と爲し、左右の餘各〻五分。）

碑の前に拜石を鋪く、青片石を以てす。（横三尺長四尺。）碑の後左右共に小石を鋪く。（下の繋石より垣に至る一尺五寸。）此の外に栗の柱五十株計りを繚り建てて垣墻と爲す、高さ六尺。（地を出づること四尺五寸。）碑の前に門を設けて開闔す、鐵鎖あり。其の外に小片石を置き遙拜處と爲す。垣の外は皆小松樹若干を繞り植ゑ、其の東に地を畫りて竹籬を設け、參詣するもの相會するの席と爲す、土を封じ小松樹を植ゑ外門の構を設く。（古來木を植うるに說あり、今は唯た土宜に從ふ。花木を以てせざるは、花木は人以て觀るものと爲し哀情を失ふ。尤も墓廟に植うべきに非ず。）石燈籠の高さ五尺、石臺盤の高さ大きさ各〻一尺五寸、下に繋石あり、碑の左右に置く。（左は木盤右は石燈。）

碑銘　（碑文は本全集第十五卷七三八頁に在り、故に略す）

山鹿修玄菴一貫貞以居士碑、孤子高興泣血立ツ

先考者生ニ天正乙酉九月庚申一、沒ニ寛文五乙巳季十二月廿二甲戌日一、嗚呼哀哉、一生謹厚ニシテ而不ニ食言一、勤ニ武業ヲ一不レ忘レ、誨ニ子孫ヲ一不レ倦マ、能接ニ賓客ニ一能恤ニ孤獨ヲ一、臨レ終ニ更ニ不レ違ニ

平生之威儀、俄然逝、嗚呼哀哉、蠢々子孫、福壽猶可望、如其言行、竟不可及也、故勒石永、戒後昆矣、

寛文第六丙午季春正月日　濺墮淚之餘滴百拜謹誌

石燈籠銘

一燈曉盡　一燈曉に盡きて
殘月冷碑　殘月碑に冷し。
此日何夕　此の日何れの夕ぞ
永無拜期　永く拜する期なし。

寛文六年正月日　稽顙して書す。

盥盤銘

盤水惟淚　盤水惟れ淚、
慕思日新　慕思日に新なり。

踟蹰躅躅　踟蹰躅躅して、

如在斯神　斯の神在すが如し。

寬文六年正月日　淚を攬めて書す。

追つて案ずるに、古來は銘誌なし。秦漢より以來始めて文士に命じて褒贊し、之れを石に刻み、碑銘と謂ふ。降りて南朝に及びて亦銘誌ありて之れを墓中に埋む。皆俗世の致す所なり。孝子の心、亡親をして功德の稱を加へしむることは尤も欲する所なり。而れども巧言麗詞を以て强ひて采飾を加ふるは、皆是れ虛誕にして禮に非ざるなり。唯だ其の始終を誌し其の姓名を詳にす。若し子孫戒守すべきの厚德あれば、明かに之れを書し、子孫碑を拜して以て戒と爲す、是れ銘の實なり。其の作文筆畫唯だ平日の言辭を以てして筆勢を巧にすべからず。悲哀泣血の間何ぞ此の巧飾に及ばんや。今の人少しく書を讀むときは、父母の喪に居て自ら(一)復詞祝文を作り、其の作文華に過ぐ。是れ喪に居るの禮を知らず、哀の情を盡さざるなり。古人之れあるときは皆平日の言を用ふ、何ぞ文の章を借らんや。又曰はく、孤子の說は、(二)雜記に曰はく、「祭には孝子孝孫と稱す。喪には哀子哀孫

(一)前出四三一頁參照

(二)禮記の篇名

と稱す」。朱子曰はく、「父の喪には孤子と稱し、母の喪には哀子と稱するは、溫公の稱する所なり。蓋し今の俗に因りて以て父母を別ちて、之れを混幷せんことを欲せざるなり。且く之れに從ふも亦害なし」と。愚謂へらく、禮に哀子の稱あり、溫公の說に從ふべからず、然れども予は母君の在すあり、旣に溫公の稱する所を聞くときは乃ち哀子と稱するに安からず、故に孤子と稱す。

(三)木主成る。

神主の制、高さ惣計一尺二寸、（身の長一尺、首を圓くし徑り五分、趺の高さ一寸五分。）身の博さ三寸、厚さ四分、（各〻象る所あり、）前を勒みて額と爲す。方趺四寸、上を殺ぎて傾側せざるを以て準と爲す。

追つて案ずるに、主は古來の制なり。之れを廟に措き之れを主と立てて帝と曰ふ。春秋に曰はく、「魯の文公二年僖公の主を作る」と。(四)白虎通に曰はく、「主を有する所以のものは、神は依據なく、孝子以て心を繼ぐなり。主は木を用ふ。木は始終あり、人と相似ればなり。蓋し之れを記して以て題と爲し、後をして知るべからしめんことを欲するなり」と。木主の制は聖人其の寸尺を謂はず。(五)家禮に其の制を出す。唯だ其の禮を詳にし其の制を正して可なり。（疏に曰はく、方尺は或は尺二寸と曰ふ。鄭(六)云はく、周は栗を以てす。漢）

(三) 位牌

(四) 後漢の班固の著、古來の儀禮に關するものなり、正しくは白虎通義と云ふ

(五) 朱子の著朱文公家禮

(六) 鄭玄か、後漢の學者、著書多し、今存するもの毛詩箋・周禮儀禮禮記註・駁五經異義等有名なり

書に、前は方に後は圓なりと。五經異義に云はく、主の狀は正方にして中央を穿ち四方に達す、天子は長さ尺二寸、諸侯は長さ一尺。又曰ふ、右主は八寸、左主は七寸、厚さ廣さ三寸、右主は父を謂ひ、左主は母を謂ふ。漢儀に帝の主は九寸、前方後圓なり、圍り一尺、后の主は七寸、圍り九寸、木は栗を用ふるなり。

主の木は今梧桐(きり)を用ふ。主は夏后は松を用ひ、殷人は柏を以てし、周人は栗を以てす。松は猶ほ容のごときなり。其の容貌を想見して之れに事ふ。人正を主とするの意なり。柏は猶ほ迫のごときなり。親しくして遠からず、地正を主とするの意なり。栗は猶ほ戰栗のごとし、謹敬の貌なり、天正を主とするの意なり。今梧桐を用ふるは、木甚だ澀なるあり、其の木容貴ぶべければなり。古來虞主に桑を用ひしことあり、其の名と其の麤糲(そかく)とを取る。孝子の心に副ふ所以なり。

凡そ主を立つるは葬後虞祭の時に在り。禮家、虞（一）して主を作るといふ是れなり。今既に葬る、故に反哭の後先づ主を立つ。今日木主成りて之れを易へ、先に立てし主を墓の傍に埋む。疏に曰はく、凡そ君は卒哭して祔（二）す。卒哭は是れ葬竟り虞數畢る後の祭名なり。孝子親始めて死するとき哭するに晝夜時なし、葬の後虞竟りて乃ち神事を行ふ。故に其の時なきの哭を卒へて、猶ほ朝夕各〻一哭す。故に其の祭を謂ひて卒哭と爲す。卒哭の明日に主を立て廟に祔し、其の昭穆（三）に隨ひ、祖父に從つて食す。卒哭して主は暫時廟に祔し畢りて更(また)殯宮に還る。小祥に至り、栗主を作りて廟に入れ、乃ち桑主を祖廟の門の左重(かたしろ)を埋めし處に埋む。故に鄭云はく、虞して主を作る。祔に至りて奉じて以て祖廟に祔す。既に事畢りて之れを殯宮に反す。然して大夫士も亦卒哭して祔す。而して左傳（四）は唯だ人君の主ある者に據り之れを言ふ、故に凡そ君と云ふ。鄭祭法（五）に註して云はく、大夫士は主無きなり。此に凡そ君と言ふは大夫士に關せざることを明にするなり。崔靈恩（六）云はく、大夫士には主無く、幣帛を以て祔す。祔竟りて並に殯宮に還り、小祥に至りて廟に入る。又檀弓に云はく、重（七）は主道なり。鄭註に、公羊傳を引きて云はく、虞主（八）は桑を用ひ、練主は栗を用ふ。則ち虞は已に主あるに似たり。而して左傳に云ふ、祔して主を作ると。二傳同じからず。案ずるに、公羊を說く者、朝に葬ひ日中には則ち虞主を作ると。鄭君の若きは二傳の文を以て其の意を異にすと雖も、則ち同じく皆是れ虞祭總て了りて然る後に主を作る。主を作りて虞を去るは實に近し。故に公羊の上に之れを虞に係け、之れを虞主と謂ふ。又主を作りて祔の須(なすべ)き所と爲す。故に左氏は祔に據りて言ふ。古春秋左氏の說は、既に葬り反りて虞す。天子は九虞、九虞は柔日を以てす。九虞は十六日なり。諸侯は七虞十二日なり。大夫は五虞八日なり。士は三虞四日なり。既に虞して然る後死者を先死の者に祔す。祔して主を作る、桑主と謂ふ。期年にして然る後栗主を作るなり。

案ずるに、左氏の傳ふる所、祔して主を作る。文二年の傳（九）に云はく、凡そ君薨じ卒哭して祔す。祔して主を作る。禮家の虞して主を作る者と合はず。左

（一）禮記檀弓下篇に、虞して戸を立て云々と出づ
（二）合せ祭る、後出四六八頁、四月四日の條
（三）廟名なり、昭は太祖の子の廟、穆は昭の子の廟
（四）僖公三十三年に「僖公を葬るは緩きなり。主を作るは禮に非ざるなり。凡そ君薨ずれば卒哭して祔す、祔して主を作り、特に主を祀る云々」と出づ
（五）禮記の篇名
（六）梁代の學者、毛詩註・周禮集註・三禮義宗・左氏經傳義及び條例・公羊穀梁文句義等の著

あり
(七) 假りの位牌は位牌の一法なりの意
(八) 一周忌ケ月目の祭
(九) 同處にはなし。僖公三十三年に出づ、前出
(一〇) 宋の高宗の時
(一一) 宋代の學者、翰林學士、著に漢上易傳あり
(一二) 唐の學者、官太保に至る。通典の著は制度典禮を詳悉して有名なり
(一三) 神主を納むる爲の箱にて、小簾又は蕉布等を垂れたるもの

氏の失なり。

主に題す。

神主を奉じ高席を設けて卓上に置き、喪服を整へ、盥漱櫛(くわんそうしつ)して香を焚き三拜し、善く書く者をして盥漱櫛して禮服を著せしむ北面して白粉を以て愼みて　先考の姓字名を題せしむ。書し畢りて乃ち神主を奉じて南面せしめ、香を焚き拜禮して哀を盡す。

追つて案ずるに、主に題するの法、古來其の說あり。今唯だ姓名を誌し奉祀す。某が名神主の左に在り。石碑木主は各〻南面して生に事ふるの禮を以てす。(一〇)紹興七年閏十月、(一一)朱震神主虞主に題する官に充てらる。按ずるに後漢の禮儀志に、桑木主は尺二寸、諡を書せす。又按ずるに、杜佑(一二)の通典に儀註の虞祭の禮を載す。止だ太祝に主の匱を捧げて座に置き、匱を前に啓き神主を捧げ出さんことを言ひて、諡を題し廟に祔するの禮を言はず。則日、享の前一日質明に太祝し、香湯を以て栗主を浴し、拭ふに羅布を以てし、桑主に題するの官は、盥洗して栗主を捧じ褥に就き、神主に題す。墨書し訖りて光漆を以て重ねて之れを模す。則ち是れ唐の制にして、惟だ栗主に題し、亦虞主に題せざるなり。是れ古來墨書を以てす、今は木主を黑漆にす、故に粉書す。

匱の制は神主を納るるを以て準と爲す。内外頂座黑漆を用ひて華飾を用ひず、左右の戸開闔す。小鐵鎖あり。

追つて案ずるに、家禮に櫝垂韜(とくすゐたう)(一三)の式あり、通典に神主の制あり。匱(ひつ)あり趺(あし)あり、其の匱の底蓋倶に方にして、底は下より上げ、蓋は上從りして下す、與に齊し。

今は只だ方匱を設けて安置するなり。

又曰はく、木主石碑の寸尺は古來周尺を以てす。今は唯だ今尺を以て宜しと爲す。

明日は月忌なり、故に石碑木主の成ること今日に在り。

圖式（原書圖を闕く）

廿二日癸卯　曇。

昨日既に沐浴齋戒し、夙に神主を拜す。朝奠し、食時に盛饌を具ふ。巳の刻に墓前に詣で、會庭に於て席を設け、各〻相會し、盥漱して禮容を整へ、垣戶を開き卓子を置き、香爐花瓶を具ふ。（先考尤も花を愛す、故に之れに及ぶ。）各〻位を爲り、（男左女右）香を焚き拜禮哭擗して哀を盡し、日月の舍らざることを歎ず。

寺僧齋會を設く。（（一）施餓鬼行道）此の間男女席を別けて哀を盡す。

夕奠すること禮の如し。此の夕火を石燈籠に挑ぐ。

追つて案ずるに、古來所謂忌日は一年に一日なり。今の俗に所謂月忌は中古の流俗に出づ。凡そ孝子の情は一生饋奠し、食を上るも亦厭ふべからず。況や其の日の相類せるをや。豈輕過せんや。先王の此れを以てせざるは、數〻するときは煩

（一）佛式祭典なり。施餓鬼は惡道に墮ちて飢餓に類せるものを供養するの意、行道は經を誦みながら行歩するを云ふ

しければなり。孝子の遠きを追ふことを力むる、毎月の月忌も以て忽にすべからず。

廿三日 甲辰 晴、夜中に雪降る。前禮の如し。

廿四日 乙巳 大雪終日止まず、北風甚だ烈し。前禮の如し。
夙に墓前に詣で雪を掃ふ。

廿五日 丙午 晴。前禮の如し。

廿六日 丁未 晴。前禮の如し。自ら墓前に詣づ。舊君淺野長直主(二)、老臣侍醫近臣をして慰弔せしめ、且つ廿五日の後は肉を食ひ酒を飲むべきを演說す。(俗に精進落しと曰ふ。) 某辱く命を拜し、命に從ふべきの旨を復し、且つ愚情を述ぶ。(酒肉を飲食すべからずと欲するの情なり。)

廿七日 戊申 晴。前禮の如し。
今日五七日に當る。各〻墓前に詣づ、前の如し。

廿八日 己酉 晴。前禮の如し。
夙に舊君、近臣をして美魚狩鳥を惠貺(けいきよう)せしむ。是れ俗に從つて、今日より肉を食ひ酒を飲み、老母を慰むべきの由なり。某嚴命を拜し、惠貺に因りて今朝より酒肉を

(二) 赤穂城主、内匠頭、第十五巻素行門人調參照

飲食すべきを謝し、別に千介正明を遣はして懇命を謝せしむ。
追つて案ずるに、世俗多く五七日を以て限りと爲し、肉を食ひ酒を飲む。舊君再命あり。然れども酒肉を飲食するに忍びず、母君も亦忍びず。故に命に從ふことを謝して尙ほ前の如し。

廿九日 庚戌 晴。前禮の如し。

晦日 辛亥 晴。前禮の如し。凡そ朔日の前は必ず人を遣はして墓邊を掃はせしむ。
自ら墓前に詣で、夕に墓邊を掃き、火を石燈籠に明かし、明日の朔を告ぐ。今日母君の處に到り　先考の遺物を分つ。悲涙止まず。

二月大

朔日 壬子 晴。前禮の如し。朔望には盛饌を具へ、酒を斟むこと三獻、神盃を拜して退く。
自ら墓前に詣でて、月朔を告げ哀哭す。望日は朔の如し。

二日 癸丑 雨。前禮の如し。
先考の遺服一領を阿弟義昌(一)奉じ奉る。櫝戸を開き香を焚き、兄弟神主の前に出で、

(一) 通稱平馬

三拜して遺服を受け、悲涙止まず、僾然(二)として其の位を見るが如く、肅然として其の聲を聞くが如く、色目に忘れず、聲耳に絶えず、哀戚盡きず、竟に遺服を新篋に納め、神主の座下に置く。

三日甲寅　雨。前禮の如し。

自ら墓前に謁し、昨日遺服を拜納することを演べて哭哀す。

四日乙卯　晴、晩に細雨。前禮の如し。

今日六七日に當る。自ら墓前に詣づ。朝に宗三寺を招請し、兄弟膳を奉じ亡父に事ふるが如くす。

五日丙辰　晴、晩に及びて北風烈し。前禮の如し。

(三)松浦大守及び石谷氏(四)慰弔す。晩に及びて稻垣氏(五)來弔、各〻閑談す。既に六七日を經、已むを得ずして談話に與る。

六日丁巳　晴。前禮の如し。

夙に墓前に詣る。昨日迅風に因り、碑石塵に埋まり、哀哭悔思す。是れ某不孝にして遠きを追ひ誠を致す能はず、未だ俗忌を終らざるに、已に亡親を忘れ、昨日の烈

(二) 彷彿と同意

(三) 平戸藩主松浦肥前守鎮信、第十五巻素行門人調參照

(四) 旗本、石谷市右衛門、同前參照

(五) 參河刈屋城主稻垣信濃守又は旗本稻垣淡路守、同前參照

風此の如し、何ぞ昨夕之れを掃かざるや。太だ亡親(を忘るる)の情を辱づ、悲涙哀哭し、自ら掃灑して水を汲み石を洗ひ盤中に入れ、而して後に家に歸る。

七日戊午　晴。前禮の如し。

明八日正に清春老尼七回の忌日に當る。老尼は予が乳母なり。使价を慶養寺(一)に發し、此の旨を告げ、別に卓子を設け茶酒を具へ香を焚く。

追つて案ずるに、喪に居て祭らざるは古の禮なり。老尼子孫なし、故に今人をして代りて之れを祭らしむ。

夜中迅雨疾風、雷數聲す。故に興きて神主を奉じ香を焚き燭を置く。

八日己未　晴。前禮の如し。

自ら墓前に詣り昨夜の安否を省ひて哀哭す。

今日使价を發し清春老尼の墓前に燒香す。且つ別に席を設け卓子を置き、美酒好茶を具へ、人を遣はし香を焚き、朝夕奠し食時に食を羞めしむ。

九日癸申　晴、南風。前禮の如し。

阿弟義昌、宗三寺を招請す。

(一)淺草區今戸町に在り

十日辛酉　曇。前禮の如し。

自ら墓前に詣づ。夕に監士を遣はし掃灑して火を挑げしむ。夕奠の後夜闌に至るまで哀を盡す。世俗の忌中は明日に限る。日月止まらず、去る者は日に疎し、慕思哭擗す。

十一日壬戌　曇。前禮の如し。尤も盛饌を具ふ。

今日正に盡七日に當る。各〻墓前に詣で位を爲り、哭擗すること前の如し。寺僧齋會を設く。法華供養、念呪行道　其の間著座前の如し。夕奠の後夜半に迄るまで哀を盡す。

追つて案ずるに、七七日の忌は浮屠の說なり、天下皆俗と爲す、乖戾すべからず。明日は肉を食ひ酒を飲む、尤も孝子の情に非ず。然れども流俗は變ずべからず、且つ母君老病にて久しく酒肉に觸れず、脾胃枯悴す。我れ肉を食ひ酒を飲まずんば、乃ち母君肯んぜず。是れ禮の變已むことを得ざるなり。既に酒肉を用ふるときは庖厨汚れ齋戒難し。故に明日已後百日の間は、唯だ朝夕奠を存し、朔望月忌に食時に食を上るのみ。凡そ孝子の心、死に事ふること生に事ふるが如く、斯須

も其の親を忘れず。然れども聖人は禮を制して其の過不及を節し、人々致ふべく萬代變ずべからざるものを以て禮の中と爲す。本朝の流俗は速かに變ずべからず、汝が曹唯だ五旬を以て三年に充てて、少くも怠慢すべからず。

十二日癸亥 曇、午の刻暴雨、頓に止む。北風、夕晴る。

今日より唯だ朝夕奠の禮を存す。朝奠の後別に香を焚き、酒を飲み肉を食ふことを告ぐ。

貴權・甲族・門生夙に使を發して嘉殽數品・狩鳥數品・好茶數種を惠貺す。故に母君阿弟阿妹を招請す。各〻先づ神主の前に至り、香を焚き拜禮哀哭す。巳の刻に惠貺の數種を神主の前に連べ、今日の儀を告ぐ。而して後に盛饌を以て母君を饗す。晩に阿弟義昌の宅に至る。又然り。夕に墓前に詣で今日酒肉を飲食することを告ぐ。

追つて案ずるに、國俗は五十日を以て忌中と爲す。聖人の説に因るときは、父の喪は三年なり。本朝の古例に因るときは、父の喪は一年を以て限りと爲す。親の喪に遭ふ者、一年は官を解き職を辭す。是れ令(一)の戒むる所なり。近世は唯だ五旬の忌畢れば、乃ち肉を食ひ酒を飲んで、平生と異ならず。唯だ一年の間神社の事

(一) 大寶令、假寧令に「凡そ職事官、父母、喪に遭はば並に解官せよ」と出づ

に觸れざるのみ。流俗以て習うて父子の情日に薄し。若し聖人の教に志あらば、已むことを得ずして五旬を以て忌中と爲し、其の後公門に出入すと雖も、亦私に歸れば乃ち喪服に復り、酒肉を飲食せず、喪の禮を用ひ、全く大祥忌に至る、是れ孝子の實なり。然れども人をして吾が喪を勤むることを知らしめば、善に伐り俗を駭かすの嫌あり。只だ微服潛行して已むを得ずんば、乃ち酒肉を飲食すと雖も、忽に初めに復りて以て喪を終る、是れ孝の至りなり、心喪の實なり。世俗の輕薄なるものは尤も行ひ難し、而して行はざれば聖門の徒に非ず。

又曰はく、不比等(二)令を撰して、一年を以て父母の喪と爲す、少しく依る所あり。三年の喪は中華既に廢す、況や本朝の澆季なる、竟に行ふべからず。故に人々致ふべく後世に傳ふべきの教を考へて、此の禮を定むるか。禮(三)に曰はく、「至親期(四)を以て斷つは是れ何ぞや。父母本と三年、何を以てか期に至る。是れ其の一期除く應きの義を問ふなり。曰はく、天地は則ち已に易りぬ、四時則ち已に變ず。其の天地の中に在る者更始せざる莫し、是れを以て之れに象る。然らば何を以てか三年するや。曰はく、加隆(五)するのみなり。焉して之れを倍せしむ、故に再期す」と。此の言に因るときは一期是れ正服にして、三年

(二) 藤原不比等
(三) 禮記、三年問篇
(四) 一箇年
(五) 厚く加ふるなり

は是れ加隆なり。且つ今の俗尙ほ一年の服名存するあり、少しく治教あらば、一年の喪復すべきなり。

曲禮に曰はく、[一]「君子の禮を行ふや、俗を變ずることを求めず、祭祀の禮、居喪の服、哭泣の位、皆其の國の故(もと)の如くして、謹みて其の法を修めて審かに之れを行ふ」と。然らば乃ち汝が曹五旬を以て忌中と爲すも、謹みて其の禮を修め、百日を以て卒哭と爲し、期月[二]を以て終と爲せ。是れ本朝の禮なり。予定むる所の禮は其の至れるや一年を限り、其の次や百日を限り、其の下や五十日を以てす。有志の輩は未だ嘗て察せずんばあらず。

曲禮に曰はく、「生には來日を與(かぞ)ふ、死には往日を與ふ」。服杖を成(つく)るは生者の事なり、死の明日を數へて三日と爲す、斂殯は死者の事なり。死日より之れを數へ三日と爲すなり。「外事には剛日を以てし、內事には柔日を以てす」と。甲丙戊庚壬を剛と爲し、乙丁己辛癸を柔と爲す。巡狩朝聘盟會の類は外事なり。內事の如きは宗廟の祭、冠昏の禮なり。是れ等の如き太だ世俗に乖戾せざれば之れを取り用ふべきなり。然らざれば乃ち唯だ俗に從つて可なり。

凡そ忌中は喪服を脫(ぬ)がず、是れ古の制なり。唯だ公門に齊衰[三](しさい)を說(ぬ)ぐ。是れ人をして吾が凶服を知らしめ、吾れ自ら服を省(かへり)みて親を忘れざるの禮なり。世俗喪中を

(一) 禮記の篇名
(二) 一年間
(三) 喪服なり

謂ひて服と稱するは、是れ其の禮を存するなり。今の人其の服を稱して多くは服を著ず、名實大いに乖く。流俗は變ずべからず。喪の次に居ては服を脱がず、外門を出で賓客に對するときは服を脱ぎて可なり。季武子(四)疾に寢す。蟜固(五)齊衰を說がずして入りて見えて曰はく、「斯の道や將に亡びんとす。士は唯だ公門に齊衰を說ぐのみ」と。武子曰はく、「亦善からずや。君子の微を表すことや」と。是れ古人は凶服を衣て疾を問ふ。此の禮將に亡びんとす。蟜固以て此の將に亡びんとするを救はんと欲す。流俗の蔽既に久し、今變ずべからざるなり。

聖人喪禮を定め、之れに過ぐる者は俯して之れに就き、焉れに至らざる者は跂て之れに及ぶ、是れ先王の制なり。情の從にすれば修飾の君子は三年を以て駟の隙を過ぐるが若しと爲し、邪淫の人は彼れ朝に死して夕に之れを忘る。故に之れが爲に中を立て節を制して、壹ら以て文理を成して、則ち之れを釋くに足らしめ、喪服を制し、倚廬に居り、粥を食ひ、苫に寢ね塊に枕し、經帶(六)を稅かず、饋奠の禮を詳にし、對(七)へて言はず、言つて議らず、弔者あれば哭踊す。是れ哀の容體聲音言語飮食居處衣服に發はるるものなり。此の如きときは無窮の情を節し、

(四) 春秋時代魯の大夫、季孫夙なり。この事禮記檀弓下に出づ。武子の威權つよく、人これに事へること君の如く、其の門に入る者皆齊衰を脱ぐ。これ禮を亂るなり

(五) 如何なる地位の人か未詳。

(六) 喪服の帶

(七) 禮記雜記下篇に「三年の喪には言うて語らず、對へて問はず云々」と出づ

君子は哀過ぐ、之れを遂ぐれば窮りなし、鳥獸にだも若かざるに至らず。小人は朝に死して夕に忘る。然して之れに從ふときは曾て鳥獸にだも若かざるなり。聖人の世を憂へ教を立つるの實、竟に其の禮を盡して君子小人を分つこと無からしむ。汝が曹戒めざらんや。

三月小 日簿を略す

四月大

朔日辛亥　晴。朔奠、禮の如し。且つ明後日既に百日に滿つ。故に虞祭の禮を存す。

二日壬子　晴。今日沐浴齋戒し、夕に監士を遣はして墓邊を掃灑し燈火を挑げしむ。夕奠の後夜闌に至るまで哀を盡す。

三日癸丑　晴。朝夕奠し、食時に食を上る、三獻あり、祝辭を以て哀を盡す。

祝詞

今日卒哭に相當る。日月舍らず、奄ちに今日に及ぶ。哀慕尙ほ切なり。謹みて清酌庶羞を以て哀みて薦む、尙はくは饗けたまはんことを。

(一) 柔日剛日、前出四六四頁參照

各〻墓前に詣で位を爲りて祭り、香を燒き哀を盡す。

寺僧齋會を設く。懺法行道。其の間著座前の如し。

追つて案ずるに、古來は三月にして葬る。葬るの日は日中にして虞祭す。柔日に遇へば再虞し、剛日に遇へば三虞す。三虞の後剛日に遇へば卒哭す。檀弓に曰はく、卒哭を成事と曰ふ。是の日や吉祭を以て喪祭に易ふ云々。本朝近日の俗は、五旬の後百箇日を以て限りと爲す。俗に卒哭忌と曰ふ。其の禮正しからずと雖も、殆ど卒哭に幾し。先考既に葬る、然れども哀子某猶ほ朝夕の奠を存し、未だ葬らざるの禮を以てす。是れ哀情忍ぶこと能はざるなり。故に今日に至るまで粥を歠り酒肉を禁じて喪の次を出でず。五旬已後、外には酒を飲み肉を食ふと言ひ、内は然らず、是れ丹君の制詞あらんことを恐る。故に之れを密にし之れを祕して漏泄せしめず。此の間止むことを得ずして酒肉を飲食すること三度なり。

又曰はく、宋の眞宗の景德中に、明德皇后は百日を以て卒哭と爲す。蓋し古の士禮は當に朝廷に施すべからず、詔して卒哭を改めて百日と爲す。是れより以後、慈聖光獻皇后及び宣仁聖烈皇后は百日に遇ひ、並に外の禮數を該載せず、皆神主廟に祔する以前に於て卒哭の祭を行ふ。

四日甲寅 晴。

今日祔す。檀弓に所謂卒哭して祔するなり。祔は附なり、祔祭は其の祖父に告ぐるなり。故に夙に興きて朝奠を設け、祔祭の事を告ぐ。正寢を灑ひ几卓を設け、神主を奉じて曾祖祖父の末席に列ね、香を燒き拜禮して祔祭の詞を祝し、饌を進め酒を獻ず。香を焚き饌を徹して茶菓を點ず。厥の後神を送り主を奉じて故の處に還る。

今日より朝夕の奠を罷め、唯だ朝夕神主を拜し、苫に寢ね木を枕にし、麁食飲水すること前の如し。古の禮、奠を罷めて朝夕哭す。本朝踊哭の禮なし。故に唯だ拜主の禮を存し、主を拜するときは又罷むるに忍びざるの情あり。因つて猶ほ茶及び菓を備く。

今日より已後墓に詣づるは、唯だ朔望月忌事變を以てす。凡そ百日の間毎に墓前に謁す、是れ未だ葬らざるに準ずるなり。尤も哀情の已むことを得ざればなり。古來死を送るの禮は(一)遠きに卽きて近づくことなし。墓するに至れば終に事盡く。人の子孝思忘れざるときは專ら廟享に精むるのみ。蓋し墓は體魄を藏む、而して(二)之れを生けりと致すは是れ不智なり。廟は以て神を宅す、而して之れを死せりと致すは是れ不仁なり。此れ聖人禮を制して幽明の故を明かにし、仁智合せて理義全きなり。愚案ずるに、哀子各〻墓に靈體を藏むるを以て、或は墳の制を飾り、或は碑碣を大にす。子孫又情に從せて日々參詣して哀を盡す。其の情實なりと雖も禮に中らず。禮

(一) 漸々遠ざかりて近づくことなしの意
(二) 禮記檀弓に出づ、前出四四一頁參照

に中らざれば神享くべからず。墓墳の制は唯だ其の藏むるを表はすに足り、其の發くことを止むるに足り、其の分限に應じて而して後に可なり。子孫の志道も其の參謁も亦禮を以てせば神は安んずべし。喪中墓に謁するに日々を以てするも、亦哀戚の情冢上に盡するの謂なり。然れども太だ俗に違ふも亦過ぐ、禮を以てするに在り。

追つて案ずるに、古は墓祭せず、漢の諸陵に皆園寢(三)あるは秦の爲す所を承くればなり。說く者以爲らく、古の宗廟は前に廟を制し後に寢を制す。以て人の居の前に朝あり、後に寢あるに象るなり。月令に「先づ寢廟に薦む」とあり、詩に「寢廟奕々たり」と稱す、言は相通ずるなり。廟は以て主を藏め、四時を以て祭る。寢は衣冠几杖あり、生の具に象り、以て新物を薦む。秦の始め寢を出して墓側に起す。漢因りて改めず、故に陵の上を寢殿と稱す。起居衣服・生人の具に象る。寢と名づくるの意なり。漢の制(四)、正月「五供畢りて(五)次を以て陵に上る。西都にも舊と陵に上ることあり、東都の儀は、百官・四姓・親家・父母・公主・諸王・大夫・外國の朝者侍子・郡國の計利、陵に會す。晝漏(六)に上水し、鴻臚(七)に九賓を設け、隨つて寢殿の前に立ち、鐘鳴るときは謁者禮を治へ客を引く、群臣位に就きて儀の如く、乘輿は東の廂より下り、太常(八)導き出で、西に向つて拜して止まり、旋りて

(三) 山陵の廟
(四) この節の終末の割註參照
(五) 後漢書禮儀志に「正月上丁に南郊に祠りし、禮畢りて北郊の明堂・高廟・世祖廟に次る、之れを五供と云ふ」と出づ。以下同書の引用なり
(六) 晝間用の水時計に水を盛り時間を正すなり
(七) 鴻臚卽ち朝貢を司る役所に九賓卽ち接伴役を設くるなり
(八) 祭祀を掌る役人

阼階を升り、神座を拜し、退きて東の廂の西に坐す。侍中・尚書・陪者皆神座の後にあり。公卿群臣神座に謁す。太官食を上り、太常樂を奏す。食に文始（舜の舞なり）・五行（周の舞なり）の舞を擧す。禮樂闋りて君臣賜を受く。食畢りて郡國の上計吏、次を以て前み、神軒に當りて、其の郡穀の價と民の疾苦する所を占ひ、神が其の動靜を知らんことを欲す。孝子親に事へ禮を盡すは敬愛の心なり、周徧禮の如し」。

（一）致堂の胡氏曰はく、「既に以て形を送りて往きて地下に安んじ、精を迎へて主を廟中に反す。而して又隆を陵園に致すこと、（二）元會の儀の如し。食を上り樂を奏し、郡國計を奏し、民の疾苦を言ふ。是れ反りて陵と廟との理を易へて、體魄を以て知ありと爲し、廟祏（廟中木主を藏むる石室を祏と曰ふ）を虚にして重ねて設けず、復た廟中の主を擧げて陵所に祭る。皆禮に違ふなり。夫れ喪葬は遠きに卽く、豈已むを得て之れを爲さんや。沐浴して斂せざるべからず、故に之れが斂を爲す。斂して殯せざるべからず、故に之れが爲に殯す。殯しては葬らざるべからず、故に之れが爲に葬る。首めて中制を爲して以て賢者の過ぎたるを節し、不肖者の及ばざるを引くなり。若し孝子の思慕無究の心を遂げしめんには、之れを葬りては之れ見ることを得ざれ

（一）胡寅、宋代の學者、著書論語詳說・讀史管見・斐然集等あり
（二）元日の朝會

(三) 死者の口中に飯及は玉を含ましむる禮なり
(四) 後漢の學者、官左中郎將に至る。著書獨斷・蔡中郎集あり
(五) 簠簋、神に供へる黍稷を盛る器。籩豆、果物肉類菜類を盛る祭器。尊彝、宗廟の祭器。鼎俎、禮記に「其の犧牲を陳べ、其の鼎俎を備ふ」と出づ、鼎俎は祭に供ふるものを料理する道具なり
(六) 後漢書禮儀志註にはこの事建寧五年正月のこととす。以下その拔萃なり
(七) 西漢長安の時代
(八) 丘濬、

ば、曷ぞ之れを殯に存するの近しと爲すに若かん。諸れを客位に殯するの近しと爲すは、曷ぞ斂する勿く、浴する勿く、飯(三)する勿く、含する勿く、之れ以て吾れの忍びずと稱すべきに若かんや。情に原づきて此に至るときは、大聖も至愚も不行に均し。故に禮に循ひ節に中るの當れりと爲すに若かざるなり。漢の明帝の永平元年正月、公卿已下を率ゐて原陵（光武の山陵）に朝す、元會の儀の如し。蓋し原廟を生けるごとくす。(四)蔡邕は折衷するに聖人の制を以てせずして、直に其の情を論ず。情豈既くることあらんや。明帝をして此の情を四時太廟の祭に移さしめば、簠簋(五)・籩豆・尊彝・鼎俎は惟だ禮之れ循つて、競々業々として、光武の成憲に監みて之れを損益修明し、至治を期せば、其の孝たるや、聖主と雖も何を以てか諸れに加へん」。

(六)靈帝の熹平元年正月、車駕原陵に上る。諸侯王公及び外戚悉く焉に會す、會殿の儀の如し。禮樂闋りて百官賜を受く。計吏次を以て殿に嚮つて前み、先帝の御座に上り、具に俗の善惡民の疾苦する所を言す。司徒蔡邕概然として嘆じて曰はく、吾れ聞く、古は墓祭なくして朝廷上陵の禮此の如く其れ備はるあり、其の本意を察して乃ち孝明の至孝惻隱は奪ひ易からざるを知ると。或ひと曰はく、本意とは何を云ふか。對へて曰はく、西京(七)の時は其の禮得て聞くべからざるなり。光武帝を始めて此に葬る。明帝位を嗣ぎ、年を逾えて群臣朝正す。先帝此の禮を復た見ざることを感じて、乃ち公卿百僚を率ゐて陵に就きて焉に朝す。瓜葛の親、男女畢く會し、郡の計吏各〻神座に向つて言ふ。庶幾くは先帝の魂神之れを聞聽せさせたまへと。

(八)瓊山の丘氏曰はく、「漢の明帝原陵に朝す、是れ後世帝王上陵の始なり。夫れ雨露

明代の學者、瓊山の人なり、官は文淵閣大學士に上り、機務に參す。其の著大學衍義補有名なり、文莊と謚す。以下の文は大學衍義補五十九卷に出づ

霜雪の變に感じて、思慕感念の誠を興し、展省拜謁の禮を行ひ、其の體魄の存する所を忘れず、怛若として其の音容の在すが如き、亦孝子の一念にして、親を愛して之れを死せりとするに忍びざるの誠、已む容からざるものあり。明帝の此の擧も亦過ぎたりと爲さず。但し時序は流易するに因り、時に感じて追慕し、臣下を率ゐて以て禮を行うて可なり。乃ち元會の儀の如く、樂を奏し郡國計を奏し、民の疾苦を言すは、何の居るところぞ。明帝の意は、豈其の親を死せりとするに忍びずして生事を以て之れに事ふるに非ざらんや。噫、聖人の孝は死に事ふること生に事ふるが如しと謂ふものは、蓋し宗廟享祀の禮を謂ふのみ、豈朝廷の上、凡そ生時事ふる所の事を謂はんや」。

愚案ずるに、禮經に墓祭の文なし。上陵の禮は三代以前に經に見えずと雖も、然れども漢より以來歷代相承け、率ね敢へて廢せず。唐の開元の禮に、天子上陵の儀注あり。宋又春秋に行ひ、明又歲ごとに三たび焉れを擧ぐ。朱子の家禮に墓祭を附す。人の子として其の親に於ける、體魄の藏むる所、留骨の在る所、其の纍纍然として丘壠に在る者、安んぞ死を以て之れを視るに忍びんや。故に墓祭は古

に非ずと雖も、寒暑變移の際に當り、益〻用つて感を增し、墳墓に省謁して以て時思の敬を寓す。是れ孝子の情の已むことを得ざるなり。然れども禮を以て其の中を節せざるときは、其の蔽や愚にして果なし。故に古來其の祭祀皆禮に循ふ。今卒哭して漸く近くに在り、哀戚太だ多し。一ら墓に謁するを以て快と爲すも亦情の過ぎたるなり。情の從にすれば乃ち禮を失す。哀子哀孫の祖考に於ける、其の靈屍を奉じて、殯せず葬せずとも、情豈旣くることあらんや。然れども竟に之れを遂ぐべからず、故に聖人は此の禮を存し、其の情を節し、此の制をして天下萬世に於てせしむ。其の慮尤も大なる哉。

世俗五旬を以て忌中と爲す。今百日を以て未だ葬らざるの禮に充つ、尤も俗に違ふに似たり。某甲（一）平日　先考の志に順ふこと能はず、不孝の罪遁るべからず。且つ我れは仕官擾冗の障りなし、故に竊に企望して此の禮を存す。子孫の志あるもの以て戒愼すべきなり。

追戒

（一）素行自身を指す

予不幸にして去年　先考の爲に棄てらる。平日承顏順聲を盡すことなく、多く　先考の志に乖戾す。先考は壽甚だ高し。某猶ほ怠りて數〻高壽を忘る。不孝の罪天地に容るべからず。今に至りて悔思するも、更に益なし。遠きを追ひ喪を勤め、饋奠を愼み祭禮を詳にすること、是れ力を著くべきの處なり。世俗は聖人の教を失つて父母の喪に於ても亦太だ早輕にして、孝子も其の實を盡すこと能はず。況や吾儕の不孝なるをや。古は喪に居るに禮を以てす。弔者も亦禮を以てす。今は服なく次なく、弔者は酒菓を以てし、談笑を以てして、哀情を忘れしめんと欲す。乖戾すれば過ぎたりと爲し、懦弱なりと爲す。故に孝心を存するの徒も、自ら群居して亂る。噫嘗て鳥獸だも若かざるなり。是れ勤め難きの最なり。然れども孝子孫の誠敬あるもの、流俗に居て其の實を勤む、是れ心喪の功なるなり。或は曰はく、公門に出入す、故に喪を遂ぐること能はずと。或は曰はく、君子の禮を行ふは俗を變ずることを求めずと。今の世に生れ、古の道に反く者は、聖人の戒むる所なり。是れ皆思はざるなり。喪大記(一)に曰はく、「既に葬りて若し君食はしむれば之れを食ふ、大夫父の友食はしむれば之れを食ふ。粱肉(二)を辟けず。若し酒醴あれば辭す」と。酒醴は顏色に關はる。然

(一) 禮記の篇名
(二) よい米と肉と

らば五旬の後公門に出入し、止むことを得ざれば酒肉を辟けずして飽くまでにせず醉に至らず。私に歸れば乃ち初に復る。友人に會し賓客に對すること平日の如くにして古事佚樂笑談に與らず。止むことを得ざれば少く之れに與るも亦可なり。三年の間駟の隙を過ぐるが若し、何ぞ之れを勤むること難からんや。然れども人以て知るときは乃ち善に伐り俗に變ずるなり。親炙の僚友も亦之れを知るべからず、而して後に孝子の實と謂ふべし。汝が曹予が不敏不孝に慣れて父母の事を褻慢する勿れ。

汝が曹戒むべし。父母疾あれば、櫛らず翔らず衣帶を脱がず、謹みて疾病及び飲食起居を考へ、自ら詳に之れを識して、良醫を招くに誠を以てし、人に接はるに笑はず怒らず、世事を談ぜざれ。

汝が曹喪に遭へば、聖教を期すべし、後賢を期する勿れ。況や予の不敏不孝なるをや。予に慣はば、予が罪を重くするなり。

汝が曹戒むべし。喪は哀を盡すに在り。夫子曰はく、「[三]喪禮は其の哀足らずして禮餘りあらんよりは、禮足らずして哀餘りあらんには若かず」と。

(三) 禮記檀弓上篇に出づ

汝が曹戒むべし。葬禮は速にすること勿れ。輕易なれば後悔す。子思(一)曰はく、「必ず誠あり、必ず信ありて、之れをして悔あらしむること勿れ」と。

汝が曹亡親の情を期すべし。子孫の禮を行ふに不平の處あれば、亡親何ぞ安んぜん。

汝が曹戒むべし。葬祭は禮を以てして華飾を欲する勿れ。華奢なれば觀にして哀なし。葬祭は財の有無に稱ふ。夫子曰はく、「其の財に稱ふときは斯れを之れ禮と謂ふ」。檀弓に曰はく、子路曰はく、傷しい哉、貧しきことや。生けるときは以て養を爲すなく、死しては以て禮を爲すなしと。孔子曰はく、菽を啜らせ水を飲ませ、其の歡びを盡さしむ。斯れを之れ孝と謂ふ。首足の形を斂めて還に葬りて椁なし。其の財に稱ふときは斯れを之れ禮と謂ふ。

汝が曹戒むべし。情の從にして哀に過ぐれば聖人の禮に背く。哀過ぐれば病みて身を失ふ。其の葬喪を盛にし家財を顧みざるは、豈孝子の實ならんや。疾あれば酒を飲み肉を食ひ、疾止みて初に復る。曲禮に出づ。孔子は伯魚(二)が哭を甚しとし、子路が姉の喪を戒め、孺子(三)泣を論ず。檀弓に曰はく、伯魚が母死す。期にして猶ほ哭す。夫子之れを聞きて曰はく、誰ぞや哭する者はと。門人曰はく、鯉なりと。夫子曰はく、噫其れ甚しと。伯魚之れを聞き遂に之れを除く。子路姉の喪あり、以て之れを除くべくして而も除かず。孔子曰はく、何ぞ除かざるやと。子路曰はく、吾れ兄弟寡くして忍びざればなりと。孔子曰はく、先王禮を制す、道を行ふの人は皆忍びざるなりと。子路之れを聞きて遂に之れを除く。弁(四)の人其の母死して孺子泣する者あり。孔子曰はく、哀しきことは則ち哀し、而れども繼ぐことを爲し難し(五)。夫れ禮は傳ふべきを爲すなり、繼ぐべきを爲すなり、故に哭踊に節ありと。

汝が曹戒むべし。喪に居て勤めず、饋奠の禮を怠り、或は久しく寢ね晝寢ね、或は

(一) 禮記檀弓上篇に出づ
(二) 孔子の子鯉の字なり
(三) 子供の泣き方の如く、長短高下の節なきを云ふ
(四) 地名
(五) 後人をして傚ひて繼續せしめ難きなり

哀戚に託して放逸緩怠なる、是れ喪を利して逸樂を行ふなり。

汝が曹戒むべし。饋奠の禮は、早輕にして愼まず、饌を具ふるに味を詳にせず、冷暖を嘗めず、傍に侍するに禮容を以てせず。動靜節を失せば乃ち神豈之れを享けんや。

汝が曹戒むべし。喪禮は子孫の職分なり。若し小節を以て人に伐り他を責むるは、是れ親の喪を以て己れが名を利するなり。君子は親の死を利とせんや。

汝が曹戒むべし。閨門の事人皆之れを知る。喪に居て其の實を盡さざるときは、御者以て笑ふべし。侍御恥づべきなくして而して後に可なり。

汝が曹戒むべし。流俗、五旬の喪は勤めざることなし。勤めざれば鳥獸の毀あり。毀を以て之れを勤むるは、勤め得るも亦人の爲なり。

汝が曹戒むべし。僚友慰弔するに、談笑常の如く、喪者の情をして亡親の哀を忘れしむ。世俗之れを以て實と爲す。之れを訝るべからず、之れを責むべからず、慇懃に交接して而して後に初に復るべし。

汝が曹戒むべし。君命の重きあり、或は忌を赦し、或は酒肉を飲食することを强ふ

るときは、速に命に從ふべし、己れが情に從ふべからず。而して亦心喪を怠るべからず。

汝が曹戒むべし。一親の在すあらば、必ず哀戚を藏し、愼みて慰弔すべし。自ら酒肉を以てし、自ら談笑を以てして存親の情を散ず。若し慰弔に託して己れが逸樂を放にせば、是れ天鑑明かなり。私に歸らば乃ち初に復る。

汝が曹戒むべし。喪に居て武業を忘るべからず。故に兵馬武器は、其の人を以て時時に之れを糺す。禮に曰はく「既に葬りて王政國に入る。既に卒哭して王事に服す。大夫士は既に葬りて公政家に入り、金革の事辟くるなし」。喪大記に出づ。世俗久しく廢すること能はず、速かに葬る。故に五旬の喪は多く既に葬るの禮に從ふ。

汝か曹戒むべし。浮屠を信ずべからず。浮屠は輕易にして粧嚴を專らとし、悉く聖人の禮に乖く。凡そ親族の疎なるも、亦亡者に於て其の情輕く、且つ死を惡み凶服を嫌ふ、是れ人の通情なり。彼れ見聞せず親炙せず、唯だ嚫金(一)を貪りて其の拜禮執行親族の如く、其の閑居するや談笑酒逸す。是れ其の致す所皆僞なり。太だ之れを惡むべし、之れを去るべし。然れども世俗皆之れに從ふ。然らざれば乃ち公門に嫌ひ

(一) 嚫金

あり。故に大底（抵）多くは浮屠の說に從うて可なり。
汝が曹戒むべし。吾が儕不孝なり、然れども父母を慕ふの切なること、寵婦愛子も及ぶべからず。今父の喪に居て其の勤修快からず、唯だ追悔あり。況や平日の慕思吾れに如かざる者、何ぞ能く力を喪に盡さんや。
汝が曹戒むべし。父母存するときは吾れ和順にして、以て父母の悅を受くべし。是れ期することあればなり。喪に居ては期することなし、動もすれば禮容を失ひ、非禮行ひ易し。愼まざらんや。
汝が曹戒むべし。父を無すること天下を得るとも致すべからず。心に之れを致すことを欲すとも、口言ふことを得ず、言へば人以て罪すればなり。父母の重きこと、天下も猶ほ敝蹝（三）のごとし。然れども生に事へ死に事へて盡さざるは、其の實是れ父母を愛せざればなり。父母に於てすら此の如きときは、其の他の能くするは、利口なり利欲なり、之れを見るべからず。
汝が曹戒むべし。其の終を正しくするや、其の棺を制するや、其の竟に葬るや、饋奠の實、時祭の誠、朔望月忌風雷寒暑、時變世變に親を忘るべからず。情の從に行

（二）やぶれたる草履、孟子盡心上篇第三十五章に、孟子の門人が舜の父罪あらば如何と問ひしに、孟子曰はく、舜は天下を棄てて父を助くべしと。故に「舜が天下を棄つるを視ること、猶ほ敝蹝を棄つるがごときなり」と

はず、唯だ禮容を存す。

汝が曹戒むべし。吾れ今喪に居て、今日は昨日を悔い、今年は去年を悔ゆ、皆及ばず。且つ父母存するときは喪祭の書を見るに懶くして、殆ど禮容を知らず。唯だ哀情を斟酌して以て葬喪の間に居り、其の哭擗器械禮制悉く闕く。然れども强ひて禮制に從はんと爲ば哀足らず、故に唯だ哀情に從せて以て葬喪を爲すも、追悔少からず。因つて此の篇を誌す。子孫の予に慣はざらんことを欲するなり。

枕塊記下　追考

葬を薄くするの說

漢の成帝の時、昌陵（一）を營起し、數年成らず、復た延陵に還歸す。制度奢泰なり。光祿大夫劉向（二）上疏して諫めて曰はく、昔「孝文皇帝（三）覇陵に居り、北厠（ほくそく）に臨み、（四）（服虔が曰はく、厠は側にして水に近きなり。李奇が曰はく、霸陵は山北の頭厠にして覇水に近し、帝其の上に登りて以て遠望す。）『嗟乎（ああ）北山の石を以て椁（五）（くわく）と爲し、紵絮（六）（ちよじよ）を用ひて斮陳（きりなら）べ、其の間に漆せば、豈動くべけんや』。張（七）釋之進んで曰はく、『其の中をして欲すべくあらしめば、南山（其の深大に比す）を錮（ふさ）ぐと雖も猶ほ隙（ひま）あるべし。其の中をして欲すべくなからしめば、石椁なしと雖も又何ぞ慼（うれ）へん』と。夫れ死者は終極なくして國家は廢興あり、故に釋之が言は無窮の計を爲すなり。孝文焉（こ）れを寤（さと）りて遂に葬を薄くして山墳を起さず。易に曰はく、（八）『古の葬る者は、厚く衣す

（一）其の地は今の陝西省臨潼縣の東
（二）漢時代の學者、著書列女傳有名なり
（三）以下終迄漢書劉向傳に出づ
（四）後漢の學者、官九江太守に至る
（五）外棺
（六）綿
（七）漢の人、文帝に仕へ、謁者僕射となり、中大夫に進み廷尉を拜す
（八）繫辭下傳

るに薪を以てし、之れを中野に藏め、封ぜず樹せず。後世の聖人之れに易ふるに棺槨を以てす』。棺槨の作は黄帝より始まれり。黄帝は橋山に葬り、堯は齊陰に葬る。丘壟皆小にして葬具甚だ微なり。舜は蒼梧に葬りて二妃從はず、禹は會稽に葬りて其の列を改めず。（樹木百物の列を改めず。）殷の湯は葬むる處なく、文・武・周公は畢に葬る。秦の穆公は雍の槖泉宮(一)に葬り、祈年館(二)下の樗里子(三)は武庫に葬る。皆丘壟の處なし。此れ聖帝明王賢君智士が遠く覽て獨り無窮の計を慮ればなり。其の賢臣孝子も亦命を承け意に順つて薄く之れを葬る。此れ誠に君父を奉安し、忠孝の至なり。夫れ周公は武王の弟にして、兄を葬ること甚だ微なり。孔子は母を防に葬る。(四)古は墓して墳せずと稱す。（墓は壙穴なり、墳は土を積めるなり。）曰はく、『丘は東西南北の人なり(五)、識さざるべからず』と。四尺の墳を爲る。雨に遇うて崩る。弟子之れを修め以て孔子に告ぐ。孔子涕を流して曰はく、『吾れ之れを聞けり、古は墓を修せず』と。蓋し之れを非れるなり。延陵の季子(六)齊に適きて反る。其の子、嬴・博（二邑なり）の間に死す。穿つて泉に及ばず、斂するに時服を以てし、封墳坎を掩ふ、其の高さ隱す(七)べし。而して號して曰はく、『骨肉土に歸復するは命なり。魂氣は則ち之かざるなし』と。夫れ嬴・博は呉を去ること千有餘里にして、季子は歸

(一) 辭海に、秦の惠公の雍の年宮は後孝公の時に槖泉宮と謂ふと出づ。但しこれ穆公以後の事なり。故に穆公より以前既にこの名の宮ありと見ゆ。
(二) 秦の惠公の築ける雍の年宮なり、雍は祈に通ず
(三) 秦の惠公の異母弟
(四) 孔子家語曲禮公西赤問篇に出づ、抄録なり。又禮記檀弓上篇に出づ
(五) 各地を周遊して一定の居處なきを以てかくいへり
(六) 下札、春秋時代、呉王壽夢の第四子にして延陵に封ぜらる

り葬らず。孔子往きて觀て曰はく、『延陵の季子は禮に合へり』と。故に仲尼は孝子にして延陵は慈父なり。舜禹は忠臣にして周公は弟弟なり。其の君親骨肉を葬る、皆微薄なり。苟も儉を爲すに非ず、誠に(八)體(禮)に便しきなり。宋の(九)桓司馬石椁せり。仲尼曰はく、『速に朽ちんに如かず』と。秦の相呂(一〇)不韋、知略の士を集めて春秋を造る、亦薄葬の義を言ふ。皆事に明かなる者なり。吳王闔閭に至るに逮びて禮に違うて厚く葬る。十有餘年にして越人之れを發く。秦の惠文・武・昭・嚴(一一)襄の五王に及びて、皆大いに丘壟を作り、其の瘞藏を多くす。咸盡く發掘暴露せらる、甚だ悲むに足れり。秦の始皇は驪(一二)山の阿に葬れり、下は三泉を錮ぎ、上は山墳を崇くし、其の高さ五十餘丈、周回五里有餘、石椁を游館と爲し、（多く石を累ねて椁を塚中に作り、以て離宮別館と爲す。）人魚(一三)の膏を燈燭と爲し、水銀を江海と爲し、黄金を鳧鴈と爲し、珍寶の藏、機械の變、棺椁の麗、宮館の盛、勝げて原ぬべからず、又多く宮人を殺し、生きながら工匠を薶むること、計るに萬を以て數ふ。天下其の役に苦しみて之れに反す。驪山の作未だ成らずして周章百萬の師其の下に至る。項籍(一四)其の宮室營宇を燔き、往く者咸見て發掘す。其の後牧兒羊を亡ひ、羊其の鑿に入る。牧者火を持ちて照して羊の失を求めしが、火其の藏椁を燒く。古より

賢者なり。以下の記事は孔子家語曲禮子貢問篇にあり

（七）人が踰れるほどの高さの意

（八）漢書原本に、禮は一本禮に作ると云ふ、この方よく通ず

（九）孔子家語曲禮子貢問篇に出づ、桓司馬は向魋なり。又桓魋とも稱す。孔子を殺さんとせしこと、論語述而篇第二十二章に出づ

（一〇）呂氏春秋今尚ほ存す

（一一）漢書の註に、莊襄王といへり。惠文王以下四王の如し

（一二）陝西省内にあり

（一三）漢書

今に至るまで、葬未だ盛なること始皇の如きものあらず。數年の間に外は項籍が災を被り、內は牧豎の禍に離ふ。豈哀しからざらんや。是の故に德彌〻厚き者は葬彌〻薄く、知愈〻深き者は葬愈〻微なり。德なく知寡きは其の葬愈〻厚く、丘壟彌〻高く、宮室愈〻麗しく、發掘必ず速かなり。是れに由りて之れを觀れば、明暗の效、葬の吉凶、昭然として見るべし。周の德既に衰へて奢侈となり、宣王賢にして中興し、更に宮室を儉にし寢廟を小にせるが爲に、詩人之れを美とす。斯干(一)の詩是れなり。上章には宮室の制の如くなるを道ひ、下章には子孫の衆多を言ふ。魯の嚴公(莊公)に及びて宗廟を刻飾し、多く臺榭(二)を築き、後嗣再び絕ゆ。春秋焉れを刺る。周宣(三)は彼が如くにして昌え、魯・秦は此の如くして絕ゆ。是れ則ち奢儉の得失なり。陛下は位に卽きて躬親ら節儉し、始め初陵を營すること其の制約小なり。天下賢明を稱せざるなし。昌陵に徙すに及び、埤を增して高きを爲し土を積みて山と爲し、民の墳墓を發き、積むに萬數を以てす。營起りて邑居期日に迫卒す。（卒の讀み猝と曰ふ。）功の費大萬百餘、（大萬は億なり、）死する者下に恨み、生ける者上に愁しみ、怨氣感動し、陰陽之れに因りて以て饑饉となり、物故し流離するもの十萬を以て數ふ。（物故は死するなり。）臣甚だ焉れを悼(四)ふ。死者を以て知ること

原本には魚の字なし、但しその註に史記に魚字ありと記せり

（一四）項羽

（一）詩經小雅、祈父之什に在り

（二）宮殿と動物園

（三）周の宣王の略

（四）漢書の註に、一說には古は閔に通じ發病の意なりと。卽ち「これをうれふ」と讀めばよく通ず

ありと爲さば、人の墓を發くことは其の害多し、若し其の知ることなしとせば、又安んぞ大にするを用ひん。之れを賢知に謀らば說ばず、以て衆庶に示すときは之れに苦しむ。苟も以て愚夫淫侈の人を說ばしむるが若きは、又何ぞ爲さんや。陛下は慈仁篤美甚だ厚く、聰明疏遠世を蓋ふ。宜しく漢家の德を弘め劉氏の美を崇め、(五)五帝三王を光昭すべし。而るに顧つて暴秦亂君と競つて奢侈を爲し、丘壟を比方して愚夫の目を說ばしめ、一時の觀を隆にして賢知の心に違ひ、萬世の安きを亡ふ。臣竊に陛下の爲に之れを羞づ。惟だ陛下上は明聖なる黃帝・堯・舜・禹・湯・文・武・周公・仲尼の制を覽、下は賢知なる穆公・延陵・樗里・張釋之が意を觀、孝文皇帝が墳を去り葬を薄くし、儉を以て神を安んず、以て則と爲すべし。秦の昭(六)・(始)皇は山を增し厚く藏め、侈を以て害を生ず、以て戒と爲すに足る。初陵の橅(音規)は宜しく公卿大臣の議に從ひ、以て衆庶を息はしむべし。書して奏す」。上甚だ向が言に感ず。而れども其の計に從ふ能はざりき。

魏の文帝皇初二年(黃初三年)十月、首陽山の東に表して壽陵と爲す。帝自ら終制(七)を作りて曰はく、「禮に國君位に卽きて椑(八)を爲るは、存して亡を忘れざるなり。昔(九)堯をば穀林に葬り

(五) 種々の說あるも概ね左の如し、五帝は黃帝・顓頊・帝嚳・唐堯・虞舜。三王は禹・湯・文武
(六) 昭襄王
(七) 喪式の制度、魏志卷二文帝紀、黃初三年の條に出づ
(八) 禮記檀弓上篇に「君位に卽きて椑を爲り、歲に一たび之れを漆して藏む」と出づ
(九) 呂氏春秋安死章に出づ。穀林は成陽山下の林にして、墓所とせるために殖林を妨げることなかりしとなり

て通じて之れに樹す、禹をば會稽に葬りて農は畝を易へず。故に山林に葬るときは山林に合す。封樹の制は上古に非ざるなり。吾れ焉れを取ることなし。壽陵は山に因りて體を爲し、封樹を爲すことなく、寢殿を立て園邑を造り神道を通ずることなし。夫れ葬は藏むるなり、人の見るを得ざらんことを欲するなり。骨は痛痒の知なく、冢は棲神の宅に非ず。禮に墓祭せざるは存亡の黷れざらんことを欲するなり。棺槨を爲るは以て骨を朽ちしむるに足り、衣衾は以て肉を朽ちしむるに足るのみ。故に吾れ此の丘墟を不食の地に營むは、易代の後をして其の處を知らざらしめんことを欲し、葦炭を施すなく、金銀銅鐵を藏むるなく、一に瓦器を以て古の塗車(一)・芻靈(二)の義に合し、棺は但だ際會を漆すること三過、飯含以てすることなく、珠玉施すことなし。珠襦玉匣は諸〻の愚俗の爲す所なり。季孫(三)は璵璠(四)を以て斂す。孔子級を歷て之れを救ふ。之れを骸を中原に暴すに譬ふ。宋公厚く葬る。君子は華元(五)・樂莒(六)が不臣を謂ひ、以て君を惡に棄つと爲す。漢の文帝の覇陵を發かれざるは求むるもの無ければなり。光武の原陵を掘られしは封樹すればなり。霸陵の完きは功釋之に在り、原陵の掘られしは罪明帝に在り、(七)(是れ)而して釋之が忠は以て君を利し、明帝の孝(八)(愛)は以て親を害す。忠臣孝子は宜

(一) 土製の轜車
(二) 草にて作りたる人形、殉死の代りにしたるもの
(三) 魯の大夫季孫子
(四) 魯國に產する玉
(五) 春秋時代宋の文・共・平三君に仕ふ。平公の時右師となる
(六) 樂呂とも書く、宋戴公の曾孫にして要職に在り
(七)(八) 傍書は三國志原本による

しく仲尼・丘明・釋之が言を思ひ、華元・樂莒・明帝の戒を鑒み、其の君を安んじ親を定むる所以を存して、魂靈をして萬載無危ならしむべし。斯れ則ち賢聖の忠孝なり。古より今に及ぶまで、未だ亡びざるの國あらず、亦掘られざるの墓なし。喪亂以來漢氏の諸陵發掘せられざるなく、乃ち玉匣金縷を燒取り、骸骨幷せ盡く。是れ焚如の刑なり。豈重だ痛まざらんや。禍は厚葬封樹に由れり。(九)其の皇后及び貴人以下、王の國に隨はざる者は、終に沒するあれば皆澗(一〇)の西前に葬る、又以て其の處を表す。蓋し舜は蒼梧に葬り、二妃は從はず。延陵(一一)は子を葬ること遠く嬴・博に在り、魂は而も靈ありて知らずと云ふことなく、一澗の間も遠しと爲すに足らず。若し今の詔に違ひ、妄りに變改造施するあらば、吾れ尸を地下に戮すと爲さん」と。(一二)

唐の貞觀九年、高祖崩ず。詔して山陵の制度を定む。漢の長陵の故事に依り、(漢の高祖は長陵に葬る、)務めて崇厚を存し、時限既に促にして功役勞弊す。虞世南(一三)封事を上りて曰はく、「臣聞く、古の聖帝明王が薄葬する所以のものは、崇高光明(顯)珍寶異物(具)を以て其の親を厚くすることを欲せざるには非ず、然も審にして之れを言へば、高墳厚隴珍物の必(畢く)ず備はるは、此れ通(適〻)じて親の累を爲し、孝と曰ふに非ざるなり。是を以て深く思ひ遠く

(九) 三國志にはこの間に左の句あり、「憂霍我が戒と爲す、亦明かならずや」
(一〇) 川の名
(一一) 前出四八二頁參照
(一二) 魏志引用終る
(一三) 始め隋に仕へ後唐の太宗に仕ふ、學者なり、歿して禮部尚書を贈らる。以下の文概ね唐書の虞世南傳の抄錄なり、旁書は原本との相違を示す

慮りて、菲薄に安んじて以て長久萬代の計を爲し、其の常情を割き以て之れを定むるのみ。(一)今丘壟を爲ること此の如し。其の內珍寶を藏めずと雖も、亦無益なり。萬代の後、人は但だ高墳大冢(墓)を見れば、豈金玉なしと謂はんや。臣が愚計は以爲らく、漢文の霸陵は既に山勢に因り墳を起さずと雖も自然に高敞(顯)なり。今のトする所の地勢は卽ち平なり、起さざるべからず。宜しく白虎通に陳ぶる所の周の制に依りて、三仭の墳を爲るべし。其の方、制度に中り事々減少して、事竟るの日に、石を陵側に刻み、今(丘封)の大小高下の式を書し(而にし)、(二)明器に須ふる所は皆瓦木を以てし、禮の文に合せ、一も金銀銅鐵を用ふるを得ず、後代の子孫をして並に皆遵奉せしむ。一通は之れを宗廟に藏む、豈美ならずや。且つ臣下の除服は三十六日を用てす。已に霸陵に依り今墳壟を爲り、(三)又長陵を以て法と爲す、(恐らくは)依る所に非ざるなり(宜しとする所)。伏して願はくは、深く古今を覽て長久の慮を爲さんことを。書して奏す」と。報いられず。虞世南又上疏して曰はく、「漢家は卽位の初め、便ち陵墓を營み、近き者は十餘歲、遠き者は十五年(五十)にして方に始めて成就す。今數月の間を以て數十年の事を造る。其の人力に於ても亦以(已に)て勞す。漢家は大郡五十萬戶、卽日(目)の人衆未だ往時に及ばずして、工役之れと一等

(一) 唐書原文はこの間に約一頁程の文章あり
(二) 副葬品
(三) 漢の高祖の墓、今陝西省の縣名

（四）唐の太宗の賢臣、遼東討伐に從ひ、幽州に至り病歿す

（五）公平なる判斷

（六）唐太宗の名相、杜如晦と並稱せらる

（七）天子が生前中あらかじめ自己の陵を作らせしなり

なり。此れ臣が疑を致す所なり」。（時に公卿又）又公卿上奏して遺詔に遵つて務めて節倹に従はんことを請ふ。太宗乃ち中書侍郎岑文本（四）に令して謂ひて曰はく、「朕一に遺詔の如くせんと欲す。朕が臣子の心頓に倹素を爲すに忍びず。如し朕が崇厚の志に稱へんと欲せば、復た百代の後廢毀の憂あるを免れざらんことを恐る。朕之れが爲に自決すること能はず、卿等の平章（五）に任す。必ず所を得せしめて朕を不孝の地に置くこと勿れ」と。因りて虞世南が封事を出し、所司に付して詳に議し以て聞せしむ。司空房玄齡（六）等議して曰はく、「謹みて按ずるに、漢の高祖の長陵は高さ九丈、光武の陵は高さ六丈、漢文・魏文は並びに封せず樹せず、山に因りて陵を爲る。竊に以ふに、長陵の制度は過だ宏侈たり、二文規を立て、又俗を矯むるを傷む。光武は中興の明主にして、多く典故に依り遵つて成式と爲す。實に宜しき攸と謂ふ。伏して願はくは、仰ぎて故命に遵ひ、俯して禮經に順はん」と。詔して曰はく、「朕既に子たり、卿等は臣たり、愛敬極り罔く、義は猶ほ一體のごとし。固く節倹を陳べて朕をして不義に陷るを容すことなかれ。今便ち敬みて來議に依らん」と。是に於て山陵の制度頗る減省ありき。

十八年、帝侍臣に謂つて曰はく、「昔漢家は皆先づ山陵（七）を造り、既に始終を達し身復

(一) 今陝西省醴泉縣の東北

(二) 閑地

(三) 埋葬

(四) 以下漢書文帝紀に出づ

た親ら見る。又子孫の經營を省き、頓に人功を費さず。古は山に因り墳を爲る。此れ誠に事に便あり。九嵕山(一)は孤聳迥絶なり、因りて旁に山陵を置くべき處を鑿らば、朕が終焉の理あらん」と。乃ち詔して山陵を九嵕山の上に營み、一棺を容るるに足るのみ。務めて儉約に從ふ。又佐命の功臣は義深きこと舟楫のごとし、在昔を追念するに何れの日か之れを忘れん。漢氏の相將は陵に陪す。又東園祕器を給して終を篤くするの義、恩意深厚なり。今より以後功臣・密戚及び德業時を佐けし者は、如し薨亡あらば塋地(二)一所を賜はり、及び賜ふに祕器を以てし、窀穸(三)の時をして喪事に闕くことなからしむ。凡そ功臣密戚の陵葬に陪するを請ふ者は之れを聽し、文武を以て分ちて左右と爲して列す。墳の高さ四丈已下三丈已上。

喪を短くするの失

漢(四)の文帝後七年夏六月、帝未央宮に崩ず。遺詔して曰はく、「朕之れを聞けり、蓋し天下萬物の萌生するもの、死あらざる靡し。死は天地の理、物の自然なり。奚ぞ甚だ哀むべけんや。當今の世は咸生を嘉して死を惡み、葬を厚くして以て業を破り、服を

重くして以て生を傷る、吾れ甚だ取らず。且つ朕既に不德にして以て百姓を佐くることなく、今崩じて又人をして重服久しく臨みて寒暑の數に罹ひ（罹は音離、遭ふなり）、人の父子を哀ましめ、長老の志を傷ひ、其の飲食を損ぜしめ、鬼神の祭祀を絕たしめ、以て吾が不德を重ねば、天下何とか謂はん。朕は宗廟を保つを獲て、眇々の身を以て天下君王の上に託すること二十有餘年なり。天の靈と社稷の福に賴りて、方內安寧兵革あること靡し。朕既に不敏にして常に行を過ちて以て先帝の遺德に羞づるを畏れ、惟だ年の久長にして終らざるを懼れたり。今乃ち幸に天年を以て、復た高廟に供養せらるるを得たり。朕が不明なるや之れを嘉ぶ、其れ奚の哀念することか之れあらん。（高廟に供養せらるるは崩ずべき事と爲し、哀念する所なきなり。）其れ天下の吏民に令して、到りて出で臨ましめ、三日にして皆服を釋き、婦を取り女を嫁し、祠祀飲酒食肉を禁ずるなし。服は大紅十五日、小紅十四日、纖七日にして服を釋け」。（紅は功なり。（五）纖は禫なり。（六）此の喪制は文帝自ら已れが意に率つて創めて之れを爲す。周禮に取ることありしに非ざるなり。何爲れぞ日を以て月に易へんや。三年の喪は其の實二十七月なり、豈三十六月の文あらんや。禫は又七月なきなり。應劭（七）が所謂日を以て月に易ふるの說は謬なり。近代の學者因循して尤も差へり。）

（八）公非劉氏が曰はく、「文帝の制に、此の喪服の斷むるは、已に葬りたる後よりなり。其の未だ葬らざる前に斬衰（九）に服す。漢の諸帝は崩じてより葬に至るまで百餘日なるも

（五）喪服の一種
（六）除服の祭
（七）後漢の學者、著書風俗通義有名なり。此の所謂は、漢書の註に述べしところなり
（八）劉攽、公非は號なり。宋の學者、司馬光と共に資治通鑑を編み、最も漢史に深し、官中書舍人に至る。以下の文は漢書文帝紀の註に出づ、但し拔萃にして前後を轉じたる部分あり
（九）裁ちたるまま緝はざる喪服

のあり。未だ葬らざれば服除かず。按ずるに、翟方進(一)の傳に、後母終る(二)、既に葬りて三十六日にして起ちて事を視ると。身漢の相に備はるを以て敢へて國家の制を踰えず。此れ其の證なり。説く者遂に日を以て月に易へ、又既葬の日を通ぜざるは、皆大いに繆れり。之れを攷ふるに、文帝の意は既に葬りて重服を除くの制なり。大紅・小紅は漸く吉に卽く所以のみ」。致堂の胡氏(三)曰はく、「文帝は喪紀を減節し、萬世の譏責を負ふ。小仁を以て大仁を害す、固に罪あり。然れども遺詔に諭す所の者は、吏民を謂ふのみ。太子嗣君豈吏民ならんや。而して景帝は此の文を冒し用ひて、乃ち自ら三年の制を短む。是れ君父の爲に斬衰を服せざること景帝より始まれり。且つ天子の服を遂ぐること三年ならざる所以の者は何の謂ぞや。政事を妨ぐと謂はんか、財用を費すと謂はんか、攝政の人を妨ぐと謂はんか。政事を妨ぐと謂はば、孰れか國家の大憂より先ならん。財用を費すと謂はば、(四)卽ち以て悅びと爲すべからざるを得ず。財用は固より禮を行ふ所以なればなり。攝政の人を妨ぐと謂はば、堯舜より周の末に至るまで、未だ攝政の人にして喪君の國を奪ふ者あるを聞かず。臣民嫁娶祠祀を爲すの故に至りては、則ち輕きを用つて重きを費すものにして、尤も儉ならずと爲す。之れを揆るに

(一) 漢代の人、成帝に仕へて丞相となり、高陵侯に封ぜらる
(二) 世を終り死するなり
(三) 胡寅、前出一一一頁參照
(四) 禮のために金がかかることは悅びとせざるを得ぬ意

理を以てし、之れを稽(かんが)ふるに事を以てするに、一として可なるものなし。堯舜三代を法とせずして乃ち安然として刻薄の景帝を以て師と爲し、戒懼する所なし。特(た)だ謂(い)はゆる位勢尊隆にして以て自ら便なるを得るものなり。是れ理義の大たることを知らざるなり。寥々たる千載、惟だ晉武(五)古制を行はんと欲して、裴・杜(六)が邪說に尼(とど)めらる。獨り魏の孝文は天性仁厚にして斷以て疑はず、盡く禮文に合せずと雖も、而も哀戚の情杖經に溢(あふ)れ、其の史を讀む者、猶ほ惻然として感動す。其の人となりを想見するに、(七)『夷狄の君あるは諸夏の亡(な)きには如かざるなり』と謂ふべきなり。豈惜しまざらんや」と。馬端臨(八)曰はく、「後の儒者皆以て喪を短くすること孝文の遺詔より始まれりと爲して、以て深く譏ることを爲す。然れども愚(われ)之れを攷(かんが)ふるに、三年の喪は春秋戰國より以來未だ能く行ふ者あらず。(九)子張問ひて曰はく、『(一〇)書に云ふ、高宗は諒闇(陰)三年言(ものい)はずと、何の謂ぞや』。子曰はく、『何ぞ必ずしも高宗のみならん、古の人皆然り』と。蓋し時君未だ三年の喪を行ふ者あらず。故に子張疑つて之れを問ふ。而して夫子答ふるに古の禮は皆然ることを以てす。蓋し亦今人の行ふこと能はざるを嘆くなり。滕(一一)の文公喪禮を孟子に問ひ、三年の喪を行はんと欲す。父兄百官皆欲せずして曰はく、吾

(五) 晉の武帝なり。この事後出四九六頁參照

(六) 裴秀と杜預。裴秀は晉の武帝に仕へ司空となる。この人の事後に出づ、杜預は晉の武帝に仕へ多く俱事に勤む、又學者にして春秋左氏經傳集解其他著述多し。この事後出四九九頁參照

(七) 論語八佾篇第五章の語、言ふ心は、夷狄を貶して中國の文化を讚へしなり

(八) 宋末の學者、著書文獻通考有名なり、この引用、文獻通考卷十四、王禮十五に出づ

(九) 論語憲問篇第四十三

が宗國魯の先君は之れを行ふこと莫し、吾が先君も亦之れを行ふこと莫しと。魯は最も禮を秉るの國たり。夫子其の一變して以て道に至るべきことを稱するも、而も尙ほ此れを行ふ能はざれば、他國は知るべし。漢の初め、禮文大率皆秦の舊を承く。秦は禮義を無する者なり。其の喪禮固に攷ふべきなし。然れども杜預が言はく、（一）『秦は書籍を燔きて意に率せて行ひ、上に亢し下を抑ふ。漢祖は草創して因りて革めず、乃ち天下を率ゐて皆重服を終へ、旦夕哀臨し、寒暑を經罹し、嫁娶飲酒食肉を禁塞し、制情に稱はざるに至る』。是を以て孝文遺詔して、斂畢りて便ち葬り、葬り畢りて紅禫を制するの文あり。是れを以て之れを觀るときは、孝文の意は、大概秦の苛法を革むることを欲するのみ。蓋し古人の所謂（二）『喪に方ふこと三年』とは、所謂天王の爲に斬衰するもの、亦以て父に事ふるに資りて以て君に事ふるなり、其の義當然なり。然るに（三）檀弓に言はく、『天子は崩じて三日に（四）祝先づ服す。五日に官長服す。七日に國中の男女服す。三月に天下服す』と。又言はく、『君の喪は諸〻の達官の長杖つく』と。則ち亦未だ嘗て其の官の崇卑、情の淺深に因りて隆殺する所あらず。秦は務めて君を尊び臣を卑しめんと欲して、之れを驅るに一切の酷法を以てす。意ふに其の其の臣民を令す

章。子張は孔子の弟子、高宗は殷の王武丁なり
（一〇）書經の無逸篇
（一一）孟子滕文公上篇第二章
（一）晉書卷二十、禮志より、馬端臨が引用せるなり
（二）禮記檀弓上篇に出づ、方は比なり。親の喪に比較しならうて、義と恩を以て君に服するなり
（三）禮記の篇名
（四）神官

る所以の者、哭臨の期、衰麻の制、必ず刻急にして人情に近からざる者あらん。是を以て帝其の弊を矯め、其の重服を釋して大功小功の纖を爲り(五)、其の久臨を釋して三十六日と爲す。詔語忠厚懇惻、異時振貸(六)勸課等の詔と與に皆仁人の言なり。豈訾るべけんや。帝の詔は固に嗣君の爲に設けず、而して景帝の喪を短くするも亦初めより遺詔に繇らざるなり。何となれば、蓋し古は天子七月にして葬り、諸侯五月にして葬る。通喪は必ず三年を以てすと雖も、然れども亦葬後を以て吉に卽くの漸と爲す。宋の桓公卒す。未だ葬らずして襄公諸侯に葵丘に會す。故に書して宋子と曰ふは之れを貶すなり。晉の悼公(七)卒して既に葬る。未だ喪を終へずして平公諸侯に溴梁(八)に會す。則ち書するに晉侯を以てす。晉の獻公卒して奚齊(九)未だ葬らずして殺に遇ふときは君の子卓と稱し、既に葬りて弑に遇ふときは則ち君と稱す。未だ葬らざるときは其の君と爲すべからざること明かなり。春秋より以來諸侯多く五月の制を守る能はず。蓋し急に吉に從はんと欲するなり。（滕の文公、五月廬に居る。未だ命戒あらず。蓋し孟子誨ふるに三年の喪を以てすと雖も、文公僅に能く五月未だ葬らざるの前諒陰の制を守るのみ。然れども亦當時に無き所なり。）秦の始皇に至りて、七月沙丘(一〇)に崩ずるを以て、九月葬る。漢の高祖崩じて凡そ二十三日(一一)にして葬る。葬の一日にして惠帝位に卽く。文帝崩じて凡そ七日にして葬る。葬の三

(五) 前に大紅小紅と出づ
(六) 貧民救助
(七) 左傳襄公十六年に出づ
(八) 河南省の地名
(九) 獻公の庶子
(一〇) 今河北省平鄉縣の東北

日にして景帝位に即く。蓋し葬期愈〻促なり。必ず葬りて位に即くものは、其の吉禮を以て位に即くを知るべし。必ず葬期を促にするは、其の決して諒陰三年する能はざるを知るべし。景帝の遵ふ所のものは惠帝の法なり。惠帝の遵ふ所のものは春秋以來亡秦に至るまでの法のみ。豈孝文の遺詔之れを爲さんや。劉公非が言はく、『翟方進が後母死して葬後三十六日にして、起ちて事を視る。身漢の相に備はるを以て敢へて國家の制を踰えず、以て明證と爲す』と。然れども孝文の詔を詳にするに、既に嗣君の爲に設けざるも、亦未だ嘗て所謂三十六日を以て臣下として私の喪に居るの限制と爲さざるなり。俗吏孝敬に薄くして榮祿に耽る。是を以て並に此の詔の語に緣り、遂に短喪の法を立て、以て其の私を便にす。方進が時に至りて遂に指して漢家の法と爲すのみ」。

晉の文帝の喪に臣民皆權利に從ふ、三日にして除服す。既に葬りて武帝も亦除す。然れども猶ほ素冠疏食哀毀して喪に居る者の如し。秋八月帝將に崇陽陵(一)に謁せんとす。群臣奏して言ふ、「秋暑未だ平かならず、帝悲感摧傷せんことを恐る」と。帝曰はく、「朕山陵を奉瞻することを得、體氣自ら佳なるのみ」と。又詔して曰はく、「漢文の天

(一) 文帝の陵なり、以下のこと概ね歷史綱鑑補並に晉書禮志に見ゆ。

下をして哀を盡さしめざりしは、亦帝王至謙の志なり。當に山陵を見る、何ぞ心に服なからん」と。其の議袞(衰)經を以て行はれ、群臣自ら舊制に依る。尙書令裴秀奏して曰はく、「陛下既に除して復た服す、義依る所なし。若し君服して臣服せざれば亦之れ敢へて安んぜざるなり」と。詔に曰はく、「患情跂及する能はざるのみ。衣服何ぞ在らん、諸君勤々の至りなり、豈苟も相違はんや」と。遂に止む。中軍の將軍羊祜(二)、傅玄(三)に謂つて曰はく、「三年の喪は貴と雖も服を遂ぐるは禮なり。而して漢文は之れを除き禮を毀り義を傷ふ。今主上は至孝にして其の服を奪ふと雖も、實に喪禮を行ふ。若し此れに因りて先王の法を復せば亦善ならずや」と。玄曰はく、「日を以て月に易ふること已に數百年、一旦古に復さんことは行ひ難きなり」。祜曰はく、「天下をして禮の如くならしむる能はざるも、且く主上をして服を遂げしむるは猶ほ愈らずや」。玄曰はく、「主上除せずして天下除せば、此れ但だ父子ありて復た君臣なきなり」と。乃ち止む。戊辰、群臣奏して服を易へ膳に復さんことを請ふ。詔に曰はく、「幽冥を感念する毎に、而も苴(四)經の禮を終るを得ず、以て沈痛と爲す。況や稻を食ひ錦を衣るに當らんや。適に其の心を激切するに足る、以て相解く所に非ざるなり。朕本と諸生なり、家に禮を

(二) 字は叔子、尙書右僕射、都督荊州諸軍事、衆心を得て、その卒するや、民慟哭すと

(三) 字は休奕、博學にして剛直、晉の武帝に仕へ累進して司隸校尉となる。以下の文綱鑑補と多少異なるも意同じ

(四) 喪服に用ふる麻繩

傳へ來ること久し。何ぞ一旦の便のために此の情を所天に易ふるに至らん。相從ふことと已に多し。(一)孔子が宰我に答ふるの言を試省せば、紛紜を事とするなし」と。遂に疏素を以て三年を終る。

(二)泰始四年皇太后崩ず。有司前代の故事を奏す。(曰はく)「倚廬の中に(三)白縑を施き帳蓐は素なり。床は布巾を以て裹む。(四)革輅・輦版・轝細・犢車は皆縑を施きて裹む」と。詔して聽さず。但だ布衣車を以てせしむるのみ。其の餘の喪に居るの制は禮文を改めず。有司又奏す「大行皇太后は當に四月廿五日を以て(五)安厝す。故事に、(六)虞には衰服を著け、既に虞して除く、其の內外の官寮は皆朝に就き、(七)晡に位に臨み服を御し訖りて各〻次る所に還り、衰服を除す」と。詔して曰はく「三年の喪は天下の達禮なり。終身の愛を受けて數年の報なし、奈何ぞ葬りて便ち吉に卽かん。情忍びざる所なり」と。有司又奏す「世に險易あり道に洿隆あり、遇ふ所の時異なり、誠に由あること然り、禮を忽にするに非ざるなり。方今戎馬未だ散ぜず、王事至つて殷く、交〻須らく聽斷して以て廣績(庶)を熙かすべし。昔周の(八)顧命康王始めて(九)翌室に登り、猶ほ冕を戴きて朝に臨む。漢魏に降りては既に葬りて除釋す。諒陰(闇)の禮は遠代より廢す。惟だ陛下高宗の

(一) 論語陽貨篇第二十一章に、宰我が三年の喪を短くすることを孔子に問ふ。孔子諄々としてその不可なるを述ぶ
(二) 以下晉書禮志に出づ
(三) 白帛
(四) 革製の小車
(五) 安置の意
(六) 虞祭即ち埋葬後の祭
(七) 申の刻、今の午後四時
(八) 顧命は書經周書の篇名
(九) 明堂即ち路寢の一部

制を割ぎて當時の宜しきに從はんことを」と。詔に曰はく、「夫れ三年の喪は情を盡し禮を致す所以なり。葬りて已に便ち除くは堪へざる所以なり。吾が哀懷を敍ぶるに當りて、用て斷絶せんことを言ふは柰何々々」と。有司又固く請ふ。詔に曰はく、「孝を篤くする能はず、毀傷を以て憂と爲す勿れ。誠に衣服は末事のみなるを知る。然れども今思ふに、草土を存し率に當に吉物を以て之れを奪ふは、乃ち重く傷む所以にして、心に見念するに非ざるに至る。每代の禮典質文は皆同じからざるのみ、何爲れぞ限るに近制を以てして達喪をして闕然せしめんや」と。群臣又固く請ふ。帝流涕久しくして乃ち許す。然れども猶ほ素冠蔬食して以て三年を終ること文帝の喪の如し。

同十年武元楊皇后崩ず。既に葬りて帝及び群臣喪を除きて吉に卽く。是れより先尙書祠部奏す。博士張靖が議に從ひ、皇太子も亦制に從つて俱に服を釋く。博士陳逵議して以爲らく、「今の制は依る所、蓋し漢の帝の權制にして、事あるに興りて禮の正に非ず。皇太子は國事あるなし、自ら宜しく服を終るべし」と。詔ありて更に詳議せしむ。尙書杜預以爲らく、「古は天子諸侯三年の喪、始め齊斬に同じ、既に葬りて喪服を除き、諒陰(一〇)以て居る。心喪して終るの制なり。士庶と禮を同じくせず。漢氏は秦の天

(一〇) 晉書禮志は皆諒闇に作る

下を承けて、天子の爲に服を修すること三年なり。漢の文帝其の下久しく行ふべからざるを見て、古制を知らずして更に意を以て制し、祥禫して喪を除き吉に卽く。魏氏は直ちに葬を訖るを以て節と爲す。嗣君皆諒陰して終るの制に復せず。學者之れを非とすること久し。然れども竟に經傳を推究して其の行事を考へず、專ら王者三年の喪は衰麻を以て二十五月を終るべしと爲す(謂ふ)。嗣君苟も此の若きときは、天子群臣皆喪を除くことを得ず、志は篤きに居るに在りと雖も、更に逼り(通じ)て行はれず。今世に至りて主皆漢文(一)に從つて、經典に由る處の制は制に非ずとす。今皇太子は尊と同體なり。宜しく古典に卒哭して衰麻を除き、諒陰を以て終るの制に復すべし。義に於て既に除かずんばある應からず。又漢文に取るなきは乃ち喪の禮に篤き所以なり」。是に於て尙書僕射盧欽・尙書魏舒、杜預が證據の依る所を問ふ。預云はく「傳に稱す、三年の喪は天子より達すと。此れ天子期を絶ちて惟だ三年の喪あることを謂ふ。喪に居て衰服三年すること士庶と同じきことを謂ふに非ず。故に后世子の喪にして、叔向(二)は三年の喪ありと稱するは二へり。周公は高宗服喪三年と言はずして、諒陰三年と云ふ。此れ服を釋きて心喪するの文なり。叔向は景王の除喪を譏らずして其の燕樂已に早きを譏

(一) 漢の文帝

(二) 羊舌肸、字は叔向、春秋時代晉國の大夫、孔子遺直の人と稱す

る。既に葬るときは除す應(べ)くして諒陰の節に違ふを明かにするなり。春秋に、(三)晉侯諸侯を享す。子產鄭伯に相たり。時に簡公(四)未だ葬らず、喪を免じて以て命を聽かんことを請ふ。君子之れを禮を得たりと謂ふ。宰咺(さいけん)(五)來りて惠公・仲子(六)が賵(にやみもの)を歸(おく)る。傳に曰はく(七)『生を弔して哀に及ばず』と。此れ皆葬りて服を除く、諒陰の證なり。先儒の舊說往々亦見ゆ。學者未だ之れを思はざるのみ。喪服は諸侯が天子の爲にも斬衰す。豈服を終ること三年と謂ふべけんや。上七代(八)を考ふるに、未だ王者君臣上下衰麻三年する者を知らず。謂ふ(諸ゝ)に下に推して將(九)に恐らくは百世の主も其の理一ならん、必ずしも能はざるには非ず、乃ち事勢得ざらんとす。故に聖人は虛しく行はれざるの制を設けざることを知る。仲尼曰はく、(一〇)『禮の損益する所百世と雖も知るべし』と。此れ之れを謂ふなり」。是に於て欽・舒之れに從つて遂に預に命じて議奏を造る。曰はく、「禮記に『三年の喪は天子より達す』と。又云はく、『父母の喪は貴賤となく一なり』と。又云はく、『端衰・喪車皆等なし』と。此れ通じて天子の居喪衣服の節は凡人に同じきを謂ふ。心喪の禮は三年に終るも、亦服喪三年の文なし。然るに繼體の君猶ほ多く荒寧

(三) 昭公十二年に出づ

(四) 鄭の君。このとき子產その喪がすみて命を聞かんことを請ひしなり

(五) 咺氏、家宰の官

(六) 魯の侯、仲子はその夫人、共に歿す。故に天子より悔み物を贈れるなり。左傳隱公元年に出づ

(七) 贈物が後れて哀みの薄らぎたる頃となるは禮に非ざるを云ふ

(八) 黃帝・顓頊・帝嚳・唐堯・虞舜・夏禹・商湯

(九) 晉書禮志の原本は「將來……事勢得ざるなり」とあり

(一〇) 論語爲政篇第二十三章、「子張問ふ十世知るべきやと。子曰はく、殷は夏の禮に因る。損益する所知るべきなり。周は殷の禮に因る、損益する所知るべきなり。其れ周に繼ぐものあらば、百世と雖も知るべきなり」と

自從にして、諒陰の制を廢し、高宗(一)をして名を往代に擅にし、子張をして疑を當時に致さしむ。此れ乃ち賢聖の譏を爲す所以にして、天子が服を以て喪を終らざるを譏るに非ず。秦は書籍を燔き意に率せて行ひ、上に亢し下を抑へ、漢祖は草創して因りて革めず、乃ち天下を率ゐ皆重服を終り、旦夕哀臨し、寒暑を經罹し、嫁娶飮酒食肉を禁塞し、制は情に稱はざるに至る。是を以て孝文遺詔して、斂畢りて便ち葬り、葬り畢りて紅禫の除を制す。高宗諒陰の義に合せずと雖も、古典に近し。故に之れを後嗣に傳ふ。時に預め陵廟を修す。故に斂葬は浹辰(二)の内に在るを得、因つて以て制を定む。近ごろ明帝に至りて存に陵寢(三)なく、五旬にして乃ち葬る。安んぞ三十六日に在らんや。此れ當時經學疏略にして前聖を思はざるの病なり。魏氏革命して、既葬を以て節と爲し古典に合ふ。然れども心を諒陰に垂れず、譏を前代に同じくす。泰始の開元より、陛下追うて諒陰の禮に遵ひ、終を愼み篤きに居る。允に古制に臻り殷宗(四)に超絶す。天下德を歌ひ、誠に靖等(五)の能く原本とする所に非ざるなり。天子諸侯の禮は、當に以て具はるべし。諸侯は其の己れを害するを惡みて其の籍を削り、今其の存するもの惟だ士喪一篇、戴聖記(六)其の間に雜錯す。亦以て正を取ること難し。天子の位は至尊

(一) 以下禮志には「今に至るまで高宗は名を往代に擅にし、子張は疑を當時に致す」と出づ
(二) 十二日間
(三) 陵墓に同じ
(四) 殷の高宗武丁を指す
(五) 短小人の意、人名にはあらざるべし
(六) 戴聖は漢代の學者、禮記の編者なり。聖を小戴と云ふ。故に戴記を小戴記とも云ふ。ここに云ふ戴聖記は禮記のことなるべし

にして、萬機の政は至大なり。群臣の衆至つて廣し、之れを凡人に同じくせず。故に大行既に葬り、廟に祔祭せば、疏に因りて之れを除す、己れ除せざれば群臣敢へて除する莫し。故に己れを屈して以て之れを除す。而して諒陰して以て制を終る。天下の人皆曰ふ、『我が王の仁なるや、己れを屈して以て宜しきに從ふ』。又皆曰ふ、『我が王の孝なるや、既に除して心喪す。我が王は猶ほ此の若くの篤きなり、凡そ臣子等も亦焉んぞ自ら勉めて以て禮を崇ばざることを得んや』と。此れ乃ち聖制風を移し俗を易ふるの本にして、高宗の雍熙を致す所以なり。豈惟に衰裳のみならんや。若し難しとする者の如きは、更に權制を以て自ら居り、屈伸厭一葉の反降を疑ひ、職事を以て斷を爲さんと欲す。則ち父在せば母の爲には朞す。父卒すれば三年す」と。此れ至親を以て至尊に屈するの義なり。出母の喪には至親を以て屬と爲す、而して長子は制あるを得ず。體尊くして義の升降皆從ふ。敢へて獨せざるなり。況や皇太子は配貳の至尊にして國と體を爲す。固に宜しく遠く古禮に遵ひ、近く時制に同じ、屈除して以て諸下に寛くし、一代の成典に恊ふべし。君子の禮に於ける、直くして行ひ曲げて殺ぐことあり、經にして等しきことあり、順つて之れを去ることあり、諸を內に存するのみ。禮

（七）崩御された天子

（八）やはらぎ

（九）禮記、禮器篇に出づ、字句多少異なる

と云ふは玉帛の謂に非ず、喪と云ふは惟だ衰麻の謂ならんや。此れ旣に臣等が所謂經制の大義にして、且つ實に卽き近く言ふも亦安からざることあり。今皇太子は至孝烝烝として自然に發し、號跳(がうたう)の慕、殯宮に匍匐す。大行旣に奐し、往きて反らず。必ず平故(へいこ)を想像し、寢殿に彷徨(はうくわう)せん。此れ永福の官屬は當に獨り衰麻して事に從ひ殿省に出入すべきを爲す、亦以て繼ぎ難し。今の將吏は二十五月の事を蒙同すと雖も、寧んぞ大臣に至るも亦其の制を奪はん。昔翟方進は自ら身を以て漢の相と爲り、喪に居ること三十六日、敢へて國典を踰えず、而るを況や皇太子に於てをや。臣等以爲(おもへ)く、皇太子は宜しく前奏の除服諒陰の制の如くすべし」と。是に於て太子遂に厭降の議を以て國制に從つて衰麻を除し、諒陰して制を終ると。(一)

魏の文帝の太和十四年、太皇太后馮氏殂(そ)す。帝勺飮(しやくいん)口に入らざること五日、哀毀禮に過ぐ。(二)中部曹、(三)華陰の楊椿(四)諫めて曰はく、「陛下は祖宗の業を荷ひ萬國の重きに臨む。豈匹夫の節と同じくして以て僵仆(きやうふ)(五)を取るべけんや。群下惶灼して言ふ所を知る莫し。且つ聖人の禮は、毀(やぶ)る(六)も性を滅せず。縱(たと)ひ陛下自ら萬代に賢ならんと欲するも、其の

(一) 晉書禮志引用終る
(二) 文獻通考卷十四、王禮十六の引用にして、通考は魏書卷一百八、禮志よりの抄出なり
(三) 官名、殿中の奏事を司る、給事中の一員なるべし
(四) 華陰は今陝西省の縣名。楊椿は字は延壽、累官太保・侍中に至る。魏書楊椿傳に出づ
(五) たふれふす
(六) 禮記、喪服四制篇に出つ

宗廟を若何せん」と。帝其の言に感じ之れが爲に一たび粥を進む。是に於て諸〻の王公等皆闕に詣でて表を上り、時に兆域(七)を定め、及び漢魏の故事並に太皇太后の終制に依り、既に葬りて公除せんことを請ふ。詔(八)に曰はく、「禍罰に遭ひてより慌惚昨の如く、梓宮(九)に奉侍し、猶ほ髣髴を希ふ。山陵の遷厝は聞くに忍びざる所なり」と。冬十月王公復た上表して固く請ふ。詔して曰はく、「山陵は典冊に依るべし。衰服の宜は情として未だ忍びざる所なり」と。帝親ら陵所に至らんと欲す。戊辰詔す「諸〻の常に從ふの具は悉く之れを停むべし。其の武衞の官、防侍は法の如くせよ」と。癸酉、文明太后を永固陵に葬る。甲戌、帝陵に謁す。王公固く公除を請ふ。詔に曰はく、「比ろ當に別に敍ぶること心に在り」と。己卯に又陵に謁す。庚辰に帝出でて思賢門の右に至り、群臣と與に相慰勞す。太尉丕(一〇)等進んで言して曰はく、「臣等老朽の年を以て累聖に歷奉す。國家の舊事頗る知聞する所なり。伏して惟るに、遠祖大諱の日ありしとき、唯だ梓宮に侍送する者は凶服して、左右は皆盡く吉に從ふ。四祖三宗は因りて改めず。陛下は至孝の性を以て哀毀禮に過ぐ。伏して聞く、御する所の三食半溢に滿たず、晝夜絰帶を釋かずと。臣等心を叩き氣を絶し、坐して席を安んぜず。願はくは少く至慕の

(七) 墓場
(八) 詔は魏書禮志に出づ
(九) 天子及びこれに準する貴人の棺
(一〇) 王族東陽王丕、時に太尉たり、魏書列傳二に出づ

情を抑へて、先朝の舊典を奉行せんことを」と。帝曰はく、「哀毀は常の事なり。豈闕言するに足らんや。朝夕粥を食し、粗ぼ支任すべし。諸公何ぞ憂怖するに足らん。祖宗の情は武略を專らとして未だ文教を修めず。朕は今仰ぎて聖訓を稟く、庶はくは古道を習ひ、時を論ずるに此の事又先世と同じからず。朕且つ懐ふ所を以て別に尚書游(一)明根・高閭(二)等に問ふ。公之れを聽くべし」。帝因りて明根等に謂ひて曰はく、「聖人は卒哭の禮、授服の變を制し、皆情を奪つて漸す。今則ち旬日の間、言吉に即くに及ぶ、特だ理を傷つくるを成す」と。對へて曰はく、「臣等伏して金冊(三)の遺旨を尋ぬるに、月を踰えて葬り、葬りて吉に卽く。故に下葬の初に於て、練除(四)の事を奏す」。帝曰はく、「朕惟ふに、中代三年の喪を遂げざる所以は、蓋し君上世を違りて、繼主初めて立ち、君德未だ流らず、臣義洽からず、故に身袞冕を襲て卽位の禮を行ふ。朕は誠に不德にして在位紀(五)を過ぎ、億兆をして君あることを知らしむるに足る。此の日に於て哀慕の心を遂げず、情と禮とをして倶に失せしむるは、深く痛恨すべし」と。高閭が曰はく、「杜預は晉の碩學なり、古より天子にして三年の喪を行ふ者あることなきを論じ、以て漢文の制は闇に古と合へりと爲し、叔世(六)と雖も行ふ所の事は承け踵ぐべしとす。是

(一) 後魏の人、字は志遠、孝文帝に仕へ儀部尚書となり、大鴻臚卿に進む
(二) 後魏の人、字は閻士、孝文帝に仕へ、中書令・給事中となり、大常卿に進む
(三) 天子の詔
(四) 一周忌の喪服を除すること
(五) 十二年間
(六) 末世

を以て臣等慺々(七)として干め請ふ」と。帝曰はく、「竊に金冊の旨を尋ぬるに、臣子の心を奪ひ、早く吉に即かしむる所以のものは、政事を廢絕せんことを慮るの故なり。群公の請ふ所其の志も亦然り。朕仰ぎて冊の命を奉じ、俯して群心に順ひ、敢へて闇默として言はずして以て庶政を荒せざらん。唯だ衰麻して吉禮を廢し、朔望哀誠を盡さんことを欲す。情許すべきに在り、故に專ら之れを行はんと欲す。杜預が論の如きは、(八)孺慕の君、諒陰の主に於て、蓋し亦誣ふるなり」。祕書丞李彪(九)曰はく、「漢の明德馬后は章帝を保養し、母子の道間然すべきなし。后の崩ずるに及びて、葬るに旬を淹えず、尋で已に吉に從ふ。然して漢章は譏を受けず、明德は名を損せず。願はくは陛下金冊の遺令に遵ひ、哀を割ぎ議に從はんことを」と。帝の曰はく、「朕眷戀衰絰して議とする所に從はざる所以のものは、實情忍ぶ能はざればなり。豈徒に苟も嗤嫌を免れんのみならんや。今終りを奉じ、儉素にして一に已に遺冊に遵仰す。但だ痛慕の心事、予に繫なる、庶はくは聖靈至願を奪はざらんのみ」。高閭が曰はく、「陛下既に上に除服せざるに、臣等獨り下に除服するときは臣たるの道足らず、又親ら衰麻を御して復た朝政を聽くは吉と凶と事雜れり。臣竊に疑を爲す」。帝曰はく、「朕今遺冊に逼られる、

(七) ねんごろなる樣

(八) 小兒の親を慕ふ如きを云ふ

(九) 後魏の人、字は道固、孝文帝に仕へ、祕書丞となり、後御史中尉となる

唯だ望むらくは、朞（一）に至るまで禮を盡さずと雖も縕結（二）差や申びんことを。群臣は各〻親疎貴賤遠近を以て除服の差を爲せ。庶幾くは稍や古に近く、今に行ひ易からん」と。群臣又言ふ、「春秋烝嘗（三）の事は廢闕し難し」。帝曰はく、「先朝より以來、恒に有司事を行ふ。朕は慈訓を蒙るに賴り常に親ら敬を致す。今昊天罰を降し人神喪ふ。特り（四）宗廟の靈を想ふに、亦歆祀（五）を輟め、饗薦を行ふを脫れば、恐らくは冥旨に乖かん」と。群臣又言ふ、「古は葬りて吉に卽く、必ずしも禮を終へず。此れ乃ち二漢の治道を經綸する所以にして、魏・晉の庶政を綱理する所以なり」。帝曰はく、「既に葬りて吉に卽くは、蓋し季俗亂多く權宜世を救ふのみ。二漢の盛、魏・晉の興、豈喪禮を簡略にして仁孝を遺忘すと曰はんや。平日の時、公卿每に稱す、『當今四海晏安、禮樂日に新に、以て美を唐虞に參し、盛を夏商に比すべし』と。今日に至るに及び、卽ち苦に朕が志を奪はんと欲し、魏・晉に踰えざらしむ。此の如きの意未だ由る所を解せず」と。李彪曰はく、「今は治化清晏なりと雖も、然も江南に未賓の吳あり、漠北に不臣の虜あり。是を以て臣等猶ほ不虞の慮を懷く」。帝曰はく、「魯公は絰を帶びて戎に從ひ、晉侯は黑衰にして敵を敗る。固に聖賢の詳にする所なり。如し不虞のことあらば紼（六）を越すと

（一）一周年
（二）鬱結の如し
（三）春秋及び冬行ふ祖先祭
（四）文獻通考には、特想宗廟之靈とあり
（五）祭りをうけること
（六）棺を引く綱

雖も嫌ふなし、而るを況や衰麻をや。豈晏安の辰に於て豫め軍旅の事を念うて、以て喪紀を廢すべけんや。古人も亦王者衰を除きて諒陰して喪を終ると稱する者あり。若し朕が衰服を許さざるときは、當に衰を除き拱默して政を冢宰(七)に委すべし。二事の中惟だ公卿の擇ぶ所のままなり」。游明根曰はく、「淵默して言はずんば大政將に曠しからん。仰いで聖心に順ひ衰服に從はんことを請ふ」。太尉丕曰はく、「臣は尉元(八)と五帝に歷事し、魏家の故事尤も之れを諱る。後の三月必ず神を西に迎へ、惡を北に禳ひ、具に吉禮を行はん。皇始(九)より以來未だ之れを或は改めず」。帝曰はく、「若し能く道を以て神に事へば、迎へずして自ら至らん。苟も仁義を失はば迎ふと雖も來らざらん。此れ乃ち平日も當に行ふべからざる所、況や喪に居るをや。朕は不言の地に在り、應に此の如く喋々たるべからず。但だ公卿朕が情を執奪して遂に往復を成せり」と。追で用て悲絶し遂に號慟す。群臣も亦哭して辭し出づ。(一〇)

司馬公(一一)が曰はく、「三年の喪は天子より庶人に達す、此れ先王の禮經にして百世不易の者なり。漢文は心を師として學ばず、古を變じ禮を壞り、父子の恩を絶ち、君臣の義を虧く。後世の帝王哀戚の情を篤くすること能はずして、群臣諂諛し、肯へて釐正

(七) 今の總理大臣

(八) 字は荀仁、後魏獻文・孝文帝に仕へ司徒となり、三老に拜せらる

(九) 後魏の初代道武帝の時の年號

(一〇) 魏書禮志引用終る

(一一) 名は光、諡公、宋の名臣、この文、文獻通考卷十四、王禮十六の引用

する莫く、晉武に至りて獨り天性を以て矯めて之れを行ふ。不世の賢君と謂ふべし。而れども裴・傅(一)が徒は固陋の庸臣にして、常に習ひ故を玩び、其の美に將順する能はず。惜しい哉」。

致堂(二)の胡氏曰はく、「孝文は古を慕ひて力行尤も喪禮に著しく、其の始終情文も亦粲然として觀るべし。漢より以來未だ之れあらざるなり。後世孺慕の君、景仰せずして先王是れ顯はるべけんや。孝文の三年を欲するに方りてや、在廷の臣一人として能く其の美を將順する者なく、帝の心を沮遏せざる莫し。所陳下る毎に、若し孝文の至情先づ定まるに非ずんば、幾何か邪說の爲に惑はされざらんや。禮に曰はく、『百官(三)備はり百物具はり、言はずして事行はるる者は、扶けて起つ』と。齊衰の喪は蓋し對ひて言はざるなり。夫の八事(四)の權のごときは經禮に非ず。今孝文は百官備はり百物具はる。是れ宜しく三日にして粥くひ、三日にして沐し、期三月にして練冠し、三年にして祥(五)し、禮の廢せるをして復た起ること古の高宗の如くならしむべし。而るに群臣は漢の制に狃れ、雜ふるに國俗を以てし、其の君をして自由を得ざらしむ。其の初は禮を守りて衆に違ひ、通喪を行はんと欲して甚だ力めしも、其の終や三年する能はず。是に

(一) 裴秀と傅玄、前出四九三・四九七頁參照
(二) 胡寅、前出一一一頁參照、文獻通考卷十四、王禮十六の引用
(三) 禮記喪服四制篇に出づ
(四) 右の文に續きて「言ひて后に事行はるる者は杖つきて起つ。身自ら事を執りて后に行はるる者は面垢つくのみ。禿者は髽せず、傴者は袒せず、跛者は踊せず。老病は酒肉を止めず。凡そ此の八つの者は權を以て制する者なり」とあり
(五) 大祥卽ち三周忌祭のこと

於て期にして祥し、月を改めて禫す。是れ古者[六]父在せば母の爲にするの服を用ふるものにして、節に中らざるなり。無乃其の本を得ずとも、遂に其の末を殺がんや。夫れ禮は惟だ其の當るのみ。之れを施して當るときは、袞冕[七]を被りて鎭圭[八]を執るが如く、之れを施して當らざれば、是れ狐白裘[九]を衣て諸れを草莽に坐するなり。豈惜しまざらんや」。

[一〇]勉齋の黃氏曰はく、「按ずるに、杜預は天子諸侯は既に葬りて喪服を除き、諒闇以て居り、心喪して制を終り、士庶と禮を同じくせざるの議なり。晉書の本傳に見ゆ。左氏傳の註に、遂に既に葬り反虞するときは喪を免るるの說あり。司馬公嘗て其の失を言ふ。然して其の言に乃ち曰はく、『衰麻は哀戚を主とす、然れども庸人に衰麻なければ哀戚得て勉むべからず』。又謂ふ、『杜預の辨は則ち辨なり、陳逵が言[一一]の質略にして敦實なるに若かず』と。愚謂へらく、衰麻の制は乃ち古先の聖人が孝子の情に沿ひて人の爲に服を制するなり。蓋し天理人心の已む容からざる所のもの、豈專ら庸人の爲に設けて以て其の哀戚を勉めんや。杜預は經に違ひ禮に悖り綱常を淪斁[一二]す。當に萬世の罪人たるべし。坐するに不孝莫大の法を以てして、特だ其の陳逵の言の質略にして

（六）禮記喪大記に、「期廬に居り喪を終ふるまで内に御せざる者は、父在せば母の爲にし、妻の爲にするなり」と出づ
（七）天子の衣冠
（八）天子の執る玉
（九）美服
（一〇）黃榦、字は直卿、宋代の學者、朱子の女婿、文獻通考卷十四、王禮十八の引用
（一一）前出四九九頁參照
（一二）破壞

敦實なるに若かずと言ふは、世教を明かにする所以に非ざるなり。先師朱文公曰はく、『左氏傳ふる所、(一)文公二年 祔して主を作るときは、(二)禮家の虞して主を作る者と合はず。廟に烝嘗禘するときは、(三)王制の喪三年祭らざる者と合はず。杜氏は左氏の失に因り、遂に國君卒哭して除するの說あり』と」。

馬端臨曰はく、「(四)古は天子の喪は七月にして葬る。左傳に以て同軌(五)と爲す。荀卿子曰はく、『天子の喪は四海を動かし諸侯を屬(つら)ぬ』。又曰はく、『天子は七月、諸侯は五月、大夫士は三月、皆其の須(ま)ちて事を容(い)るるに足らしむ。事は成を容るるに足り、成は文を容るるに足り、文は備を容るるに足り、曲は物を容れ備ふ、之れを道(だう)と謂ふ』と。須は待つなり、待つ所を謂ふ。之は斯なり。事は喪の具なり。道は委曲、物を容れ物を備ふる者なり。蓋し萬乘の尊き、四海の廣きを以て、喪の期三年に至るときは、必ず物を備へ禮を盡して以て其の孝を致し、之れを悔あるなからしめんのみ。此れ古の孝子の心なり。秦漢より以來習ひて短喪の制を爲し、既葬を以て服を釋くを例とす。是に於て惟だ葬期の促(すみやか)ならざるを恐る。兩漢より六朝に至り、人主の喪は、大行の殯に在ること兩月に及ぶものあること少し。是れ天子にして大夫士の禮を行ふ克(また)はざるなり。魏の孝文力めて古の道を行ひ、獨り三年の喪を爲す。而して

(一) 春秋に魯の文公二年に「僖公の主を作る」。傳に「僖公の主を作るは、時ならざるを書するなり」と出づ。又これより先き僖公三十三年の傳に、「僖公を葬るは緩きなり、主を作るは禮に非ざるなり。凡そ君薨ずれば卒哭して祔す。祔して主を作り、特に主を祀る、廟に烝嘗禘す」と。主は神主なり、烝は冬祭、嘗は秋祭、禘は三年の喪終りたるときの祭

(二) 前出四五四頁參照

(三) 禮記の篇名

(四) 文獻通考卷十四、上

其の臣歷代の制に狃れて、固く服を釋かんことを請ふ。重服を釋かんと欲すれば必ず先づ葬期を促す。而して帝の答詔に曰はく、『梓宮(六)に侍奉し猶ほ彷彿(髣髴)を希ふ。山陵の遷厝は聞くに忍びざる所なり』と。固く請うて始めて葬る。既に葬りて終に服を釋かず。賢なる哉」。

又曰はく(七)「先儒言はく、古は天子崩じて太子位に卽くに、其の別四あり。始めて死するときは、嗣子の位を正す。顧命(八)に所謂『子釗を南門の外に逆へ、延きて翼室に入る』といふ是れなり。既に殯するときは繼體の位を正す。顧命に所謂『王麻冕黼裳し、入りて位に卽く』といふ是れなり。年を踰えて改元の位を正す。春秋に書する所『公位に卽く』といふ是れなり。三年にして踐阼の位を正す。『舜の文祖に格る(九)』、及び伊尹の冕服して太甲を奉じ亳に歸る(一〇)といふ是れなり。漢以來短喪の制に遵ひ、諒闇の說を廢し、日を以て月に易ふ。則ち年を踰ゆる三年にして卽位の禮復た聞かず、大概衰經の中に於て嗣服の吉禮を行ふ。然れども漢の高祖は四月甲辰を以て崩じ、五月丙寅に葬る。其の日惠帝位に卽く。則ち崩後二十三日に在り。文帝は六月己亥を以て崩じ、乙巳に葬る。景帝は丁未を以て位に卽く。則ち崩後七日、葬後三日に在り。蓋し西都

禮二十に出づ
(五) 左傳に「天子七月にして葬る。軌を同じうして畢く至る」と出づ。軌を同じうすることは四夷の國を別にすればなり
(六) 前出五〇五頁と字句多少異なる
(七) 文獻通考巻十四、王禮十七に出づ
(八) 書經の篇名、周の成王の崩ぜんとせし時、其の子釗、後の康王に對する遺言なり
(九) 書經舜典に出づ
(一〇) 書經太甲中篇に出づ

の人主皆預め陵寢を爲る。故に升遐[一]の後復た古者の七月の制に循はず、蓋し崩より葬に至るまで旬日に及ばざるものあり。是を以て嗣君の位に卽くは多く旣葬の後に在り。東漢に至れば葬期漸く遲し。是に於て始めて令を制して大行の柩前に卽位するを以てす。而して歷代之れに遵ふ。蓋し猶ほ旣殯の後に在り。魏の宣武方に崩じて、太子明くるを俟たずして位に卽く。毋乃太だ促なるか。且つ當時は魏の傳世旣に久しく、時は承平に屬す。何の急迫の虞ありてか、親肉未だ寒えざるの時に於て、旦を待たずして其の位を襲がんや。孝文は賢主にして力めて古道を追ひ以て親の喪を行ふ。肅宗[二]は幼冲にして輔臣識なく、之れを導きて以て乃祖の行ふ攸に率ふ能はずして、此の過擧あるなり」。

（一）崩御
（二）唐の肅宗なるべし

已資紙規第一六七號　東京府規格外許可

昭和十七年二月十八日印刷
昭和十七年二月二十三日發行

山鹿素行全集思想篇 第十卷

會費貳圓五拾錢(停)

編纂者　廣瀬（ひろせ）豐（ゆたか）

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地
發行者　岩波茂雄

東京市神田區錦町三丁目十一番地
印刷者　白井赫太郎

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地
發行所　岩波書店
電話九段(33)二一八七・二一八八番
　　　　　　二一八九・二一八〇番
振替口座東京七四四一六番
會員番號一〇二〇三七號

配給元　東京市神田區淡路町二丁目九番地　日本出版配給株式會社

精興社印刷　岡山製本

落丁・亂丁等不完全な品がありましたら直接御申出願ひます。お取替致します。